

能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書 I

(志賀町中村畑遺跡)  
(志賀町女郎塚遺跡)

1982

石川県立埋蔵文化財センター



能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書 I

(志賀町中村畑遺跡)  
(志賀町女郎塚遺跡)

1982

石川県立埋蔵文化財センター





中村畑遺跡航空写真



中村畑遺跡 角杯形須恵器



中村畑遺跡出土 把手付須恵器



## 例 言

- 1 本書は、能登海浜道建設工事に関する埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書第1集である。
- 2 本書に収録したのは、石川県羽咋郡志賀町に所在する中村畑遺跡・女郎塚遺跡の2遺跡である。
- 3 調査は、石川県土木部有料道路課の委託を受けて、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 調査は次のセンター職員が担当し、全般にわたって土肥富士夫氏（石川考古学研究会会員）の指導を受けた。

中村畑遺跡——中島俊一・谷内尾晋司・浜野伸雄

女郎塚遺跡——中島俊一・谷内尾晋司・浜野伸雄

- 5 調査にあたって、次の諸機関および個人の指導と援助を受けた。記して謝意をのべる。  
石川考古学研究会・志賀町教育委員会・志賀町上棚地区・同矢駄地区・石川県有料道路建設事務所・高堀勝喜・桜井甚一・浜岡賢太郎・雄谷助市郎・中越照次・津田耕吉（以上石川考古学研究会々員）・田中孝典・橋本郁也（以上大阪経済法科大学生）・木村昌宏・長沢豊文（以上奈良大学生）・越坂一也（国学院大学生）・木立雅郎（立命館大学生）・垣内光次郎（立正大学生）・久田正弘（明治大学生）
- 6 遺物の整理は石川県埋蔵文化財協会に委託した。（担当—榎見敦子・斉藤和代・森岡かがり・米沢亮子・勝島栄蔵）
- 7 本書の作成にあたっては、センター職員および桜井甚一氏をはじめとする石川考古学研究会々員各位の指導・助言を受けて、次のように分担執筆し、また編集は、各担当者の協議のうえ谷内尾が担当し、橋本澄夫が統括した。

能登海浜道関係埋蔵文化財発掘調査の経緯——橋本澄夫

中村畑遺跡第Ⅰ・Ⅱ章——浜野伸雄、第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ章——谷内尾晋司

女郎塚遺跡——垣内光次郎

また、特に中村畑遺跡出土の初期須恵器については、中村 浩氏（大谷女子大学講師）より有益な御教示をいただき、出土土器の胎土分析については、三辻利一氏（奈良教育大学教授）にお願いし、その玉稿を付章として本書に登載した。

- 8 本書の遺構・遺物挿図の指示は次のとおりである。
  - （1）挿図の縮尺は図内に標示した。
  - （2）方位はすべて磁北を示す。
  - （3）グリッド名称は北東隅杭で代表する。
  - （4）水平基準線レベルは海拔高を示す。
  - （5）土器実測図の断面は、土師器は白抜き、須恵器およびその他の土器類は黒塗り以示す。
- 9 本書の文章表現については、あえて統一をとらなかった。



# 目 次

## 能登海浜道関係埋蔵文化財発掘調査の経緯

能登海浜道関係埋蔵文化財発掘調査の経緯	1
1) 能登海浜道第I期関係	1
2) 能登半島縦貫道路関係	2
3) 能登海浜道第II期関係	5

## 中 村 畑 遺 跡

第I章 遺跡の位置と環境	17
第1節 位置と地理的環境	17
第2節 歴史的環境	17
第II章 調査の経緯	20
第1節 調査の経緯	20
第2節 調査日誌抄	20
第III章 遺 構	23
第1節 分布調査と遺跡の範囲	23
(1) 分布調査の概要	23
(2) 遺跡の範囲	23
第2節 A地区の遺構	27
(1) 層序と遺構配置	27
(2) 土壇状遺構	28
(3) 竪穴状遺構	38
(4) 掘立柱建物跡	39
(5) その他の遺構	42
第3節 B地区の遺構	43
(1) 層序と遺構配置	43
(2) 溝状遺構	44
(3) 掘立柱建物跡	48
第IV章 遺 物	49
第1節 A地区の遺物	49
(1) 縄文時代の遺物	49
(2) 古墳時代の遺物	49
(3) 平安時代の遺物	53
第2節 B地区の遺物	59
(1) 縄文時代の遺物	59

(2) 古墳時代の遺物 .....	60
(3) 平安時代およびそれ以降の遺物 .....	85
第V章 ま と め .....	93
第1節 遺構について .....	93
(1) 土壙状遺構 .....	93
(2) 竪穴状遺構 .....	96
(3) 掘立柱建物跡 .....	96
第2節 遺物について .....	97
(1) A地区出土の古式須恵器 .....	97
(2) B地区大溝出土土器 .....	99
(3) B地区第1号溝出土土師器 .....	105
(4) B地区第2号溝出土土器 .....	106
付章 中村畑遺跡出土須恵器の胎土分析 .....	109

## 女 郎 塚 遺 跡

第I章 遺跡の位置と環境 .....	115
第1節 地理的環境と立地 .....	115
第2節 歴史的環境 .....	115
第II章 調査の経緯 .....	118
第III章 遺 構 .....	123
(1) 1号大塚 .....	124
(2) 2号塚 .....	124
(3) 3号塚 .....	124
(4) 4号塚 .....	126
第IV章 考 察 .....	126
第1節 石川県における塚について .....	126
第2節 ジョロウ塚の築造方法とその性格 .....	129
第V章 ま と め .....	130

# 挿 図 目 次

## 能登海浜道関係埋蔵文化財発掘調査の経緯

- 第1図 有料道路全線と関連遺跡…………… 6
- 第2図 羽咋市寺家遺跡周辺の関連遺跡… 8

## 中 村 畑 遺 跡

- 第1図 位置と周辺の遺跡 (1/50,000) 18
- 第2図 調査区の位置……………24
- 第3図 A地区遺構配置および土層断面図  
(1/150) ……………25
- 第4図 第1号土壙実測図 (1/30) ……28
- 第5図 第2号土壙実測図 (1/30) ……29
- 第6図 第3号土壙実測図 (1/30) ……30
- 第7図 第4号土壙実測図 (1/30) ……31
- 第8図 第5号土壙実測図 (1/30) ……31
- 第9図 第6号土壙実測図 (1/30) ……32
- 第10図 第7号土壙実測図 (1/30) ……32
- 第11図 第9号土壙実測図 (1/30) ……34
- 第12図 第10号土壙実測図 (1/30) ……34
- 第13図 第12号土壙実測図 (1/30) ……34
- 第14図 第13号土壙実測図 (1/30) ……34
- 第15図 第14号土壙実測図 (1/30) ……36
- 第16図 第15号土壙実測図 (1/30) ……36
- 第17図 第16号土壙実測図 (1/30) ……36
- 第18図 第17号土壙実測図 (1/30) ……36
- 第19図 第18号土壙実測図 (1/30) ……37
- 第20図 第19号土壙実測図 (1/30) ……37
- 第21図 第1号竪穴住居跡実測図 (1/100)  
……………38
- 第22図 第1号掘立柱建物実測図 (1/100)  
……………39
- 第23図 第2号掘立柱建物実測図 (1/100)  
……………39
- 第24図 第3号掘立柱建物実測図 (1/100)  
……………40

- 第25図 第4号掘立柱建物実測図 (1/100)  
……………40
- 第26図 第5号掘立柱建物実測図 (1/100)  
……………40
- 第27図 第6号掘立柱建物実測図 (1/100)  
……………42
- 第28図 第7号掘立柱建物実測図 (1/100)  
……………42
- 第29図 B地区L38グリッド北壁土層断面模  
式図……………43
- 第30図 B地区遺構配置図 (1/200) ……45
- 第31図 溝状遺構堆積層序断面図 (1/40)  
……………46
- 第32図 大溝実測図 (1/60) ……………47
- 第33図 A地区出土石匙実測図 (1/2) 49
- 第34図 第1号住居跡出土遺物実測図  
(1/3) ……………49
- 第35図 須恵器把手付椀拓影 (1/2) ……50
- 第36図 A地区出土土器実測図……………51
- 第37図 須恵器体部調整痕拓影 (1/1) 51
- 第38図 A地区出土土器実測図 (1/3) 52
- 第39図 A地区出土土器実測図 (1/3) 54
- 第40図 A地区出土土器実測図 (1/3) 55
- 第41図 A地区出土土器実測図 (1/3) 57
- 第42図 A地区出土土器実測図 (1/3) 58
- 第43図 A地区出土土製品実測図 (1/2)  
……………58
- 第44図 B地区出土石器実測図 (1/2) 59
- 第45図 B地区大溝下層出土土器実測図  
(1/3) ……………60
- 第46図 B地区大溝下層出土土器実測図  
(1/3) ……………65
- 第47図 B地区大溝下層出土土器実測図  
(1/3) ……………66

第48図	B地区大溝下層出土土器実測図 (1/3) ……………	67
第49図	B地区大溝下層出土土器実測図 (1/3) ……………	68
第50図	B地区大溝下層出土土器実測図 (1/3) ……………	69
第51図	B地区大溝下層出土土器実測図 (1/3) ……………	70
第52図	B地区大溝出土土器製品実測図 (1/2) ……………	72
第53図	B地区大溝上層出土土器実測図 (1/3) ……………	74
第54図	B地区大溝上層出土土器実測図 (1/3) ……………	76
第55回	角杯形須恵器実測図(1/3) ……	77
第56図	B地区大溝上層出土土器実測図 (1/3) ……………	181
第57図	B地区大溝上層出土土器実測図 (1/3) ……………	82
第58図	B地区大溝上層出土土器実測図 (1/3) ……………	83
第59図	B地区出土木製品実測図(1/5) ……………	84
第60図	B地区第1号溝出土土器実測図 (1/3) ……………	86
第61図	B地区第1号溝出土土器実測図 (1/3) ……………	88
第62図	B地区第2号溝出土土器実測図 (1/3) ……………	90

第63図	B地区出土土器実測図(1/2) 91
第64図	B地区出土土器実測図(1/3) 92
第65図	加賀市敷地天神山遺跡出土角杯形土器実測図(1/3) ……………100
第66図	富来町高田遺跡出土須恵器模倣土器実測図 ……………102
第67図	辰口町高座遺跡方形周溝遺構出土土器実測図(1/3) ……………103
付章挿図1	大陶邑出土須恵器のRb—Sr分布 ……………110
付章挿図2	羽咋郡志賀町コマクラベ窯須恵器のRb—Sr分布 ……………111
付章挿図3	羽咋郡志賀町中村畑遺跡出土須恵器のRb—Sr分布 ……………111
付章挿図4	中村畑遺跡出土須恵器のSi量の比較 ……………112
付章挿図5	中村畑遺跡出土須恵器のFe量の比較 ……………113

**女 郎 塚 遺 跡**

第1図	遺跡の位置(1/50,000) ……	116
第2図	調査区の位置の地形図(1/2,000) ……………	120
第3図	ジョロウ塚実測図(1/300) ……	121
第4図	ジョロウ塚配置図(1/200) ……	122
第5図	1号大塚断面実測図(1/60) ……	123
第6図	2・3号塚実測図(1/60) ……	124
第7図	4号塚実測図(1/60) ……	125

**表 目 次**

**中 村 畑 遺 跡**

第1表	中村畑遺跡土壌一覧表……………	95
第2表	中村畑遺跡の編年的位置 ……	104

**女 郎 塚 遺 跡**

第1表	石川県下の主要塚一覧表 ……	128
-----	----------------	-----

## 図 版 目 次

### 中 村 畑 遺 跡

- 図版 1 遺跡周辺の航空写真
- 図版 2 遺跡の遠景
- 図版 3 B地点よりの展望とA地点近景
- 図版 4 遺跡の調査風景
- 図版 5 A地区の遺構
- 図版 6 A地区の遺構
- 図版 7 A地区の遺構
- 図版 8 A地区の遺構
- 図版 9 B地区の遺構
- 図版10 B地区の遺構
- 図版11 A・B地区出土遺物
- 図版12 A地区出土遺物
- 図版13 A地区出土遺物
- 図版14 A・B地区出土遺物
- 図版15 B地区出土遺物

- 図版16 B地区出土遺物
- 図版17 B地区出土遺物
- 図版18 B地区出土遺物
- 図版19 B地区出土遺物
- 図版20 A・B地区出土遺物
- 図版21 A・B地区出土遺物
- 図版22 A・B地区出土遺物
- 図版23 A・B地区出土遺物

### 女 郎 塚 遺 跡

- 図版24 調査区の遠景
- 図版25 調査区近景
- 図版26 2・3号塚近景
- 図版27 4号塚近景
- 図版28 4号塚近景
- 図版29 1号大塚頂部断面・断層検出状況



能登海浜道関係埋蔵文化財  
発掘調査の経緯



# 能登海浜道関係埋蔵文化財発掘調査の経緯

## 1) 能登海浜道第 I 期関係

能登海浜道は県都金沢および金沢港・北陸自動車道と能登半島を結ぶための幹線道路として立案された。能登半島の中でも特に珠洲・輪島・鳳至地区など北部能登住民が大きな期待を寄せるものであった。能登海浜道第 I 期工事は金沢市粟崎地内から羽咋市柳田地内（猫の目）までの延長約 35 km であり、同第 II 期工事は柳田 I・C から田鶴浜町天津地内までの約 20 km を結ぶものである。大津から穴水町此木地内までは能登半島縦貫道路（約 25 km）が連結し、さらに此木から珠洲市にかけては大規模農道で結ばれる計画である。

能登海浜道第 I 期工事に関する埋蔵文化財について、県土木部道路課が計画図を添えて県教育委員会社会教育課に問い合わせのあったのは、昭和 45 年（1970）6 月のことであった。県教委は昭和 43 年（1968）に石川考古学研究会員を中心とした北陸自動車道関連遺跡調査団を組織して路線内の分布調査を行っていたが、同 44 年 4 月には社会教育課は埋蔵文化財専門職員 1 名を初めて配置（嘱託）し、本格的な発掘調査を開始している。能登海浜道第 I 期工事の埋蔵文化財調査依頼はこのような状況下で行われたのであった。県社会教育課は北陸自動車道関係の分布調査例にならって、昭和 46 年 1 月 23 日に「能登海浜道路埋蔵文化財分布調査委員会規約」を施行するとともに、この道路が通過する 1 市 5 町（羽咋・内灘・七塚・高松・押水・志雄）の教育長を中心とした「能登海浜道路埋蔵文化財分布調査委員会（委員長 桑田良夫県教育長）、と各市町に在住する石川考古学研究会員を中心とした「同調査団（団長 秋田喜一石川考古学研究会々長）、を組織している。

能登海浜道第 I 期工事は、その名称の通り内灘砂丘から羽咋砂丘を經由するもので、そのほとんどは砂丘の汀線寄りに路線を設定するものであった。いうまでもなく高さ約 70 m を測る内灘砂丘は、日本海屈指の代表的砂丘であり、それに続く高松・羽咋の砂丘も規模の大きな砂丘列として著名である。一方、内灘町向粟崎・大根布・黒津船などの海岸地帯は、かつて北陸人類学会員らを中心に数々の原始・古代遺物を採集しており、明治中期ごろにおけるその活動は、砂丘遺跡研究史上はもとより日本考古学の発達史上においても、重要な意味をもつ地域を含んでいたのである。調査団は、昭和 43 年版『全国遺跡地図（石川県）』（文化財保護委員会刊）を中心に計画路線に複合もしくは近接する遺跡を検索し、宇ノ気町大崎から七塚町白尾にまたがって所在するとみられるいわゆる大崎クロガケ遺跡（縄文）、高松町字高松地内の遺物散布地である額神社遺跡（年代等不詳）、押水町免田地内の散布地と記録される大海川河口遺跡（縄文～平安）、内灘町通称権現森に礎石群を残す小浜神社旧跡の 4 遺跡を破壊の危険性をもつものとして調査の対象とすることとし、その他の部分についても可能な限り現地踏査し、埋蔵文化財の有無を確認することとした。調査団が現地調査を実施したのは、昭和 46 年 2・3 月中であり、大崎クロガケ遺跡と小浜神社旧跡については包含層（クロガケ）および神社礎石群が路線からかなり離れていることを

確認している。額神社遺跡と大海川河口遺跡については、試掘による調査を行っているが、前者については厚い砂層に、また後者についてはおびただしい湧水に阻まれて、深さ数メートル程度の範囲に包含層が存在しないことを知り得たにとどまった。その他の地域、例えば羽咋市柳田地内などにおいても小試掘を行っているが、包蔵地を発見することはできなかった。

以上のように、能登海浜道第Ⅰ期工事については、砂丘地上を路線として選定していることにより、組織的に分布調査を実施した結果から、発掘調査を必要とするような事態に至らなかったのである。県立埋蔵文化財センターが発足した昭和54年(1979)以降においては、分布調査段階でユンボ一等の重機を導入して、かなりの深度まで包含層の有無を確認する方法をとっているが、さきにも述べた如く、専門職員として嘱託1名が配置されていたに過ぎぬ当時としては、無理からぬ事だったとすべきであろう。なお、同分布調査の詳細については、『能登海浜道路埋蔵文化財分布調査報告書』(昭和46年 石川県教委刊)を参照されたい。

## 2) 能登半島縦貫道路関係

田鶴浜町大津から穴水町此木に至る能登半島縦貫道路は、海浜道路とは異なり穴水・中島町境にある別所岳(標高358m)の尾根近くを経由する山間部の道である。この道路の路線内についての埋蔵文化財に関する調査依頼は、昭和48年4月18日付けで県有料道路課から文化財保護課に対して行われている。北陸自動車道関係の発掘調査がピークを迎えて、県教委は昭和46年(1971)に至って社会教育課に文化室を設置し係長以下専門職員4名を配している。さらに、同48年4月には専門職員を8名に増強し(うち1名は管理係)文化財保護課に昇格しているのである。能登半島縦貫道路に関する分布調査依頼は、文化財保護課設置の直後に行われたことになる。

昭和48年は北陸自動車道関連発掘の最終年度であり、金沢市吉原七ツ塚墳墓群では猛暑をついで工事と併行の発掘が行われていた。また、宇ノ気町塚越台地では鉄工団地造成を原因とする緊急調査が行われており、この春に増強された県専門職員もこれらの発掘現場に専従する状況であった。県有料道路課から能登半島縦貫道路に関する埋蔵文化財の有無についての調査依頼を受けた文化財保護課は、同年秋、上記の発掘が大詰めの段階を迎えてようやく回答を提出している(9月22日付)。回答の内容は、路線範囲内に埋蔵文化財包蔵地の所在するものとして、穴水町宇留地がにがだら遺跡1件のみを挙げるものであった。調査資料としては「昭和48年度埋蔵文化財調査カード」(昭和49年3月刊「石川県遺跡地図」の基本台帳)を参照したとされている。さきにも述べたように、能登半島縦貫道路は人里離れた山間部を通過するものであり、周知化された遺跡が極めて少ない地域であったが、海浜道第Ⅰ期で組織されている分布調査委員会や同調査団が全く組織されなかったことに問題があった。すなわち、能登半島縦貫道路の建設に当っては、計画路線を現地調査することなく、「遺跡地図」等によって周知化されていたものについてのみチェックするにとどまったのである。さて、穴水町宇留地がにがだら遺跡は縄文時代とみられる石器単独出土地(県番号3258)であったが、その後の路線変更により破壊されないこととなった。



① 穴水町宇留地館跡の調査



② 穴水町宇留地館跡で検出された焼土遺構  
(中近世ごろの炭焼窯の可能性があった)  
〈昭50.8.9橋本撮影〉



③ 発見時の土川の石室状遺構

2,000 m<sup>2</sup>の範囲にわたりトレンチ(試掘)調査を実施した。その結果丘陵北端で土師器片、中央部で焼土面を検出したが、いずれも中世館跡と結びつけられるものが判明できなかった。したがって当該地域内に遺跡は所在しないものと判断した。」というもので、土師器片・焼土面の存在を確認しながらも、遺跡は所在しないという不可解な回答内容であった。中世館跡でないから遺跡でないとの判断は誰が下したものであろうか。いずれにせよ、土師器片・焼土面の追求調査はなされず、工事は着手されている。

以上のように、埋蔵文化財保存上とくに問題はないということで、能登半島縦貫道建設工事は着々進行することになった(昭47年12月に有料道路課から文化室に問い合わせがあり、これに対して、48年4月23日付で事業地区内に中島町横田クラカケバ遺跡・穴水町大町遺跡・同町浄明寺址の3件の所在を回答しているが、爾後の処理については不明である)。しかし、工事が現実のものとなった段階で、穴水・中島町などに在住する考古学研究者から、路線内における新規遺跡の発見通報を受けることになった。穴水町宇留地館跡・中島町土川遺跡・同町熊甲宮の前遺跡がこれであった。これらの遺跡については、後述のように、急拠分布調査や緊急発掘を実施して対応しているが、工事を目前にひかえての調査となり、必ずしもすべての遺跡について十二分な記録保存とするに至らなかった点は遺憾である。これも、調査委員会や調査団などの組織を通じて、地元研究者から事前に情報を得る努力が不足していたからだと反省せねばならない。

穴水町宇留地館跡については、昭和49年3月刊『石川県遺跡地図』には掲載されていないものであり、49年度中にその存在が通報されたものである。昭和50年(1975)4月28日付で「発掘通知」が提出され、同年8月5日から同月12日にかけての8日間にわたって、県文化財保護課職員2名によって現地調査され、9月3日付で有料道路課あて結果報告がなされている。その報告内容は「宇留地館跡と推定されていた丘陵部約

中島町土川遺跡は、中島～富来を結ぶ県道脇で標高約50mの丘陵南斜面にあったが、昭和49年11月14日道路工事のための伐木中、工事関係者によって石室状の遺構1基を発見、有料道路課を通じて文化財保護課へ通報のあったもので、同月18日付で「発見届（工事中）」が提出されている。現地確認の結果、発掘調査を要すと判断され、11月22日付で有料道路課から調査依頼を受けるとともに、同日付で「発掘通知」が提出されている。工事着工後の発見という事態で、発掘調査は十分な準備期間もないままに11月30日に開始され、悪天候をついて12月21日に終わっている。これも文化財保護課職員2名によって行われている。遺構は河原石を用いて構築された全長約5m、幅約2mの長方形プラン石室状のもので、内部から灯明皿1点が出土している。遺構の性格は中世墳墓の一種とされ、昭和50年3月31日（起案）、工事の実施は差し支えない旨を申し添えて有料道路課あて報告されている。

中島町熊甲宮の前（宮の前B）遺跡も土川遺跡のケースと同様、工事のための伐採が終わった段階で発見されている。国指定重要民俗文化財「熊甲二十日祭の杵旗行事」で有名な久麻加夫都阿良加志比古神社背後の台地上にあり、横田I・Cと県道を結ぶ取り付け道路建設のため削平しようというものであった。樹木伐採後の昭和51年（1976）7月29日、中島町在住の唐川明史氏（石川考古学研究会幹事）らによって、

小規模な塚状遺構数基とその近傍より五つの桜花をあしらった和鏡1面と鉄鎌1点が採集されたのである。県有地の中での発見であったので、同年8月3日には石川県知事から文化庁長官あてに「遺跡発見通知」が提出され、続いて同月13日付で「発掘通知」が送られている。発掘調査は8月27日から11月2日にかけて実施され、2基の中世墳墓もしくは経塚とみられるものの外に、縄文中期の土壙状遺構8基を検出しているが、その第1号土壙には打製石斧13個と磨製石斧1個が一括埋納されており注目された。調査結果は翌51年3月上旬に原因者側に報告されている。



④ 中島町熊甲宮の前遺跡全景



⑤ 宮の前遺跡第1号塚の発掘状況



⑥ 宮の前遺跡発見の和鏡（懸仏として転用）

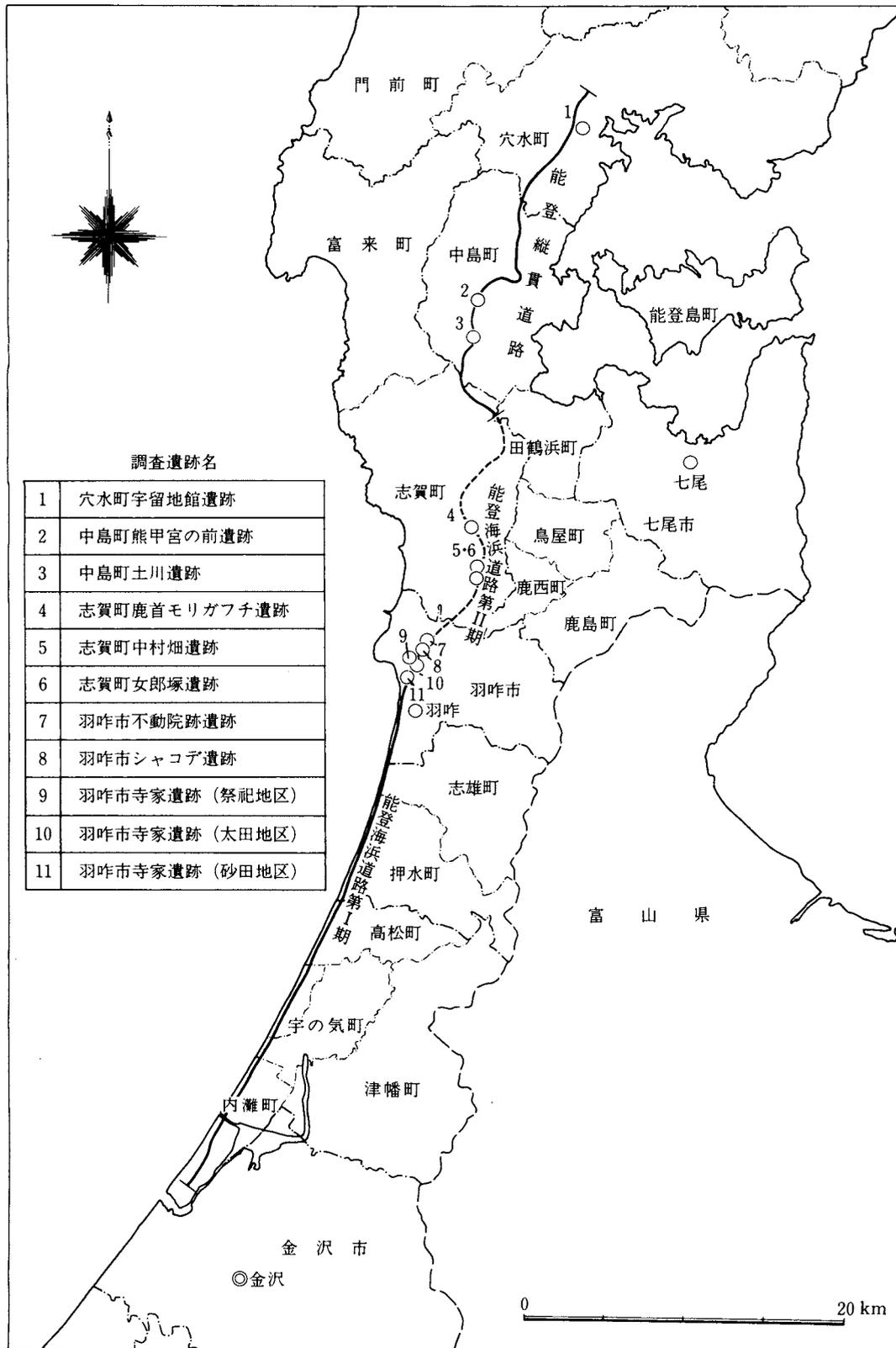
以上で能登半島縦貫道路建設に係る埋蔵文化財調査の経緯と結果を略述したが、組織的な事前分布調査を行っていないため、工事中発見となるケースが多くなっている。したがって、悪条件のもとでの緊急発掘となったことはいうまでもない。

### 3) 能登海浜道第Ⅱ期関係

海岸砂丘上を縦走して建設された能登海浜道(第Ⅰ期)と羽咋市柳田地内通称猫の目で連絡し、田鶴浜町大津で能登半島縦貫道路と接続するのが能登海浜道第Ⅱ期(能登半島縦貫第Ⅱ期とも称された)の工事計画である。

昭和47年(1972)6月13日付で、有料道路課から文化室に対して予定路線内における埋蔵文化財の有無について調査依頼があった。同道路建設における埋蔵文化財に関する両者間での公的交渉はこれが初現とみられる。文化室はこれに対して7月15日付で回答しているが、昭和43年(1968)文化財保護委員会刊行の『全国遺跡地図(石川県)』が参考とされた。次いで、昭和48年11月6日、県有料道路建設事務所は文化財保護課に宛てて「能登半島縦貫有料道路及び有料道路管理事務所建設予定地にかかる埋蔵文化財等の調査について」依頼する文書を提出している。これは、羽咋市柳田地内通称シャコデ台地を中心に道路敷地(約20,000m<sup>2</sup>)とその西側に接して、事務所建設用地(約28,000m<sup>2</sup>)を買収するため事前調査を求めるものであった。この調査依頼は12月12日付で有料道路課より再提出され、これを受けた文化財保護課は翌49年3月に至って職員を現地に派遣し、遺跡等の有無を確認させている。その回答は3月28日付で行われているが、柳田シャコデ台地を中心に広く埋蔵文化財包蔵地が分布していることを示唆している(なお、有料道路管理事務所はのちに寺家祭祀遺跡に近い砂丘地に建設されているが、買収に至らなかった柳田地内の予定地はのち圃場整備のため削平されている)。

能登海浜道第Ⅱ期建設計画が具体的に進行をみせるのは、昭和50年代(1975～)以降のことといえる。同年9月6日には、第Ⅱ期建設に係る環境アセスメントについての打合せ会が、関係11課(環境衛生・観光・農政・文化財保護・企画調整・環境保全課等)を集めて開催されるが、昭和51年1月以降ほぼ月1回のペースで開かれ、4月からは建設に関する全体会議、5月からは建設促進本部幹事会という二本立ての形で定例化される。埋蔵文化財についても、これらの会議の場で協議されることになったが、7月29日開催の第二回幹事会には能登島架橋事業についての計画概要も説明されている。ところで文化財保護課がこれらの会議に臨むに当たって、関連遺跡として挙げていたものは、羽咋市域に限定されている。すなわち、釜谷・新保・猫の目(49年刊「石川県遺跡地図」番号2162)、柳田ウワノ(2197)、柳田台地(2198)、柳田セックデン古墳(2200)、柳田シャコデ廃寺跡(2215)、寺家(2223)、柳田古墳群(2201・2202・2204～2209)、柳田テングク1号窯(2213)の8件であった。寺家遺跡の名がすでに挙げられているが、これはのちに発見され全国的な話題となった寺家(祭祀・太田・砂田)遺跡とは別地点のものであり、寺家集落とシャコデ台地との間に所在する土師器散布地をいうものであった。なお、志賀町地内については



第1図 有料道路全線と関連遺跡

建設路線とくに倉垣から矢駄地区にかけてのコースが未確定だったこともあり、埋蔵文化財についてはほとんど問題にされていなかった。ただ、このように能登海浜道第Ⅱ期計画の具体化（用地買収など）が進行する段階で、分布調査委員会や同調査団を組織しようとする動きは全くみられず、したがって関係地域の考古学研究者の意見等を聴く姿勢は生じなかった。すなわち、能登海浜道第Ⅱ期については縦貫道路の場合と同様に、埋蔵文化財の保存に関しては行政内部ですべて処理しようとの姿勢が貫かれたのであった。なお、会議の中で羽咋市寺家・柳田地区などについては、海浜道との関連で周辺水田で大規模な圃場整備が実施されることも明らかにされている。事実、羽咋市寺家・柳田地区では、道路建設工事に先だって路線周辺での圃場整備が始められている。圃場整備は団体営の形であり、関連する発掘は羽咋市が事業主体となるものであったが、このころ同市には専門職員が配されておらず、道路敷内の発掘と併行する形で県文化財保護課職員がこれを担当している。

能登海浜道第Ⅱ期に関連する発掘調査（圃場整備関係を除く）は、昭和52年（1977）秋から開始されたが、工事中発見遺跡の多かったことや用地買収が必ずしもスムーズに進まなかったことなどから、すべての現地調査を完了したのは昭和56年5月の時点であった。以下、発見や調査の概略を年次ごとに記すこととする。

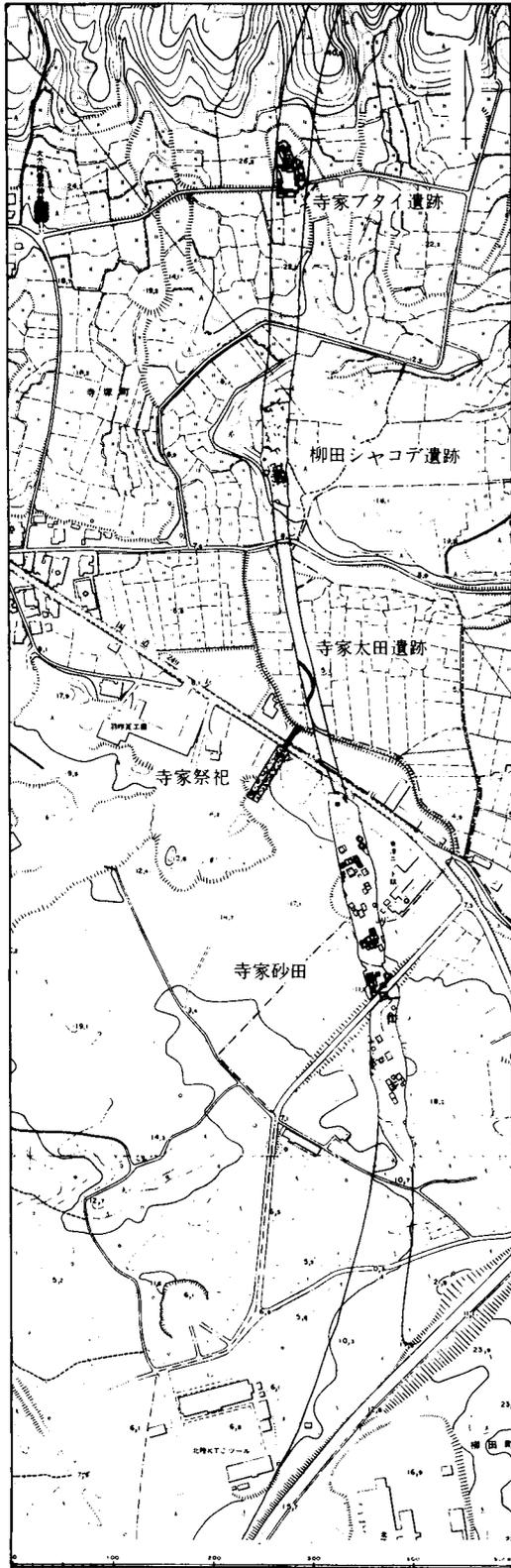
#### ① 昭和49年（1974）

路線決定のための資料とするため、6月18日から7月1日の期間中に羽咋市柳田シャコデ廃寺跡の範囲（とくに西側周辺）確認調査を行っている。その結果、シャコデ台地西縁部に廃寺跡とは別の埋蔵文化財包蔵地が存在することを確認し、これを柳田シャコデ遺跡と名づけている。

#### ② 昭和52年（1977）

この年度までに、柳田シャコデ廃寺跡を回避する形で、羽咋市域内の路線はほぼ決定をみている。しかし、49年度に確認した柳田シャコデ遺跡は路線と重複することとなった。一方、道路建設との関連で行われる寺家・一の宮地区圃場整備事業で、さきに文化財保護課がマークしていた寺家遺跡（向田地区）が破壊されることが判明している。また、有料道路課の依頼を受けて、4月18日には羽咋市寺家地内の分布調査を行っており、通称ブタイと太田の2地点で包蔵地を発見している。寺家ブタイ遺跡は不動院など気多神社関連の社僧坊跡群であり、太田はのちに寺家遺跡太田地区と称される地域である。また、4月12日には有料道路課は文化財保護課に対し羽咋市釜屋・新保・猫の目遺跡の発掘調査依頼を提出（発掘通知4月14日付）。5月18日付で寺家ブタイ遺跡と寺家遺跡（向田・太田地区）の調査依頼がなされた（発掘通知4月12日付）。翌53年3月には寺家地内の通称砂田と呼ばれる砂丘地で祭祀遺跡が発見されるが、これの発掘依頼および発掘通知は向田・太田地区についてのものが運用されている。

本格的な発掘調査は、羽咋市教育長の依頼によって行った寺家向田地区（団体営圃場整備・国補事業）からであった（昭和52年10月1日～53年3月31日）。現場での作業は53年1月23日で終わっているが、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物多数を検出している。寺家遺跡（向田地区）の現場と併行して、12月16日から釜屋・新保・猫の目遺跡の発掘に着手している（翌年3月



第2図 羽中市寺家遺跡周辺の関連遺跡

31日まで)。この遺跡は国道北東側に沿ってみられる長大な砂丘遺跡であるが、発掘の対象としたのは砂丘からはずれた北東寄り水田部であり、のちに寺家遺跡太田地区とされた地域にほぼ一致する。冬期に入ってからでの着手であり、調査員にとっては悪条件下での作業となっている。調査原因は、海浜道路と圃場整備後の水田からの排水溝建設に係るもので、調査は有料道路課の依頼によるものであった。発掘は幅3m、延長約100mのトレンチ法によったが、層位観察によって過去少なくとも3回にわたって冠水（一部は河川敷化を示すという）していることを明かにしている。遺構の検出はなかったが、平安後期（10世紀代）の須恵器（坏・蓋・壺）、土師器（坏・埴など）約1,000点が出土、「大」「太」「勝」などを記した墨書土器も検出、調査者は「平安後期中核的集落跡」と推定している。この排水溝は翌年以降の工事で国道下を抜け、さらに砂丘部を横断（暗渠）し日本海に放水する計画であり、昭和53年春に発見された寺家祭祀遺跡は、この工事の延長線上にあったことは今更付言するまでもないことである。

### ③ 昭和53年（1978）

同年3月中ごろ、羽中市寺家地内の国道（249号線）脇砂丘地における土木工事現場に立ち寄った石川考古学研究会員により、砂層中に須恵器・土師器を主体とする良好な包含層が存在することを発見した。土木工事とはさきに述べた排水施設（導水管）建設を目的としたものであった。遺跡発見の報せは直ちに県文化財保護課にもたらされ、同課も職員を派遣してその事実を確認し、同月22日には文化庁に発見届を提出している。そして、24日には工事を中止していた現場で緊急発掘を開始している。遺跡発見から約10日後のことであった。発掘調査は幅平

均 15 m、延長約 50 m の範囲で行われたが、年度当初をはさんでの忙しい中であり、3 月 24 日～3 月 31 日と 4 月 10 日～5 月 31 日の 2 期に分割して行っている。前半 3 月中の調査で、勾玉や帯金具などが発見（4 月 6 日記者発表）されているが、同発掘地点が目すべき祭祀遺跡であることが確実視されることになったのは、後半 4 月以降のことである。5 月 2 日ごろまでに各種の鏡類や奈良三彩陶片等が検出され、さらに、祭祀を行ったとみられる遺構群も出現したのである。

寺家における祭祀遺跡発見の情報は、当然のことながら石川考古学研究会の中でも論議を呼ぶとともに、これが全国的視野でみても極めて重視すべきものであるとの統一的な理解を得ることになった。同研究会代表は、5 月 4 日には県教育長に対して、導水管敷設ルートの変更も含め保存対策を要望している。5 月 10 日までには、新たに奉獻用とみられるミニチュア鉄器類（やりがんな・鎌・刀子など）が検出され、同 14 日には石川考古学研究会が現地見学会を開いているが、これには、多数の羽咋市民も参加している。当日気多神社でもたれた集会では、県に対して地元代表や学識経験者を加えた調査委員会を組織するよう働きかけることも決めている。石川考古学研究会のこうした動きとともに、県内外の史学研究者や文化財保護に関心の深い人々の間にも、寺家遺跡の保存に対する要望が広まり、5 月 26 日には北陸史学会が、6 月 14 日には能登文化財保護連絡協議会が県に保護を求める要望書を提出している。一方、石川考古学研究会からの強い要望を受けた県教委も、調査委員会を設置する方針を固め、6 月 5 日に第 1 回「石川県能登縦貫道関連（寺家遺跡）埋蔵文化財調査委員会」を地元羽咋市で発足開催している。委員会は学識経験者と地元代表者および県・市教委等から選ばれた 19 名の委員で構成され、「委員会規約」を審議決定したあと委員長に槻木慶雄県教育長、副委員長に野口定雄市教育長をそれぞれ選出している。しかし、導水管敷設コース変更により祭祀遺跡の保存を図ろうという学識経験者側委員の要望は、地元側委員の賛同を得られず、当日は結論をみるに至らなかった。第 2 回調査委員会は、6 月 14 日に開催されたが、ここでも現状保存案と工事推進論が対峙し審議は長びいたが、“遺構を樹脂等によって数個に分割したうえで取り上げ、導水管工事を終ったあと遺構を元位置に戻して保存する。という妥協案が委員長より提案され、次回までにこれを検討することとして散会し



⑦ 寺家遺跡祭祀地区の遺構群



⑧・⑨ ウレタン樹脂による梱包作業

ている。第3回委員会は6月24日に開催され、前回の委員長提案を了承しているが、これには、今後積極的に遺跡範囲等確認のための分布調査を実施するとともに、主要部分を史跡公園として整備保存することを条件として付している。

寺家の祭祀遺構取り上げ作業は、7月13日から近畿ウレタン工業の手で開始された。奈良国立文化財研究所技官沢田正昭氏の直接指導によるもので、 $1.5 \times 1.5 \times 0.7$  m (重量3~5t)の大きさに分断した遺構を「発泡性硬質ウレタン樹脂(発泡スチロール)」で梱包し、レッカーで移動させる工法をとっている。この作業が終わった7月下旬から9月下旬にかけて、導水管敷設工事が行われ、10月1日から3日間にわたって、ウレタン樹脂で梱包された状態の遺構を再び元位置に戻す工事を実施して、調査委員会で決定した保存作業を完了している。

能登海浜道建設に関するいわば付帯的工事で発見されたのが寺家祭祀遺跡であったが、調査委員会を組織しての保存法検討の間にも、道路敷内での発掘調査は進められていた。7月1日から10月1日にかけては、高架となる寺家遺跡太田地区(水田)で行われ、縄文時代から中世に至る土層観察により、寺家遺跡をとりまく自然環境の変遷を明かにしている。また、10月1日からは寺家遺跡砂田(I)地区の発掘に着手している(12月13日まで)。これは、祭祀遺構(導水管)より約60m東南方に離れた地点で、国道をまたぐ海浜道の橋台建設部分約 $120 \text{ m}^2$ がその対象であった。昭和54年以降、寺家砂田地区における発掘面積は1万数千 $\text{m}^2$ に及ぶことになるが、当(I)地区調査はその最初のものとなっている。柱穴群・溝状遺構・竪穴状遺構と二彩小壺片・白磁碗片・越州窯系壺片・双耳瓶ミニチュア等の祭祀的性格を想わせる遺物を検出している。

羽咋市域以北については、8月30日付で有料道路課より志賀町東谷内地区の分布調査依頼があり、9月8日の現地調査の結果、路線付近に縄文時代包蔵地が所在することを確認し、その旨を回答している。東谷内遺跡は海浜道路線敷には重ならず、現状保存できるとの見通しであったが、翌54年に至って工事用道路の建設工事を原因に、かなりの範囲にわたって破壊されていることが判明し問題となっている。

昭和53年は、寺家祭祀遺跡の発見とその保存問題をめぐって、文化財保護課や石川考古学研究会にとって多忙な年となっているが、一方で翌54年4月開所をめざす県立埋蔵文化財センターの設置準備も大詰めをむかえていた。すなわち、研究会が要望する「開かれた埋文センター」の実現をめぐり、県教委と研究者側との間に厳しい調整経緯があったことを忘れてはならない。また、

9月10日には、カドミウム汚染による梯川流域水田の公害防除土地改良事業を原因として、小松市白江ネブツドウ（東）地区の発掘調査を開始している。

#### ④ 昭和54年（1979）

4月1日付で県立埋蔵文化財センターが開所した。所長以下18名、うち専門職員は12名（うち5名は嘱託）である。これまで、発掘調査事業はもとより遺物整理作業にいたるまで、行政機構（文化室・文化財保護課）の中で行われ、発掘調査が学問的配慮より行政的配慮を重視する形で進められてきたが、センターの開設によってこのような弊害はある程度緩和されると期待された。能登海浜道第Ⅱ期の羽咋市域でのコースは、この時期にはすでに決定しており、用地の買収もそのほとんどについて終わっていた。寺家地内においては、さきに発見された祭祀遺構群の南東方近くに設定されており、この時点でのコース変更は不可能とされた。センター開所とともに寺家遺跡を中心に海浜道Ⅱ期に関する発掘も本格化するのである。センターが有料道路課から寺家地内道路建設地での埋蔵文化財包蔵地分布範囲の確認調査依頼を受けたのは、4月24日付のことである。また、同日付で寺家砂田地区（Ⅱ）と柳田シャコデ遺跡の発掘依頼も受けている。センターは、5月1日から砂田地区（Ⅱ）、6月19日から柳田シャコデ遺跡の発掘を開始し、いずれも12月下旬までの現場作業となっている。砂田地区全般の分布調査もこれと併行して行い、7月中旬までに路線内での遺跡範囲を確認し、有料道路課へは7月23日付で回答している。

当年7月11日には知事等来賓多数を迎えてセンター開所式が行われた。これに合わせて、展示室（1階収蔵室を利用）を整備することになり、職員は現場作業と展示作業を併行して行うこととした。寺家砂田地区（Ⅱ）はいわゆるN区市道脇であり、市道上を高架とするため発掘を急がれたものである。そして、この地区で検出されたのは平安時代前半期ごろとみられる大型掘立柱建造物群であった。これらの建物の柱穴掘方は一辺約120cmに達するもので、少なくとも7棟分の検出をみている。とくに注目されたのは、ヒサシを有する9×2間の大型特殊の建物跡であった。これら祭祀行為と関わりの深い建物群の性格をめぐり、県内外の研究者の関心は、祭祀遺構発見時に益して高まる。大型建物群の全容が明かにされたのは10月ごろであるが、11月1日には亀井



⑩ 県下で初めて採用された航空写真測量  
（寺家遺跡砂田地区、昭55年）



⑪ 志賀町鹿首モリガフチ遺跡の発掘風景



⑫ 流木とともに完形品を含む多量の土器が出土



⑬ 検出された竪穴式住居跡

⑭ 志賀町鹿首付近の航空写真（中央がモリガフチ遺跡）



正道氏（東京国立博物館）、11月17日に上田正昭氏（京都大学）、同19日には森浩一氏（同志社大学）が来跡視察され、センターとしても貴重な指導を得ている。一方、大型建物群の保存を要望する声も高まりをみせたため、11月20日には県文化財保護課・埋文センター・学識経験者・県土木部による保存法に関する協議会をもっている。そして、12月12日には建物跡群を損傷しないよう高架橋の設計を変更することで合意をみている。なお、12月4日には遺跡の周辺を撮影するため初めて航空機を飛ばしている（航空写真測量は翌55年に当遺跡で初採用している）。

寺家の発掘と併行して行っていた柳田シャコデ遺跡の発掘では、6・7世紀にかけての集落跡が検出されている。竪穴住居と掘立柱建物からなるが、7世紀後半ごろを境に前者から後者への転換がみられ、県内では最古の掘立柱建物跡の発見として話題になっている。

#### ⑤ 昭和55年（1980）

寺家遺跡発掘のピーク（発掘面積約1万m<sup>2</sup>）を迎えるが、志賀町地内の路線も確定し、4月中には分布調査依頼があり、5月26日には志賀町鹿首モリガフチ・中村畑の2遺跡についての発掘調査依頼を受けている。センターは長期化が予想される寺家遺跡砂田地区（III地区）の発掘を4月1日より開始、市道と54年検出の大型建物群（II地区）をはさんで、延長約350m、その幅平均35mの発掘を行うことになる。夏期を中心に関東・関西方面にまで働きかけ、多数の大学生に参加を求めている。路線北寄り（N区）では、掘立柱建物群を方形の土塁・溝で画した鎌倉時代館跡（三区画以上）を検出、その下層からも平安時代後半の掘立柱建物群を発見している。また、遺物としても海獣葡萄鏡・素文鏡・金銅鈴・三彩小壺など、国家的祭祀行為を想わせる重要遺物を採集しているのである。一方、路線南寄り地区（S区）では、平安時代前期の小鍛冶跡や土器製塩遺構と2×3間程度の小型掘立柱建物群を検出しているが、この地区でも歩揺・鉄鐸・銅鈴・ガラス容器小片などが出土、中でも中近東文化やシルク・ロードなどとの関連を想わせるガラス容器片の発見は大きな話題となっている。また、下層からは多数の8世紀ごろの竪穴住居跡を発見しているが、竪穴から掘立柱への家屋や集落の変遷を研究する上にも貴重な資料を提供するものとなっている。

志賀町地内では、6月16日から鹿首モリガフチ遺跡の発掘に着手（10月20日まで）、海浜道上棚I・Cへの取付道路で破壊されることになった中村畑遺跡の発掘も、これに併行し7月14日に開始している（12月25日まで）。鹿首モリガフチ遺跡は弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての集落跡であったが、完形品を含む多量の土器を出土している。とくに、古式の弥生土器と共伴したとみられる1点の藍胎漆器片は、X字形の浮文で飾られた優品であった。中村畑遺跡は古墳時代中期から後期にかけてのものであったが、角杯形須恵器（完形品）の出土は話題となっている。ところで、中村畑遺跡の調査中に、ようやく決定をみた矢駄・上棚地区路線敷内に新遺跡が存在するとの情報が入った（石川考古学研究会員による）。伐木作業中の現場に急行したセンター職員により、女郎塚と呼ばれるかなり大規模な塚状遺構の所在を確認、直ちに有料道路課に対し調査の必要なことを通報している。これを受けた同課も発掘調査の必要を認め、7月25日付で発見届と発掘依頼を同時に行っている。中世墳墓もしくは宗教関係遺跡と考えられた



⑮ 海浜道路の羽咋地区遺跡群航空写真

女郎塚の発掘は、8月20日に始められ10月18日に一旦中断（用地買収の不調による）のあと、翌年3月17日に再開、同月24日に完了している。昭和55年夏から秋にかけて、海浜道関係だけで4現場を併行せざるを得ない状況となった。これも、道路計画の段階での組織的情報集収に不備があったことに一因があったと考えられる。女郎塚の存在は地元ではよく知られていたものであり、研究者に情報の提供を求めることなく進行したことを反省せねばならない。

⑥ 昭和56年（1981）

海浜道第Ⅱ期に関する現地における調査の最後の年度である。雪融けを待って中断していた志賀町女郎塚遺跡の発掘を再開している（3月17日～24日）。精密な測量の結果、大型の1号塚（14.5×15.0mの略三角形プラン、高さ4.1m）の外に、小規模な塚状遺構3基（2～4号塚）が付随することが判明しているが、発掘調査の結果、自然地形を巧みにカットして塚形を構築していることも明かとなった。中・近世における宗教遺構として新しい資料を加えることになった。

一方、寺家遺跡砂田地区の調査は、55年12月中には終了する予定で進められていたが、同月27日、雪積1mを越える大雪に見舞われ、やむなく中継することとなった。しかし、調査の年度内完了を目ざすため、2月4日から遺構上の除雪作業を開始、13日より遺構の精査と実測作業を再

開し、同月9日には終了している。ところが、同年4月に入って、寺家遺跡内の国道側溝工事が行われることが判明。5月22・23日にかけて緊急調査を実施している。小範囲の発掘ではあったが、祭祀遺構群の東端を画する土塁状遺構(昭和53年検出)の延長部分をここでも確認する成果をおさめている。能登海浜道第II期工事を原因とする全ての現場作業はこの時点で終了したのであるが、莫大な量の遺物・記録類の整理と分析は、この時点から本格的に始まることになる。

金沢から穴水に至る一連の有料道路は、能登海浜道I・II期と能登半島縦貫道路の3期に分けて建設された。能登海浜道I期の建設に関して、埋蔵文化財の分布について問い合わせを受けたのは昭和45年(1970)のことであり、同II期の最終調査を終えたのが同56年(1981)のことであるから、実に足かけ11年を経過したことになる。報告書刊行までをもって完了とするなら、15年の歳月を要することになる。その間に、埋蔵文化財を担当する側も、社会教育課・文化室・文化財保護課・文化課の変遷をたどり、また昭和54年4月からは県立埋蔵文化財センターの設置をみている。間もなく全路線の開通供用をみることになるが、その建設に当って寺家祭祀遺跡をはじめ幾多の文化遺産を発見し、また、これを記録保存という名で抹消してきたことを忘れてはならない。保存された遺物や記録を十分に活用することで償わねばなるまい。

今、過去10年の関連調査を振りかえり、反省すべき最大の事柄は、埋蔵文化財センター設置以前に行われた分布調査が必ずしも充分でなかったことである。さきにも触れたことであるが、埋文センター開設以前は、埋蔵文化財保護に寄せる配慮よりも、開発側に近い行政的配慮の方が優先していた時期があった。有料道路3期のうち、能登半島縦貫道路と海浜道II期の前半において特にその傾向が強く、その存在すら確認される機会も与えられず、消滅した遺跡も無しとは言い切れない。調査体制が不備な段階でこそ、地元研究者等の協力を得るための配慮が必要なのであり、能登海浜道I期を除いて「調査委員会」「調査団」を組織化しなかったところに、当時の保護行政側が埋蔵文化財の保護に示した誠意の程度を示している。能登海浜道II期に関連する発掘は昭和52年に始まり56年5月に終了している。この5ケ年に亘って、石川県がかつて経験したことのない過密発掘を実施している。とくに昭和55年度の寺家遺跡では、初めての体験である1現場1万m<sup>2</sup>発掘を実施している。発掘調査面積の増大化が、埋蔵文化財保護の円滑化と安易に結びつけられることが多い。それは、短期日で広い面積を発掘せよという要請となって現われる。行政発掘の正しいあり方については、常に問い直す姿勢が求められよう。有料道路を原因とした10余年に亘る経緯は、これを問い直す一つの道標であるともいえよう。



# 中村畑遺跡発掘調査報告



# 第 I 章 遺跡の位置と環境

## 第 1 節 位置と地理的環境

口能登最大の穀倉地帯を形成する邑知地溝帯の北屏・眉丈山系は、標高 188 m の雷ヶ峰を最高所とするなだらかな山系である。分水嶺が南の断層崖から約 1 km のところにあることから、河川のほとんどが北方・西方に流れ込む。これが伊久留川や於古川となり、中・下流域に肥沃な沖積平野を形成。文化を育む母体となった。於古川は眉丈山系から西流して志賀町を貫流、日本海に注ぐ川である。於古川の中流域には旧福野潟低地が広がり、穀倉地帯独特の田園風景をかもしだしている。

志賀町の大字上棚は於古川の上流、眉丈山系の西方山麓に位置する。狭少な河谷平野の山裾を上棚川（東谷内川）と函屋川が北流。両河川は当地で合流し日詰川となり、二所宮雨谷で於古川に収束する。山麓に散在する集落は上棚出・上野出・箱屋・別荘谷内・中村・宮の前・東谷内の 7 小字に分かれる。中村部落は上棚川右岸の山裾に営なまれる農山村である。遺跡はこの中村部落背後の、狭少な台地上に形成された棚田地帯周辺に所在する。

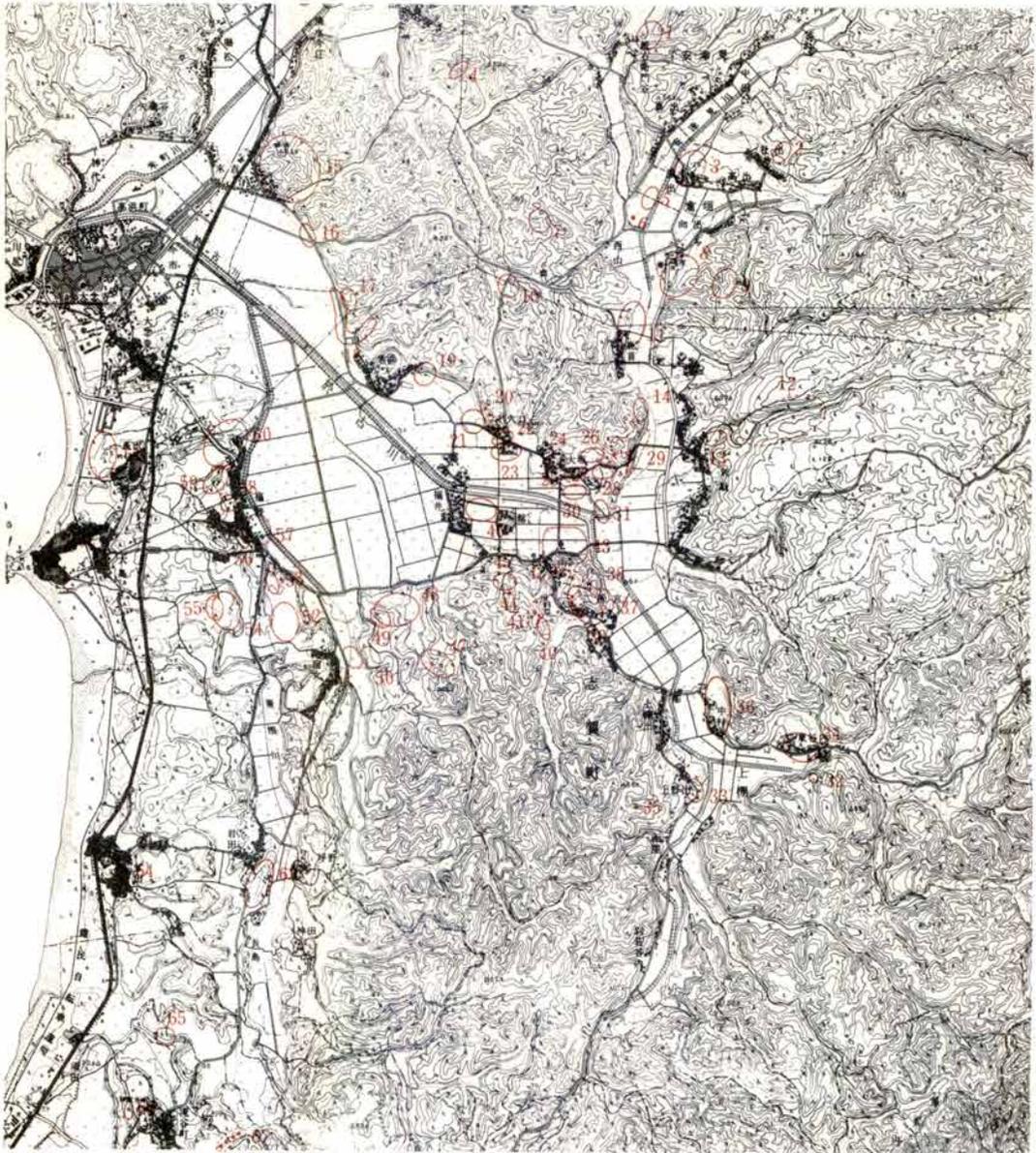
当地は、鹿西町後山地内を通り地溝帯へぬける山越えルート（いわゆる徳丸峠越え）と、鳥屋町花見月・瀬戸を通り二宮川下流域へぬける眉丈山西縦谷ルートの要衝にあたることから、古代より重要な位置を占めてきた。現在でも両路線は県道能登部一高浜線として、広く県民に活用されている。

## 第 2 節 歴史的環境

まず、中村畑遺跡の周辺地域における遺跡分布状況を概観してみたい。

縄文遺跡としては、旧福野潟を取り巻く眉丈山系の支脈丘陵台地上に大坂オバタケ・東谷内・長沢堂ヶ谷の各遺跡が存在する。いずれも、昭和 29 年に実施された旧福野潟周辺総合調査により、縄文中期を中心とした集落跡であることが確認されている。志賀町の縄文遺跡には他に、志加浦一帯に点在する志加浦縄文遺跡群が知られている。これらは小浦マツハズレ・上野ヤケダ・安部屋営団 A 遺跡などに代表される縄文前期～中期初頭頃にかけての遺跡群である。また、先の総合調査により能登地方での最初の発見となった堀松貝塚は、町の中央北部、堀松地区の西に連なる通称上野の台地斜面に所在する。調査の結果、貝層を構成する貝類はシジミを主体とするもので（他にはサルボウ・カキ・サザエなど）、伴出した土器片により縄文時代中期前葉～後半にかけて形成されたものであることが確認された。このことは、能登の縄文文化を考えるうえで貴重な資料を提供しただけではなく、福野潟生成時期を究明するうえにおいても価値ある成果を取めたといえよう。

弥生時代の遺跡は米町川や於古川の流域に認められる。米町川中流域に所在する北吉田米町川



- |              |             |               |             |
|--------------|-------------|---------------|-------------|
| 1 安津見遺跡      | 18 米浜遺跡     | 35 上棚火の塚古墳    | 52 長沢おおくぼ遺跡 |
| 2 安津見上野畑遺跡   | 19 米浜はげの下遺跡 | 36 上棚中村畑遺跡    | 53 福野経塚     |
| 3 倉垣上野ヶ原遺跡   | 20 穴口古墳群    | 37 二所宮日詰遺跡    | 54 長沢堂ヶ谷内遺跡 |
| 4 北吉田横穴      | 21 米浜藤の森遺跡  | 38 二所宮日詰用水遺跡  | 55 大島神土山遺跡  |
| 5 安津見川の中遺跡   | 22 穴口宮の下遺跡  | 39 二所宮宮山遺跡    | 56 福野高野坂遺跡  |
| 6 丸山古墳       | 23 穴口貝塚     | 40 二所宮小学校裏遺跡  | 57 福野前川遺跡   |
| 7 安津見西山遺跡    | 24 大坂おぼたけ遺跡 | 41 下甘田小学校古墳群  | 58 福野上野遺跡   |
| 8 倉垣遺跡       | 25 大坂遺跡     | 42 二所宮古墳群     | 59 福野横穴     |
| 9 倉垣1号窟跡     | 26 大坂寺畑遺跡   | 43 大坂舟の町遺跡    | 60 福野大念寺跡   |
| 10 矢駄おはい山遺跡  | 27 大坂坊の上遺跡  | 44 おお千場古墳     | 61 長沢中世遺跡   |
| 11 鹿首モリガフチ遺跡 | 28 大坂やちだ遺跡  | 45 館遺跡        | 62 大島氏館跡    |
| 12 矢駄横穴墓群    | 29 大坂城ヶ墓古墳群 | 46 館泉田跡       | 63 坪野中世墳墓群  |
| 13 矢駄瀬戸山遺跡   | 30 大坂坊の下遺跡  | 47 福井二塚1・2号墳  | 64 甘田くるみ谷古墳 |
| 14 鹿首遺跡      | 31 大坂古屋塩内遺跡 | 48 福井まんだらじA遺跡 | 65 滝谷八幡社遺跡  |
| 15 末吉城跡      | 32 東谷内垣内遺跡  | 49 福井まんだらじB遺跡 | 66 滝谷中世墓    |
| 16 末吉瓦冢遺跡    | 33 上棚遺跡     | 50 宿南山遺跡      | 67 滝谷古墳群    |
| 17 米浜クルマダン遺跡 | 34 東谷内遺跡    | 51 宿女遺跡       |             |

第1図 位置と周辺の遺跡 (縮尺1/50,000)

川底遺跡から採集された数点の土器片は、県下において最古の弥生式土器とされた加賀市柴山出村遺跡出土土器に近似するもので、野々市町上林遺跡や金沢市寺中遺跡から出土した同期の土器片とともに、県下の弥生文化波及期を考えるうえで貴重な資料となっている。一方、於古川の本・支流域には福野マエガワ遺跡・倉垣加茂小学校遺跡・二所宮日詰遺跡・鹿首モリガフチ遺跡等が存在する。これらは弥生時代中期中葉～後期終末にかけて営まれた集落遺跡である。なかでも、中村畑遺跡の調査と併行して発掘調査された鹿首モリガフチ遺跡からは、多数の完形土器をはじめ、大型の住居跡・土壙等が検出され、当地域における弥生終末期を代表する遺跡であることが確認された。

古墳時代に至っても於古川の本・支流域には引き続き集落が造成されている。上棚中村畑遺跡もその例にもれるものではない。また、古墳の築造も盛んに行なわれており、中期から後期の所産である大坂城ヶ墓古墳群・二所宮古墳群・下甘田小学校古墳群をはじめ、館おお干場古墳・福井1・2号墳・上棚火の塚古墳・倉垣丸山古墳などが知られる。

奈良・平安時代の遺跡としては、倉垣コマクラベ窯跡・大坂寺畑遺跡・大阪舟の町遺跡・米浜藤の森遺跡などがある。なかでも倉垣コマクラベ窯跡は平安時代中期初頭の築窯と推定されるもので能登における須恵器生産の地域相を考えるうえで貴重な資料を提供している。中世に至ると遺跡は、おもに福野潟西方の内列砂丘縁辺に形成されている。このことは、当時の生活の中心が海岸線へ移行してきたことを物語るとともに、旧福野潟を中心とした農業生産だけでなく、漁業・海運の盛行をも推察させる一要因となっている。

## 第Ⅱ章 調査の経緯

### 第1節 調査の経緯

中村畑遺跡の調査は、能登海浜道第2期工事に伴う上棚I・Cの取り付け道路建設に係るものであった。調査は、事業主体である県有料道路課からの依頼を受けた県立埋蔵文化財センターが昭和55年7月25日～同年12月24日にわたって実施した。

当取り付け道路は、上棚中村部落北の棚田地帯を経由し、北東行して本線に接続するものである。遺跡はこの棚田地帯（一部畑地を含む）周辺に所在することから、調査にあたっては、事前に遺跡の広がり把握のための試掘調査が必要とされた。試掘調査は、調査区をA地区（畑地部分）とB地区（水田部分）とに分割し、トレンチ法を採用して行なった。調査の結果、A地区には確実に遺跡が存在することが確認された。しかし、B地区には部分的に未買収地区が存在していたことから、試掘区域が制約され、十分な成果を得ることはできなかった。そこで、B地区の未買収地区に関しては買収が完了した段階であらためて試掘調査を実施することとし、とりあえずA地区より発掘調査を開始することになった。

A地区は遺跡の北端に位置する。急斜面と鞍部から成る複雑な地形により、流入推積土は深い所で2mにもおよんでいた。この流入推積土の除去作業には、未買収地区の存在により重機が導入できず、全て人力にたよらざるをえなかった。加えて、人夫として調査に参加していただいた方々の大半が高齢に達していたことから、作業の完了には予想以上の日数を要することになった。また、現場調査員の不足により調査が断続的なものにならざるをえなかったことも、結果的には調査が遅滞する要因となった。このような悪条件のなかでA地区の調査は進められた。そして、最終的な実測段階に至ったのは10月も下旬にさしかかる頃であった。

この期を境に、調査の主体はようやくB地区に置かれることになった。しかし、この頃から今度は悪天候に悩まされる日々が続くようになる。この年は、夏以来、例年のない異常気象に見舞われており、秋口から暖を必要とするほど寒い日が続いた。また、終日の晴天は望めず、調査は雨天強行という熾烈な事態にまで追い込まれた。それにもかかわらず、日々雨合羽を持参して、調査に協力された地元住民の方々のおかげにより、調査は12月24日をもって完了することができた。ここに記して謝意を表する次第である。

### 第2節 調査日誌抄

昭和55年7月9日

中村畑遺跡の発掘調査について有料道路課と打ち合せを行う。当方からは谷内尾・中島・土肥が出席。工事着手が明年度であることを確認。A地区から調査を開始することとする。

7月25日

本日より中村畑の調査開始。A地区の草刈りを行う。現状は畑地である。

7月26日

草刈り終了。プレハブ建設予定地の水田にトレンチを2本設定。北側・南側両トレンチからは遺構・遺物の検出はなく、当水田地が過去の耕地整理により削平を受け造成されたものであることを確認した。

7月27日

本日より人夫20名参加。路線センター杭を基軸として調査区全域を覆うグリッドを設定。杭打ち作業を開始する。併せてA地区に設定したトレンチ（南側）の発掘作業を行う。

7月29日

グリッド杭打ち続行。A地区のトレンチ（南側）を拡張する。本日、志賀町文化財審議委員の方々10余名来跡。見学される。

8月1日

グリッドの基本杭打ち作業終了。これをもとに路線敷にトレンチを設定する。A地区のトレンチ（南側）の表土除去作業終了。ピット・土壇・溝状遺構等を検出。遺物としては須恵器・土師器（いずれも平安期か）が多い。

8月2日

路線敷におけるトレンチの設定完了。東西方向に幅2mで路線敷いっぱいに設定する。A地区のトレンチ（北側）を掘り始める。地形的に鞍部と考えられることから、大量の流土が推積しているものと推察される。

8月4日

A地区のトレンチ（北側）発掘作業。明確な包含層は認められないが、流土中から須恵器・土師器等の破片が出土する。A地区南側のトレンチ拡張区で住居跡を検出。

8月8日

路線敷に設定したトレンチ発掘の結果、調査対象区のはほぼ中央部にあたる棚田地帯には、遺構が存在しないことを確認した。A地区のトレンチ（北側）発掘作業継続。

8月20日

路線敷に設定したトレンチ発掘終了。路線南端（中村部落寄り）の台地の北側に溝状遺構が存在することを確認。A地区の調査終了後、この地を拡張調査とすることとする。

8月28日

A地区のトレンチ（北側）発掘作業および遺構検出作業。

9月3日

A地区遺構検出作業および北側トレンチ拡張作業。

9月9日

A地区遺構検出作業およびトレンチのセクション実測。北側トレンチの拡張作業継続。

9月13日

A地区北側トレンチの拡張作業継続。

9月17日

本日より、同町倉垣・矢駄地内に所在する鹿首モリガフチ遺跡発掘調査現場に合流。実測作業を行う。このため、一時、中村畑の調査を中断する。

10月20日

本日より中村畑遺跡の調査を再開する。ユンボによりA地区の掘り残し部分を掘る。その後、B地区（路線南端の台地北側）で検出した溝状遺構周辺の表土除去作業を行う。

10月21日

A地区の清掃作業と遺構検出作業を行う。B地区の表土除去作業継続。本日、鹿首モリガフチ遺跡から器材搬入。午後から遺跡航空写真撮影実施。

10月22日

B地区の表土除去作業終了。

10月30日

A地区の遺構検出作業。南側で半壊状態の住居跡1棟（方形・1辺約8m）を検出。その他にもピット・土壇数基を検出した。その後遺構発掘作業開始。

11月7日

A地区の遺構発掘作業。完掘した土壇（1～4号）の平面・断面実測。

11月20日  
A地区の遺構検出作業および遺構発掘作業。検出された土壇・ピット等の平面・断面実測。本日よりB地区の調査を開始する。

11月21日  
A地区の検出遺構完掘。写真撮影を行う。B地区、トレンチ拡張区の清掃。遺構検出作業開始。

11月26日  
A地区の平板実測開始。B地区は遺構検出作業継続。

11月27日  
B地区・調査区の北側に落ち込み検出。しかし、検出面での土色が単一でないことから遺構の重複も考えられる。

11月29日  
B地区の北側落ち込みを掘る。上面で溝状遺構を検出。2号溝とする。

12月1日  
B地区、2号溝完掘。その後写真撮影・平面実測（ $S=1/20$ ）。結果的に2号溝は3号溝の覆土を切って形成されたものと判断。引き続き3号溝を掘る。

12月3日  
A地区の平板実測継続。B地区3号溝の発掘作業。

12月11日  
8日ぶりの晴天。B地区、3号溝下層上面まで掘り下げる。その後セクション実測。

12月16日  
A地区、1号住平面実測図（ $S=1/20$ ）。B地区、水くみの後清掃作業。

12月18日  
B地区、3号溝（大溝）完掘。その後清掃・写真撮影。

12月20日  
雪の激しく降る中、B地区大溝の平面実測作業（ $S=1/20$ ）。

12月22日  
大溝の平面実測。その後レベル測定・一部遺物の取り上げ作業。

12月23日  
大溝の遺物取り上げ作業。本日、大半の器材を撤収する。

12月24日  
B地区の平板実測作業（ $S=1/100$ ）。本日を以て能登海浜道第2期建設工事に伴う中村畑遺跡の緊急発掘調査を終了する。

# 第Ⅲ章 遺 構

## 第1節 分布調査と遺跡の範囲

### (1) 分布調査の概要

発掘調査範囲を確定するため、本調査に先だち2度にわたって分布調査を実施した。

第1次の分布調査は、遺跡の有無およびその分布範囲を把握することを目的として、昭和54年5月12日に実施した。その方法は路線敷予定地の任意の7ヶ所に試掘溝を設け、遺構・遺物包含層の有無の確認を行なった。試掘溝は幅1mのトレンチで、延面積約120m<sup>2</sup>にわたって設定した。

その結果、遺跡地は近世の開田により、かなり大規模に削平整地されており、旧地形の変形が著しく、良好な遺存状態を保っているとはいえない状態であった。また、用地買収が未完了の箇所が点在し、地主の了解も得られなかったため、不十分な調査とならざるをえず、当初予定した成果をあげることができなかった。このため、極めて不確定要素の強いものであるが、遺構と遺物の分布は、少なくとも予定路線内の2ヶ所にわたって認められ、約2500m<sup>2</sup>が調査の対象面積と推定された。

第2次の分布調査は、昭和55年7月25日より、A地点の本調査を併行して実施した。

これは第2次の分布調査の不確定要素を補い、発掘調査の実施範囲を確定することを目的としたものである。南北250m、東西135mの範囲に5m区画のグリッドを設定し、それに応じて、5mごとに、路線幅いっぱいにトレンチを設けて試掘することを基本に実施した。

### (2) 遺跡の範囲

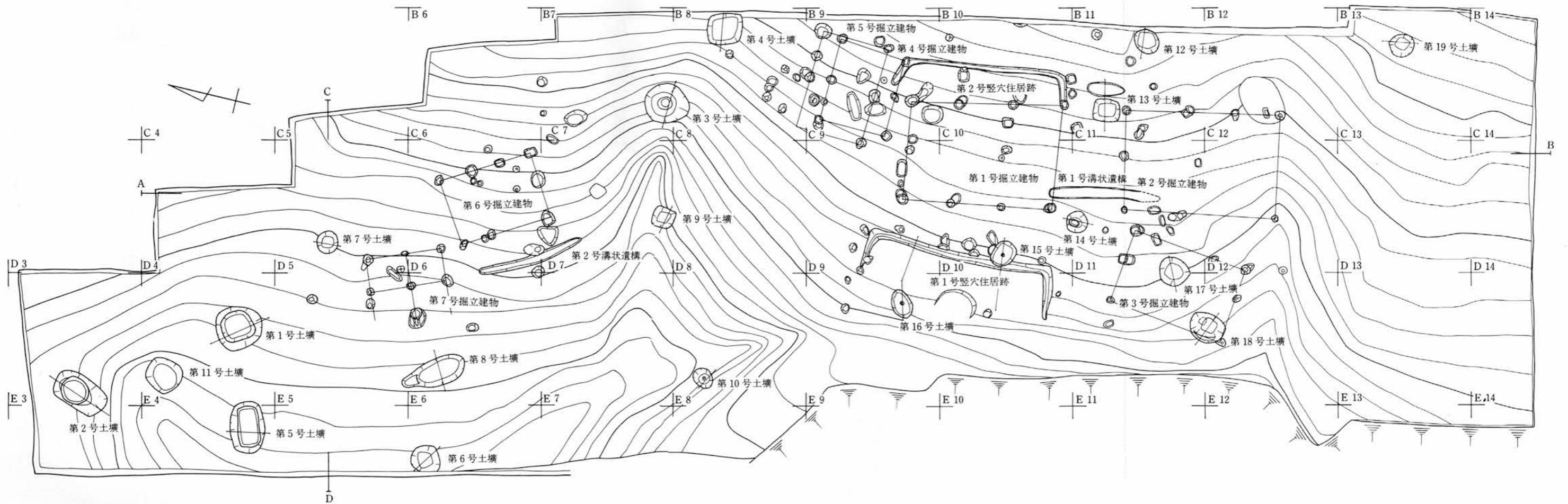
分布調査区の2ヶ所より遺構・遺物包含層が確認された。それぞれ、中村畑遺跡A地区、B地区と便宜上分割して記述を進めることとする。

**A地区** 中村畑台地北端、山裾緩斜面に設定した調査区で確認された。グリッド番号FI～F15を西端とし、山裾までの範囲である。この部分は、畑地として近世の開田による削平をまぬがれた地点で、遺跡の遺存状態は比較的良好である。遺構の分布のあり方から、かつては当然西側緩斜面にかけて、遺跡が広がっていたものと推定されるが、これらの地点は段々の棚田状に開田されており、トレンチ調査で、遺構が完全に削平され破壊されていることが確認されたため、調査の対象から除外した。これらの地点でもかつての開田作業の際、土器が出土しており、遺跡は西側平野部にかけて広がっていたことは確実である。A地区での調査面積は約1000m<sup>2</sup>である。

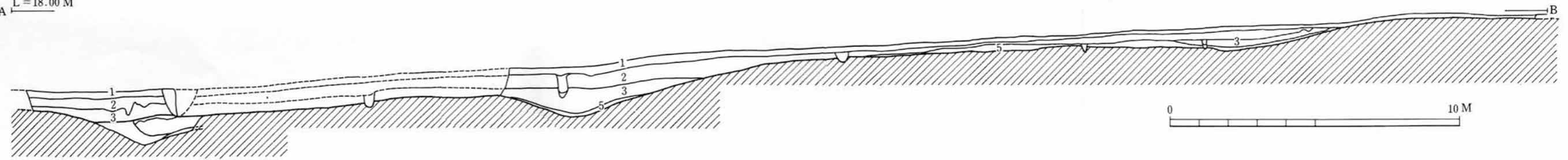
**B地区** A地区と低い谷状をなす鞍部を隔てて位置する。A地区同様、開田作業で大きく損壊しており、遺存状態は極めて悪いが、グリッド番号、J37、J40、Q40、Q38を結ぶ約800m<sup>2</sup>の範囲で遺構・遺物包含層を確認し、これを調査対象区域とした。B地区での遺跡の拡がり、現中村畑集落背後からも遺物の出土が知られることから、これらを中心とした約5000m<sup>2</sup>と推定する。



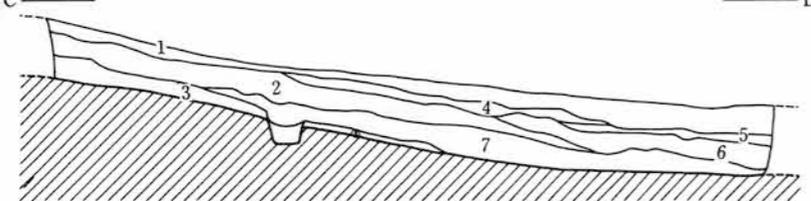
第2図 調査区の位置



A L = 18.00 M



C L = 16.00 M



- 凡例
- 1 表土層
  - 2 明茶褐色粘質土層
  - 3 黒褐色粘質土層
  - 4 暗茶褐色粘質土層
  - 5 暗黄褐色粘質土層
  - 6 混黄褐色粘質土ブロック暗茶褐色粘質土層
  - 7 混黒褐色粘質土ブロック暗茶褐色粘質土層

第3図 A地区遺構配置および土層断面図 (縮尺1/150)

## 第2節 A地区の遺構

### (1) 層序と遺構配置

#### 層序 (第3図)

土層の堆積は、山側よりの流土の関係で、調査区東側で少なく西側が多い。また、南端では概して少なく、北側が多い。すなわち、B 10グリッド付近では地表下約 30 cmで地山に達するが、もっとも堆積の厚いF 4グリッド付近では現地表より地山面で約 160 cmを測り、地点により極めて不均等な堆積状況を呈する。

遺跡の基本的層序は、暗褐色を呈する表土層(第1層)下に茶褐色粘質土層(第2層)、黒褐色粘質土層(第3層)があり、地山面に達するが、地点により、これらの層間に暗茶褐色粘質土、暗黄褐色粘質土、混黄褐色粘質土ブロック暗茶褐色粘質土などの各層が混在し、それは調査区の北西部地区を中心に比較的顕著に認められる。

各層における遺物の包含状況は、第2層とした茶褐色粘質土層中に、古墳時代後期・平安時代後期が混入して認められ、第3層とした黒褐色粘質土層には全く遺物は包含しない。したがって遺構面にあたる面を除いて、地山面により直接出土する遺物は皆無である。また、各遺構の掘り込み面は、掘立柱建物の柱穴と推定されるピット群はそのほとんどが第2層上面より掘り込まれ、土壙状遺構は第3層上面よりのものと、地山面からのものがあり、時期的な相異を示している。

こうした、遺物の包含状況の遺構検出面の検討から、第2層上面が平安期の生活面、第3層上面が古墳時代後期の生活面、地山面あるいは第3層が縄文時代の生活層と推定したい。また、第2層と3層との間層をなす5・6層は、単に山よりの流入堆積土というよりも、平安期において生活面整地のため意識的に客土された盛土層である可能性も強い。

#### 遺構の配置 (第3図)

A地区の調査区の微地形を概観すると、F 7グリッドからB 8グリッドにかけてとE 12グリッドかからB 13グリッドにかけての、2ヶ所に凹状の鞍部が入り込み、調査区の北側と、ほぼ中央部南側が高台となっている。ピット群はこの部分に集中して検出され、住居址と推定される堅穴状遺構2基がこの凹部にはさまれた高台部に営まれている。ピット群は掘立柱建物の柱穴として考えてよいものであり、排水を意図した立地といえよう。

これに対して、土壙状遺構は調査区全域から検出されている。一見無秩序な配置状況を呈しているが、詳細にみると、上記の遺構同様かなり意図的な配置関係がみとめられる。後述するが土壙状遺構には、縄文時代に帰属する落とし穴と考えられるものと、古墳時代後期の所産と考えられる覆土上面に焼痕を残す大型大壙がある。縄文時代の落とし穴と考えられる土壙は比較的至高所に位置するものが多く、たとえば、第12号土壙、第13号土壙、第14号土壙、第15号土壙、第16号土壙はそれぞれ旧地形の高台尾根筋に従って列状に連続して検出され、当時のけもの道にそった配置としてとらえることが可能である。対して古墳時代の大型土壙は、凹地となっている低所に作られており、これは高所からの集水を意図した結果とも受け取られ、その性格を考える上で

興味深い。

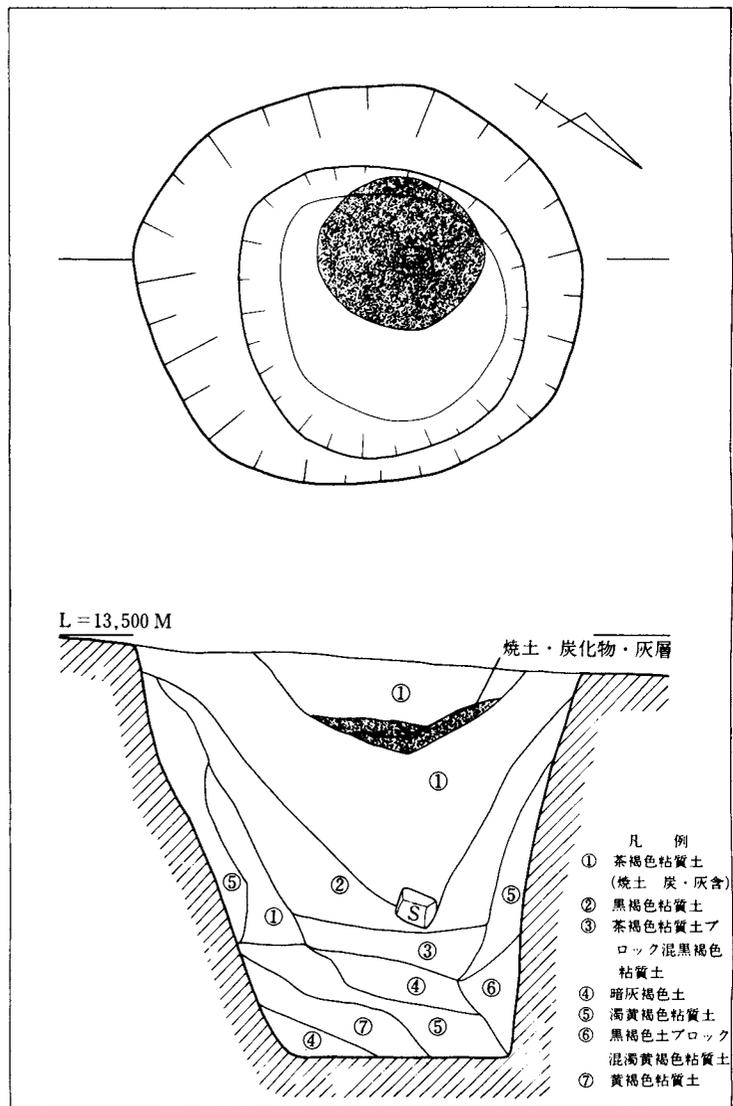
## (2) 土壙状遺構

### 第1号土壙（第4図・図版6）

位置 調査区北部の緩傾斜面に位置し、第5号土壙と北に約3m隔てる地点に存在する。

形態 円筒状を呈する大型の土壙である。壁は検出面より約100cmまではやや傾斜をもって落ちそれ以下はほぼ垂直に落ち平坦な底面を作り円筒状を呈する。規模は、上面で径約180cm、中段部で径約100cm、基底面で径約90cmを測る。深さは中央部で約160cmである。壙内覆土は中段部を境として上下で大きく異なり、この土壙が意識的に廃棄され埋戻されたことを示している。上位は焼土・炭化物層を含む茶褐色粘質土がV字状をなして堆積するのに対して、下位では、黒褐色粘質土、暗灰褐色土、黄褐色粘質土がレンズ状に互層をなし、壁際では地山の崩れとも受け取れる濁黄褐色粘質土が壁面を覆うがごとく垂直的に堆積する。このことは、この土壙内に円筒形をなす筒状木製品が納置されていたことを示すものと考えられ、壁際に充填されたごとく堆積する濁黄褐色土は土壙壁と筒状木製品の隙間に詰められた裏込め土の役割をはたすものと理解できる。

また、この遺構の廃棄に伴う意識な埋土とみられる茶褐色粘質土中には焼土・炭化物粒が多く含まれており、特に上面より約25cmの地点で、径約70cm、厚さ10cm前後の焼土・炭化物層塊が検出されたことは、何らかの火を使用する営為が同時に行なわれたことを示している。こうした形態は他の同形態の大型土壙とも共通する事象であり、これらの土壙の性格の一端を暗示するものであろう。

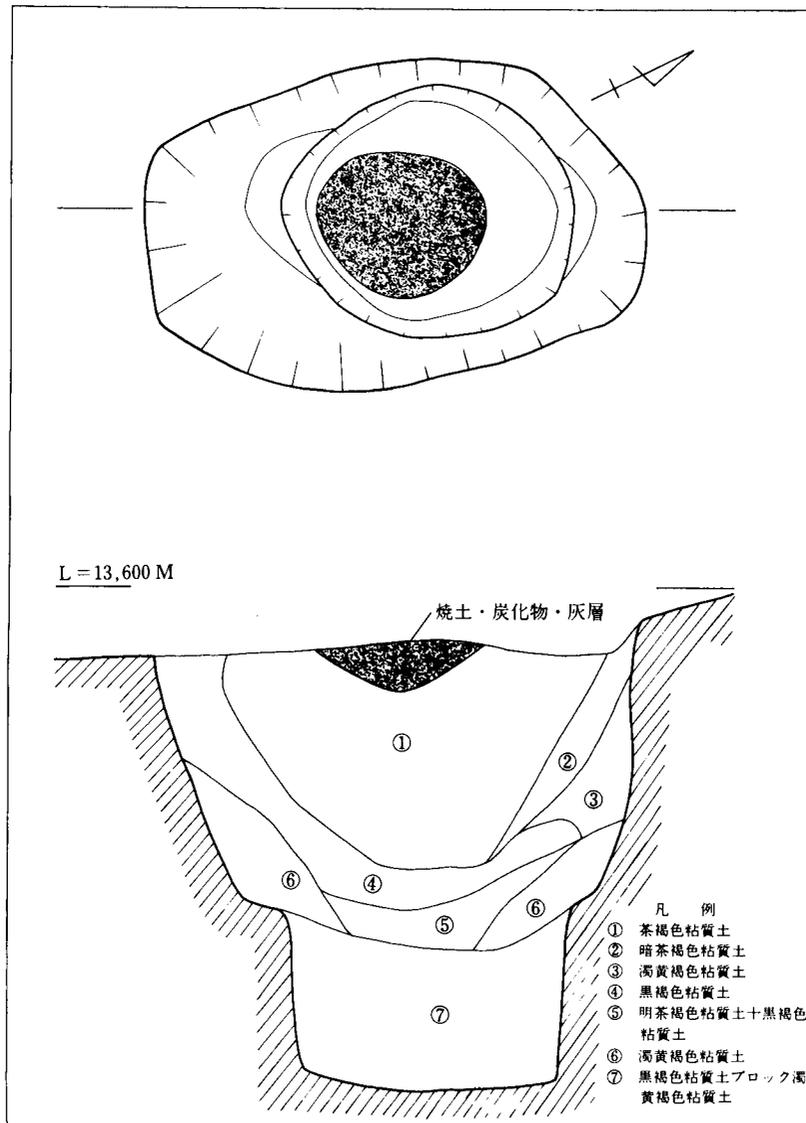


第4図 第1号土壙実測図（縮尺1/30）

第2号土壙（第5図・図版6）

位置 調査区の最北端に位置し、第11号土壙の北に約2m離れる。微地形的にはF5グリッドから北にかけて浅い谷状をなす凹地が入り込んでおり、その落ち際に位置する。

形態 掘込み上面が南北に長い長円形をなす大型土壙である。第1号土壙と同様に、壁は検出面より約100cmまではやや傾斜をもって落ち、幅約10cmのテラスを作り、以下はほぼ垂直に落ち正円形に近い底面を作る。底面は平坦で下部は円筒状をなす。規模は、上面で長径約200cm、短径130cm、下部上面で径約115cm、基底面で径約105cmを測る。深さは中央部で約180cmである。壙内覆土は中段部を境として異なる。下部が黒褐色粘質土の混合土ほぼ1層からなるのに対して、上部は、焼土・炭化物粒を含む茶褐色粘質土が90cm近くV字状に厚く堆積し、その下に黒褐色粘質土、茶褐色粘質土が互層をなし、壁際を廻るように濁黄褐色粘質土が垂直的に堆積し、



第5図 第2号土壙実測図（縮尺1/30）

ドーナツ状を呈する。また、第1号土壌と同様に、土壌覆土上面に焼土・炭化物・灰のレンズ状の集積層が径約60 cm、最大厚約20 cmにわたって検出され、本土壌が意識的に埋戻され、火の使用を伴う何らかの営為があったことを示している。

### 第3号土壌 (第6図・図版6)

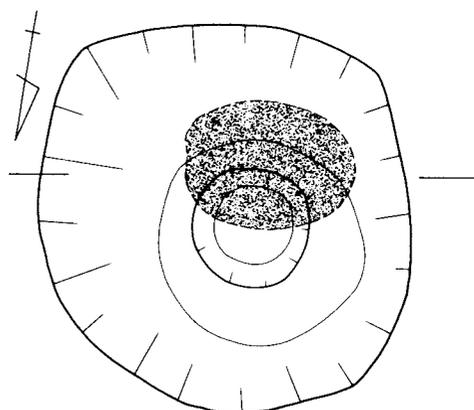
**位置** 調査区中央部のやや北、E7グリッドからB8グリッドにかけ谷状に入り込む凹地に位置する。調査区東壁より西に約3 mの地点で、第9号土壌とは東に約4 m隔てる。

**形態** 上面プランがほぼ正円形を呈する大形土壌である。壁はやや傾斜をもって落ち、正円形の底面を作り、さらに底面には浅い円形の掘込みが穿たれている。規模は上面で径約150 cm、底面で径約80 cmを測り、底面に穿たられた掘込みは径約45 cm、深さ10 cmと浅い。比較的急傾面に位置するため、底面までの深さは、地形的に高所の東側で約150 cm、低い西側で約100 cmを測る。土壌覆土は、東半部の壁際に半ドーナツ状をなして若干の黒褐色粘質土ブロックを含む濁黄褐色粘質土が垂直的に堆積し、その間に、黒褐色粘質土と茶褐色粘質土の混合土が断面V字状に堆積する。底面とそれに連なる壁には濁黄褐色粘質土の凹状堆積がみとめられ、底面の浅い掘込み部には黒褐色粘質土が堆積する。底面上約80 mの地点でよりしまった黄褐色粘質土の薄い水平堆積層がみられ、その上に、焼土・炭化物粒を含む暗茶褐色粘質土層が堆積する。この層中に長径約65 cm、厚さ15 cmの焼土・炭化物の集積塊が存在する。

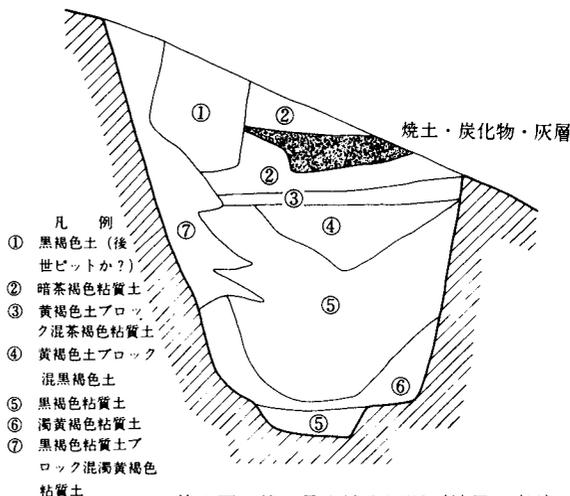
### 第4号土壌 (第7図・図版6)

**位置** 第3号土壌から東に約1.5 m、調査区東壁に接して位置する。

**形態** 上面プランが隅丸方形を呈す大形土壌である。壁はほぼ垂直に落ち、底面は鍋底状をなし、断面はU字状を呈する。規模は上面で一辺約140 cm、下面部はやや円に近いプランで径125 cm、深さは中央部で約170 cmを測る。土壌覆土は、深さ約130 cmの地点までは第1号土壌などと同様に、壁を取りまくように若干の茶褐色粘質土ブロックを含む黄褐色粘質土がドーナツ状をなして垂直堆積し、それによって形成された円筒状の茶褐色粘質土・黒褐色土およびそれと茶褐色粘質土の混合土が断面V字状に堆積する。



L=15,700 M



第6図 第3号土壌実測図 (縮尺1/30)

第3層とした黒褐色土と茶褐色粘質土層の下面はほぼ水平であり、それ以下はかなり固く敷詰められた感の強い濁黄褐色粘質土、暗灰褐色土が互層をなして堆積する。覆土上面には長径75 cm、短径50 cm、厚さ40 cmの焼土・炭化物集積層が検出されている。

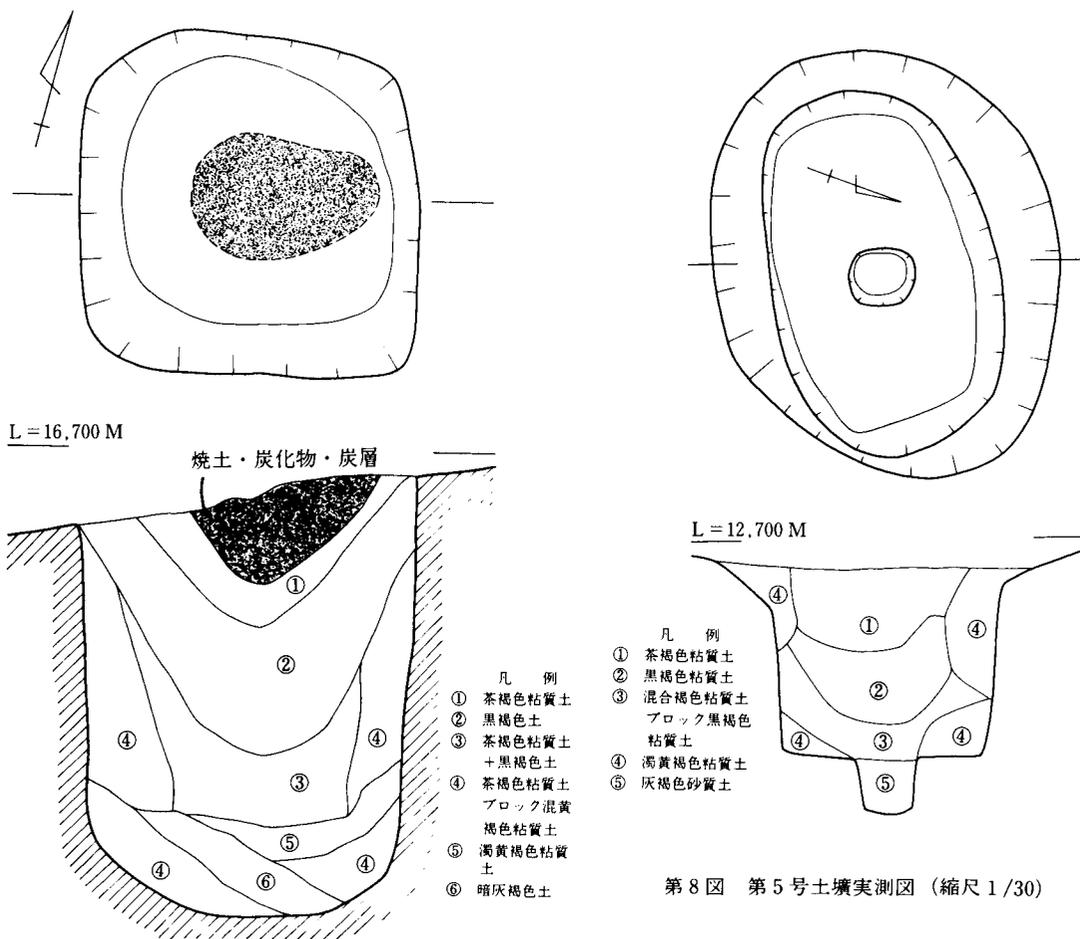
第5号土壙（第8図・図版7）

位置 調査区の北部、第1号土壙の西方約2mの凹部となっている地点に位置する。

形態 上面プランが長円形を呈し、底面中央部にピットをもつ比較的大型に属する土壙である。

土壙掘方は2段に掘り込まれており、下段の壁はほぼ垂直に落ち、平坦で水平な底面を作る。

規模は、上面で長径約170 cm、短径約135 cm、下段上面で長径約145 cm、短径約60 cm、底面で長径約120 cm、短径約80 cmを測る。深さは中央部で約75 cmである。底面中央部に穿たれたピットは径約24 cm、深さ24 cmを測る。土壙覆土は、壁際に接して濁黄褐色粘質土がドーナツ状に廻



第7図 第4号土壙実測図（縮尺1/30）

第8図 第5号土壙実測図（縮尺1/30）

り、中央の空間に、茶褐色粘質土、黒褐色粘質土、および、これらの混合土が順次堆積する。底面のピットには灰褐色砂質土が堆積する。

第6号土壙（第9図・図版8）

位置 第5号土壙から北に約6m隔てた地点に、調査区西壁に接して位置する。調査区内では凹地で低所にあたる部分に営まれた土壙である。

形態 平面プラン楕円形を呈する円筒形の土壙である。壁はやや傾斜をもって落ち、平坦な底面を作る。規模は上面で長径約160cm、短径140cm、底面で径約60cmを測る。検出面よりの深は中央部で約85cmである。土壙覆土は、茶褐色土および灰褐色砂質土が互層をなして堆積するが、低所にあるため、水分を多く含み軟質な土壌である。

第7号土壙（第10図）

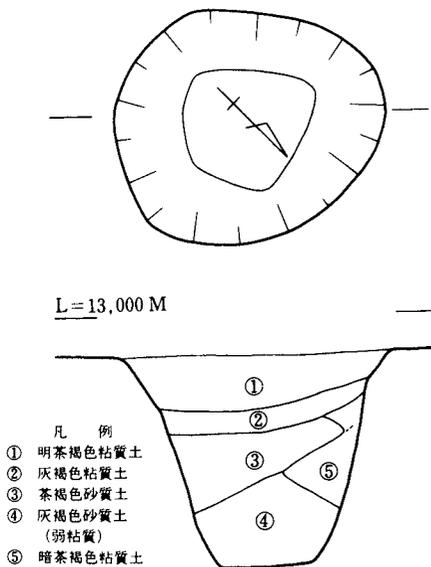
位置 第7号掘立建物の北に位置し、第1号土壙とは東に約4m隔てる。

形態 平面プラン円形を呈する円筒形の土壙である。壁はやや傾斜をもって落ち、底面は平坦に整えられている。規模は上面で径約75cm、底面で径約50cmを測り、深さは中央部で約60cmである。土壙覆土は底面より上面近くまで暗茶褐色粘質土が堆積し、上面には茶褐色粘質土がレンズ状に堆積する。

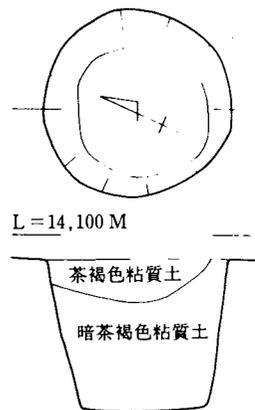
第8号土壙

位置 第7号掘立建物の西に位置し、第6号土壙とは東に約3m隔てる。

形態 平面プラン長円形をなす、浅い土壙状落込みで、北西端で同様の小規模な落込みと重複している。断面プランは、明確な底面を作らない浅い舟底状をなし、壁面や底面には凹凸があり乱雑に掘られている。規模は上面で長径約180cm、短径約100cmを測り、深さは中央部で約30cmと深い。土壙覆土は暗茶褐色粘質土が上面まで堆積する。



第9図 第6号土壙実測図（縮尺1/30）



第10図 第7号土壙実測図（縮尺1/30）

#### 第9号土壙（第11図・図版7）

位置 調査区中央部のやや北、E7グリッドからB8グリッドにかけ谷状に入り込む凹地の底部傾斜面に位置し、第3号土壙とは西に約4m隔てる。

形態 平面プラン不整形円形を呈する比較的小型の土壙である。壁はやや傾斜をもって落ち、鍋底状の底部に連なる。このため、断面形はU字状を呈する。規模は、上面で長径約85cm、短径約70cmを測り、深さは中央部で約80cmを測る。土壙覆土は、底部より明茶褐色粘質土、茶褐色粘質土が中位ぐらいまで堆積、それより上は黒褐色粘質土が上面まで堆積し、他の同形態の土壙とやや層序関係が異なる。

#### 第10号土壙（第12図・図版7）

位置 調査区中央部の北西よりの凹地に位置し、第9号土壙とは南西に約5m隔てる。

形態 平面プランがほぼ正円形を呈し、底部にピットを有する円筒形の土壙である。壁は傾斜をもって落ち平坦な底面を作る。底面のほぼ中央にピットが穿たれている。規模は、上面で径約80cm、底面で径約35cmを測り、深さは中央部で約55cmを測る。底面のピットは径13cm、深さ約20cmを測る。土壙覆土は、底面から中ほどまで暗茶褐色粘質土、茶褐色粘質土がレンズ状に堆積する。底面ピットには濁黄褐色粘質土が堆積する。

#### 第11号土壙

位置 調査区北端の凹地斜面に位置し、第2号土壙とは南に約2m隔てる。

形態 平面プランが楕円形を呈する浅い土壙状遺構である。明確な底面を作らず鍋底状である。規模は、上面で径約120cm、深さ約50cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土が上面まで堆積する。

#### 第12号土壙（第13図・図版8）

位置 調査区のほぼ中央部の東壁に接した最高所に位置する。この土壙を含める5基土壙が東から西にかけて列状に配されており、西隣する第13号土壙とは約2.5m隔てる。

形態 平面プランが楕円形を呈する円筒形の土壙である。壁はほぼ垂直に近い形で落ち、平坦な底面を作る。底面形は方形に近い。規模は、上面で長径100cm、短径約89cm、底面で長径60cm、短径52cmを測る。深さは中央部で約150cmと深い。土壙覆土は、底面から約40cmまで暗灰茶色粘質土が堆積し、それから上は上面まで暗茶褐色粘質土が厚く堆積する。

#### 第13号土壙（第14図）

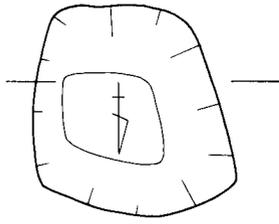
位置 調査区中央部東より位置し、西隣する第13号土壙とは約4m隔てる。

形態 平面プランが楕円形を呈する円筒形の土壙である。壁はほぼ垂直に落ち、平坦な底面を作る。規模は上面で長径約90cm、底面で長径約75cm、短径約65cmを測る。深さは中央部で約85cmを測る。土壙覆土は、暗茶褐色粘質土、濁黄褐色粘質土がレンズ状を呈して互層に堆積する。

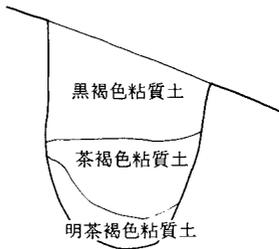
#### 第14号土壙（第15図・図版7）

位置 調査区のほぼ中央部に位置し、隣接する第15号土壙と北西に約3m隔てる。

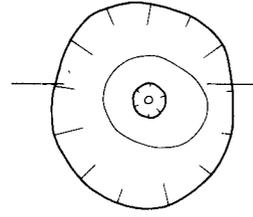
形態 平面プランがほぼ正円形を呈する円筒形の土壙で、底面に浅いピット状をなす掘込みが穿たれている。規模は、上面で径約80cm、底面で径約50cm、ピット底面で径約30cmを測る。深さは、中央部で底面まで約80cm、ピット底まで約90cmを測る。土壙覆土は、暗茶褐色粘質



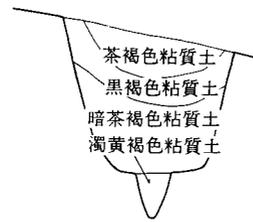
L = 14,300 M



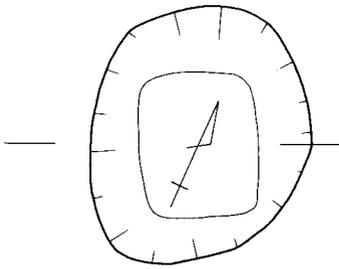
第 11 图 第 9 号土壤实测图 (縮尺 1/30)



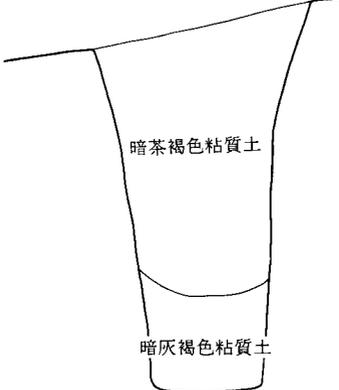
L = 13,500 M



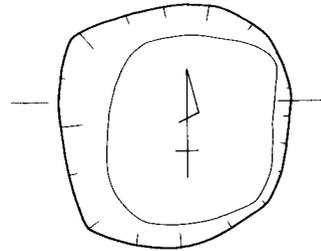
第 12 图 第 10 号土壤实测图 (縮尺 1/30)



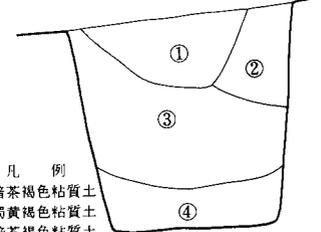
L = 17,600 M



第 13 图 第 12 号土壤实测图 (縮尺 1/30)



L = 17,800 M



- 凡 例
- ① 暗茶褐色粘質土
  - ② 濁黃褐色粘質土
  - ③ 暗茶褐色粘質土
  - ④ 濁黃褐色粘質土

第 14 图 第 13 号土壤实测图 (縮尺 1/30)

土を主体とし、上面に茶褐色粘質土が厚くレンズ状に、ピット中には濁黄褐色粘質土が堆積する。

#### 第 15 号土壙（第 16 図・図版 7）

位置 調査区のほぼ中央部西側、第 14 号土壙から北西に約 3 m の地点に位置する。西壁が第 1 号竪穴住居跡との重複で損壊している。

形態 平面プランが長円形を呈する円筒形の土壙で、底面にピットを有するタイプのものである。壁はほぼ垂直に落ち平坦な底面を作る。底面の中央部にピットが穿たれている。規模は、上面で推定長径約 90 cm、短径約 75 cm、底面で長径約 85 cm、短径約 60 cm を測る。深さは東壁部で約 70 cm、底面のピットは円形で径 12 cm、底面よりの深さを測る。土壙覆土は他の同タイプの土壙とやや異なり、底面より東壁部に上面にかけては暗茶褐色粘質土が、西壁から西半上面にかけては茶褐色粘質土が堆積するが明確に一線で区別できるものではない。

#### 第 16 号土壙（第 17 図・図版 7）

位置 調査区中央部の西に、第 1 号竪穴住居跡と重複して位置する。第 15 号土壙とは西に約 4 m 隔てる。

形態 平面プランが長円形を呈する円筒形の土壙で、底面にピットを有するタイプのものである。壁はやや傾斜をもって直線的に落ち、平坦な底面を作る。底面のほぼ中央部に円形のピットが穿たれている。規模は、上面で長径約 110 cm、短径約 72 cm、底面で長径約 85 cm、短径約 58 cm を測る。底面までの深さは東壁部で約 80 cm を測るが、上面は、第 1 号竪穴住居址の造営により、かなり削平されたものと思われる。底面のピットは径約 10 cm、深さ約 18 cm を測る。土壙覆土は、底面より上面まで暗茶褐色粘質土一層の堆積であるが、東壁部に混暗茶褐色粘質土ブロック黄褐色粘質土の塊状堆積がみとめられる。

#### 第 17 号土壙（第 18 図・図版 8）

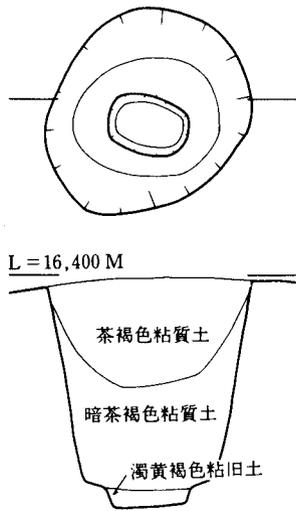
位置 調査区の中央部やや南側の斜面に位置し、第 14 号土壙とは南に約 4 m 隔てる。

形態 平面プランがやや不整な楕円形を呈する円筒形の土壙である。壁は中位よりほぼ垂直に落ち、平坦な平面に連なる。規模は、上面で長径約 105 cm、短径約 90 cm、底面で長径約 70 cm、短径約 60 cm を測る。深さは中央部で約 140 cm を測る。土壙覆土は、底面より中位ぐらまで黒褐色粘質土、濁黄褐色粘質土が互層に堆積し、それより上は茶褐色粘質土が上面まで厚く堆積する。

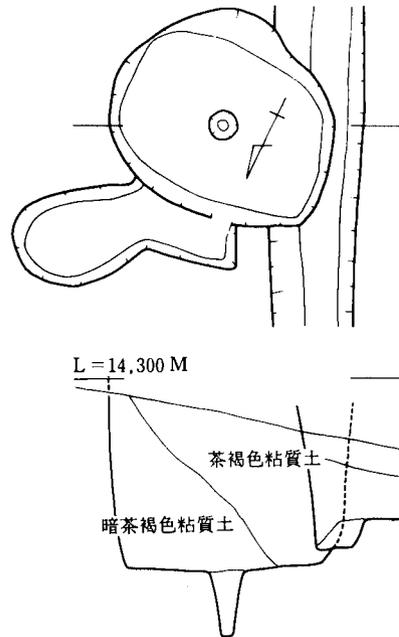
#### 第 18 号土壙（第 19 図・図版 8）

位置 調査区南部の E 12 グリッドから B 12 グリッドにかけては凹地が浅い谷状をなして入り込んでいる。この凹地に下る緩傾斜面の南端に位置し、第 17 号土壙とは南西に約 2 m 隔てる。

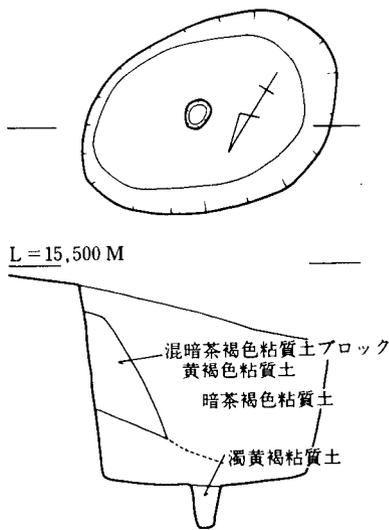
形態 平面プランがやや不整な円形を呈し、壁がほぼ垂直に近いかたちで落ち平坦な底面を作り円筒状をなす土壙であるが、西半部の壁の中ほどに狭いテラス状の段をもっている。また、調査時点において、地山面で検出したが、土壙の北側の検出面の直上、南北 45 cm、東西 35 cm の範囲に厚さ約 5 cm の薄い粘土塊が検出された。その粘土上面から小型の壺形土器 1 個が出土をみておりこれらが本土壙に伴うものとみられることから当時の掘り込み面はもっと上面にあったと考えられる。規模は検出面で長径約 130 cm、短径約 115 cm、底面で径約 50 cm を測る。検出面よ



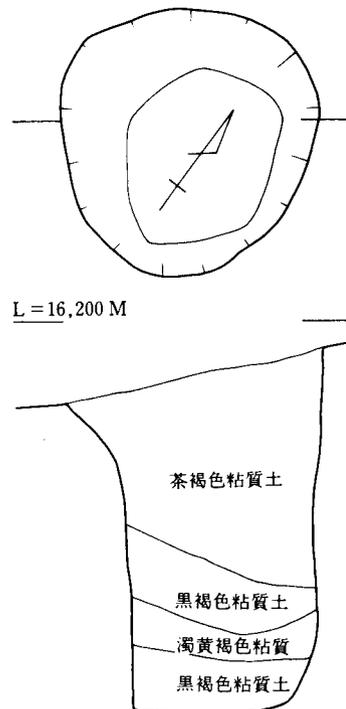
第 15 図 第 14 号土壙実測図 (縮尺 1/30)



第 16 図 第 15 号土壙実測図 (縮尺 1/30)



第 17 図 第 16 号土壙実測図 (縮尺 1/30)



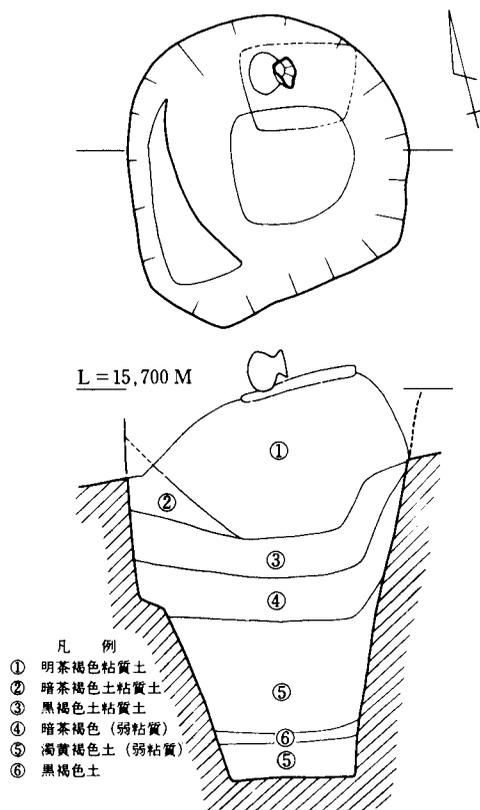
第 18 図 第 17 号土壙実測図 (縮尺 1/30)

りの深さは中央部で約 120 cm、粘土上面からだ約 160 cmを測る。西側のテラス面までの深さは約 50 cmである。土壙覆土の層序は、底面を覆って黒褐色土が、その上に薄く濁黄褐色粘質土が、さらにテラス面まで黒褐色粘質土が厚くほぼ水平堆積し、その上に暗茶褐色粘質土、黒褐色粘質土が堆積、検出面と粘土塊の間には明茶褐色粘質土が厚く堆積する。こうした層序関係からみて、本土壙は廃棄にあたって、埋め戻された可能性が強いといえよう。

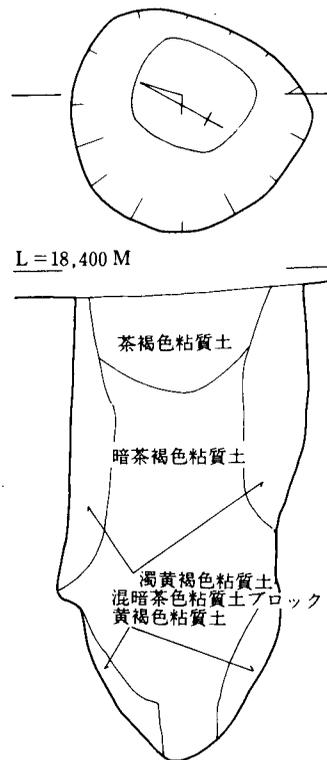
第 19 号土壙 (第 20 図)

位置 土壙群の中では最も調査区の南東端の高所に位置し、最も近くに隣接する第 12 号土壙とも南東に約 10 m 以上隔てた地点にあたる。

形態 平面プランが隋円形を呈する円筒状の土壙である。壁はほぼ垂直に近い形で落ちる深いものであるが、他の同タイプの土壙と異なり、平坦な底面を作らない。また、北壁がやや内側に入り、中ほどよりやや下位に狭い段を作る。土壙覆土の堆積層序も他の同タイプのものとやや異なり、壁を覆うように濁黄褐色粘質土がドーナツ状に垂直堆積し、その間に混暗茶褐色粘質土ブロック黄褐色粘質土が上面近くまで厚く堆積し、上面には茶褐色粘質土がレンズ状に堆積する。



第 19 図 第 18 号土壙実測図 (縮尺 1/30)



第 20 図 第 19 号土壙実測図 (縮尺 1/30)

### (3) 竪穴状遺構

#### 第1号竪穴住居跡 (第21図・図版5)

**位置** 調査の中央部の緩斜面に位置する。東上方に位置する第1号掘立柱建物と約1.5mの間隔を置く。北壁部で第15号土壌、北部床面で第16号土壌を切り、重複している。

**形態** 西半部を欠くが方形プランをとると推定される竪穴住居跡で、一辺の方向はほぼ磁北をとるが、それはまた地形的に傾斜面の方向でもある。壁が残存するのは地形的に高所にあたる東辺部のみで、北および南辺部では壁にそって廻らされた周溝のみがかろうじて残存している。このため、周溝でみるプランはコの字状を呈す。東周溝部から約1mの地点までほぼ水平な平坦面がみられることから、この部分までは床面が残存しているものと思われる。現存する床面の中央付近に長径約150cm、深さ15cmの土壌状遺構が、その南に3個の柱穴状ピットが検出されたが、いずれも深さ10~15cmと浅く、さらにその位置的な関係からも、本住居跡に伴う柱穴とは考えにくいものである。また、住居跡をとりまくように9個の柱穴状ピットが検出されたが、これもまた、本住居跡に伴うものと断定できるものではない。住居跡覆土は暗茶褐色粘質土が床面を覆って堆積し、周溝壁部には濁黄褐色粘質土が堆積する。床面からは焼土・炭化物の集積層は検出されなかった。

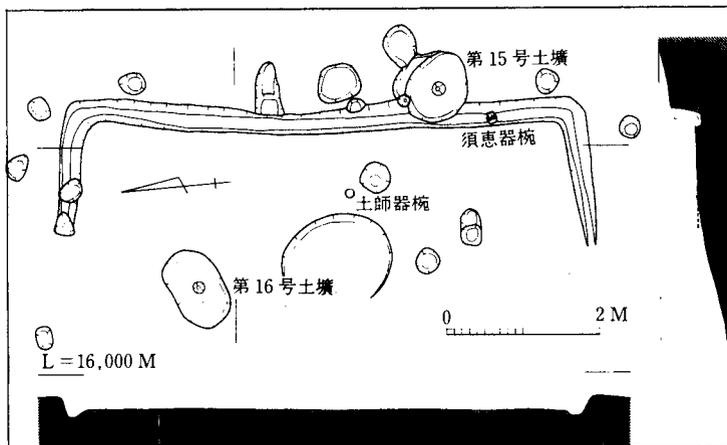
**規模** 現存する東壁部で一辺約7m、検出面より床面までの深さ約30cm、周溝幅約30cm、深さ約10cmを測る。

**遺物の出土状態** 東壁周溝部南側より、周溝内に転げ込むように須恵器把手付碗形土器が、東壁部より、約1m西の床面上より土師器碗形土器が出土している。

#### 第2号竪穴住居跡

**位置** 第1号住居跡東壁より東に約7m離れた地点に東周溝部が位置する。

**形態** 周溝部のみを残すが大半が削平されている。周溝の平面プランはコの字状を呈し、一辺の方向はほぼ第1号住居跡に一致する。一辺の規模は約6.4mを測る。周溝幅約25cm、深さ10cm。



第21図 第1号竪穴住居跡実測図 (縮尺1/100)

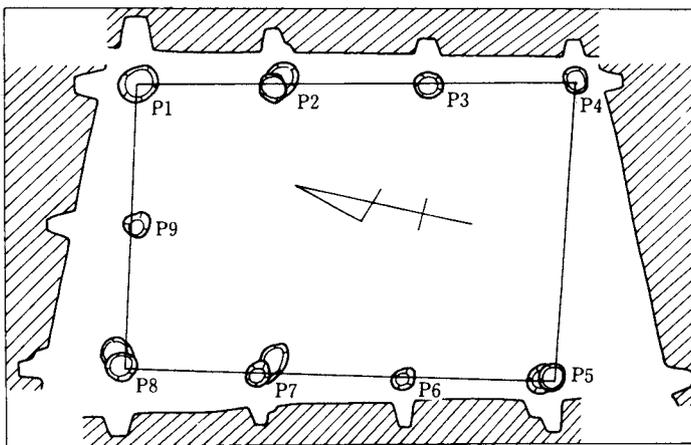
#### (4) 掘立柱建物跡

##### 第1号掘立柱建物 (第22図・図版5)

位置 調査区中央部の緩傾斜面に作られており、第2号堅穴住居跡と重複して位置する。

形態 南北3間×東西2間の掘立柱建物である。建物の方向はN-14°-Wとやや主軸を西に振っている。柱穴は円形で、径が最大のもので約50cm、最小のもので約30cmと大きさにやや格差がある。また、斜面に位置しているため、検出面でレベル差が地形的に高所に位置するものと、低所に位置するもの間に最大約80cm比高差があるが、検出面よりの深さは約40cm前後とほとんど差がなく、後世の地形の削

平・流失を若干考慮したとしても、この建物は当時より現状に近い傾斜地に造営されていた可能性が強い。各柱穴間の距離は、東桁行P1より180cm、202cm、190cm、西桁行P8より180cm、190cm、195cm、北梁行P1より180cm、180cm、南梁行P4より390cm、をそれぞれ測る。また、P2、P5、P7、P8で柱穴の重複がみられ、この建物の建替えが少なくとも2度あったことを示している。



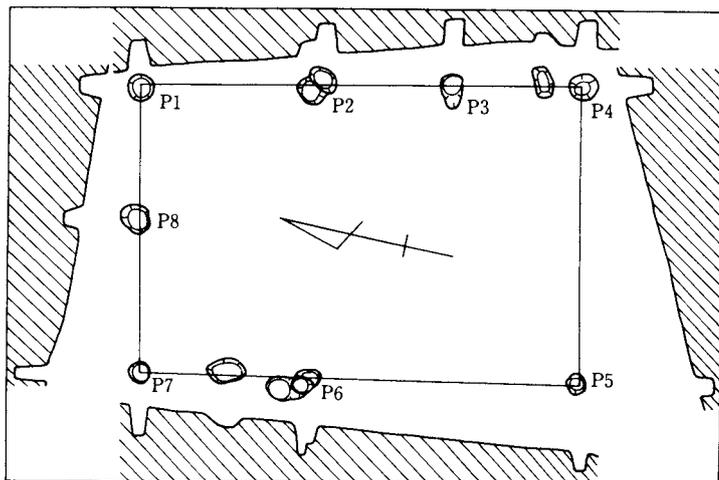
第22図 第1号掘立柱建物実測図 (縮尺1/100)

##### 第2号掘立柱建物 (第23図)

位置 第1号掘立柱建物の南に約2.5mの間隔をおき、ほぼ同方向を向いて位置する。

形態 南北3間×東西2間の掘立柱建物である。建物の方向はN-14°-Wと第1号掘立柱建物と同方向である。柱穴の平面プランはほぼ円形で、最大径約45cmから最小径約22cmまでのものがある。また、斜面に位置するため、検出面でのレベル差が、地形的に高所にあるものと低所にあるものとの間に最大約100cmの比高差がある。検出面よりの深さは、約40cm前後と

検出面の比高差はほとんど関係なく、ほぼ均一で、第1号掘立柱建物同様現状に近い傾斜地に造営されていたものと推定される。各柱穴間の距離は、東桁行P1より220cm、180cm、165cm、西桁行P7より220cm、350cm、北梁行P1



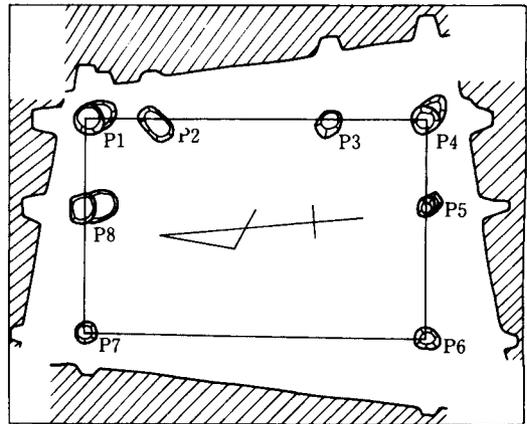
第23図 第2号掘立柱建物実測図 (縮尺1/100)

より 180 cm、200 cm、南梁行 P 4 より 395 cm をそれぞれ測る。この建物も柱穴の重複がみられ、建替えられた可能性が強い。

### 第 3 号掘立柱建物 (第 24 図)

**位置** 第 2 号掘立柱建物の西に約 1 m の間隔をおいて位置する。

**形態** 東桁行の柱穴間隔がやや不自然であり、また、西桁行では 2 柱穴を欠くが、南北 3 間×東西 2 間の掘立柱建物と推定した。建物の方向は  $N-5^{\circ}-E$  とほぼ磁北に近い。柱穴の平面プランは、この建物に付かない可能性の強い P 2 を除いてほぼ円形で、規模は径約 30 cm 前後とほとんど格差がない。検出面でみると、地形的に高所と低所に位置するもの間に、約 60 cm の比高差がある。また、検出面よりの深さは、高所にあるものが約 40~50 cm と深いものに対して、低所のものが浅く、西桁行列では P 7 から P 8 の間の 2 柱穴はその痕跡さえ残さない。こうした事実から、この建物の築造にあたっては、盛土等により地形が平坦に整えられた可能性が強い。各柱穴間の距離は、東桁行 P 1 より 198 cm、225 cm、125 cm、西桁行 P 7 より 450 cm、北梁行 P 1 より 120 cm、160 cm、南梁行 P 4 より 120 cm、170 cm、をそれぞれ測る。また P 1、P 4 など柱穴の重複がみられ、建替えが行なわれたことを示している。



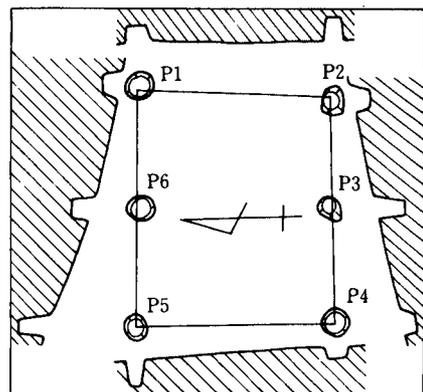
第 24 図 第 3 号掘立柱建物実測図 (縮尺 1/100)

第 4 号掘立柱建物 (第 25 図)

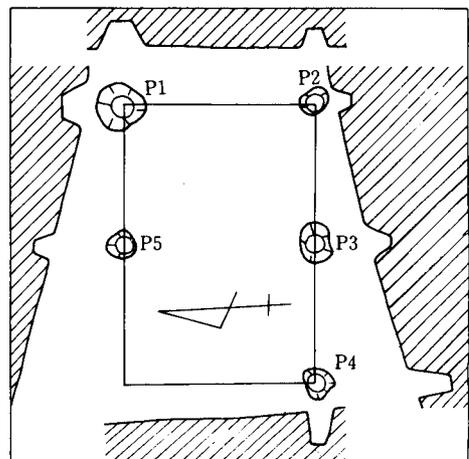
### 第 4 号掘立柱建物 (第 25 図)

**位置** 第 1 号掘立柱建物の西に約 70 cm の間隔をおいて位置、この地点を中心に北にかけて、多くの柱穴状ピットが検出されたが、掘立柱建物として抽出しえたのはこの建物を含める 2 棟のみであった。

**形態** 南北 1 間×東西 2 間の小規模な掘立柱建物である。建物の長軸の方向は  $N-88^{\circ}-W$  とほぼ東西である。柱穴の平面プランは円形で、規模は径約 30 cm 前後とほぼ均一である。地形的に高所にあるものと低所のものとの間に約 90 cm の比高差があるが、検出面よりの深さにはほとんど差はなく、もともと現状に近い傾斜



第 25 図 第 4 号掘立柱建物実測図 (縮尺 1/100)



第 26 図 第 5 号掘立柱建物実測図 (縮尺 1/100)

面に建てられていたものと推定される。各柱穴間の距離は、東梁行P 1より250 cm、西梁行P 5より、260 cm、北桁行P 1より160 cm、160 cm、南桁行P 2より150 cm、150 cm、をそれぞれ測る。また 建替を推定させる柱穴の重複はない。

#### 第5号掘立柱建物（第26図）

**位置** 第4号掘立柱建物も重複して位置する。南桁行列で見ると約70 cm北にずれる。

**形態** 南北1間×東西2間の小規模な掘立柱建物で、北西隅の柱穴を欠く。建物の方向はN-88°-Wと第4号掘立柱建物と同一である。柱穴の平面プランはやや不整な円形で、規模は径約60 cmから30 cmとややバラつきがある。地形的に高所にあるものと低所のものとの間に検出面において約100 cmの比高差があるが、柱穴の深さは逆に低所に位置するP 4が約50 cmと最も深く、現状に近い傾斜面で建てられたことを示している。ただ、北西隅の柱穴痕を欠くことは、この部分に整地による盛土が施されていた可能性を窺いさせるものであり、第4号掘立柱建物との築造の前後関係をみる上で注意しておきたい。各柱穴間の距離は、東梁行P 1より250 cm、北桁行P 1より180 cm、南桁行P 2より180 cm、180 cm、をそれぞれ測り、第4号掘立柱建物よりやや規模が大きくなっている。

#### 第6号掘立柱建物（第27図）

**位置** 調査区の北部、第1号から第5号掘立柱建物群とは浅い谷状の凹地を隔てた北東の緩傾斜面に位置する。最も隣接する第5号掘立柱建物とでも、約10 m以上の距離をおく。

**形態** 北桁行と西梁行で各1柱穴ずつを欠くが、南北3間×東西2間の掘立柱建物と推定した。建物の方向はN-33°-Eとやや東にふる。この地点では地山までの堆積がかなり厚く、柱穴は、地山面より30~40 cmほど上位の第2層（茶褐色粘質土層）上面より掘込まれているが、実際に柱穴として検出したのは地山面に近い地点であった。このため各柱穴の検出面よりの深さは、地形的に高所にあるものが概して深く、低所のものが浅く、わずかに痕跡を残すのみのもも多い。現状で高所と低所の検出面の比高差は約80 cmである。さらに低所においては、地山面と第2層の間に盛土とみられる層の推積も観察される。こうしたことから、この建物は地形がある程度平坦に整地された上に建てられた可能性が強い。柱穴の平面プランは、やや不整な略円形を呈するものが多く、規模においても、最大径約60 cmから最小25 cmと統一がとれていない。各柱穴間の距離は、東桁行でP 1より125 cm、115 cm、120 cm、西桁行でP 8より115 cm、235 cm、北梁行でP 1より255 cm、南梁行でP 4より100 cm、150 cmをそれぞれ測る。

#### 第7号掘立柱建物（第28図）

**位置** 第6号掘立柱建物の北西に約1 m隔てた緩傾斜面に位置する。

**形態** 地形的に低所にあたる西桁行列両端の2柱穴を欠くが、南北2間×東西2間の総柱の掘立柱建物と考えられる。現状における検出面での比高差は地形的に高所と低所にあるもの間に約60 cmあり、柱穴の検出面よりの深さは、高所にあたる西桁行列では約40 cmを測るのに対して、低所の東桁行列では約5 cmとわずかに痕跡を残すのみである。これは、この建物が第5号掘立柱建物と同様に、盛土によりある程度平坦に整地された上に建てられたことを示すものと考えられる。柱穴の平面プランは、やや不整な略円形を呈し、規模は径約25 cmから約25 cmまでのも

のがみられ統一がとれていない。各柱穴間の距離は、東桁行でP 1より150 cm、135 cm、北梁行でP 1より125 cm、南梁行でP 3より125 cm、P 7よりP 5まで110 cm、をそれぞれ測る。

### (5) その他の遺構

調査区内より、性格不明の遺構が多く検出されている。溝状や土壇状をなす浅い掘込遺構がほとんどであり、不定形で人為性を窺えないものも多く含まれ、明らかに後世の攪乱によると思われるものもある。その中でも、先に述べてきた遺構と何らかの関連性があり、人為性の強い遺構と考えられるものについて、若干ふれておく。

#### 第1号溝状遺構

位置 調査区中央部のやや南、第1号掘立柱建物と第2号掘立柱建物の間にそれらと重複して位置する。

形態 傾斜面の方向に平行して南北にのびる浅い溝状をなす遺構である。溝断面は逆台形をなす。覆土は暗茶褐色粘質土と濁黄褐色粘質土の混合土が堆積し、第1・2号竪穴住居跡周溝覆土と共通する。規模は長さ約420 cm、最大幅約40 cm、深さ5～15 cmを測る。

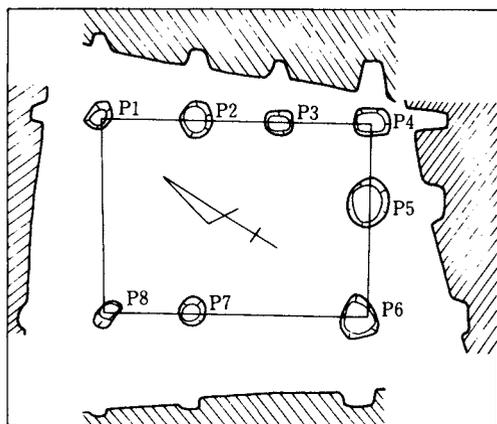
#### 第2号溝状遺構

位置 調査北部、第6号掘立柱建物の南西約1.2 mの地点に位置する。

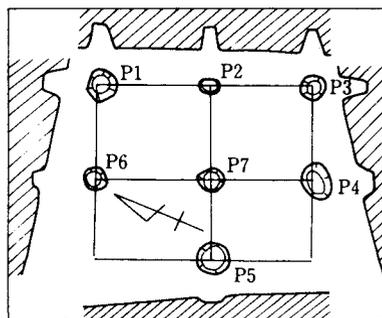
形態 傾斜面に従い北西—南東にのびる浅い溝状をなす遺構である。方向は第6号掘立柱建物の方向とほぼ一致する。溝断面は明瞭な平面を作らないU字状なし、整えられていない。覆土は黒褐色土が上面まで堆積する。規模は長さ約400 cm、最大幅35 cm、深さ5～20 cmを測る。

#### 土壇状遺構

第13号土壇の西、第1号掘立柱建物の北西隅、第1号竪穴住居跡の床面—第7号建物の西などから、浅い土壇状をなす遺構が検出されている。第1号竪穴住居跡と重複する1例を除いて、いずれも、不整形な形状を呈する。覆土は暗茶褐色粘質土や黒褐色土と黄褐粘質土の混合土なるものなどがあり、一定ではない。



第27図 第6号掘立柱建物実測図 (縮尺1/100)



第28図 第7号掘立柱建物実測図 (縮尺1/100)

### 第3節 B地区の遺構

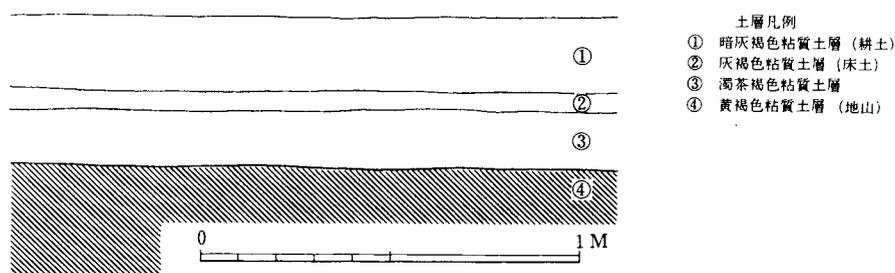
#### (1) 層序と遺構配置

##### 層序 (第29図)

B地区の地形は、近代の開田・整地により、旧地形が大きく損われている。すなわち、緩斜面の切り盛りにより水平に整えられた田面が棚田状をなして連なっている。このため、切土にかかる部分は現田面下約20cm前後に削平された地山面が現われ、また盛土にかかる部分は、地点によっては1m以上の盛土層がみられるなど、本来の堆積層序を残している部分は極めて少ない。当然のことながら地形的に高いところは削平され、低いところは盛土されており、1枚の田でみれば中央部付近が比較的旧状に近い層序を残していることになる。B地区の調査区ではL 37・38グリッド付近がこれにあたり、B地区の基本的層状として、L 38グリッド北陸土層断面図を第 図に示した。これによると、地表下約15~20cmの厚さで耕土層が堆積し、その下は幅約5cmの厚さで灰褐色を呈する極めて粘質度の強い床土層となる。この層を黄褐色粘質土の地山層との間に濁茶褐色粘質土が約10~15cmの厚さで堆積する。この層はかなり汚れのみられる混合土層で、古墳時代期から中近世期の土器片を包含する。しかし、それは攪乱された状態で見とめられ、この層が後世の開田整地の際に施された客土であることを示している。B地区で遺構が検出された北西部では、この層下が地山面となり、遺構はすべて地山面で検出された。本来の掘り込み面はこれより上面の層と推定されるが、削平により層位は不明である。

##### 遺構配置 (第30図・図版9)

水田2枚にわたって設定したB地区の調査区は、分布調査時点においてはほぼ全域から土器片の出土をみた地点であったが、調査区の北東部を除いて、開田の際の整地作業により大きく削平され、遺構が遺存していないことが確認された。遺構は、旧地形ではやや斜面にあたる部分であったと推定される、K 37・K 38・L 37・L 38の各グリッドに集中して検出された。しかし、その上面は削平されており、遺存状態は良好とはいえない。検出した遺構は、調査区北東端を北西から南東にはしる3条の溝状遺構とその南側に位置する1棟の掘立柱建物であり、それぞれ、大溝、1号溝、2号溝、1号掘立柱建物とした。



第29図 B地区L 38グリッド北壁土層断面模式図

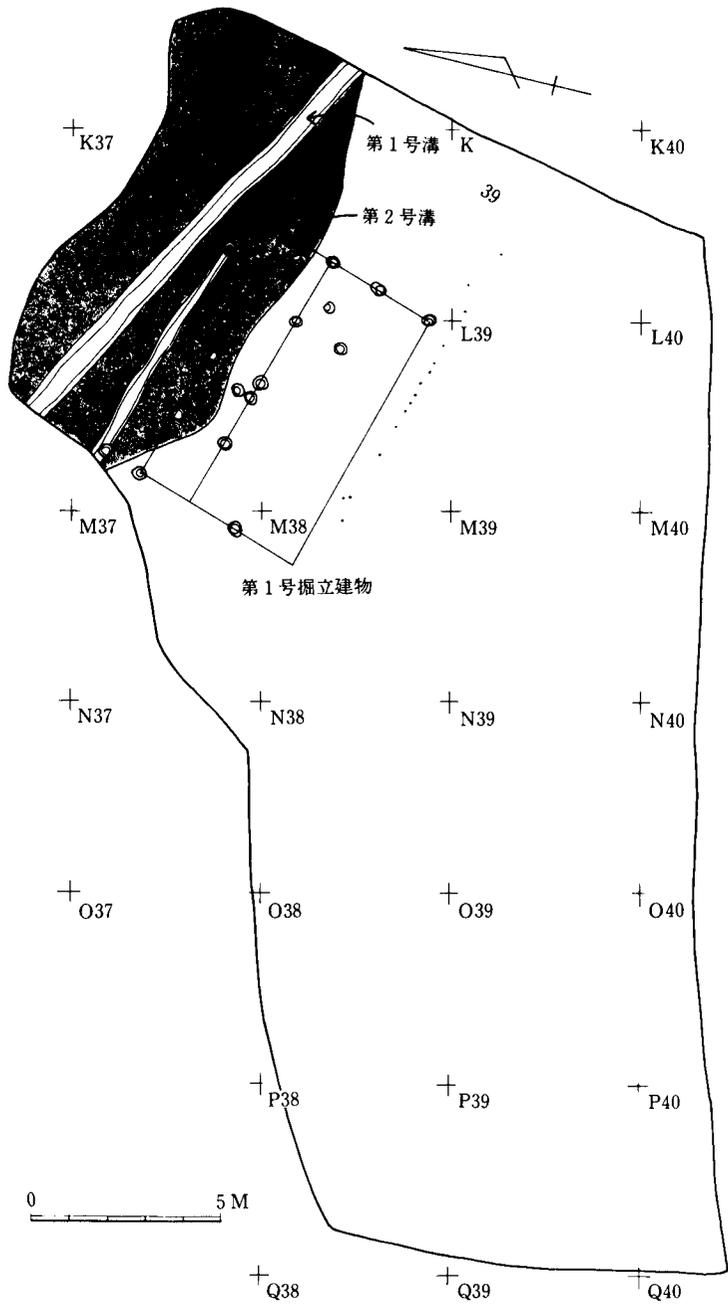
## (2) 溝状遺構

### 層序 (第31図・図版10)

大溝、第1号溝、第2号溝がたがいに重複しており、その切合いの層序関係が複雑にこみいつている。このためまず、相互の重複の前後関係を層的に明らかにしておく必要があり、その後、各溝状遺構の形態・規模について述べることにする。

溝の堆積土層については、A—B・C—Dの2ヶ所の線上で観察し、その断面土層図を作成した。それに従い説明をしてゆく。まず、A—B線上の地点では、大溝底面に18層(暗青灰色砂礫層)が、その上に17層(暗青灰色粘質土)が南方向から流れ込むように堆積する。特に18層は植物遺体や炭化物を多量に混入し、椀・甕類を主体とした土師器とともに比較的古式に属する須恵器が少量出土している。17層を斜めに切るかたちの土層線が観察され、北側底面およびこの線の上に13層(暗青灰色砂層)、4層(青灰色砂層)が堆積する。いずれも、炭化物、遺物を多く包含する層である。この層よりの出土する土器はその形態より6世紀後半代に帰属するものが多い。この層より上には上面まで、暗灰褐色土を基調とする層が薄い青灰色砂層を介しながらほぼ水平堆積する。これらの層よりの遺物の出土量は少ない。中央線より南で、これらの層を切り込んだ5層(濁灰褐色粘質土層)があり、さらにこの層を切り込んで、2層(淡青灰色砂層)、3層(濁茶褐色砂層)、4層(青灰色砂層)が堆積する。これらは第1号溝の覆土をなすもので、平安時代後期の遺物が3層・5層が中心に出土する。後述するが、3層と5層出土々器の間に若干の年代差が認められ、堆積順位と矛盾しない。第1号溝の南側は近世の攪乱土層の1層(濁茶褐色粘質土層)によって損壊している。また、C—D線上の地点では、大溝底面の北半部に17・18層がやはり南方向より流入した状態で厚く堆積、その上に、茶褐色砂質土を主体とした層がほぼ水平堆積する。これらの堆積層を切り込んで落ち込む斜行線が北側で観察され、この線は、南側では地山の落ち込み線に連なり、全体として、明確な底面を作らない、断面V字状を呈する落ち込み線を描く。この落ち込み内の堆積層序は、C—D線上の地点とほぼ同様で、底面を覆って13層、4層が約50cmほど厚く堆積し、そのより上面まで、暗灰褐色土を基調とする層が薄い青灰色砂層を介しながら水平堆積する。北側ではこの層を切り込んだ第1号溝の覆土層が認められる。5層が全体を覆って上面まで堆積し、さらにこの層の中央部を切り込んで2層、3層、4層がレンズ状に堆積する。また、南側では淡青灰色土を覆土とする第2号溝の落ち込みがみられる。

ここでいままで述べてきた溝層序の堆積順を時期別に整理してみることにする。まず18層、17層、16層、15層、14層が順次堆積し溝がほぼ上面まで埋没する。(大溝I期) そのあと再度大溝が掘り返えされ、13層、4層、11層、10層、9層、8層が順次上面まで堆積する。(大溝II期) ここで完全に溝としての機能が破棄される。かなりの時期的間隔をおいたのち、かつて大溝の地点に第1号溝が掘り込まれ、5層が上面まで堆積する。(第1号溝I期) そのあとやや規模を縮尺して、再度溝が掘り返えされ、4層、3層、2層が順次堆積する。(第1号溝II期) それと併行もしくはやや遅れて第2号溝が掘り込まれ、2層が堆積する。以上の順でこの溝の堆積層序が形成されたものと推定される。また各層が包含する遺物の帰属時時期も、再度の掘り返し作業による若



第30图 B地区遺構配置图 (縮尺1/200)

干のみだれがあるものの、この堆積順に従った新旧関係がみとめられ、大きく矛盾していない。

遺物の出土層位については、大溝 I 期の堆積層に包含されるものを大溝下層出土、II 期の堆積層に包含されるものを大溝上層出土として区別したが、第 1 号溝、第 2 号溝出土のものについては特に層位的に上下層の区別はしなかった。

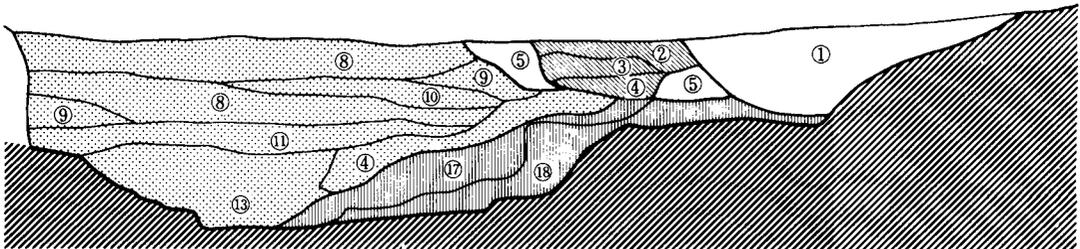
大溝 (第 32 図・図版 10)

位置 調査区の北西端に位置する。

形態 北側に孤状にやや湾曲しながらほぼ東西に走る古墳時代後期の溝状遺構である。南側での落ち込み線は確認したが、北側は調査当時使用中の農道にあたっていたため、発掘を実施しえず溝幅は確認できなかった。また、東西への延長は路線外にあるためいかなる形で続くか不明である。前述したように、この溝状遺構は大きく 2 期にわたって営まれたもので、I 期と II 期とはや

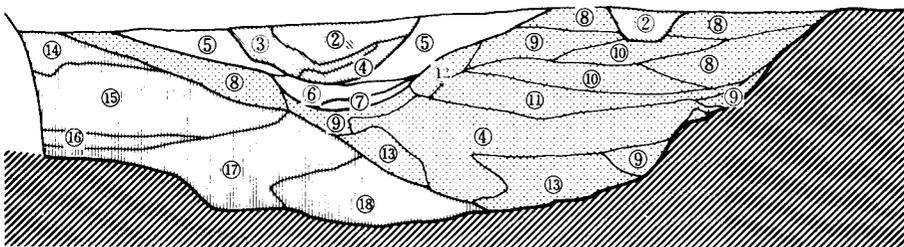
L = 12,800 M A

B



L = 12,800 M C

D

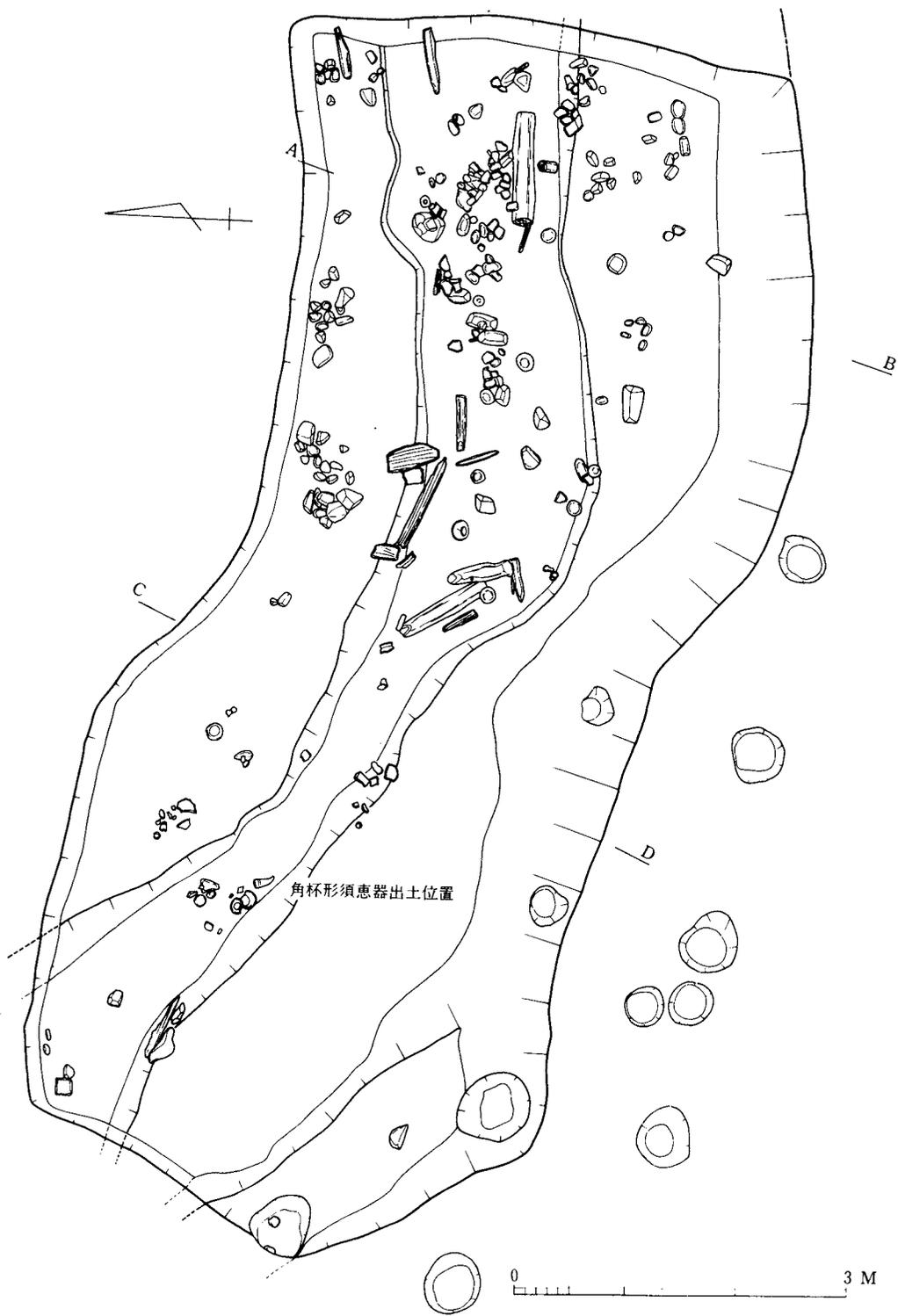


凡 例	
	近世攪乱土層
	平安時代溝状遺構 (新)
	" (古)
	古墳時代溝状遺構 (新)
	" (古)

土層凡例

- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| ① 濁茶灰色粘質土 (近世攪乱土)   | ⑪ 濁茶褐色粘質土 (炭化物混)   |
| ② 淡青灰色砂 (弱粘質)       | ⑫ 暗灰褐色粘質土 (炭化物混)   |
| ③ 濁茶褐色砂 (炭化物混入)     | ⑬ 暗青灰色砂 (炭化物多量混入)  |
| ④ 青灰色砂              | ⑭ 濁茶褐色粘質土          |
| ⑤ 濁灰褐色粘質土 (炭化物多量混入) | ⑮ 混茶灰色砂 (弱粘質)      |
| ⑥ 濁黄灰色砂             | ⑯ 混茶灰色砂            |
| ⑦ 淡黄灰色砂礫            | ⑰ 暗青灰色粘質土 (炭化物混)   |
| ⑧ 暗灰褐色砂 (弱粘質)       | ⑱ 暗青灰色砂礫 (炭化物多量混入) |
| ⑨ 濁青灰色砂 (弱粘質)       |                    |
| ⑩ 暗灰褐色砂 (炭化物混)      |                    |

第 31 図 溝状遺構堆積層序断面図



第 32 図 大溝実測図

や形態が異なる。

**I期の形態** 溝の壁はゆるやかに傾斜しながら落ち込み、底近くで低い段を作って急に下り、ほぼ平坦に整えられた底面に連なる。このため断面形は段をもつ逆台形を呈する。検出面より底面までの深さは約110 cmであるが上面の削平分を考慮するなら当初はもっと深さがあったものと推定される。溝の幅は北端を確認しえなかったが、底面中央線で対称に折返して、それが溝幅を示すものとするなら、C-D線上の地点で、少なくとも約5～6 mはあったものと推定される。

**II期の形態** I期の溝の完全埋没後、再度掘り込まれたもので、C-D線上の地点での土層観察で、およその断面形態を知ることができる。底面は平坦ではなく、断面V字状を呈するが、落ち込みの傾斜度はゆるやかである。規模は幅約4 m、深さ約1 mを測る。方向はI期の溝よりやや北に振る。

#### 第1号溝(第32図)

**位置** 大溝の中央部を縦断して、ほぼ南東から北西に走る。

**形態** 大溝と同様に少なくとも2期にわたって掘り直されているが、新旧溝の方向はほぼ同一である。古段階の溝は、幅に対して深さの割合に少ない断面U字状を呈するもので、規模はC-D線上の地点で幅約430 cm、深さ約50 cmを測る。また、これに重複する新段階の溝は、若干の底面を作る断面逆台形ないしU字状を呈するもので、規模は幅約100 cm、深さ約30 cmを測る。

#### 第2号溝(第32図)

**位置** 第1号溝の南に位置し、第1号掘立柱建物の北辺柱穴列と約120 cmの間隔をおく。

**形態** 幅約40 cm、深さ約20 cmを測る小規模な溝で、断面形態は逆台形を呈する。第1号掘立柱建物と方向を同一にし、北西の庇柱列と約120 cmの間隔をおき平行することから、この建物に伴なう雨落溝的な性格もつ溝と考えられる。

### (3) 掘立柱建物跡

#### 第1号掘立柱建物(第32図)

**位置** 大溝の南に、建物の一部を重複して位置する東西棟の建物である。

**形態** 削平により多くの柱穴を欠いていたため、調査時において確認しえず、図面整理の段階で、掘立柱建物としてみてよいことが判明した。この不手際のため、建物の形態を示す詳細な実測図や写真図版を掲載することができなかった。11個の柱穴を残すのみであるが、これらから、南北2間東西4間で北側に庇をもつ総柱の掘立柱建物を推定した。各柱穴間の距離は、桁行が約180 cm(6尺)、梁行が約150 cm(5尺)の等間隔にほぼ統一されている。北辺の柱穴がやや規模が小さいため、これを庇の柱穴と推定したが、身舎と庇とでは柱間の間隔差がないことから、庇のない、桁行4間、梁行3間の総柱の建物である可能性も否定できない。また、南桁行と約60 cmの間隔において平行する杭列がある。径約10 cm前後の杭が長さ約10 mにわたって30～50 cm間隔で打込まれている。杭根の遺存状態が良好であることから、調査時にあっては、近代の整地時のものと考えていたものであるが、その位置関係からこの建物とかなり密接な関連をもつもののようにも思われ、付随する何らかの施設である可能性も考えられる。

# 第IV章 遺物

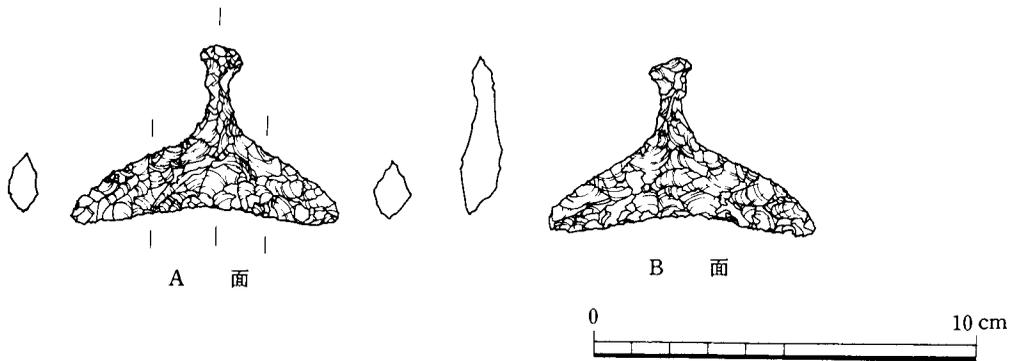
## 第1節 A地区の遺物

### (1) 縄文時代の遺物

石器 (第33図・図版11)

石匙 (第33図)

身が横長に広がる三角形で、中央部に小さなつまみを付け、左右はほぼ対称である。両面加工で、全面に入念な押圧剥離が施される。刃部がやや内湾し、身縁部全体が刃状に調整される類例の少ない優品である。石材は鉄石英質で堅固。横幅7cm、縦幅4.2cm、厚さ1.1cmを測る。



第33図 A地区出土石匙実測図 (縮尺 1/2)

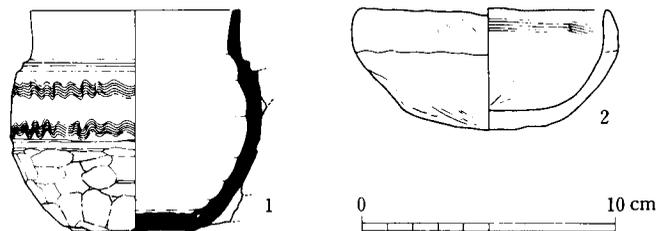
### (2) 古墳時代の遺物

第1号住居跡出土遺物 (第34図・図版12)

須恵器把手付椀形土器、土師器椀形土器各1点が床面より出土している。

須恵器把手付椀 (第34図1)

やや胴張の円筒形をなす把手付椀形土器である。安定感のある平底で、体部に取り付けられた把手を欠くが、その取り付け部の痕跡より、比較的大ぶりなものであったと推定される。口縁部はやや外反ぎみにのび、端部は平縁で、稜角は極めてシャープに調整される。口縁と体部を画して凸線が廻る。また、体部中位に強い横ナデで生じた凹線状のくぼみが廻る。この2線によって区画された体部上位には、細い6条単位のクシ状具による波状文が2段にわ



第34図 第1号住居跡出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

たって施されている。波状文は約5cmほどの巾で断続し、波幅も不均一で乱雑である。成形手法は底面に置かれた円形の粘土板を中心にマキアゲ・ミズビキで口縁部まで成形される。調整は、内面と外面体部上半部まで回転ナデ調整、以下底部との境まで細い単位の不整方向の静止ヘラケズリ調整である。底部は内・外面とも未調整である。法量は、口径8.4cm、底径5cm、器高8.9cmを測る。胎土は0.2~2mm程度の白色砂粒を含み密である。焼成は極めて良好で器質は堅緻でつややか。色調は内・外面とも青灰色を呈す。



体部のクシ描き波状文



外面

内面

第35図 須恵器把手付椀拓影 (縮尺1/2)

#### 土師器椀 (第34図2)

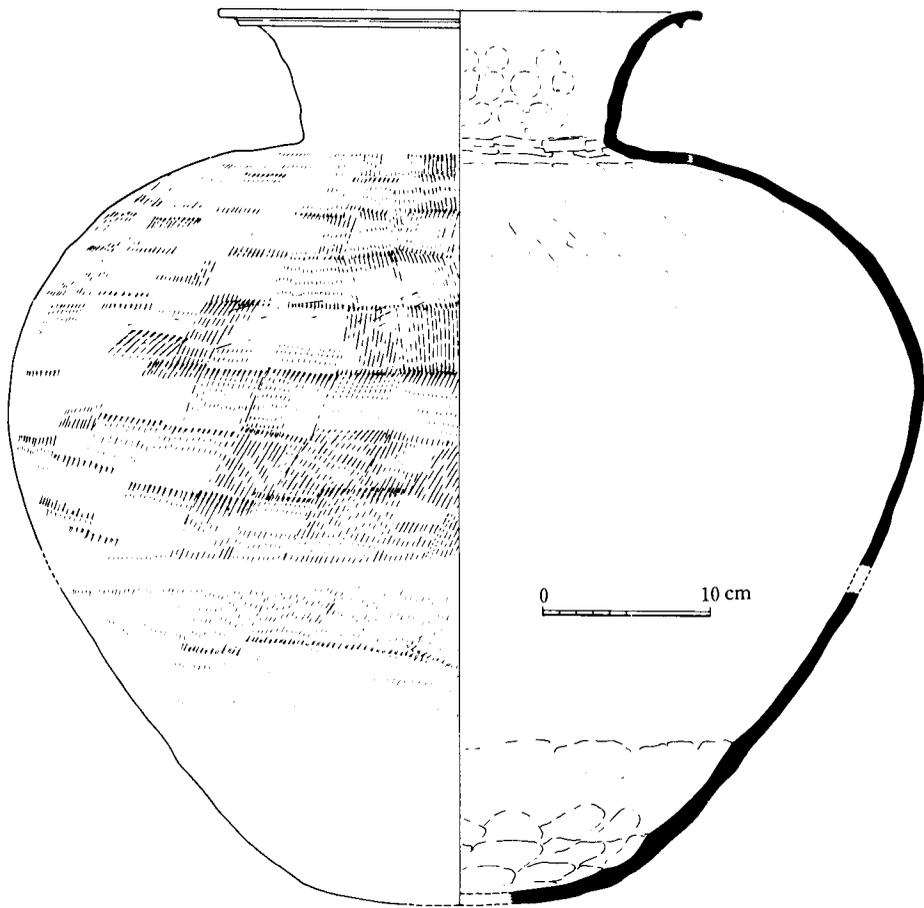
半円形を呈する椀形土器で、口縁部がやや内湾する。内・外面ともナデ調整されるが粗雑で、成形時の輪積痕を一部残す。口縁部内面は横方向にハケ調整される。胎土は粗砂粒の含有量が少なく密。焼成は良。色調は内・外面とも明茶褐色を呈す。口径9.7cm、器高4.8cmを測る。

#### 包含層出土遺物 (第36・38・図版13)

調査区北西部を中心に、須恵器、土師器、土製品が出土しているが、量的に少なく、細片化しているものが多いため、図化しえたのは15点である。

#### 須恵器甕 (第36図)

細片化した状態で出土しているため、口縁部から底部までの破片が一応そろっていることが確認されたが、接合点を明確にした全体形の復元は不能であった。図示したものは、口縁・胴・底部片を図上で推定復元したものであることをまずことわっておく。ゆるやかに外反する口縁部に、胴張りの体部が取付く古式の特徴をもつ中型甕である。やや方形に近いかたちなす口縁端部には1条の断面三角形を呈するシャープな凸線が廻る。また口縁部は、内・外面とも丁寧な横方向のナデ調整で仕上げられ、内面には成形時の指頭圧痕をかすかに残している。体部の調整は、タタキ・スリケシ手法が用いられており、外面は溝幅約1.5mm前後の細い平行タタキ調整後さらに入念にナデ仕上げされ、内面はスリケシにより全くタタキ痕を残さない。底部内面はナデ調整されているが、成形時のものとみられる拳大の連続する押圧痕を比較的明瞭に残し、胴部との成形手法の違いを示している。口縁部と体部の接合部内面は細い横方向のヘラ削りによって調整される。焼成は、底部がややあまいが、それ以外は極めて良好で、堅緻でつややかな器質である。色調は内面灰色、外面暗青灰色を呈する。胎土は0.2~1.0cmの白色砂粒を含み緻密である。推定法量は、器高約54cm、口径約29cm、最大胴径約54cmを測る。



第 36 图 A 地区出土土器实测图

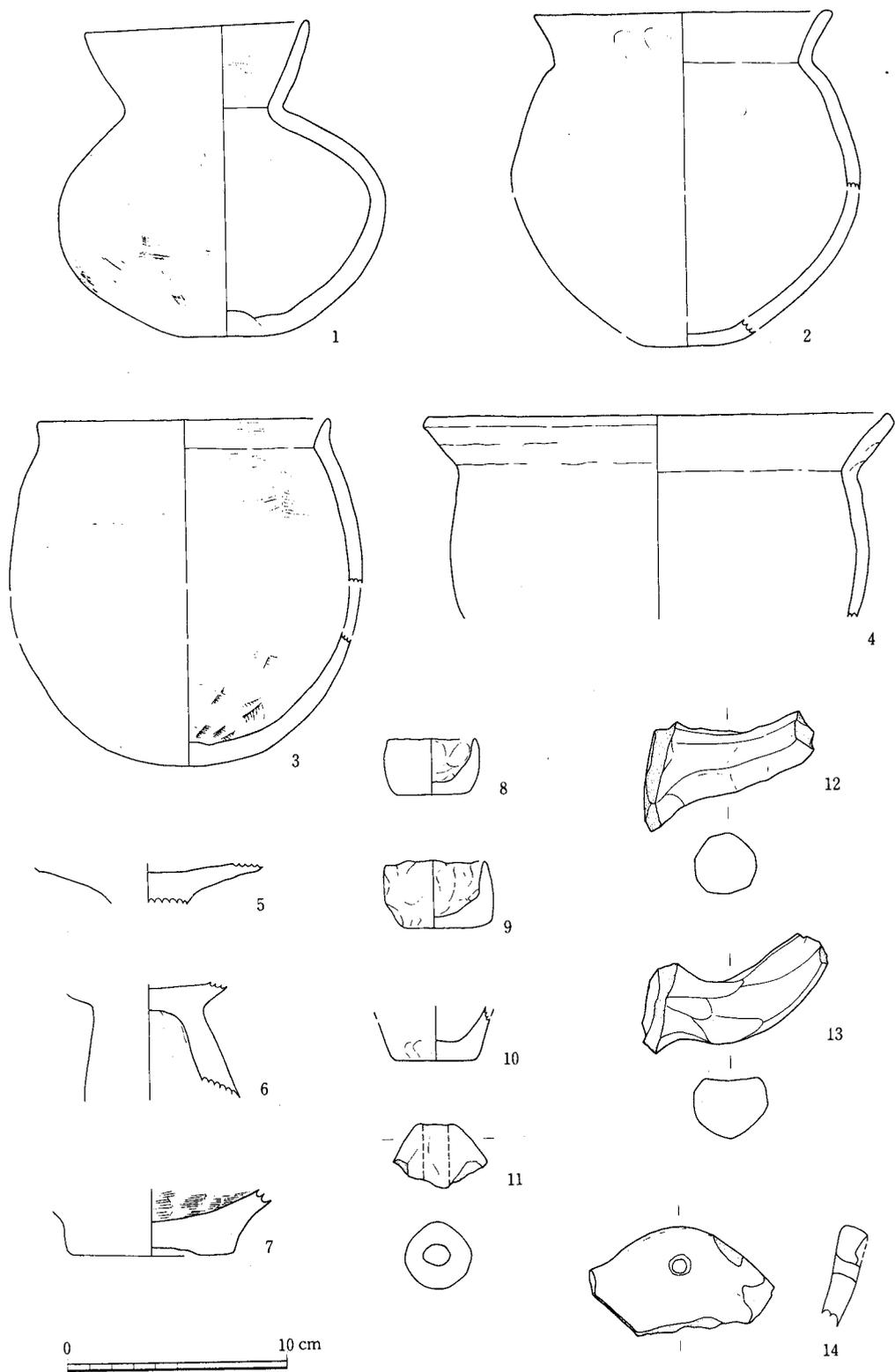


外 面



内 面

第 37 图 須恵器体部調整痕拓影 (縮尺 1/1)



第 38 图 A 地区出土土器实测图

### 土師器 (第 38 図)

#### 壺形土器 (第 38 図 1)

口径10cm、器高14cm を測る小型壺で完形品である。やや外反する口縁部は横ナデ調整され、端部は丸縁。体部外面は上半部に縦ハケ、下半部は不整方向のハケ調整痕が残る。内面は不整方向にナデ調整される。色調は明茶褐色を呈し、胎土、焼成ともに比較的良好。

#### 甕形土器 (第 38 図 2～4)

タイプの異なる個体を図化した。いずれも小型の甕である。2 はやや胴張の体部にくの字状に外反する口縁部が付くもので、底部は丸い。調整はすべて指ナデによると考えられ、ハケ調整痕はみとめられない。焼成・胎土はともに並で、色調は暗茶褐色を呈す。推定器高約15cm、口径13.2cm を測る。

3 は体部上端を外側にやや折り曲げ口縁とした甕で、口縁部と体部に内面にみとめられる稜で区別する。器面の磨耗が著しく、ハケ調整痕が内・外面にわずかに残るのみである。胎土・焼成ともに並で、色調は淡黄褐色を呈す。推定器高約15.5cm、口径13cm を測る。

4 は直線的に外反する口縁に長胴の体部が付く甕と考えられる。器面の磨耗が著しいため調整は不明。胎土中にはほとんど粗砂粒は含まれない。焼成はやや不良。色調は内面茶褐色、外面黒褐色を呈す。口径21.2cm を測る。

#### 高杯形土器 (第 38 図 5・6)

ともに破片であるが、屈曲して開く口縁を有する杯部にラップ状に開脚する脚部が付く、小型の高杯と考えられる。焼成・胎土ともに並で、色調は橙褐色を呈す。

#### 底部 (第 38 図 7)

しっかりとした平底で、中央部がやや内側に窪む。外面は指ナデ、内面は螺旋状にハケ調整される。胎土は粗砂粒を多量に含む。焼成は不良。色調は内面灰褐色、外面茶褐色を呈す。底径約7.5cm 測る。形態から比較的大型の壺形土器の底部と推定される。

#### 手捏土器 (第 38 図 8～10)

グイノミ型の小型手捏土器である。いずれも色調は明茶褐色を呈し、胎土、焼成ともに並である。1 は口径4cm、器高2.5cm、2 は口径4.5cm、器高3cm、をそれぞれ測る。

#### その他の土製品 (第 38 図 11～14)

12・13 は土器の把手片である。先端部を欠くが、やや湾曲してのびる角状をなすもので、椀ないしは鉢形土器に取付くものと考えられる。いずれも茶褐色を呈し、胎土・焼成ともやや不良。

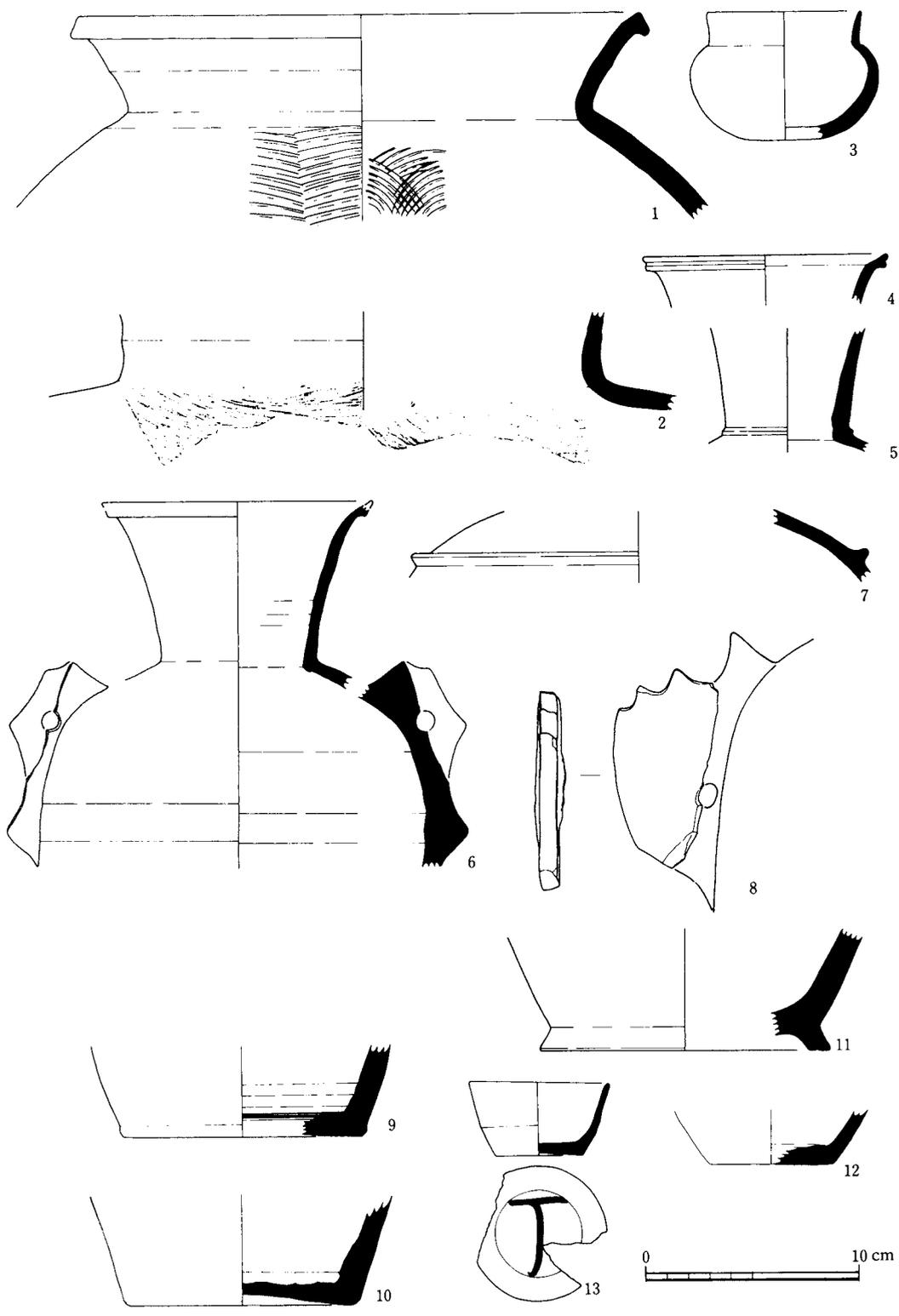
14 は口縁部片であるが、焼成前に穿孔された径約0.8cm の円孔をもつ。胎土、焼成とも良好で、色調は灰黒褐色を呈し、他の土器と器質がやや異なる。11 は土錘片である。

### (3) 平安時代の遺物

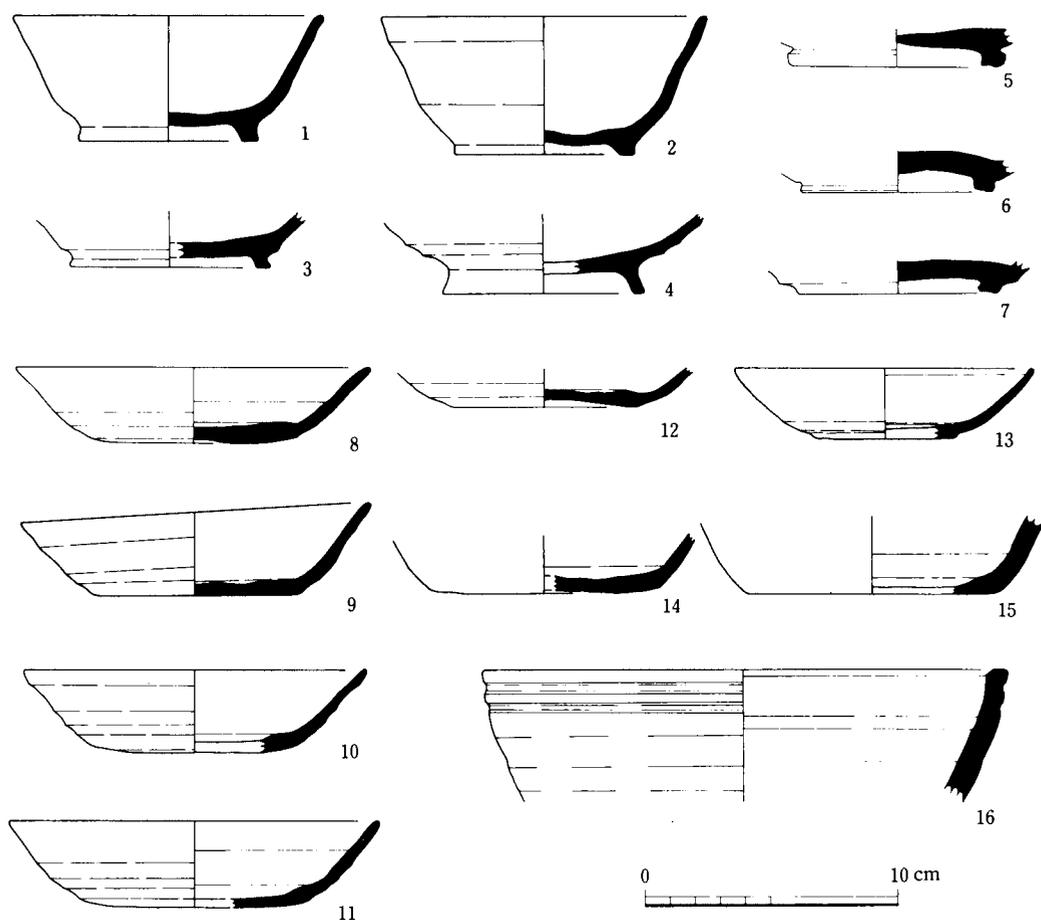
すべて包含層よりの出土である。

#### 須恵器 (第 39・40 図)

##### 甕 (第 39 図 1・2)



第 39 图 A 地区出土土器实测图



第40図 A地区出土土器実測図

1はややなで肩の体部に外反する口縁部が取付く器形で、口縁端部はやや下にたれ平縁に作られる。口縁部は回転ナデ調整され、体部は、外面に横位の荒い平行タタキ、内面に同心円タタキを残す。口径25.6cmを測る。焼成は良好であるが、胎土中に粗砂粒を比較的多く含む。色調は暗灰色を呈す。2は頸部径約25cmを測る中型甕片で、口縁部はほぼ直立するかたちでのびる。頸部は回転ナデ調整され、体部外面に横位の平行タタキ、内面に円弧状タタキ痕を残す。胎土・焼成は並で、色調は青灰色を呈し、外面には自然釉がふりかかる。

#### 瓶 (第39図・4~10)

口縁部から底部までの破片が出土しているが、すべて断片的で全体形を窺いうるものはないが、これらは長頸瓶あるいは双耳瓶の破片と考えられる。4の口縁片はやや外に折れる端部に凹線が廻り、5の頸部付け根には凸帯が廻る。7は肩部に凸帯が廻る。6、9は胎土・焼成・色調より同一個体と推定される双耳瓶である。8は鶏冠状を呈する大ぶりの耳部片である。いずれも、胎土・焼成とも良好で、暗青灰色の色調を呈するものが多い。

### 壺 (第 39 図 3・11・12)

3は推定器高約6cm、口径約7cmの小型の短頸壺片である。古墳時代の須恵器に多い器形であり、出土層位上ここに掲載したが、他と区別して考える必要がある。11は高台を有する短頸壺の底部片と考えられる。12は底径5.3cmとやや小ぶりであるが、壺または瓶の底部であろう。

### 杯 (第 40 図 1～15)

法量、高台の有無など形態差から、A・B・C・D・E類に大別される。

杯A(1～3)は外反する貼高台をもつもので、坏部の外傾度は比較的少なく、器高は高い。法量は、1が口径13cm、器高5.5cm、底径7.2cm、2が口径12.2cm、器高5cm、底径7.2cmを測る。胎土・焼成とも比較的良好で、色調は灰色を呈す。

杯B(4)は外反する比較的高く作られた貼高台をもち、端部を欠くが坏部が外傾度が大きいものである。入念な回転ナデ調整が施され、全体に薄手に仕上げられている。胎土は精良であるが、焼成はやや不良、色調は淡灰褐色を呈す。

杯C(5～7)は底部片のみであるが、ずんぐりとした内湾ぎみの高台をもつもので、底部器壁は比較的厚手である。底径は、5が8.2cm、6が7.4cm、7が8.0cm、をそれぞれ測る。胎土中に白色の粗砂粒が多く含まれ、焼成は良好、色調は暗青灰色を呈す。

杯D(8～13)は無高台で、口縁部の外傾度が比較的大きく、器高が低いものである。13は口縁端部がやや内湾する特徴をもつ。いずれも、口縁部は回転ナデ調整されるが、成形時のミズビキ痕と考えられる凹凸を明瞭に残している。底部は回転ヘラ切りのままである。わずかに底部を残している13は、切り離しに糸切技法が用いられている可能性が強い。比較的密なる胎土のものが多く、焼成は良好、色調は灰色を呈する。

杯E(14・15)は底部片のみで全体形は不明である。底径10cm前後を測る大ぶりなもので、坏として考えてよいのかも疑問である。

### 鉢 (第 40 図 23)

いわゆるスリ鉢型をなす鉢形土器口縁片である。端部はやや内湾し、外面には2条の凹線が廻り、また、成形時のミズビキ痕と考えられる凹凸を内・外面に残す。胎土は精選され密である。焼成はややあまく、色調は灰褐色を呈す。口径20.2cmを測る。

### 墨書土器 (第 40 図 13)

いわゆるグイノミ型の坏で、底部に「丁」字状の墨書が不鮮明ではあるが描かれている。ミズビキで成形されており、底部には回転糸切痕が残る。胎土中に白色砂粒が比較的多く含まれる。焼成はやや不良で、色調は淡灰色を呈す。口径6.4cm、器高3.4cm、底径4.1cmを測る。

### 土師器 (第 42 図)

#### 甕 (第 42 図 1)

口径17cmを測る小型の甕形土器である。胴以下を欠くが、やや内湾ぎみに外反する平縁の口縁に筒状の体部が付く器形をとると推定される。器面の調整は、内・外面とも横位のハケ調整とみられるが器面の磨耗が著しく、わずかにその痕跡を残すのみである。胎土は比較的精選されている。焼成は不良で、色調は赤褐色を呈す。

皿（第42図4～6）

いずれも台付のもので、やや内湾ぎみに開く体部は口縁部で外反する。4はほぼ完器に近く、口径12.9cm、底径6.4cm、器高2.3cm、高台高0.8cmを測る。体部の調整は、いずれも磨耗が著しく不明であるが、4・5は底部に回転糸切り痕を残し、6の底部はナデ調整されている。色調は、4が明茶褐色、5が茶褐色、6が淡褐色を呈す。いずれも胎土中に白色砂粒を多量に含み、焼成は、4・5が不良で、6は良好である。

杯（第42図2・3・8～21）

法量、高台の有無などの形態差から、A～Hの8類に大別される。

杯A（2・14・19）は無高台のもので、ミズビキで成形され、底部に回転糸切り痕を残すものである。胎土中には砂粒を比較的多く混和し、焼成はややあまく、色調な明茶褐色を呈す。2は完器に近く、口径は12.2cm、底径5.3cm、器高3.2cmを測る。2の内・外面はナデ調整され平滑に仕上げるのに対し、体部がやや内湾ぎみに外傾する14は、内面末調整で成形時のミズビキ痕を残す。

杯B（10・12）は無高台で小型の杯で、厚く作られた底部に回転糸切り痕を残す。杯Aと同様の胎土・焼成・色調を示す。10はナデ調整され、口径8.0cm、底径3.3cm、器高3.8cmを測る。

杯C（3）はグイノミ型の杯である。古墳時代後期の同型のものに近似するが、底部に回転糸切り痕を残し区別される。内面黒色土器で、内・外面とも入念なへら研磨で仕上げられた精品である。現存体径約5cm、底径4.3cmを測る。胎土は精選され、焼成は良好、色調は明茶褐色を呈す。

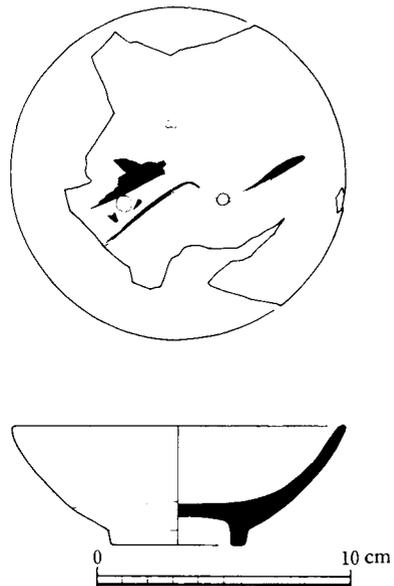
杯D（9）は外反する高い高台を有するものである。粗砂粒の混入が比較的小なく胎土は精選されている。調整は入念なナデで仕上げられ、ミズビキ痕、底部の糸切り痕は消され器面は平滑である。焼成は良好で、色調は明茶褐色を呈す。高台高1.7cm、底部7.0cmを測る。

杯E（11・18）は高台を有し、内面黒色でないものである。高台は断面三角形をなし、底面中央部に回転糸切り痕を残す。2片とも焼成不良で暗茶褐色を呈す。胎土は粗粒を多く含む。

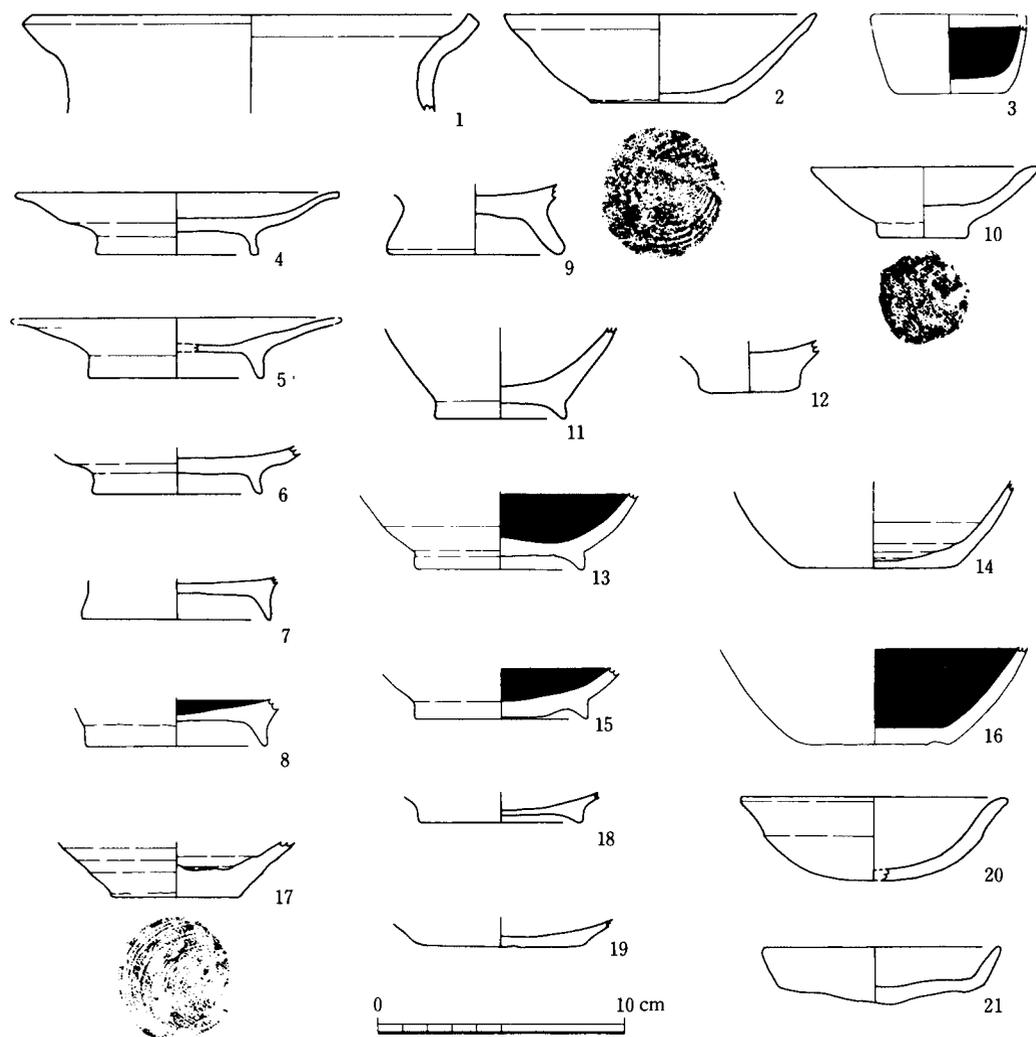
杯F（8・13・15・16）は高台を有する内面黒色土器である。高台は断面三角形を呈する付高高で、比較的高いもの（8）と低いもの（15・16）がある。外面はナデ調整され比較的平滑に仕上げられている。13は底面中央部に回転糸切り痕を残す。内面はいずれも入念なへら研磨で仕上げられる。胎土・焼成とも良好で、地色は明茶褐色を呈す。底径は6.2～7.4cmを測る。

杯G（20）は底面を作らないもので、体部と口縁部の界に段を有する。口径10.6cm、器高3.2cmを測る。胎土・焼成とも良好で茶褐色を呈す。

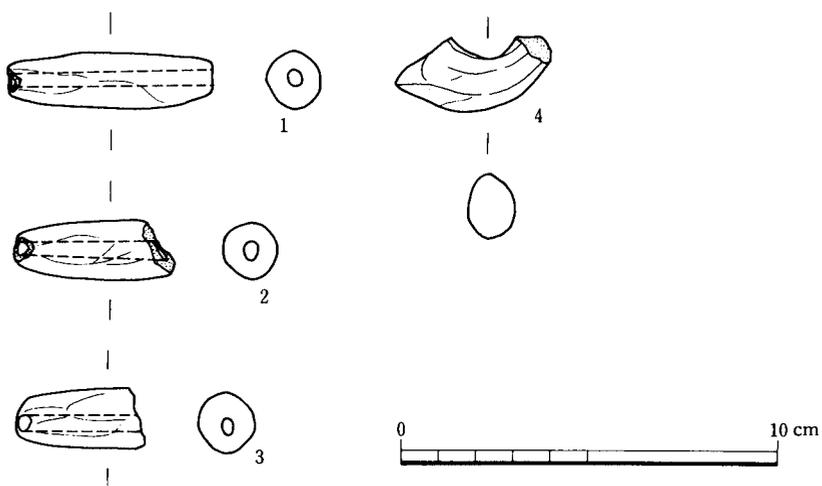
杯H（21）は手捏で成形された皿状を呈する



第41図 A地区出土土器実測図



第 42 图 A 地区出土土器实测图



第 43 图 A 地区出土土製品实测图

小型の杯である。口径9.5cm、器高2.2cmを測る。胎土・焼成とも良好で明茶褐色を呈する。

#### その他の土製品 (第43図)

1～3は土錘で、1は長さ8.1cm、径2.2cm、重さ10.6kgを測る。4は把手付土器の把手片である。

#### 近世陶器 (第41図)

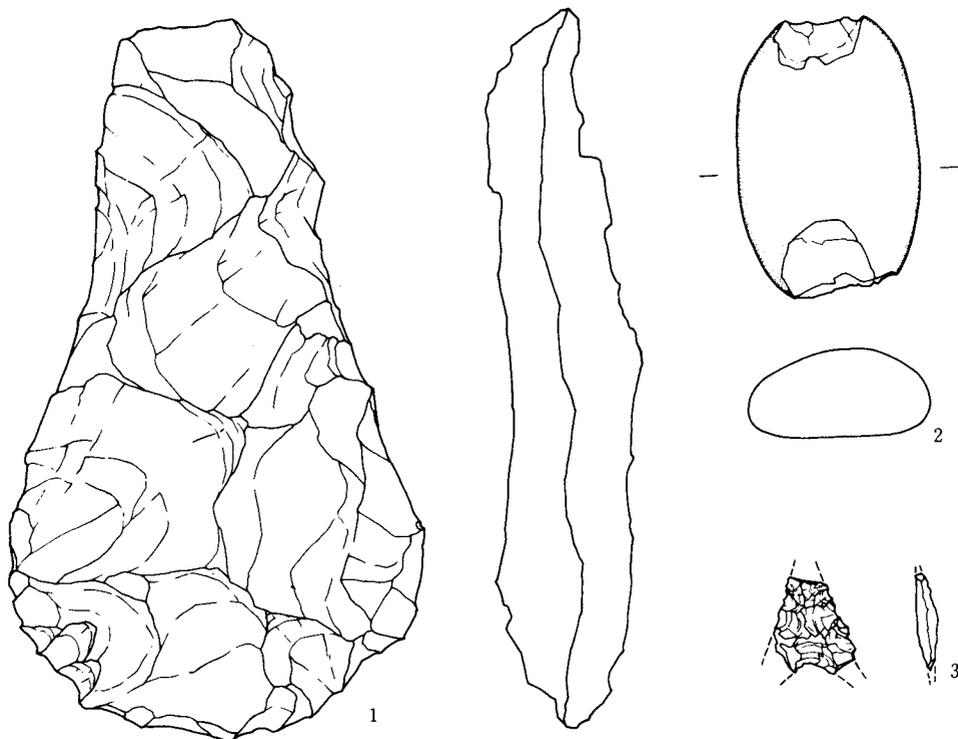
口径8cm、器高4.7cmを測る。体部には灰色釉がかかる。

## 第2節 B地区の遺物

### (1) 縄文時代の遺物

#### 石器 (第44図・図版11)

3点の石器が大溝中より出土している。1はバチ型を呈する大型打製石斧である。花崗岩質の石材による両面加工品であるが刃部の作りは粗雑である。長さ18.7cm、幅11.0cm、重さ738gを測る。2は偏平な砂岩質の自然礫の両端を打ち欠いて石錘としたものである。長さ7.2cm、幅4.7cm、重さ約100gを測る。3は端部を欠くが両面加工の石鏃である。



第44図 B地区出土石器実測図(縮尺1/2)

## (2) 古墳時代の遺物

大溝下層出土遺物（第45～51図・図版14～23）

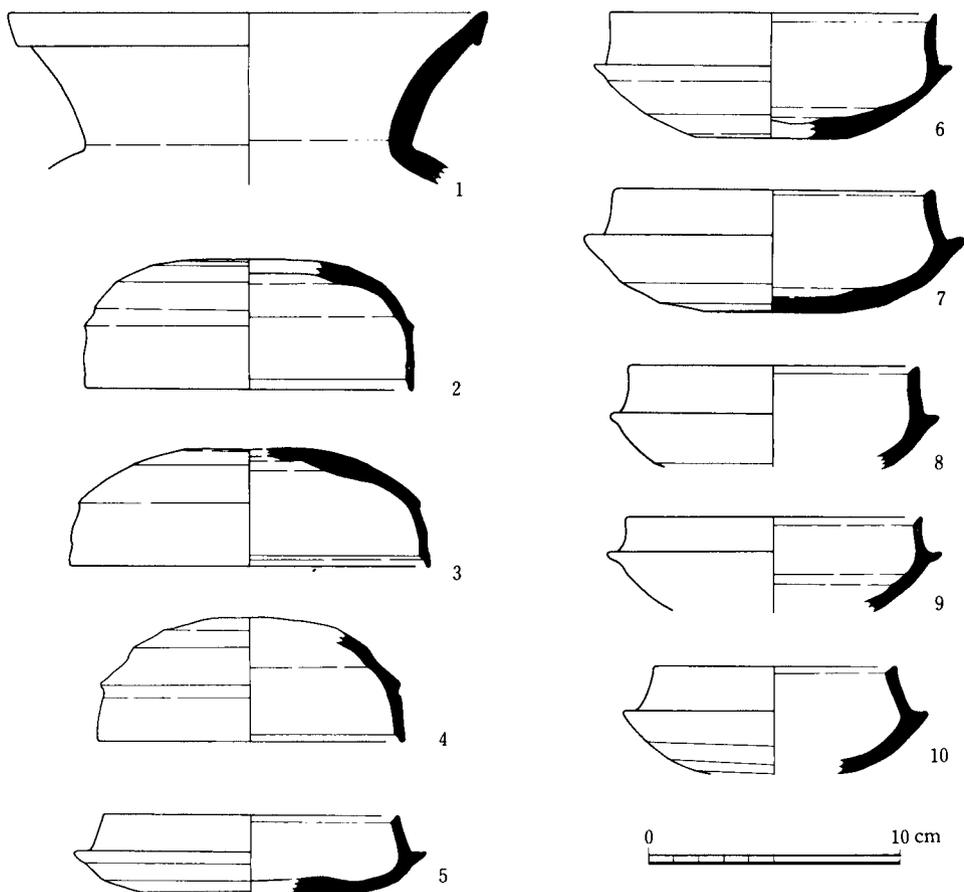
須恵器（第45図）

甕（第45図1）

大きく外反する口縁は、端部が下方に屈曲肥厚して狭い口縁帯を作り、平縁をなす。内・外面とも回転ナデ調整が施され平滑に仕上げられている。焼成がやや不良のため、色調は赤灰色を呈す。胎土は白色砂粒を多く混和するが、比較的精選され粗砂粒はほとんど含まない。口径18.8cm。

杯蓋（第45図2～4）

口径、器高とも比較的大きく、口縁部がやや外傾するため、断面形は半円形に近い。段部の稜は、2・4が明瞭であるが、3はややシャープさに欠ける。4は口径に対して器高が高く天井部は丸い。天井部の調整は回転ヘラ削りによっており、2・4が全体の約2分の1、3が全体の約3分の1前後に施される。2・3の口縁端部は内傾する段を残すがシャープさに欠ける。内面は回転ナデ調整され、比較的平滑に仕上げられる。胎土・焼成とも良好で、色調は暗青灰色を呈する。法量は、1が口径12.8cm、器高5.1cm、2が口径14.1cm、器高4.6cm、3が口径12cm、をそれ



第45図 B地区大溝下層出土土器実測図

ぞれ測る。

#### 杯身 (第 45 図 5 ~ 10)

たちあがり器高の 2 分の 1 以上を占める偏平な 5 を除き、若干の口径の大小の差があるがほぼ同形態で、2 ~ 4 の杯蓋に対応するものである。比較的長いたちあがりは内傾し、端部に段をもつ。内面は回転ナデ調整され、底部外面は約 2 分の 1 が回転ヘラ削りされる。胎土中に砂粒を多く含むが、目立ような粗砂粒は少ない。焼成は比較的良好で、色調は暗青灰色を呈す。法量は、5 が口径 11.5cm、器高 3.2cm、7 が口径 12.6cm、器高 4.8cm、10 が口径 9.8cm、をそれぞれ測る。

#### 土師器 (第 46 ~ 51 図)

##### 甕形土器 (第 46・47 図)

法量、口縁・体部の形態の違いなどから A ~ D の 4 類に大別される。

甕 A (1 ~ 4) は、球形に近い体部をもち、口縁がくの字状に外反するものである。口縁端部に若干の相異がみられ、横ナデにより端部が平縁に作られるもの(甕 A<sub>2</sub>-1)、上方よりのナデ押しえにより端部がやや肥厚するもの(甕 A<sub>2</sub>-3)、端部が丸縁となるもの(甕 A<sub>3</sub>-2)がある。いずれも、体部内面がヘラ削りされている。口縁端部を欠く 4 は、体部外面下位および内面が乱雑にヘラ削りされる。胎土中に多くの砂粒を混和し、焼成は並。色調は淡茶褐色を呈する。口径は、1 が 20cm、2 が 20.8cm、3 が 17.6cm をそれぞれ測る。

甕 B (5 ~ 8・12 ~ 16・20) は、やや胴長の体部をもち、口縁がくの字状に外反するもので、体部内面がハケ調整あるいはナデ調整されるものである。口縁部の形態差および体部調整の相異より、さらに B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>・B<sub>3</sub> 類にわかれる。甕 B<sub>1</sub> (6 ~ 8・12) は、体部と画する稜を内面に作って、外反する。くの字状口縁の甕で、口縁は横ナデされ、端部は丸縁をなす。体部の調整は、外面がハケ調整、内面が強いナデ調整である。7 は縦位の荒いハケ調整痕を外面に残す。色調は全体に暗茶褐色を呈するものが多く、粗砂粒の含有が比較的少なく、胎土・焼成は良好である。口径は、6 が 17.4cm、7 が 15.0cm、8 が 16.2cm をそれぞれ測る。甕 B<sub>2</sub> (5・15・16・20) は、口縁部が直立的に立ちあがり端部で外傾屈曲するものである。体部と画する内面の稜は比較的明瞭である。焼成は不良で、図化した 3 片とも、器面の磨耗により調整は不明。胎土は密であり、色調は赤褐色を呈す。口径は、5 が 15.5cm、15 が 16cm、16 が 15.1cm をそれぞれ測る。甕 B<sub>3</sub> (13・14) は、口縁部が曲線的に外反するもので、端部は肥厚し丸縁をなす。口縁部の横ナデ調整は粗雑で、1 次調整時のハケ調整痕を残す。また、内面には体部と画する稜は全くみられない。体部は内・外面とも乱雑にハケ調整され、体部中位は横ハケ調整される。胎土中に 2mm 前後の粗砂粒の混入がみられ、焼成はややあまく、色調は明赤褐色から暗灰褐色を呈し、均一ではない。口径は、13 が 18.5cm、14 が 19cm を測る。

甕 C (17) は、体部に対して小さな口縁部をもつ甕で、口縁部はやや内湾ぎみに外反し、体部は胴張りである。口縁部は横ナデされる。体部は外面に斜行する細いハケ調整痕を残し、内面は強いナデ調整で仕上げられている。胎土、焼成とも良好で、色調は淡茶褐色を呈す。口径 11.8cm。

甕 D (9 ~ 11・18・19) は、上端部を外方に引き出し口縁部とした小型の甕で、体部は胴長である。口縁部の形態差より D<sub>1</sub>・D<sub>2</sub>・D<sub>3</sub> 類に細分される。甕 D<sub>1</sub> (9・18・19) は頸部より端部に

かけて先細る口縁部を有するものである。端部は横ナデ調整されるが、入念さに欠く。体部外面は斜位にハケ調整され、内面も同様であるが乱雑で、19は成形時の輪積・マキアゲ痕を顕著に残す。胎土は比較的精選され、粗砂粒の含有は少ない。焼成は良好で、色調は淡赤褐色を呈す。口径はそれぞれ、9が14.0cm、18が15.5cm、19が14.3cmを測る。甕D<sub>2</sub>(19)は、端部に強い横ナデを施し口縁部と体部を区別したもので、全体に器壁の厚い小型の甕である。体部外面は縦位にハケ調整され、内面は荒く横位にヘラ削りされている。胎土は3mm前後の白色粗砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は暗赤褐色を呈する。口径11.3cm。甕D<sub>3</sub>(11)は比較的長く引き出された口縁部を有するものである。焼成不良のため器面の磨耗が著しく調整は不明。胎土は密である。色調は赤褐色を呈する。口径10.3cm。22～25は甕底部片で、すべて丸底である。

#### 高杯形土器 (第48図)

すべて断片で全形を残すものはない。このため、杯部と脚部において特徴を記述する。

杯部はその形態差より、A・B・Cの3類に大別される。

杯A(28・30)は有段のもので、杯部が屈曲して段を作り、口縁部と杯底部がこの段によって画されるものである。28・29ともやや焼成不良で器面の磨耗が著しく細かい調整は不明瞭であるが、28の内面にわずかにヘラ研磨痕が残る。胎土はほとんど粗砂粒を混入せず密である。色調は赤褐色を呈する。口径は、28が20cm、30が14.7cmをそれぞれ測る。

杯B(29)は内湾ぎみに開口する杯部の下位に粘土紐を貼付け口縁部と杯底部を区別し有段状にしたものである。内・外面とも乱雑にヘラ研磨されている。胎土は2～5mmの粗砂粒の混入が目立ち粗雑である。焼成は良好で、色調は明茶褐色を呈する。口径18.5cm。

杯C(31)は、内湾ぎみに開口する無段のもので、口縁部は端部でやや外傾する。器面は内・外面ともナデ調整されるが、仕上げは粗雑で、成形時の積上痕およびハケ調整痕が部分的に残る。胎土は粗砂粒を含まず精良。焼成は良好。色調は淡灰褐色を呈する。口径18.2cm。

脚部は杯部同様A・B・Cの3類に大別されるが、相互の対応関係は接合点をみいだせないため不明である。

脚A(32～38)は、直線的にのびる比較的長い脚胴部を有し、34にみられるように脚端部がラッパ状をなして開脚するものである。外面はヘラ削りおよびヘラ研磨で調整されるが、仕上げは概して雑である。また、脚内面のシボリ痕はヘラ削ぎで調整されるが、36のように未調整のものもみとめられる。胎土は比較的精選されており、粗砂粒はほとんど含まない。焼成は良好で、色調は淡灰褐色もしくは淡茶褐色を呈し、比較的堅固な器質である。34の底径は11.3cmを測る。

脚B(39～41)は脚Aに比較して短脚のもので、脚端部ですとく開脚し、内面に稜をもつ。調整は入念で、ナデにより成形時の痕跡が丁寧に消されている。脚胴部門面はヘラ削りで整えられ、端部は横ナデされている。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は並で、色調は淡茶褐色を呈する。底径は、40が12cm、41が10.5cmをそれぞれ測る。

脚C(42・43)は脚端部が屈曲せずに開脚するものである。42と43とでは杯部との接合法がやや異なり、形態的には2つに細分される。胎土は精選されており粗砂粒はほとんど含まない。焼成は並。色調は淡茶褐色を呈する。42は底径10.6cmを測る。

## 椀形土器（第49図）

器形的に杯、鉢に近いものも包括し、A～Fの6類に大別した。

椀A（44～50・53）は、内面の稜によって体部と口縁部が区別されるもので、すべて内面黒色土器である。法量および口縁部・体部の形態差によってさらにA<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>・A<sub>3</sub>・A<sub>4</sub>の4類に細分される。椀A<sub>1</sub>（44・46）は器高に対して口径が大きいものである。外面はナデ調整、内面は入念にへら研磨されつややかである。胎土は精選されたものが使用され密。焼成は良好。色調は暗茶褐色を呈する。口径は、44が16.5cm、46が16.8cmである。椀A<sub>2</sub>（45・48・49）は椀A<sub>1</sub>より器高が高く、口径が小さいものである。調整・胎土・焼成・色調は椀A<sub>1</sub>に同じ。口径は、45が13.8cm、48が14.2cm、49が12.6cmを測る。椀A<sub>3</sub>（50・53）は体部が深く作られ、わずかに外反する口縁部を有するものである。50の体部はやや肩が張り、完器の53は丸底に作られる。外面の調整は、体部が縦ハケ、口縁部は横ナデ調整され、内面は入念に細いへら研磨が施されつややかである。胎土は2～5mm大の白色粗砂粒を比較的多く含む。焼成は良好。色調は淡黒褐色を呈す。法量は、53が器高6cm、口径12.0cm、50が口径10.7cmを測る。椀A<sub>4</sub>（47）は口径16.8cmを測る比較的大ぶりの椀である。口縁端部は外傾し、内面に弱い稜を作る。外面はハケ調整後ナデ仕上げされ、内面はへら研磨される。胎土は密で、焼成は良好。色調は暗茶褐色を呈す。

椀B（51・52・55・56）は、口縁端部が外傾し、内面に稜をもつもので、体部の形態差からさらにB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>の2類に分けられる。椀B<sub>1</sub>（51）は半球形の体部をもつ。内・外面とも入念にへら研磨され、器面はつややかである。若干の粗砂粒を含むが胎土は精選され密。焼成は良好。色調は淡茶褐色を呈す。法量は、口径13.5cm、器高5.7cmを測る。椀B<sub>2</sub>（52・55・56）はやや肩が張る体部をもつもので、器形的には椀A<sub>3</sub>に近い。外面は粗放にハケ調整後ナデ仕上げされ、内面はへら研磨される。胎土は比較的密である。焼成は良好。色調は暗茶褐色を呈す。法量は、完器の55が器高5.1cm、口径12.2cmを、52が口径11.9cm、56が口径9.8cmを測る。

椀C（54・57・58～60）は半球形を呈する椀である。法量および口縁端部の形態差からさらにC<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・C<sub>3</sub>の2類に細分される。椀C<sub>1</sub>（54・57・60）は器高が比較的低く、口縁端部がほぼ直立するものである。口径の大きさにややバラつきがあり、54が14.5cm、57が12.7cm、60が17.5cmを測る。54・60は内・外面ともへら研磨で仕上げられるが、57はやや調整が粗雑で外面に成形時のマキアケ痕を残す。また、口縁端部内面に一条のへら描き沈線が引かれている。54・60の胎土は粗砂粒の混入が少なく密であるのに対し、57は粗砂粒が目立つ。焼成はともに並。色調は、54・60が淡茶褐色、57が暗灰褐色を呈す。椀C<sub>2</sub>（58）は口径に対し器高が高いものである。内・外面ともへら研磨される。胎土・焼成はともに良好。色調は淡茶褐色を呈す。口径11.5cm。椀C<sub>3</sub>（59）は口縁端部が内傾するもので、器高に対して口径が大きい。内・外面とも入念なへら研磨で仕上げられ、赤彩される優品である。また、外面の一部および底部内面にススの付着がみとめられる。胎土はほとんど粗砂粒の混入がみとめられず精選されている。焼成は良好。地色は淡茶褐色を呈す。完器で、器高5cm、口径15.2cmを測る。

椀D（61・63）は底部から端部にかけて直線的に開口する器形ものである。61は口縁端に強い横ナデによる凹凸帯があり、63は内面黒色土器である。ともに外面はナデ調整で仕上げられ、内

面はへら研磨される。胎土は63が比較的粗砂粒を多く混入するのに対し、61はほとんど粗砂粒の混入がみとめられない。焼成は61がやや不良、63は良好である。色調は、61が淡橙褐色、63が暗茶褐色を呈す。このように61と63は、胎土・焼成・色調において、かなりの相違があり、61は類品を平安後期の杯にもとめることができる。口径は、61が13.7cm、63が14.2cmを測る。

椀E(62)は同期の須恵器杯形土器の模倣品と考えられるものである。この種の土器は、関東地方を中心に多出するもので、県内では類例が極めて乏しい。内・外面とも入念なへら研磨で丁寧に仕上げられる。内面黒色土器で、外面は口縁たちあがり部を除き全面赤彩されている。胎土は精選され、粗砂粒の混入はみとめられない。焼成は良好。地色は淡褐色を呈す。口径13.2cm。

椀F(64)は体部胴径が口径よりも大きく、器形的には壺ないしは甕形土器に近いものである。内面黒色土器で、内・外面とも入念なへら研磨で丁寧に仕上げられている。胎土は精選され、粗砂粒の混入は少ない。焼成は並。色調は暗茶褐色を呈す。口径11.3cm、現存高約6cmを測る。

#### 鉢形土器(第50図)

有台のものと同付のものがある。台付のものの中には先に述べた椀形土器が取付くものも含まれるが、ここでは便宜上一括して鉢形土器として取扱うこととする。法量、台の有無などの形態差からA～Eの5類に大別される。

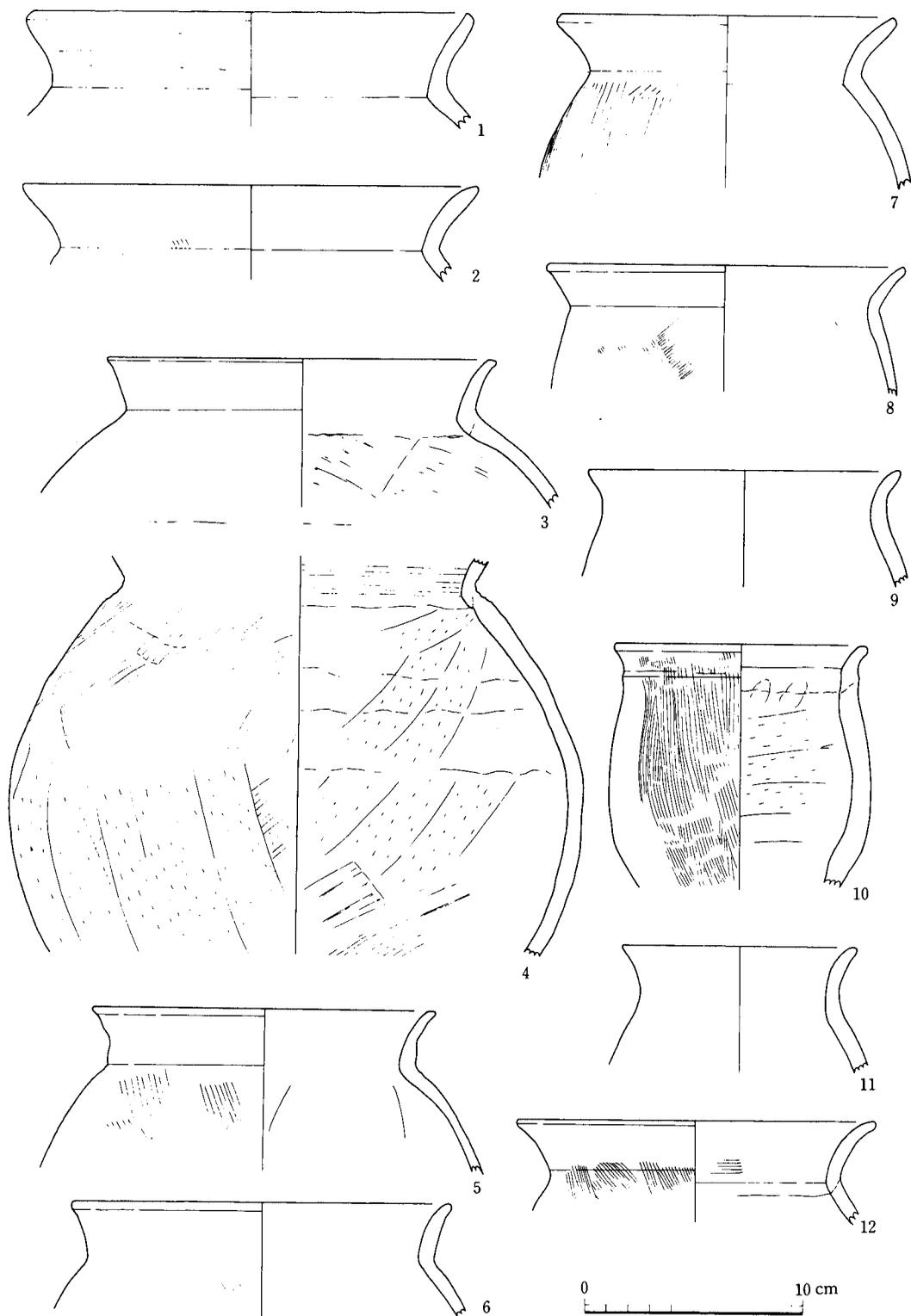
鉢A(65)は椀形土器椀A<sub>4</sub>の拡大化した器形である。外面ハケ調整後ナデ仕上げされており、口縁部は横ナデされる。内面はへら研磨仕上げ。胎土は精選されており密。焼成は並。色調は外面淡茶褐色、内面淡橙褐色を呈する。口径19.5cm、現存高約8cm。

鉢B(66)は体部が直線的開口し、その端部に強い横ナデを施すことで口縁化したもので、体部と口縁部の境に横ナデによる弱い稜をもつ。器面は調整は内・外ともハケナデによる。胎土中に比較的多く粗砂粒を含む。焼成は並。色調は淡茶褐色を呈する。口径18.6cm、現存高約5cm。

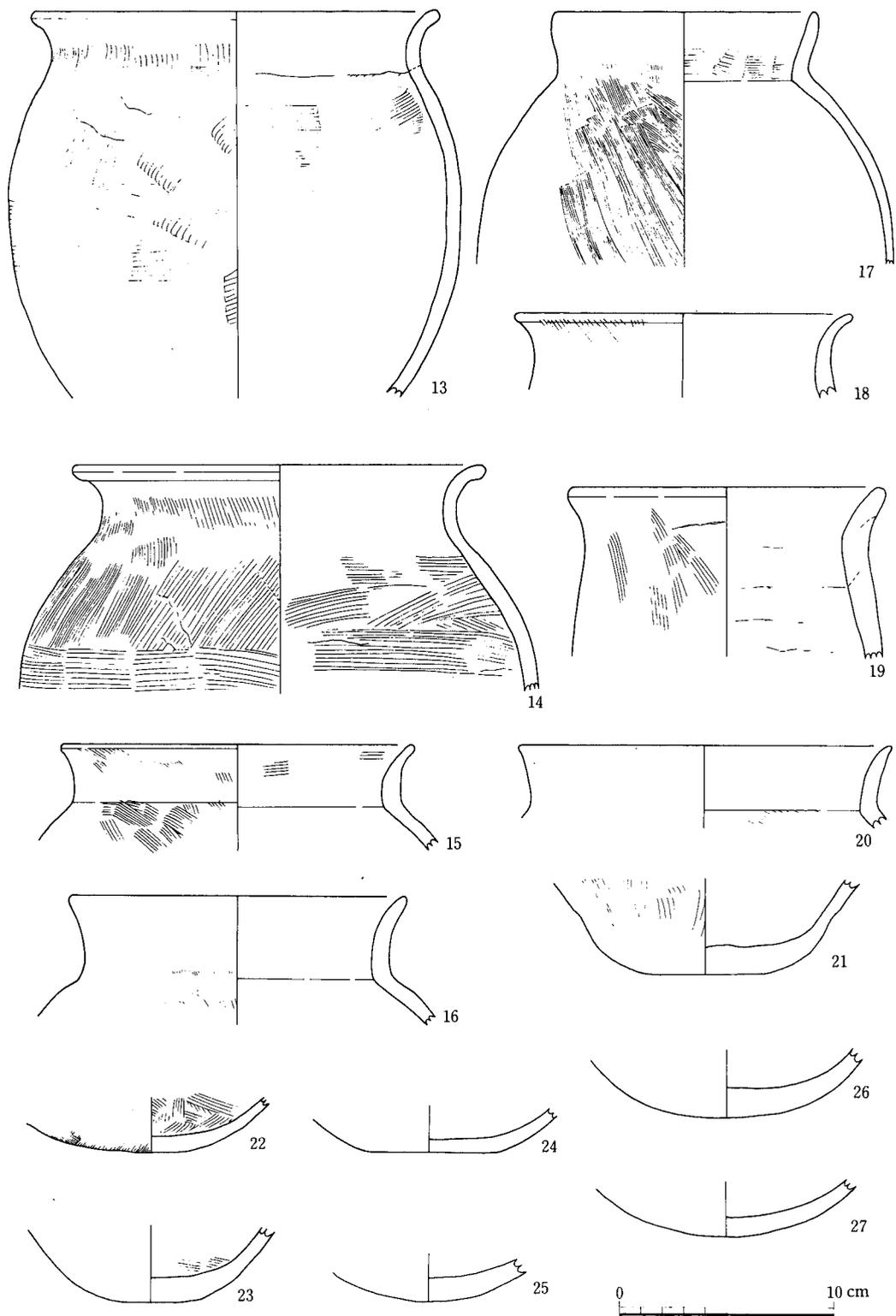
鉢C(67)は半球形を呈する鉢である。ほぼ直立する端部は横ナデされ先細に整えられる。また、口縁端部内面に指頭圧痕を残す。体部は内・外面ともハケ調整されるが粗雑で、成形時のマキアゲ痕を顕著に残す。胎土は2～5mm大の粗砂粒を比較的多く含む。焼成は良好。色調は淡茶褐色を呈する。口径23.5cm、現存高約9.5cmを測る。

鉢D(68)は底部を欠くが砲弾状を呈するものである。内・外面ともかなり磨耗しているが、成形・調整時のものと思われる指頭圧痕を全面にわたって顕著に残す。胎土は砂粒を多量に含む。焼成は並。色調は淡黄褐色を呈する。口径14cm、現存高約11.5cmを測る。

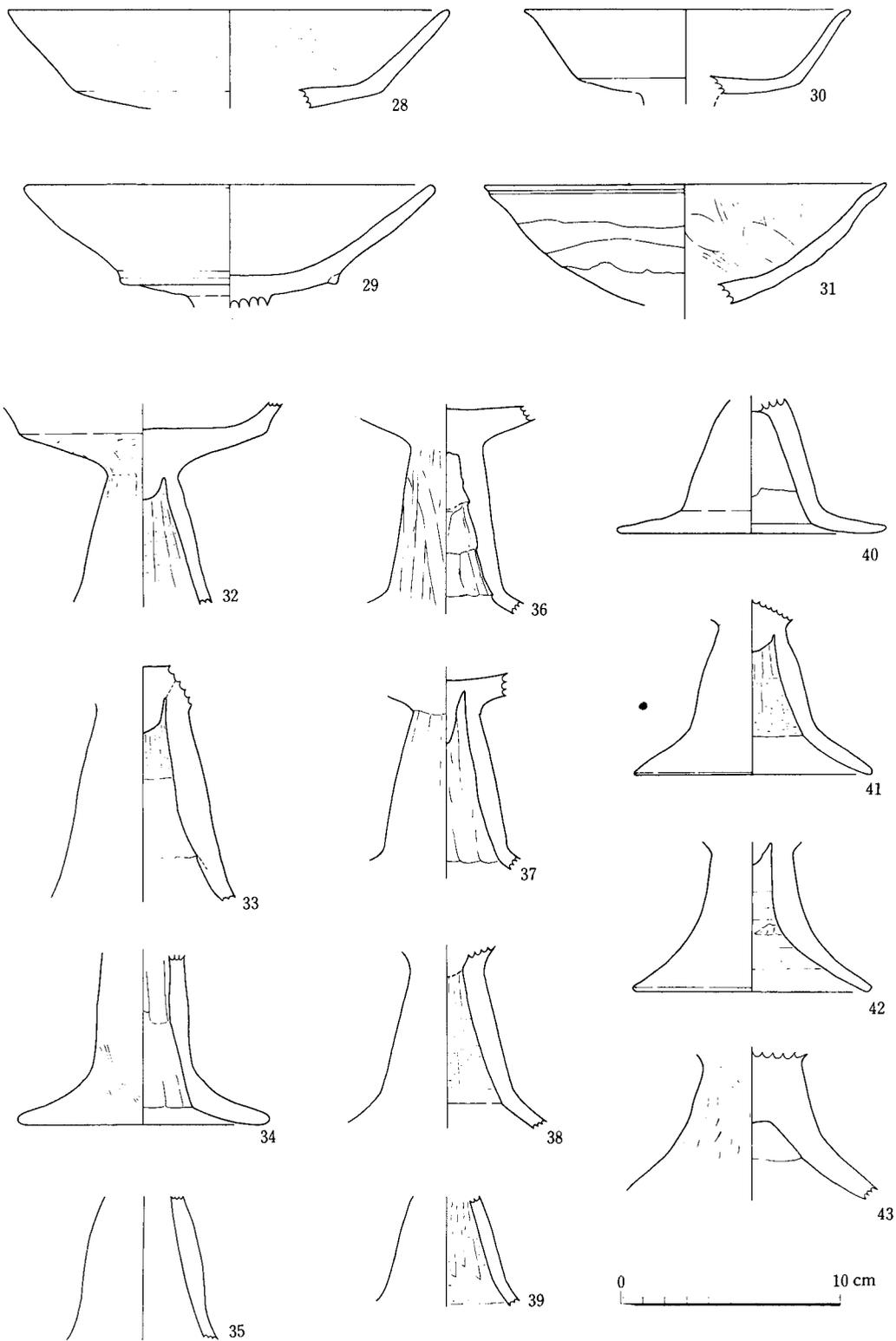
鉢E(69～75)は台付の鉢形土器である。69を除き体部を欠くが、脚台部の形態からさらにE<sub>1</sub>・E<sub>2</sub>・E<sub>3</sub>の3類に細分される。鉢E<sub>1</sub>(69・70)は鉢Aに小さな脚台が取付くものである。69は口縁部外面が横ナデされ、体部外面および内面はへら研磨される。脚台部は指ナデにより調整されている。口径16.5cm、底径6.2cm、器高8.9cmを測る。70は内面黒色土器である。内面は入念にへら研磨され平滑であるが、外面はハケ粗調整痕を残し、脚台部はへら削りで整えられている。69・70とも胎土・焼成は良好で、色調は淡茶褐色を呈する。鉢E<sub>2</sub>(72～74)は反外して開脚する脚台を有するものである。73の体部内面は黒色である。72の外面はハケ調整され、73はクビレ部に指頭圧痕を残している。いずれも胎土・焼成は良好で、色調は淡茶褐色を呈する。底径はそれぞれ、



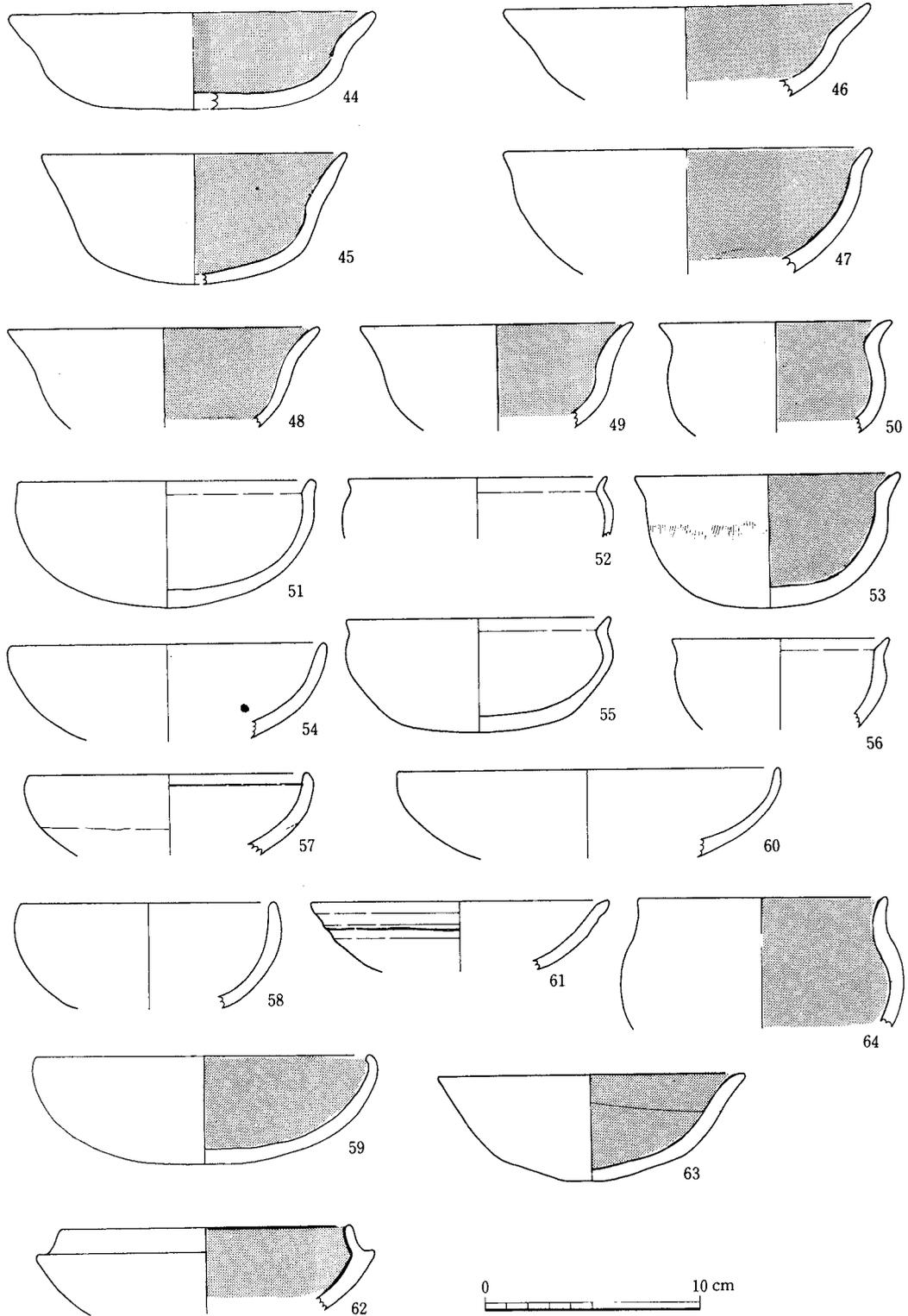
第 46 图 B 地区大溝下層出土土器实测图



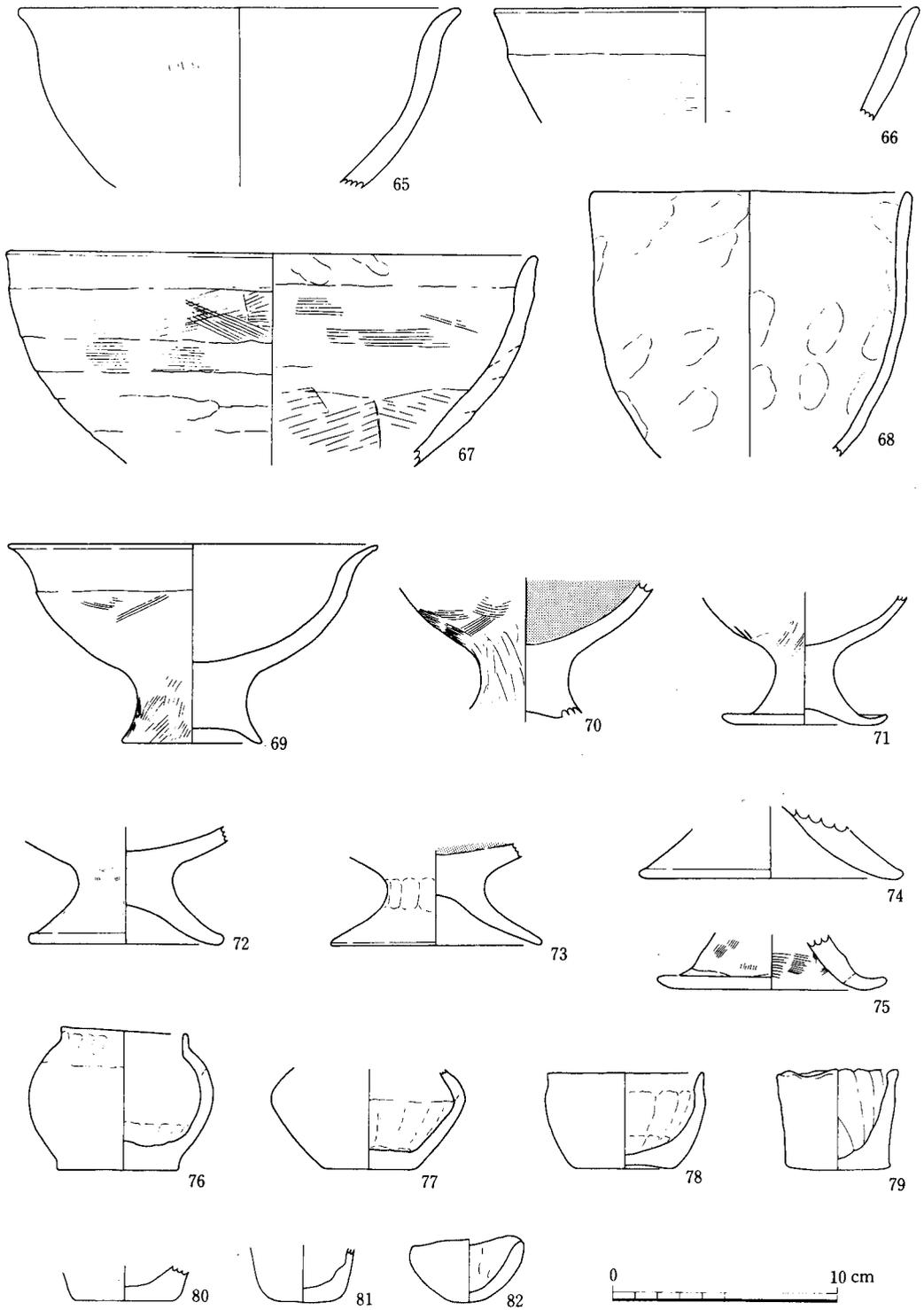
第 47 图 B 地区大沟下層出土土器実測図



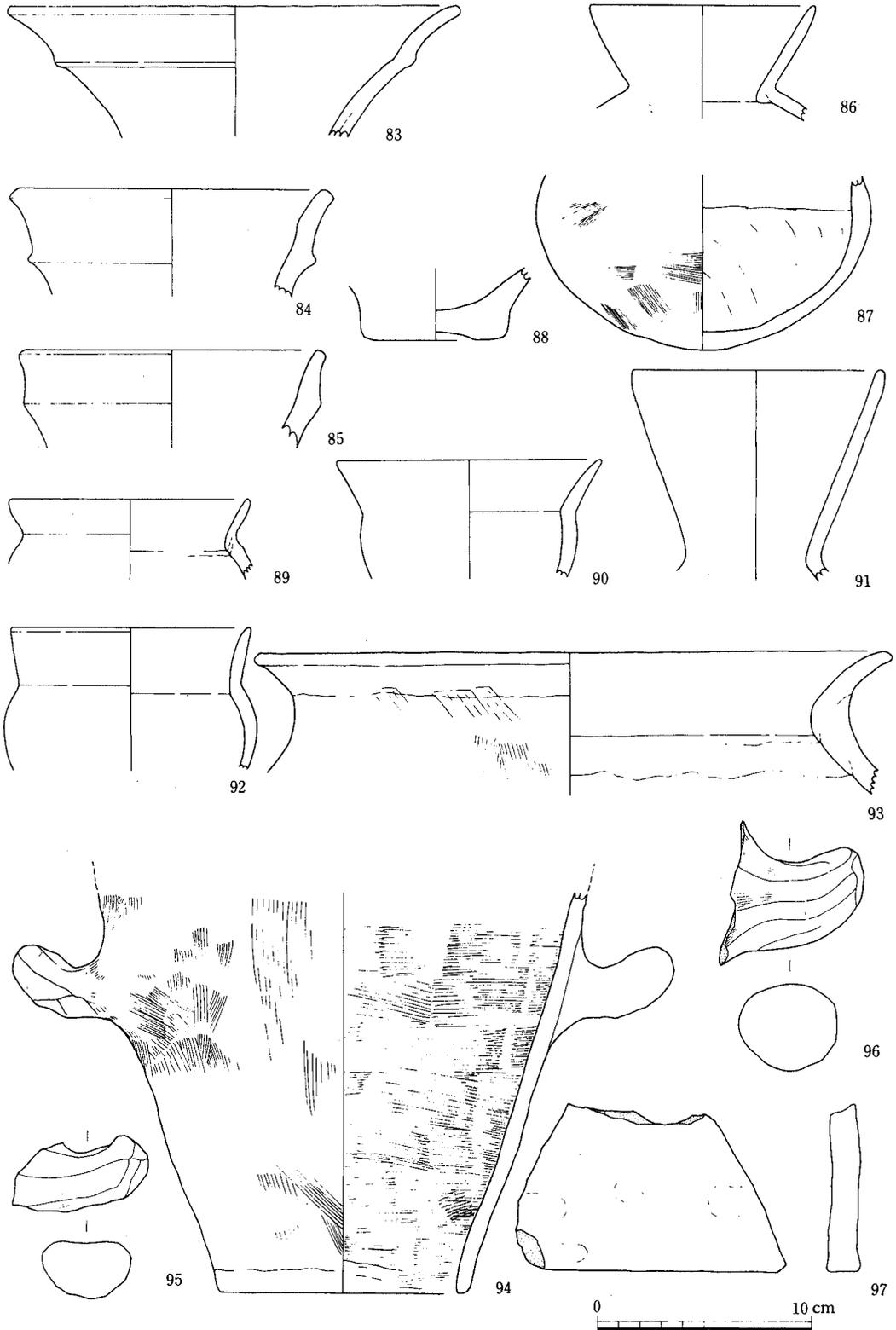
第 48 图 B 地区大溝下層出土土器実測図



第 49 图 B 地区大溝下層出土土器实测图



第 50 图 B 地区大溝下層出土土器实测图



第 51 图 B 地区大溝下層出土土器实测图

72が8.5cm、73が9.4cm、74が11.3cmを測る。鉢E<sub>3</sub>（71・75）は脚台の端部が上方にハネ上るものである。71は比較的小型の体部が取付く。器面は内・外面ともへら研磨され仕上げは丁寧である。対して75は仕上げは粗雑で、ハケ調整痕を顕著に残す。胎土・焼成はともに良好。色調は、71が淡茶褐色、74が暗茶褐色を呈する。底径は、71が6.0cm、75が8.2cmを測る。

#### 手捏土器（第50図）

器種・器形などからA・B・Cの類に大別される。

手捏土器A（76・77）はしっかりとした平底をもつ体部に短い口頸部が付く壺形の手捏土器である。77の胴部はやや張る。胎土はほとんど粗砂粒を含まず精良。焼成は良好。色調は、76が内面黒褐色、外面淡茶褐色、77が内・外面とも淡茶褐色を呈する。76は完器で、口径5.5cm、底径5.3cm、器高6.1cm、77は口頸部を欠き、胴径8.7cm、底径4.3cm、現存高約4.2cm、をそれぞれ測る。

手捏土器B（78～81）は、いわゆるグイノミ型の手捏土器で、もっとも普遍的にみられるものである。平底のものとして78のようにやや中央部が凹むものがあり、81は全体に小型で底部がやや安定性に欠ける。また、成形にあたって、78のように2段ないし3段にかけて成形・調整されるものと、79のように底部より一挙に口縁部まで成形・調整されるものがある。手捏土器の胎土は概して、砂粒の含有量の小さいものが多く、手捏土器Bの胎土はすべて精選されたものが使用されている。焼成も良好で、明茶褐色あるいは明灰褐色と色調は明るい。78が口径6.8cm、器高4.2cm、79が口径5.3cm、器高4.5cmを測り、ともに完器である。

手捏土器C（82）は尖底の極小手捏土器である。粘土塊を2～3回指で押えて形どったもので極めて粗雑な作りである。口径4.5cm、器高2.8cmを測る。胎土・焼成とも良好で、明茶褐色を呈する。

#### 壺形土器（第51図）

壺形土器の出土点数は極めて少ない。89・90・92のような埴あるいは鉢形土器に近いものも含め大きく5形態のものがある。88は壺は底部と考えられる。

壺A（83）は大きく外反する有段口縁のものである。内・外面とも入念なへら研磨が施され、仕上げは丁寧である。胎土・焼成とも良好で、色調は暗灰褐色を呈する。口径20.7cm。

壺B（84・85）はやや外傾する有段口縁のものである。段部の稜が明瞭な84と、不明瞭な85がある。口縁部は内・外面とも横ナデされ、比較的厚く仕上げられる。胎土・焼成は良好である。色調は淡灰褐色を呈する。84が口径14.3cm、85が口径13.5cmである。

壺C（86・87）は、いわゆる小型丸底壺に近いもので、86・87は同一個体である。器面の磨耗が著しいが、口縁部は内・外面ともハケ調整後乱雑にへら研磨される。体部は外面にハケ調整痕を残し、内面は底部よりナデ上げられている。胎土は粗砂粒をほとんど含まず精良。焼成はやや不良で、色調な淡赤褐色を呈する。口径10.2cm、推定器高15.8cmを測る。

壺D（91）は外傾する長い口頸部を有するものである。明瞭褐色の化粧土を上塗する精品で、器面は内・外面とも入念なへら研磨が施される。胎土・焼成とも良好。口径11.3cm。

壺E（89・90・92）は、口径が体部胴径より大きなもので、いわゆる広口壺とされるものであ

る。いずれも胎土・焼成とも良好で、色調は明橙褐色を呈す。口縁部および体部外面はヘラ研磨され、内面は入念にナデ仕上げされている。口径はそれぞれ、89が11.2cm、90が12.3cm、92が11cmを測る。

カマド形土器（第51図93・97）

93が口縁部片で、97が基底部片である。体部の大半を欠き、同一個体かどうか不明である。93の口縁はくの字の外反し、端部は横ナデにより平縁に近い形に整えられる。口縁部および体部外面に荒いハケ調整痕を残す。体部内面は未調整に近く、成形時のマキアゲ痕をそのまま残す。胎土は2~5mm大の粗砂粒を比較的多く含む。焼成は並で、2次焼成痕はほとんどみとめられない。色調は明茶褐色を呈する。口径約29cmを測る。

甔形土器（第51図94~96）

94は口縁部にかけて外傾する円筒状をなし、体部中位に把手をもつ。底部は中空である。体部は内・外面ともハケ調整される。胎土は砂粒を多量に含む。焼成は並。色調は淡灰褐色を呈する。底径11.5cm、現存高約18cmを測る。95・96は把手片である。

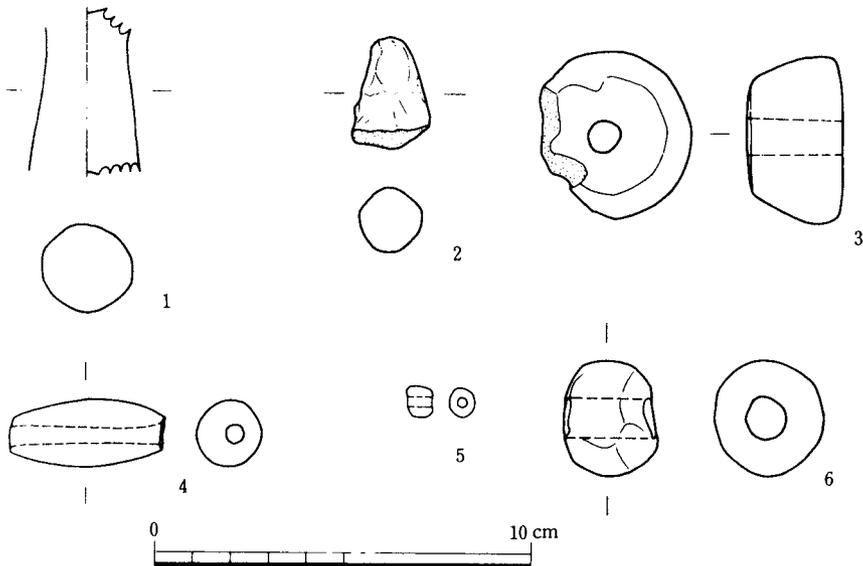
その他の土製品（第52図）

脚状土製品（第52図1）

径2.8cm、現存高4.2cmを測る。高杯形土器の雛形品と推定されるが、杯部および脚端部を欠くため全体形は不明である。化粧土を上塗りして仕上げられた精品で、色調は明桃色を呈する。胎土は密でほとんど粗砂粒を含まない。焼成はやや不良で、器面は磨耗している。

角状土製品（第52図2）

現存長2.8cm、同幅2.0cm、測る。基部に剝離痕がみとめられることから、雛形土器の把手とも考えられる。胎土・焼成とも良好。色調は明茶褐色を呈す。



第52図 B地区大溝出土土製品実測図

### 紡錘車形土製品 (第 52 図 3)

径4.4cm、厚さ2.5cmを測る。中央部に径0.9cmの円孔が穿孔されている。胎土は微砂粒を多量に含む。焼成は並。色調は淡茶褐色を呈する。

### 土垂 (第 52 図 4・6)

管状を呈する 4 は、長さ4.1cm、径1.8cm、重さ10.6g を測る。球状の 6 は、長さ2.8cm、径3.0cm、重さ19g を測る。ともに胎土中に砂粒を多量に含む、焼成は並。色調は淡茶褐色を呈する。

### 土玉状土製品 (第 32 図 5)

長さ0.7cm、径0.8cmを測る土玉で、中央部に2.5mmの円孔が貫通している。色調は黒褐色を呈する。

### 大溝上層出土遺物 (第 53～58 図・図版 14～23)

#### 須恵器 (第 53・54 図)

#### 甕 (第 53 図 1～4)

1・2 は胎土・焼成・色調を同じくし、同一個体と考えられる。口径 48.6cm を測る大型甕である。口頸部は外反してのび、端部は上下に肥厚する。口頸部外面は、断面三角形を呈する凸縁によって 2 段に区画され、それぞれにクシ描による波状文が施される。施文具であるクシ歯状具は 10 条単位の細いもので、1cm 前後の波幅で丁寧に描かれ文様の乱れはほとんどみとめられない。口頸部は内・外面とも回転ナデ調整され平滑である。体部は破片のみで全体形は不明。外面は縦位の細い平行タタキ調整後、回転を利用した細かいカキ目調整が施され、内面は重複する同心円タタキメを残すが、頸部に近い部分は一部カキ消されている。胎土は 2～5mm 大の白色砂粒を若干含むが密である。焼成は良好。色調は内・外面とも暗青灰色を呈し、器壁内部の地色はいわゆるセピア色である。

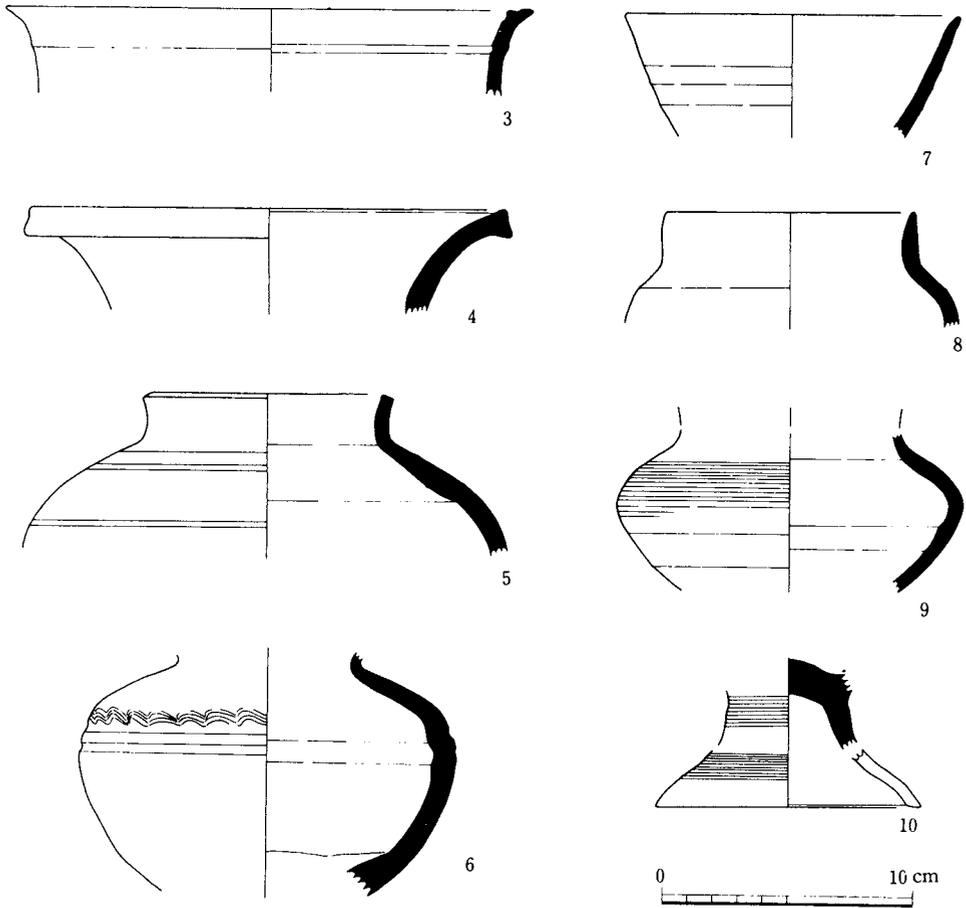
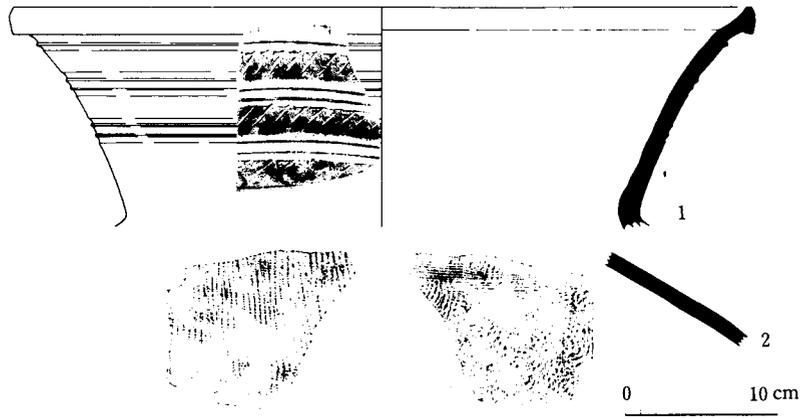
3 は口縁片であるが、いかなる器種・器形に取付くものか不明である。ほぼ直立ぎみに開口する口頸部は端部で外傾肥厚し、平に作られる縁部に 1 条の凹線が廻る。また、内・外面とも回転ナデ調整され、それによって生じた弱い稜線を外面に、内面に凹線を有する。胎土は粗雑で、多量の粗砂粒を含む。焼成は並。色調は淡灰色を呈する。口径 21cm を測る。

4 は口径 18.6cm を測る口頸部片である。ゆるやかに外傾する口頸部は端部でやや肥厚し、幅約 1cm の口縁帯を作る。口縁帯はやや内に凹む。内・外面と回転ナデ調整され器面は平滑である。胎土は精良で、焼成は並。色調は、内面が暗青灰色、外面が淡灰色を呈する。

#### 壺 (第 53 図 5～10)

5 は口径 9.2cm を測る短頸壺である。体部下半を欠くが、球形に張る体部にほぼ直立する口頸部が付く器形をとるものと推定される。端部は平縁である。体部は内・外面とも回転ナデ調整され、外面に 5 条の浅い沈線が廻る。胎土は砂粒を多量に含む、焼成は良好で外面に縁灰色の自然釉がかかる。色調は淡灰色を呈する。

6 は胴径約 15cm を測る体部片である。最大径をやや上位におく球形の体部中位に 2 条の弱い凹線が廻り、その上に波状文からなる文様帯が施されている。波状文は 5～6 本単位のクシ歯状施文具によるもので、波幅が一定でなく、描きかたは乱雑である。成形はマキアゲ・ミズビキ手



第 53 图 B 地区大溝上層出土土器実測図

法によっており、外面はナデ調整で平滑に仕上がるが、内面は成形時のままで未調整である。胎土は2~5mm大の粗砂粒を若干含むが比較的密である。焼成は並。色調は淡灰色を呈する。

7は出土層位より一応ここでは古墳時代ものの中に含めたが、類例に乏しく、壺口頸部と考えるにやや不自然である。どちらかといえば、平安期に下降する杯片の可能性が強い。

8は口径9.8cmを測る短頸壺である。口頸部はほぼ直立し、端部は先細りで丸く仕上げられる。マキアゲ・ミズビキ成形後、内・外面とも入念に回転ナデ調整される。胎土は粗砂粒をほとんど含まず密。焼成は並、色調は淡灰色を呈する。

9・10は同一個体で、脚台付の短頸壺と推定される。内面はマキアゲ・ミズビキ成形痕を顕著に残すが、外面はカキ目調整され平滑である。胎土は粗砂粒を若干含むが密。焼成は良好。色調は暗青灰色を呈する。9は胴径13.5cm、10は底径10.4cmを測る。

#### 杯蓋 (第54図11~17)

法量および器形の特徴から、A~Eの5類に大別される。

杯蓋A(11)は、器高が低く、口径が大きい大型に属するものである。天井部と口縁部を画する稜はみとめられず、丸くなだらかな円弧を描く。端部は丸く仕上げられる。マキアゲ・ミズビキ技法で成形され、内面は平滑に回転ナデ調整されている。天井部の回転へら削りは2/5程度である。胎土は2~5mm大の粗砂粒を多量に含み粗雑。焼成は並。色調は暗青灰色を呈する。口径15.4cm、器高4.5cmを測る。

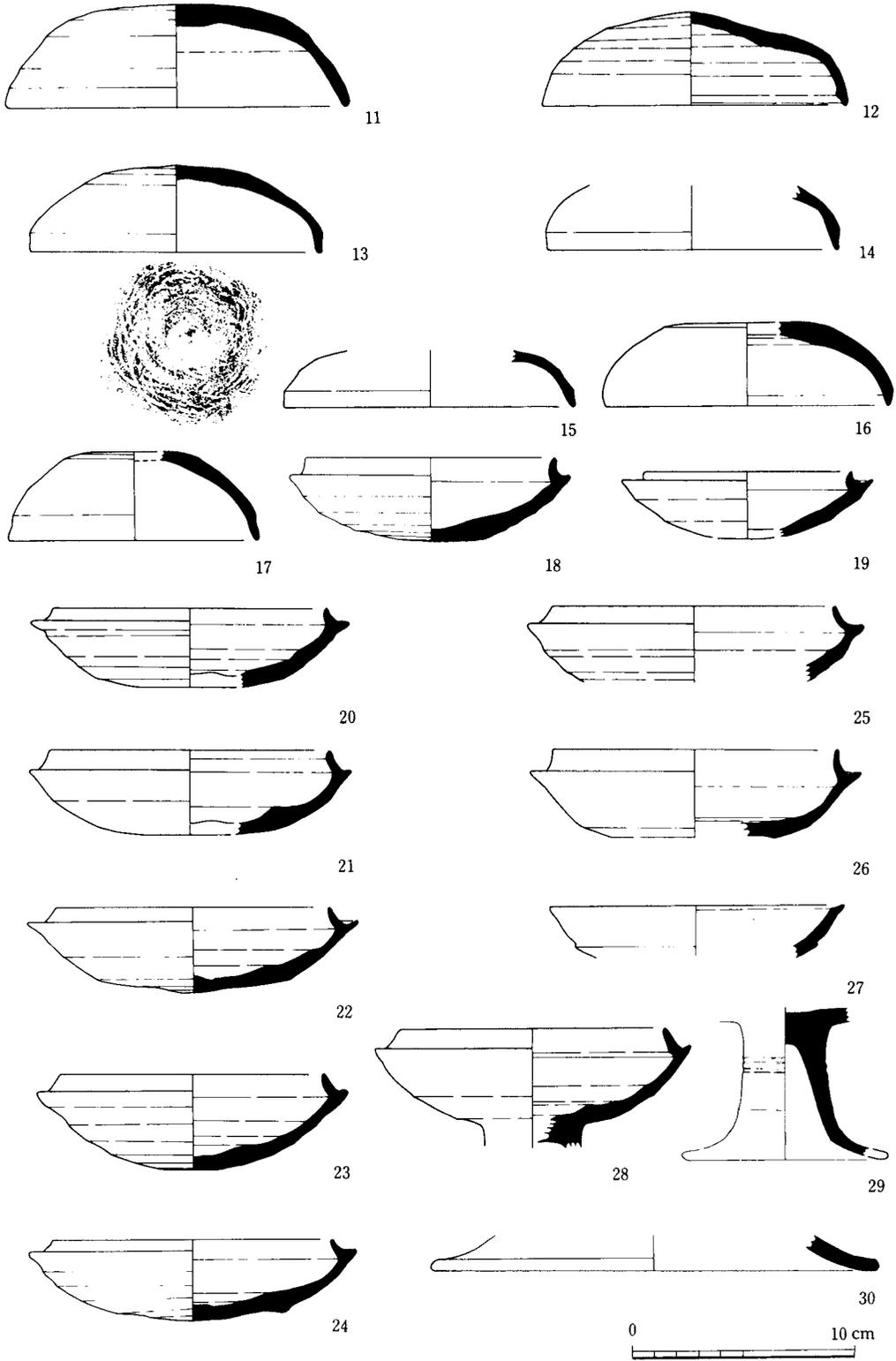
杯蓋B(12)は口径13.6cm、器高4.2cmを測り大型に属する。やや焼きゆがみがあるが、天井部からのカーブは端部で内屈して、口縁を画する弱い稜を作りだす。端部内面には内傾する段を有する。マキアゲ・ミズビキ手法で成形された後、内・外面とも回転ナデ調整される。天井部のへら削り調整は1/2程度である。胎土中に2~5mm大の粗砂粒を多量に含む。焼成は良好。色調は暗青灰色を呈する。

杯蓋C(13~15)は、器高が低いもので、なだらかなカーブを描いて内傾する天井部が端部で強く内屈し、外面に口縁を画する弱い稜を作りだす。マキアゲ・ミズビキ手法で成形された後、内・外面とも入念に回転ナデ調整され、器高は平滑である。13は天井部内面中央部に細い同心円タキキ痕を残す。天井部の回転へら削り調整は1/3前後と少ない。胎土は粗砂粒の混入の少ない精選されたものが使用されている。焼成は良好で、色調は暗青灰色を呈する。法量はそれぞれ、13が口径13cm、器高3.8cm、14が口径13cm、15が13.2cmを測る。

杯蓋D(16)は外面に稜を有さないもので、端部でやや内傾し、先細に作られる。成形後の入念な回転ナデ調整により器面は平滑である。胎土・焼成とも良好で、色調は暗青灰色を呈する。口径12.6cm、器高3.6cmを測る。

杯蓋E(17)は口径10.2cm、器高3.9cmを測る。口径に対して器高が高く半球形を呈する。入念な回転ナデ調整により器高は平滑である。特に端部が強く横ナデされ、天井部との境に弱い稜を作りだす。天井部は回転へら削り調整は1/3程度である。胎土は精選され密。焼成は良好。色調は暗青灰色を呈する。

#### 杯身 (第54図18~26)



第 54 图 B 地区大沟上層出土土器实测图

法量、器形・調整手法の特徴から3類に大別される。

杯身A (20~25) は内傾する短いちあがり有し、端部が丸く仕上げられるものである。法量は、口径12.5cm前後、器高3.5~4cmと、ほぼ均一である。内・外面とも回転ナデ調整で仕上げられるが、成形時のマキアゲ・ミズビキ痕を比較的顕著に残す。底部の回転ヘラ削り調整は約1/3程度である。胎土は2~5mm大の粗砂含を少量含むが比較的密で、焼成は良好。色調は淡灰色もしくは暗青灰色を呈する。

杯身B (18・19) は比較的小ぶりで、ちあがり端部がやや外反ぎみに先細となるものである。内・外面とも回転ナデ調整で仕上げられ、特に内面調整は入念である。底部の回転ヘラ削り調整は2/5程度である。胎土は砂粒を多量に含む。焼成は並。色調は淡灰色を呈する。18が口径11.3cm、器高3.7cm、19が口径9.2cmを測る。

杯身C (26) は、ちあがり比較的長く直立し、端部が先細で丸いものである。体部は比較的深く作られる。マキアゲ・ミズビキ成形後、入念に回転ナデされ器面は平滑である。底部の回転ヘラ削り調整は1/3程度である。胎土は粗砂粒を多量に含み粗雑、焼成は並。色調は淡灰色を呈する。口径12.8cm。

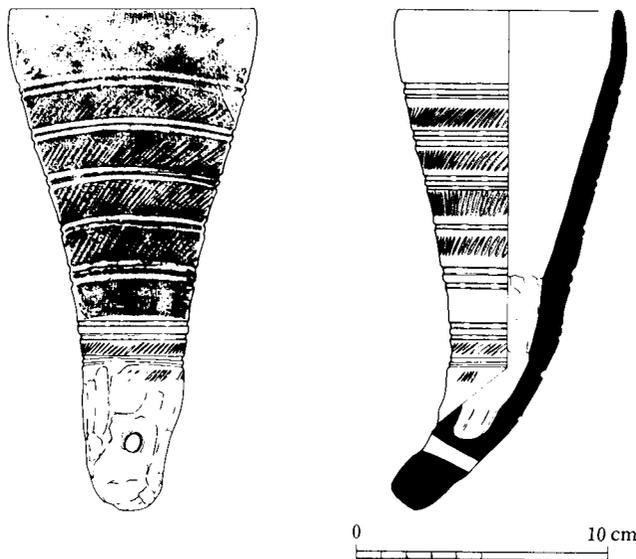
#### 高杯 (第54図 27~30)

有蓋、無蓋の両者が存在する。

27は無蓋のもので、体部と口縁部の境に稜を作り、端部に内湾する段を有する。胎土・焼成と良好で、色調は暗青灰色を呈する。口径13.2cm。

28は有蓋高杯で、杯部の器形態および調整は杯身Aに同じ。胎土は精選されほとんど粗砂粒を含まない。焼成は並。色調は淡青灰色を呈する。口径12cm。

29・30は脚部である。短脚の29は、端部で大きく屈曲して開口するもので、やや上位に2条の凹線が廻る。回転ナデ調整され器面は平滑である。胎土は砂粒を多量に含む。焼成は良好。色調



第55図 角杯形須恵器実測図

は淡灰色を呈する。30は底径約20cmを測り、長脚二段高杯の脚部片と考えられる。

#### 角杯形須恵器（第55図・図版15）

口径が9.8cm×8.7cmと楕円形で、器高20cmを測る完形品である。2条単位による沈線で8区分された上部の4区画にクシ歯状具による斜向列点文を、下部の2区画にヘラ状具による刻目文を、それぞれ連続施文して器面を飾っている。犀角状に屈曲する尖底部には径7mmの紐通孔が穿たれている。体部の成形はマキアゲ・ミズビキ手法によっており、入念な回転ナデ調整で内・外面とも平滑に仕上げられている。底部は手捏により尖底状に成形し体部に接合したものと推定され、内面の接合痕はヘラ削ぎにより調整されている。また、外面は入念にナデ調整されその痕跡を残さない。胎土は若干の粗砂粒を含むが、他に比較して精良。焼成は良好。色調は内・外面とも淡青灰色を呈する。

#### 土師器（第56～58図・図版16～20）

##### 甕形土器（第56図）

法量および口縁・体部の形態の違いなどからE・F・Gの3類に大別される。

甕E（1～10）は、口縁がくの字の外反し、端部が丸く作られるもので、口縁部の外傾度、体部調整の相違より、さらにE<sub>1</sub>・E<sub>2</sub>・E<sub>3</sub>類に分かれる。甕E<sub>1</sub>（1～4・6・10）は口縁部が強く外反し、体部内面は入念にナデ調整され口縁部との境に弱い稜を作るものである。外面の調整は縦位ないしは斜位のハケ調整で、口縁部は横ナデされる。胎土・焼成とも比較的良好なものが多い。色調は淡茶褐色あるいは明茶褐色を呈する。口径は18cmから20cm前後である。甕E<sub>2</sub>（5・7）は、胴張で口縁部の外反度が弱いもので、内面には稜を作らない。口縁部は横ナデされ、体部は外面ハケ調整、内面ナデ調整される。胎土は粗砂粒を比較的多く含む。焼成は並。色調は暗茶褐色を呈する。口径は、5が15.6cm、7が15.4cmを測る。甕E<sub>3</sub>（9）は口縁部が直立ぎみに立ち上り、端部で外反する。体部は球形に近い。器面の磨耗が著しいため調整痕は不明瞭であるが、口縁部の横ナデ調整は雑で、1次調整のハケ調整痕を残す。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成はやや不良。色調は明赤褐色を呈する。口径12cm。

甕F（11）は口縁部が長く直線的に外傾する傾するものである。内・外面ともにハケ調整痕を残し、口縁部の横ナデは雑である。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は並。色調は淡茶褐色を呈する。口径17.2cm。

甕G（12・13）は体部が長胴になるもので、上端部に外方に屈曲させ口縁部を作る。内・外面ともハケ調整され、口縁部は横ナデ調整される。胎土は粗砂粒の含有が少なく密。焼成は良好。色調は暗茶褐色を呈する。口径は、12が16.6cm、13が17.7cmを測る。

##### 壺形土器（第57図）

上層と同様に出土点数は少ないが、4形態のものが出土している。

壺F（14・15）は有段口縁の壺である。14の口縁やや外傾し、15はほぼ直立する。ともに口縁部は内・外面とも横ナデ調整され、段部の稜は明瞭である。胎土・焼成とも良好で、色調は淡茶褐色を呈する。口径は、14が16.2cm、15が16cmを測る。

壺G（16）はやや内湾ぎみに外傾するくの字口縁である。球形の体部が取付くものと推定され、

器形的に甕形態に近い。器面の磨耗が著しく調整は不明。胎土はほとんど粗砂粒を含まず精良。焼成はやや不良。色調は淡茶褐色を呈する。口径14.5cm。

壺H(17)は外反して延びる口頸部を有る長頸壺で、下層出土の壺Dに同じ。調整は、荒いハケ調整後、ヘラ研磨仕上げされるが、内面はさほど入念でない。胎土・焼成とも良好で、色調は明茶褐色を呈する。口径11.3cm。

壺I(33)は、口径7.5cm、器高6.8cmを測る、いわゆる小型丸底壺である。器面の磨耗が著しいが、体部内面に成形時の指頭によるナデ上げ痕を顕著に残す。胎土は粗砂粗を含まず精良。焼成はやや不良。色調は淡茶褐色を呈する。

#### 鉢形土器(第57図18・19)

18・19ともいわゆる砲弾状を呈する器形をとる鉢形土器の口縁部片と推定される。端部がやや内傾する19は、口径15.2cmを測る大型品で、外面ハケ調整、内面ナデ調整される。18は口径10cmを測る。両者とも胎土は粗砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は淡茶褐色を呈する。

#### 椀形土器(第57図)

器形的に杯・鉢形土器に近いものも包括し、G～Kの5類に大別される。

椀G(20)は器高に対する口径の大きいもので、内面に体部と口縁部を画する稜を有する。底部は平に近く安定している。外面はナデ調整、内面はヘラ研磨で仕上げられている。胎土は粗砂粒をほとんど含まず精良。焼成は良好。色調は淡茶褐色を呈する。口径16.4cm、器高4.2cm。

椀H(21・22・25・26・30・31)は半球形を呈する椀で、口縁端部が外傾するものである。口縁部・体部の形態差によってさらにH<sub>1</sub>・H<sub>2</sub>・H<sub>3</sub>の3類に細分される。椀H<sub>1</sub>(21・22)は、それぞれ口径が15.8cm、14.5cmを測る比較的大ぶりの椀で、22は内面に弱い稜をもつ。外面はハケ調整後ナデ仕上げされ、内面は入念にヘラ研磨される。胎土・焼成とも良好で、色調は淡茶褐色を呈する。椀H<sub>2</sub>(25・26)は浅い杯状を呈する椀で、端部は外屈し内面に稜を作る。外面は入念なナデ調整、内面はヘラ研磨で仕上げられる。胎土・焼成とも良好、色調は淡茶褐色を呈する。法量は、25が口径13.2cm、器高4.4cm、26が口径12.6cm、器高4.2cmを測る。椀H<sub>3</sub>(30・31)はやや肩が張る体部を有するもので、31は内面黒色土器である。外面は入念にナデ調整され、内面はヘラ研磨仕上げでつややかである。胎土・焼成とも良好。色調は暗茶褐色を呈する。口径は、30が13.5cm、31が12.2cmを測る。

椀I(23・24・29・32)は口縁が外傾しないもので、形態からさらにI<sub>1</sub>・I<sub>2</sub>・I<sub>3</sub>の3類に細分される。椀I<sub>1</sub>(23・29)は端部内面が外傾するものである。外面はハケ調整後ナデ仕上げ、内面はヘラ研磨される。胎土・焼成とも良好で、色調は淡茶褐色を呈する。口径は、23が13.2cm、29が12.2cmを測る。椀I<sub>1</sub>(24)は端部がほぼ直立するものである。内・外面ともヘラ研磨されるが、やや入念さに欠ける。胎土は粗砂粒を含まず精良。焼成は良好。色調は茶褐色を呈する。口径13cm、器高4.3cm。椀I<sub>3</sub>(32)はほぼ平底に近い底部を有するもので、内面黒色土器である。外面ナデ調整、内面はヘラ研磨されるが、やや粗雑で器面は平滑さを欠く。胎土は砂粒を多量に含む。焼成は並。色調は淡灰褐色を呈する。口径13cm、器高5.2cm。

椀J(28)はやや深い体部を有するものである。口縁部は横ナデされやや外傾する。内面黒色

土器であるが、内面のヘラ研磨は入念さに欠け、また、内面のナデ調整も雑で、全体に粗雑な作りといった感の強い土器である。口径11.9cm、器高6.5cm。

椀K(27)は口径10cmと小型で、体部が下方に長く伸びる。器形的には甕もしくは鉢形土器に近い。外面はハケ調整、内面はナデ調整される。胎土・焼成とも良好で、色調は暗褐色を呈する。

#### 高杯形土器(第58図34~38)

34の杯部は直線的に外傾する無段のもので、口径15.8cmを測る。35・36は中空でラップ状に開脚する脚部であり、杯部が内面黒色となる37・38の脚部は棒状をなす。35~37の外面はヘラ研磨されるが、38がハケ調整痕をそのまま残している。端部で大きく外屈する35の底径は10cmを測る。35・36の胎土は粗砂粒を比較的多く含むのに対して、37・38の胎土は精良され密である。焼成は36を除いて良好である。色調は34・35・36が明茶褐色37・38が淡灰茶褐色を呈する。

#### 土器脚部(第58図39~43)

高杯の錐形土器かと考えられる41を除き、他は台付鉢の脚台部である。外面はハケ調整後ナデ仕上げされるものが多く、内面はヘラ研磨される。42は内面黒色土器である。41は底径7cmを測る小型品で、内・外面とも入念にナデ上げられる優品である。胎土・焼成とも比較的良好なものが多く、色調は明茶褐色もしくは淡灰色を呈する。

#### 手捏土器(第58図44・45)

小型で、安定した底部を有するいわゆるグイノミ型の手捏土器である。いずれも色調は明茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。底径は、44が3.6cm、45が4cmを測る。

#### 土器底部(第58図46~48)

平底の46・47が壺形土器、丸底の48が甕形土器の底部と考えられる。46は底径4.6cmと小さく、47はやや内側に凹む。48は外面にハケ調整痕、内面に成形時のマキアゲ痕を顕著に残す。

#### 土器把手(第58図49~53)

49~52は甕形土器に、角状をなして比較的长度長く伸びる53は椀あるいは鉢形土器に取付く把手と考えられる。49~52の胎土は粗砂粒を比較的多く含むのに対して、53の胎土は精選されている。色調は、49~52が淡茶褐色もしくは灰茶褐色を呈し、53は明茶褐色を呈する。焼成はともに並。

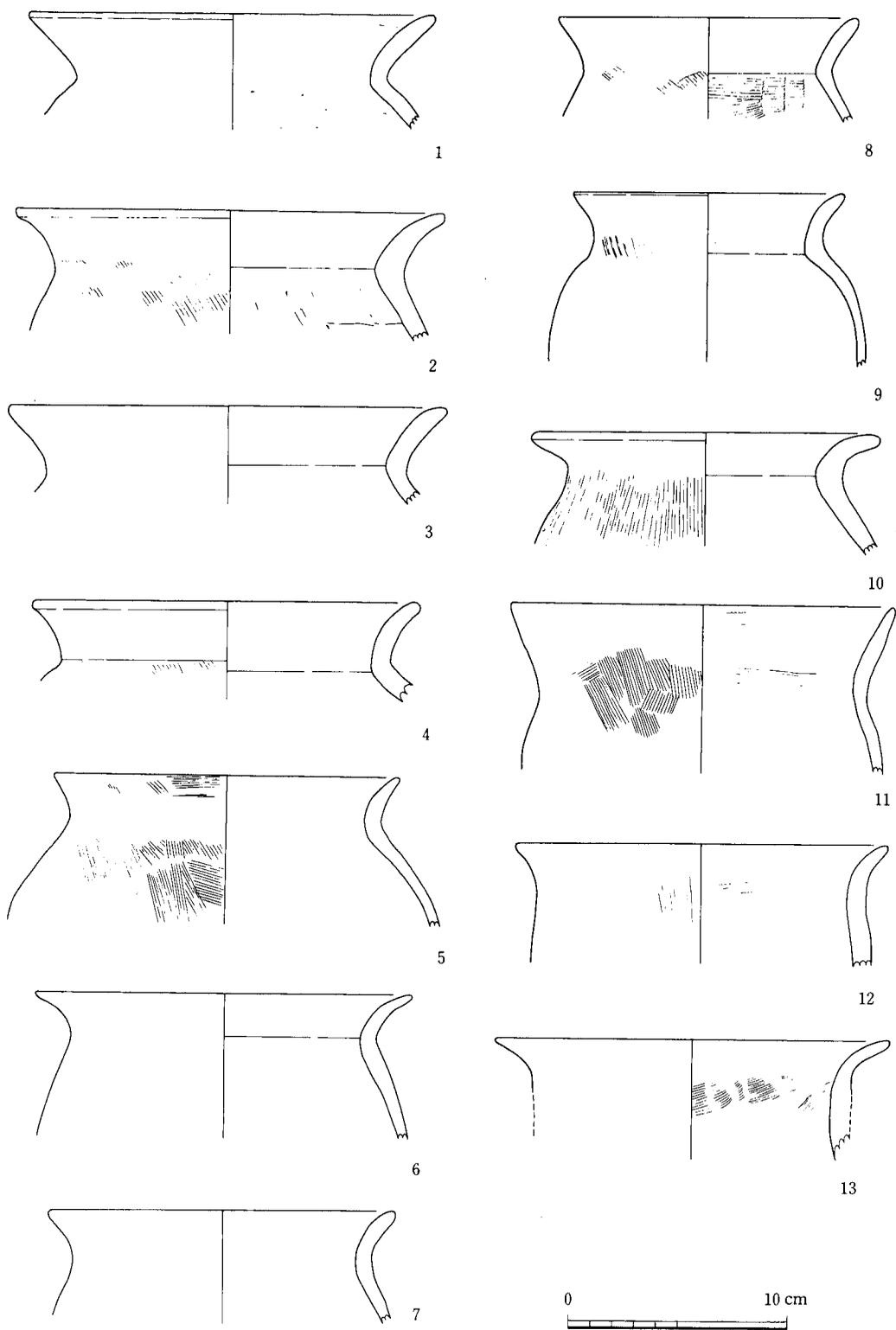
#### 土製支脚(第58図54・55)

ともに円形棒状を呈するもので、55の基部はやや広がる。54が径約4.5cm前後と推定され、55が径4.5cm、底径6.5cm前後である。ともに強い2次焼成を受け、器面は赤く焼けただれている。

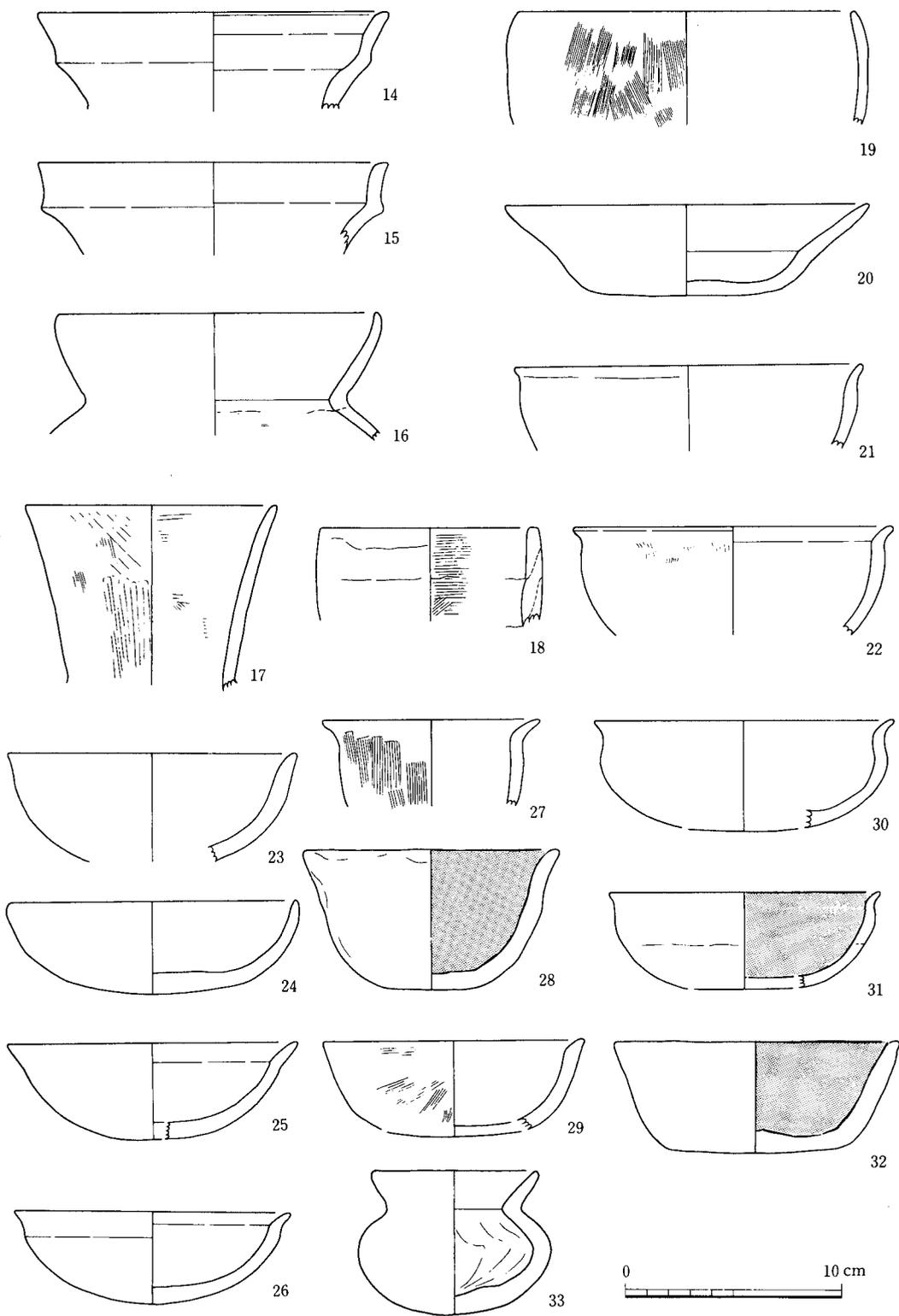
#### 木製品(第59図1~8)

大溝からは土器類ともかなりの木片が出土している。多くは未加工の自然木片と思われるものであるが、一部面取りや杭状に加工したものも含まれる。しかし、用途が明らかで木器と断定しうるものはない。図化したものは人為的な加工痕がみとめられるもので、比較的遺存度の良好なものである。

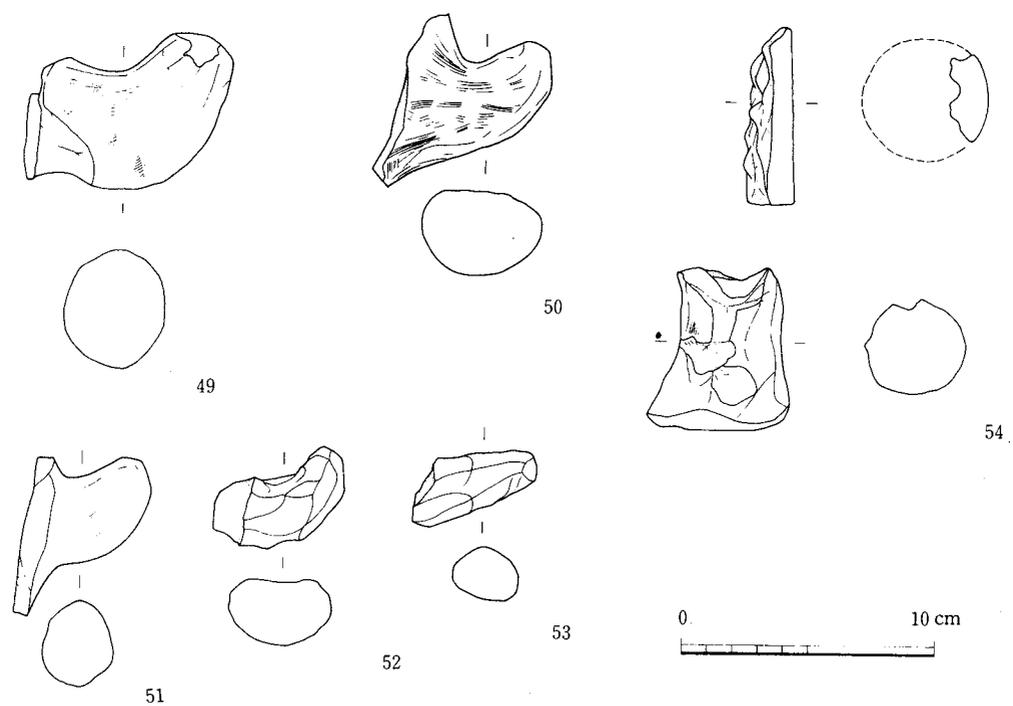
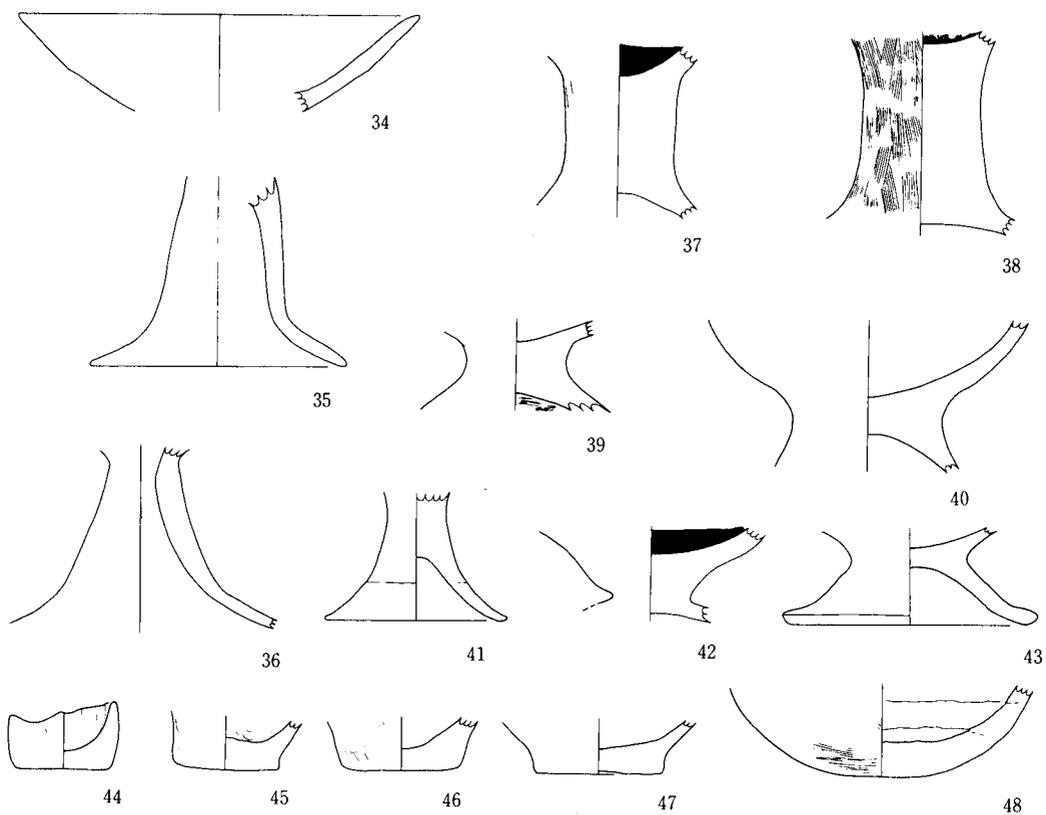
1は建築用材の断片かと推定されるもので、現存長48cm、現存最大幅16cm、厚さ1.7cmを測る。下端に2cm前後の方形の柄穴の一端が残る。また、左辺に2~3cmの焼痕がみとめられ、黒く炭化している。2・5・6は板材の断片であるが、腐蝕化が進み、加工面は平滑ではない。3・



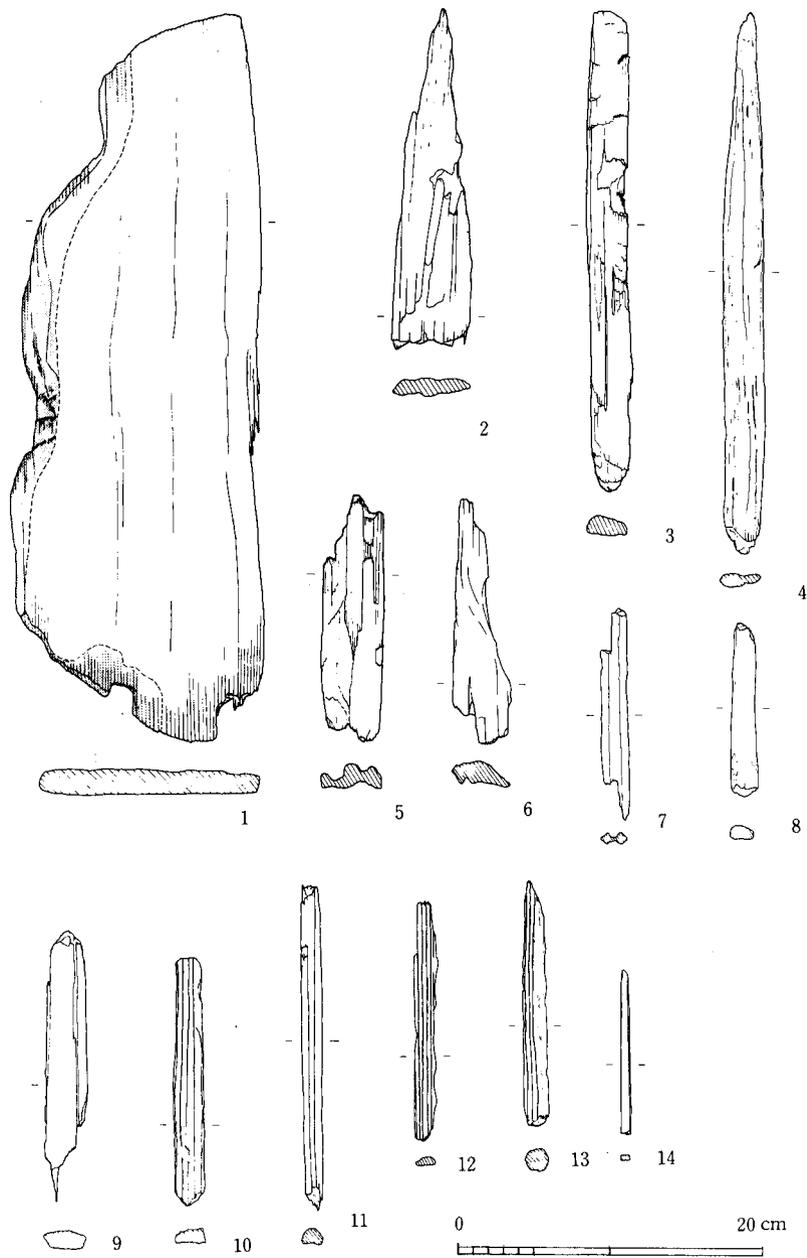
第 56 图 B 地区大溝上層出土土器実測図



第 57 图 B 地区大沟上層出土土器実測図



第 58 图 B 地区大溝上層出土土器実測図



第 59 图 B 地区出土木製品実測図

4は断面長円形に加工したもので、4の先端は杭先状に尖っている。7・8は上下端を欠く、8は比較的入念な加工調整が施され、加工面は平滑である。各木片の現存量はそれぞれ、2が長さ22.4cm、巾5cm、厚さ1.2cm、3が長さ32cm、巾2.8cm、厚さ1.4cm、4が長さ34cm、巾2.5cm、厚さ1.2cm、5が長さ16.2cm、巾4.1cm、厚さ1.5cm、6が16cm、巾3.8cm、厚さ1.6cm、7が長さ8.5cm、巾1.8cm、厚さ0.8cm、8が長さ11.3cm、巾2.8cm、厚さ1.2cmを測る。

### (3) 平安時代およびそれ以降の遺物

#### 第1号溝出土遺物（第60・61図・図版21～23）

##### 須恵器（第60図）

##### 蓋（第 図1～5）

すべて破片であるが、端部の形態からA・Bの2類に大別される。

蓋A（1・2）は端部が屈曲しないものである。天井部が平に近く、口縁はなだらかに伸びる。器面は内・外面とも回転ナデ調整され平滑である。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は並。色調は暗青灰色を呈する。口径は、1が15cm、2が14.5cmを測る。

蓋B（3～5）は端部が屈曲し、外面に稜をなすものである。比較的器高が高いもの（3）と低く平たいもの（4・5）がある。ともに天井部は回転ヘラ削りされ平である。仕上げは回転ナデ調整で器面は平滑である。5の内面には墨汁が全面に付着している。胎土・焼成とも比較的良好で、色調は淡青灰色を呈する。口径は、3が15.1cm、4が12.9cm、5が13cmを測る。

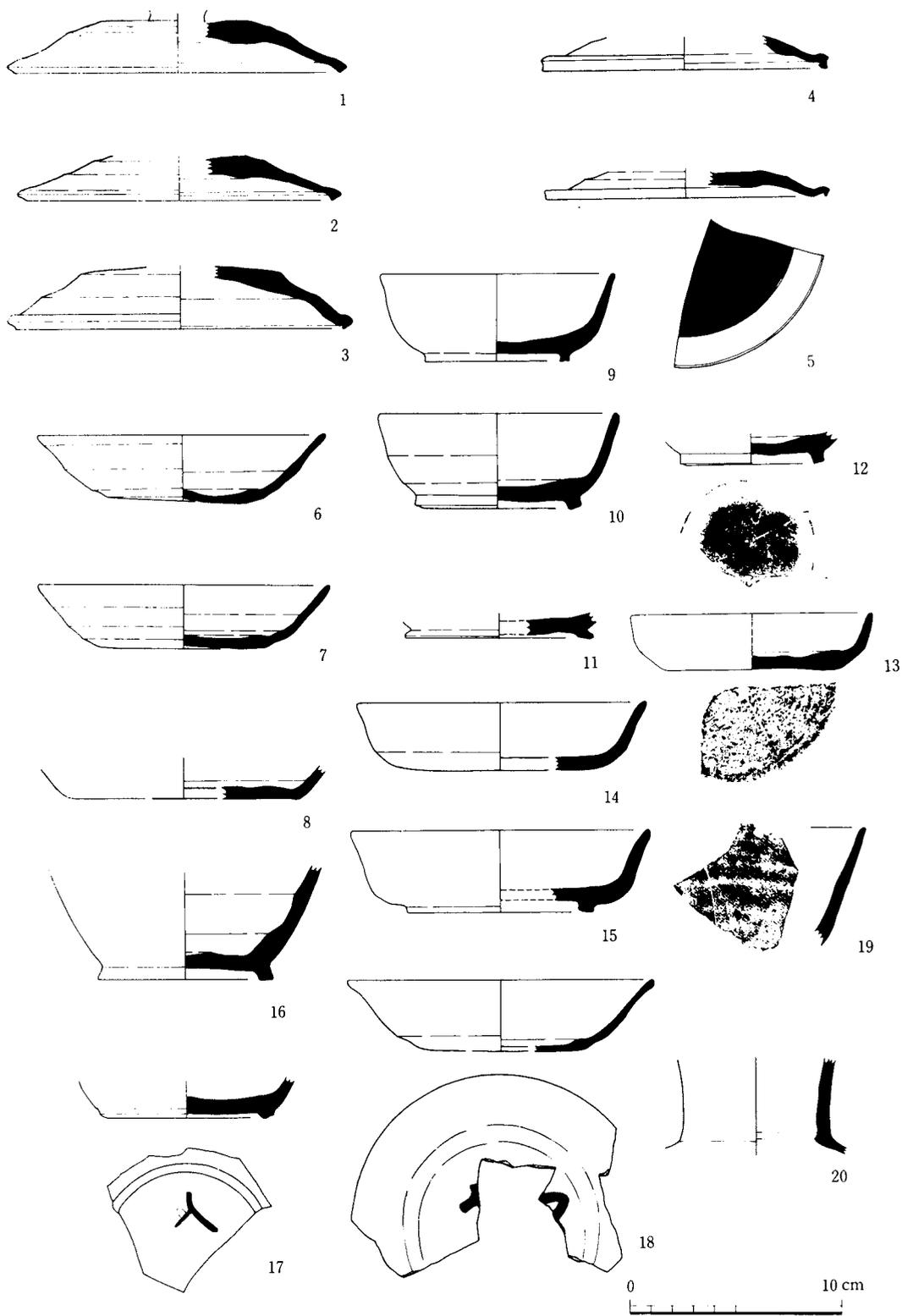
##### 杯（第 図6～15・17・18）

法量、高台の有無などからA・B・C・Dの4類に大別され、17・18の底面には墨書がみとめられる。また、12・13の底面、19の口縁部にはヘラ描きによる窯印が施されている。

杯A（6～8・18）は無高台で口縁部の外傾度が大きいものである。端部はやや外反し丸く作られる。いずれも回転ナデ調整されるが、墨書を有する18を除き、成形時のミズビキ痕を明瞭に残している。底部の回転糸切り痕はナデ調整で消されている。胎土は砂粒を多量に含むが粗砂粒の混入はほとんどみられない。焼成は並。色調は淡灰色を呈するものが多い。法量はそれぞれ、6が口径13.4cm、器高3.1cm、7が13.5cm、器高2.9cm、18が口径14.4cm、器高3.3cmを測る。

杯B（13・14）は無高台で、口径に対して器高が低い杯である。口縁部の外傾度は杯Aに比較して弱く、器壁も厚く作られる。器面は入念に回転ナデ調整され平滑である。底部の切り離しは静止糸切り法によるが、ナデ調整されわずかにその痕跡を残すのみである。胎土は粗砂粒を多量に含み粗雑。焼成は良好で、色調は暗青灰色を呈する。法量はそれぞれ、13が口径10.2cm、器高2.5cm、14が口径13.6cm、器高3.1cmを測る。

杯C（9～12・17）は高台を有するものである。高台はずんぐりとした貼高台で、9のようにほぼ直立するものと、10・12のようにやや外反するものがある。11の高台は外反度が強く先細りとなる。体部は口縁が高台からすぐに内湾ぎみに立ち上り、外傾度は比較的弱い。器面は入念に回転ナデ調整され平滑である。底部の切り離しは静止糸切り法によるもので、わずかにその痕跡を残す。胎土は若干の粗砂粒を含むが比較的密。焼成は良好。色調は淡青灰色を呈するものが多



第 60 图 B 地区第 1 号沟出土土器实测图

い。法量はそれぞれ、9が口径11cm、器高4cm、10が口径11.2cm、器高4.3cm、11が底径8.8cm、12が底径10.5cm、17が底径12.3cmを測る。

杯D（15）は杯Cの口径をひとまわり大きくしたものである。口縁は端部でやや外反する。器面は入念に回転ナデ調整され平滑である。高台はずんぐりとした貼高台でやや内傾する。胎土は粗砂粒を多量に含み粗雑。焼成は良好。色調は淡青灰色を呈する。法量は、口径14cm、器高3.8cm、底径8.8cmを測る。

#### 瓶（第60図20）

頸部径が基部で6.8cmを測る長頸瓶頸部片である。淡緑灰色の釉が内・外面に施釉される灰釉土器で、きわめて緻密で精白な胎土は一見して他地域よりの搬入品であることを示す。入念な回転ナデ調整が施され、器面は平滑に仕上げられている。焼成は良好で、地色は灰白色を呈する。

#### 土師器（第61図）

##### 杯（第61図1～19）

法量、高台の有無などの形態差からA～Iの9類に大別される。

杯A（1・2）は体部の外傾度が50°以上と強く扁平な杯である。口縁はやや内湾ぎみに外傾し、端部で外反する。底部は比較的薄く、回転糸切り痕を明瞭に残す。内・外面とも回転ナデ調整され、特に内面は平滑に仕上げられている。胎土は粗砂粒をほとんど含まず精良。焼成は良好。色調は明茶褐色を呈する。法量は、1が口径14cm、底径5.1cm、器高3.3cm、2が底径5.5cmを測る。

杯B（3～5）は厚い底部、直線的に外傾する体部の杯で、4・5は底部外面に強いナデが施されるため、端部断面は鋭角的である。底部は杯A同様に回転糸切り痕を明瞭に残す。器面は入念に回転ナデ調整され平滑である。胎土は粗砂粒をほとんど含まず精良。焼成は良好。色調は明茶褐色を呈する。底径はそれぞれ、3が5cm、4が4.6cm、5が5.6cmを測る。

杯C（6）は底部が薄いものである。体部の外傾度は50°前後と強い。胎土中に砂粒を多量に含み、さらに焼成不良であるため器面の磨耗が著しく、調整は不明である。おそらく回転ナデ調整で仕上げられたものと推定され、底面にわずかに回転糸切り痕を残す。底径5.4cm。

杯D（7・8）は体部がやや内湾ぎみに外傾するものである。杯Cと同様な胎土・焼成・色調を示し、器面の磨耗が著しい。7は内面黒色土器である。底部の切り離し痕は不明であるが、8の底部中央部がやや凹む。底径はそれぞれ、7が5.2cm、8が5cmを測る。

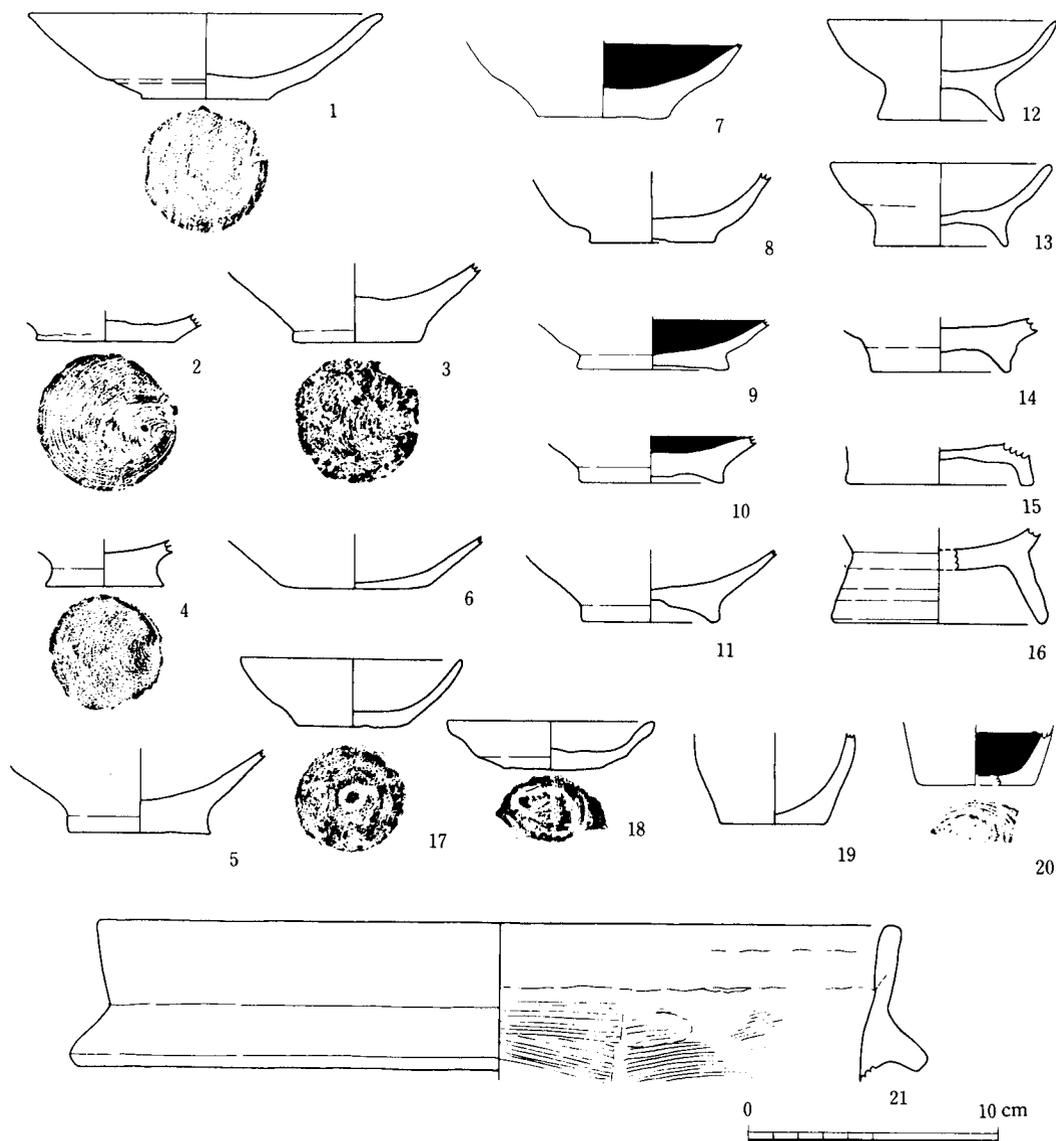
杯E（9～11）は断面三角形を呈する高台を有するもので、9・10は内面黒色土器である。器面は回転ナデ調整され、内黒の9・10は内面が入念にヘラ研磨されつややかである。胎土は粗砂粒をほとんど含まず精良。焼成は並。色調は淡灰茶褐色を呈する。底径はそれぞれ、9が6cm、10が5.7cm、11が5.2cmを測る。

杯F（17・18）は無高台で小型の杯である。17は器面が回転ナデ調整により平滑に仕上げられているが、18は成形時のミズビキ痕を顕著に残し仕上げは雑である。ともに底部には回転糸切り痕を残す。胎土は粗砂粒を含まず精良。焼成はやや不良。色調は、17が淡茶褐色、18が淡灰褐色を呈する。法量はそれぞれ、17が口径8.7cm、底径4.5cm、器高2.6cm、18が口径8.2cm、底径

4cm、器高 1.8cm を測る。

杯G (12~14) は外傾する高い高台を有する小型の杯である。14 は底部の器壁が厚く、ひとまわり大きくなるかもしれない。器面はナデ調整され平滑である。胎土は粗砂粒を含まず精良。色調は明茶褐色を呈する。法量はそれぞれ、12 が口径 8cm、底径 4.9cm、器高 3.9cm、13 が口径 8.7cm、底径 5.2cm、器高 3.2cm、14 が底径 5.4cm を測る。

杯H (19・20) はグイノミ型を呈するもので、安定感のある底部は回転糸切り痕を残す。ともに胎土は精良で、入念な調整で仕上げられる優品で、20 は内面黒色土器である。焼成は良好で色調は明茶褐色を呈する。底径はそれぞれ、19 が 4.2cm、20 が 4.5cm を測る。



第 61 図 B 地区第 1 号溝出土土器実測図

杯 I (15・16) は外反する高い高台のもので、16 は高台高 3.6cm を測る。回転ナデ調整され、底部に回転糸切り痕を残す。胎土・焼成とも良好で色調は明茶褐色を呈する。底径は、15 が 7.3cm、16 が 8.2cm を測る。

#### 羽釜 (第 61 図 20)

口径 34cm 前後と推定される口縁上端部である。わずかに外傾し、端部はやや肥厚し丸い。鏝は断面長台形のもので貼付けられ、下方にやや垂れる。マキアゲ法で成形され、内・外面ともハケ調整される。口縁端部の横ナデは不明瞭。胎土は 2~5mm 大の粗砂粒を含みやや雑。焼成は並。色調は、外面が黒褐色、内面が暗茶褐色を呈する。

#### 第 2 号溝出土遺物 (第 62 図・図版 22)

#### 須恵器 (第 62 図)

#### 杯 (第 62 図 23・24)

23・24 ともずんぐりとした高台を有するもので、24 の高台はやや内傾する。回転ナデ調整されるが、23 の内面はやや凹凸をもつ。胎土は砂粒を比較的多く含む。焼成は並。色調は淡青灰色を呈する。底径はそれぞれ、23 が 6.8cm、24 が 10cm を測る。

#### 土師器 (第 62 図)

出土した土師器はすべて杯で底面に回転糸切り痕を残す。5・21 は内面黒色土器で、高台を有するのは 21 のみである。法量、体部の形態差から A~E の 5 類に大別される。

杯 A (1~7・13・14) は、比較的厚く作られる安定した底部を有し、体部がやや内湾してゆるやかに外傾し、口縁端部でやや外屈し丸くおさまるものである。回転ナデ調整で仕上げられ、内面は平滑であるが、1・7 の外面はミズビキ成形時の凹凸を残す。5 の内面はヘラ研磨されつややかである。胎土は概して精良で、焼成も良好である。色調は淡灰茶褐色を呈するものが多い。法量は、1 が口径 18.5cm、底径 5.4cm、器高 4.2cm、2 が口径 18.8cm、底径 5.4cm、器高 4.1 cm を測り、他もほぼこれに準じる。

杯 B (8~12) は杯 A の小型化したもので、調整・胎土・色調もほぼ同様である。法量は、8 が口径 9.4cm、底径 4.9cm、器高 2.2cm、9 が口径 10cm、10 が口径 8.7cm を測り、すべて口径が 10cm 以内である。

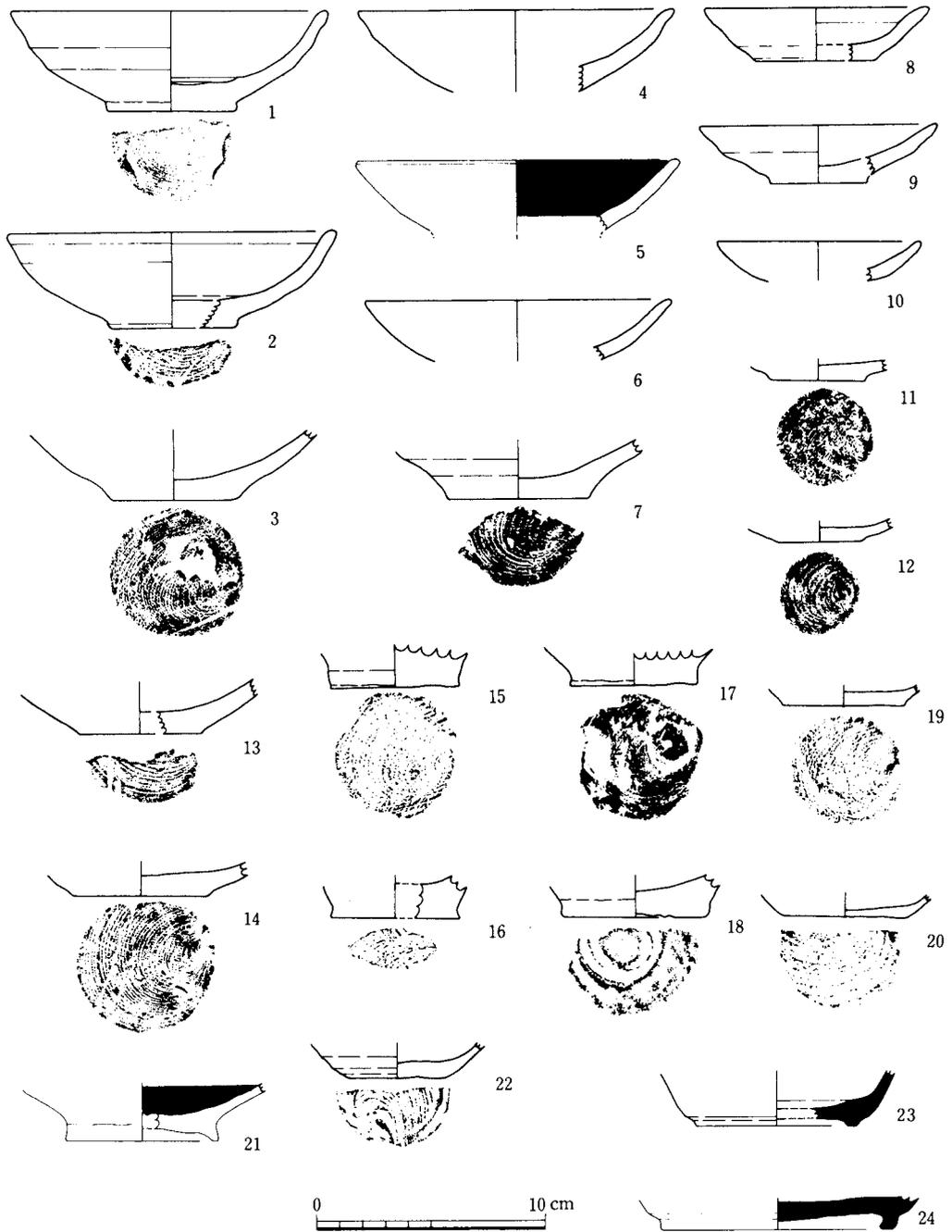
杯 C (15~18) はすべて体部を欠き全体形が不明であるが、厚い底部のものである。底面には明瞭な回転糸切り痕を残す。胎土・焼成は良好で、色調は淡茶褐色を呈する。底径はそれぞれ、15 が 5.5cm、16 が 5.5cm、17 が 5.4cm、18 が 6.1cm を測る。

杯 D (19・20・22) は底部が薄く作られるものである。胎土は粗砂粒を含まず精良。焼成は並。色調は淡茶褐色を呈する。底径はそれぞれ、19 が 5.2cm、20 が 5.3cm、22 が 4.3cm を測る。

杯 E (21) は断面三角形を呈する低い高台を有する内面黒色土器である。器面は回転ナデ調整され、底面に回転糸切り痕を残す。胎土は粗砂粒を含まず精良。焼成は並。色調は暗茶褐色を呈する。口径 6.5cm。

#### B 地区包含層出土遺物 (第 63 図・図版 23)

耕土・床土の除去および遺構検出作業中に出土をみたもので、遺構が検出された、K 37・K 38・



第62图 B地区第2号沟出土土器实测图

L 37・L 38 の各グリッドから集中的に出土している。おそらく、第1号溝あるいは第1号溝の上面に伴うものが多いと考えられる。器形を窺いうるものも少なくないが、ここでは特殊な遺物のみを紹介するにとどめておく。

#### 緑釉土器（第63図1）

底径7.2cmを測る皿である。精選された緻密な胎土と焼成堅固な須恵質品であり、全面に淡緑色の釉が施彩されている。口径部を欠くが、口径13cm前後の小型皿と推定され、やや外傾する高台の内面が2段にわたってえぐられている。入念に回転ナデ調整され、底面にわずかに回転糸切り痕を残す。

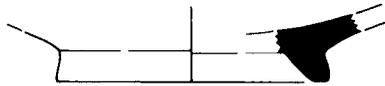
#### 白磁（第63図2）

底径約7cm前後と推定される高台片である。ずんぐりとした高台でやや外傾する。内外面とも回転ナデ調整され器面はきわめて平滑である。胎土は若干の黒色微砂粒を含むが緻密。焼成は良好で器質は堅緻。



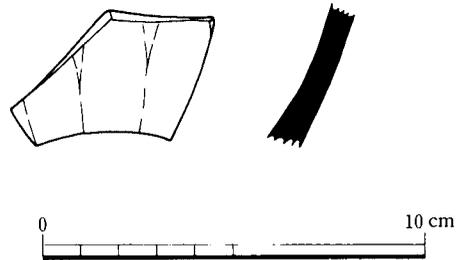
#### 青磁（第63図3）

蓮弁で加飾された青磁碗の体部細片と推定される。釉は明るい色合いである。胎土は黒色微砂粒を比較的多く含み、素地は灰白色を呈す。



#### 珠洲焼（第64図）

すべて体部細片である。器高のタタキ調整痕は左上りの斜位で、単位が比較的荒く長いもの（1・2）と、細く短いもの（3～5）がある。やや焼成不良の3を除き、胎土・焼成とも良好で色調は暗青灰色を呈する。



第63図 B地区出土土器実測図

#### その他の陶磁器類

やや時期的に下降すると考えられる陶磁類が若干出土している。すべて細片であり、器種・器形が不詳なものがほとんどである。

#### 木製品（第59図）

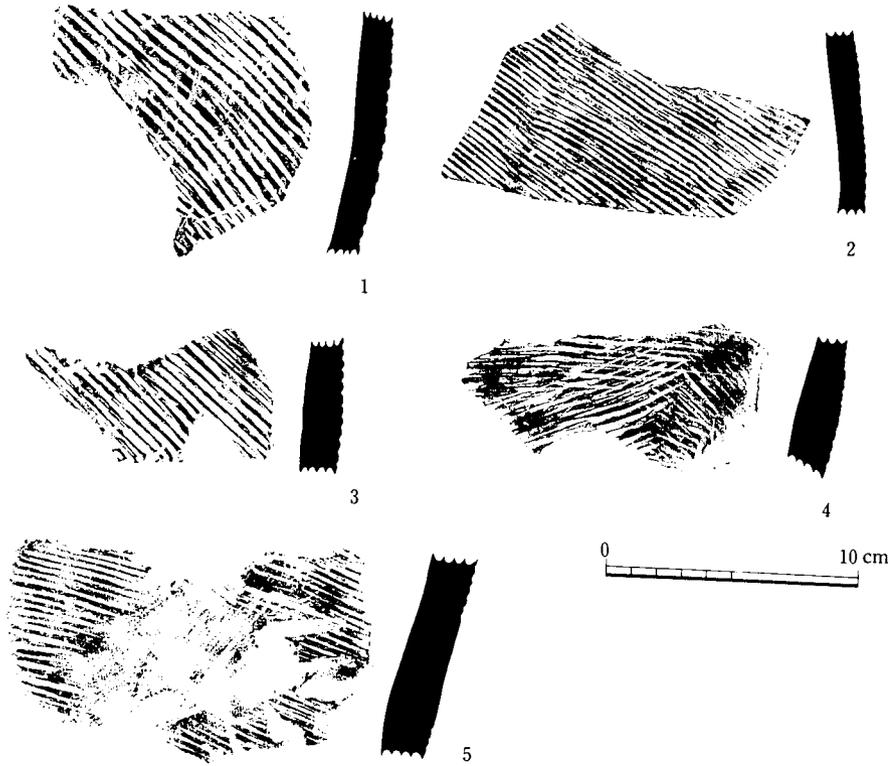
9・10は上下端を欠くが、4面が平坦に加工・調整された断面長方形を呈する角材の断片である。現存法量はそれぞれ、9が長さ約16cm、巾2.6cm、厚さ1.4cm、10が長さ約16cm、巾2cm、厚さ1.2cmを測る。

11は断面半円形に加工された木片である。上下端を欠く。現存長約21cm、巾1.4cm、厚さ1.2cm。

12は板材の断片である。現存長約14cm、巾2.2cm、厚さ0.8cm。

13は尖端が斜に切られ杭状をなす。現存長約16cm、巾2.4cm、厚さ2.2cm。

14はいわゆる箸状不器で、断面方形を呈する。現存長約11cm、巾0.5cm、厚さ0.4cm。



第64図 B地区出土土器実測図

# 第V章 ま と め

## 第1節 遺構について

### (1) 土壌状遺構

中村畑遺跡で検出された土壌状遺構は総数19基で、すべてA地区からである。形態・規模はかなり多様であり、また、壙内よりの遺物は皆無である。このため、明確な形態分類の規準を明示することは困難であり、さらに造営時期の比定も確たる材料に欠く。従来よりこれらの土壌状遺構について、墓、井戸、便所、貯蔵穴、落し穴などの諸説があり、本遺跡で確認されたものも、これらのうちのいずれかの性格をもつものと思われる。

#### 土壌の分類

土壌の平面形、断面形、大きさ深さなどの規模、底部施設、覆土の状態、立地の位置、配置状況などが、類型を設定するにあたっての基礎的な要素となろう。これらの諸要素を組み合わせた分類はきわめて煩瑣なもので、かなりの類型に分類しうるのであろう。しかし、このような機械的な分類はいかに詳細であろうと、その結果が即土壌の性格を規定するものとはならない。性格を推察するにあたって、問題となるのは、1に立地と配置状況であり、2に壙内施設の有無と覆土の堆積状態である。こうしたことをふまえ、大きく次の7タイプに分類整理した。

- A類** 上面プランが円形あるいは長円形を呈する大型土壌である。深さは150 cm～180 cmと比較的深く、2段に掘り込まれるものもある。底面はほぼ正円形に近い。この類を特徴づけるのは壙内覆土の堆積状態で、上面に焼土・炭化物層を伴うなど、明らかに人為的に埋め戻された形跡がみとめられ、さらに、2段に掘り込まれる第2号土壌や、壁を覆って地山土（黄褐色粘質土）がドーナツ状に垂直堆積する第4号土壌などは、壙内に円筒状をなす木製品あるいは木枠が納置されていたごとき状況を示す。
- B類** 上面プランが円形あるいは長円形を呈する土壌で規模がA類よりやや小さいものである。壁はほぼ垂直に近く、深さは50 cm～80 cm前後である。底面はほぼ平坦で中央部に深さ20 cm前後の小ピットを有する。覆土は茶褐色粘質土および黒褐色粘質土がレンズ状に堆積する。
- C類** 形態はB類に準じるが、底面にピットを伴わないもの。
- D類** 上面プランが長径100 cm前後を測る楕円形を呈し、壁がほぼ垂直に落ち、深さが150 cm前後と深いもの。底面はほぼ平坦である。壙内覆土は黒褐色粘質土、茶褐色粘質土がほぼ水平堆積するが、茶褐色粘質土の堆積が極めて厚い。
- E類** 上面プランおよび規模はD類に準じるが、深さが約185 cmと深く、明確な底面を作らないもの。また、壙内覆土の堆積は垂直に落ちる壁面を覆うように地山土に近い濁黄褐色粘質土がドーナツ状に垂直堆積する。
- F類** D類に準じるが、やや規模が大きく、上面に粘土塊および土器を伴う。

G類 やや不整な長円形を呈し、掘り方が粗雑で明確な底面を作らないもの。深さは30 cm～50 cmと他に比較して浅い。

#### 土壌の立地および配置

遺跡全体としては極めて限られた部分的発掘調査であり、総体としての分布・配置状況は明らかではない。A調査区では、ほぼ全域から検出され、一部は他の遺構と重複する。一見無秩序な分布状況を呈しているが、詳細にみるとかなり意図的な配置関係がみとめられる。すなわち、A類をのぞく他の土壌は、台地平坦部、傾斜面、谷間をいわずばらまかれたような感じで分布しているが、調査区中央部の台地尾根筋に従って、B・C・D類に属する第12号・第13号・第14号・第15号・第16号土壌が弧状をなして一定の間隔をおいて検出され、当時のけもの道にそった配置としてとらえることも可能である。これに対して、A類の土壌は、凹地となっている谷筋や、傾斜面に作られており、高所からの集水を意図した結果かとも受けとられ、土壌の性格を暗示するがごとくである。また、土壌の掘り込み面は、B・C・D・E類が地山面であったのに対して、A・F・E類がそれより上位の層からと推定され、土壌相互の造営時期差を示している。

#### 土壌の性格

B・C・D・E類に属する土壌は「落し穴」と考える。「落し穴」については詳細な論考を行った神奈川県「霧ヶ丘遺跡」の報文<sup>(1)</sup>があり、これらの土壌は、霧ヶ丘遺跡で分類・整理された「落し穴」の諸類型にほぼ該当する。この種の遺構は、県内でもかなり調査例が増えてきており、羽咋市寺家ムカイダ遺跡<sup>(2)</sup>、同シャコデ遺跡、同柳田グランド遺跡<sup>(3)</sup>、志賀町代田営団遺跡<sup>(4)</sup>などで検出されている。また土壌内より、人工的な遺物を出土する例はまれで、先の霧ヶ丘遺跡では123基中12基から発見されているにすぎなく、約250基が確認された鳥取県「青木遺跡<sup>(5)</sup>」では皆無に近い。県内の例では、約40基が確認された寺家ムカイダ遺跡で縄文時代前期末から中期前半の土器片が、柳田グランド遺跡で縄文時代前期後半の福浦上層式土器片が断片的に出土している。こうした諸例から、本遺跡の「落し穴」は縄文期に帰属するものと推定され、それは検出層序的にも妥当である。ただ、A地区で出土した縄文期の遺物としては、石匙が1点あるのみである。

A・F類に属する土壌は「水溜め井戸」と考える。調査期間中たびたび降雨にみまわれ、遺構内に多量の雨水が滞水し、水汲み作業に貴重な時間を費すことが多々あった。特にA・F類などの大型土壌での作業は大変手間どった。この時、直感的に感じたのであるが、これは水溜め用の施設ではなかろうかと。低地の集落はともかく、台地の集落では水利がいかようであったのかが大きな問題となる。飲用水はともかくとして、他の生活用水まで低地や谷間の利水地帯から運びこむのではいかにも大変である。また、この期の台地集落において、地下涌水線を切ったの深井戸の検出例は極めてまれである。とすると、A・F類のような大型土壌の存在が問題となろう。前述したように、A類の土壌の中には、壙内に円筒状を呈する木製品あるいは木枠が納置されていたような掘り方や覆土の堆積状態を示すものがあり、さらに、微地形的にみて凹地や谷筋となっている傾斜面に位置することは、意図的な自然集水を考慮した立地と考えられ、この種の土壌が「水溜め井戸」としての機能を有していた可能性を強く示唆するものであろう。低地の遺跡では

第1表 中村畑遺跡土壙一覧表

土壙番号	形態	分類	規模 (cm)			備考
			上縁部径	底面径	深さ	
第1号	円形	A	180	90	160	覆土上面に焼土層
第2号	長円形	A	200×130	105	180	覆土上面に焼土層
第3号	円形	A	150	80	150	覆土上面に焼土層底面に浅いピット
第4号	隅丸方形	A	140	125	170	覆土上面に焼土層
第5号	長円形	B	170×135	120×80	75	底面にピット
第6号	楕円形	C	160×140	60	85	
第7号	円形	C	75	50	60	
第8号	長円形	G	180×100	—	30	明確な底面を作らず
第9号	略円形	C	85×70	—	80	明確な底面を作らず
第10号	円形	B	80	35	55	底面にピット
第11号	楕円形	G	120×100	—	50	明確な底面を作らず
第12号	楕円形	D	100×98	60×52	150	
第13号	楕円形	C	98×90	75×65	85	
第14号	円形	B	80	30	80	底面にピット
第15号	長円形	B	90×75	85×60	70	底面にピット
第16号	長円形	B	110×72	85×58	80	第1号住居跡と重複底面にピット
第17号	楕円形	D	105×90	70×60	140	
第18号	略円形	F	130×115	50	120	覆土上面に粘土塊上面より土師器壺出土
第19号	楕円形	E	93×86	—	185	明確な底面を作らず

あるが、この種の土壙と極めて近似する遺構が、小松市漆町遺跡<sup>(6)</sup>や金沢市西念・南新保遺跡<sup>(7)</sup>で検出されている。いずれも地下涌水線を切るものでない。西念・南新保遺跡例では壙底に桶形木製品が納置されており、明らかに「水溜め井戸」と使用されていたことが確認されている。また、A・F類に属する土壙が意識的に埋め戻され、それに際して、焚火を伴う何らかの営為が行なわれたことは、井戸の廃棄に伴う祭祀儀礼の一種と考えられる。やや形態を異にするが、弥生時代末期から古墳時代初期の台地遺跡<sup>(8)</sup>に多出する大型円筒形土壙がある。墓壙や貯蔵穴などの性格をもつとする説<sup>(9)</sup>が有力であるが、中には、円筒状の木枠を納置した痕跡を残すものや、覆土の状態がA・F類と極めて近似するものが認められ、これらの大型円筒状土壙の一部については「水溜め井戸」であった可能性も無視できない。こうした視点からも検討する必要があるだろう。なお、A・F類土壙の造営時期は、F類に属する第18号土壙の上面より、5世紀後半の所産と考えられる土師器壺が出土しており、この期を中心とするものと推定される。しかし、A類土壙は伴

なう遺物が皆無であり、また、同時に検出した掘立柱建物群と重複するものがないことから、これらの建物群が平安期のものとすれば、この期に帰属する可能性も否定できない。

G類の土壌は、浅くて不整形に掘り込まれるもので、その性格は不明である。

## (2) 竪穴状遺構

2基の竪穴住居跡が検出された。緩傾斜面に位置するため、整地の際の盛土部分が流失し、全体形を確認できなかったが、2基とも方形プランで、壁際に廃水用の周溝を廻らす下部構造をもつ。支柱穴は不明である。第2号住居跡はコの字状に周溝のみを残す。第1号・第2号住居跡の東辺とほぼ同方向に走る第1号溝状遺構も、そのあり方から竪穴住居跡の残欠である可能性が強い。第1号住居跡の床面と周溝より土器が伴出しており、造営および廃棄年代は5世紀後半と推定される。他の住居跡も第1号住居跡とほぼ同時期もしくはそう前後しない時期の所産と考えられる。

県内では古墳時代後期の集落遺跡の調査例は極めて乏しく、住居跡を確認した遺跡は、加賀市千崎・大島遺跡<sup>(11)</sup>、同敷地天神山遺跡<sup>(12)</sup>など2～3例を管見するにすぎない。特に5世紀後半代の住居跡を確認したのは本遺跡が初例であるなど、この期の集落構造の実体が全く把握されていないのが実状である。ただ、敷地天神山遺跡では、20数基の竪穴住居跡が構造的なまとまりをもったかたちで検出されており、5世紀代に遡上すると考えられるものも含まれている。本遺跡と立地面での共通性が看取され、その構造解明がまたれる。

## (3) 掘立柱建物跡

掘立柱建物は、A地区で7棟、B地区で1棟の、総数8棟が検出された。その内訳は、2間×3間が4棟、2間×2間が1棟、1間×2間が2棟に、B地区で検出された2間×4間で片庇の建物が1棟である。

### A地区の掘立柱建物

いずれも掘り方をもたない素掘りの柱穴からなるもので、柱穴の規模にかなりのばらつきがある。また、柱間の間隔も不定で、尺を基準単位とする数値でおさまるものはほとんどなく、規則性に乏しい。かなりの傾斜面に立地するにもかかわらず、地形的に高所にある柱穴と低所にある柱穴の深さにほとんど格差がない場合がある。第1号、第2号建物がそれである。検出面が当時の生活面であり、平坦に地ならしをする整地作業がおこなわれない土間作りと仮定するなら、約80cm以上の比高差をもつ土間が考えられ、これは通常の生活空間としてはいかにも不自然である。これらの建物は床帳りであったと考えた方が理解しやすい。対して、第3号、第6号、第7号建物は、盛土などによりある程度平坦に整地されたのち築造されたと考えられるものである。いずれも地形的に低所にある柱穴は浅く、その痕跡さえ残さない場合も多い。第6号、第7号建物が位置する地点で、これらの柱穴が層序的に盛土層かと推定されるかなり上面の層より掘り込まれていることが確認されている。第4号・第5号建物は、検出面からの柱穴の深さにかなりのばらつきがあり、この両者のどちらにあたるものか確認できなかった。

重複して存在する掘立柱建物群からなる集落にあって、建物の単位群および築造の前後関係を推定する手がかりとして、柱穴の重複関係や建物主軸方位があり、また、古代集落にあっては南北棟建物を主体とすることが共通の特徴の1つにあげられている<sup>(13)</sup>。本遺跡のA地区では、南北棟をとるのは重複する第4号・第5号建物のみであって、他の建物は東西棟をとる。おそらく本遺跡の場合、東西に傾斜する緩斜面での集落立地という地形的条件が大きく作用しているものと理解できる。こうした視点をふまえ、A地区での建物配置をまとめてみると、①柱穴の重複関係から第1号・第2号・第3号建物が同一位置で建替えられている。②第4号・第5号建物は方向を同じにし、梁行を南北にややずらして建替えられている。③第1号・第1号建物はほぼ同規模（面積約20m<sup>2</sup>）で方向を同じにする。④第3号・第4号・第5号がほぼ方向を同じにする。⑤浅い鞍部を隔てて、北に位置する第6号・第7号建物は南側の建物群と方向をかなり異にする。などの特徴があげられる。また、各建物面積は、第1号が約20.6m<sup>2</sup>、第2号が約21.6m<sup>2</sup>、第3号が約15.3m<sup>2</sup>、第4号が約8m<sup>2</sup>、第5号・第6号が約9m<sup>2</sup>、第7号が約6.6m<sup>2</sup>で、面積20m<sup>2</sup>前後を最大とする小型建物群から構成され、束柱をもつ第7号建物は倉庫と推定される。

これらの建物群の造営年代であるが、柱穴内よりの土器の出土など伴出する遺物が皆無で明らかでない。周囲より出土した土器は古墳時代後期（5世紀後半）と平安時代後期（11世紀前後）のものであり、これらのいずれかの時期に帰属するもの考えられる。帰属年代によって、これの建物群の性格の見方が大きく異なるわけであり、確たる物証がない以上、慎重を期しておきたい。ただ、北側に位置する2棟については、やや離れた地点での層序断面の観察ではあるが、平安期の遺物を包含する層上面より掘り込まれる柱穴の存在が観察され、この期に帰属する可能性が極めて強いことを述べておく。

#### B地区の掘立柱建物

11個の柱穴を残すのみであったが、2間×4間で北側に庇をもつ東西棟の総柱掘立柱建物と推定した。各柱穴間の距離は、桁行が6尺、梁行が5尺の等間隔に統一され、A地区で検出した建物と異なり、定型化したものとなっている。また、建物面積は約32.4m<sup>2</sup>と規模も大きい。北辺柱穴列と約120cmの間隔をおいて平行する溝（第2号溝）があり、これはこの建物に付随する雨落溝と考えられる。建物の造営年代は第2号溝出土の土器から11世紀後半代と推定される。

## 第2節 遺物について

### (1) A地区出土の古式須恵器

A地区から2点の古式須恵器が出土した。第1号住居跡から出土した把手付椀（第34図1）とそれに隣接した包含層から出土した中型甕（第36図）である。いずれも県内では最古の1群に属すると考えられるもので、本遺跡の性格をみる上で重要な問題点を含んでいる。

古式須恵器については、和泉陶邑窯を中心とした田辺昭三氏や中村浩氏の研究成果が公表されており、編年基準の大綱が提示されている。<sup>(14~18)</sup>これらに準拠して、本遺跡出土の古式須恵器の編年的位置づけをおこなってみたい。

## 把手付椀

把手付椀は、田辺編年の I 期 TK 216 型式から TK 208 型式、中村編年の I 型式 2 段階から 3 段階を中心に盛行する器形である。形態的特徴の変遷は「底部の平らな椀に大きな把手を付け、器体を太い凹線、凸帯、櫛描文などで飾るものから、最終的には小型化して底がすわりにくい椀に、耳状の把手をつけたものに変化していく。」という。本遺跡出土のものは、比較的大きいと推定される把手を欠くが、大型で深い体部と安定感のある平底を有することを器形的特徴とし、成形手法的には、底部を粘土板で作り、マキアゲ・ミズビキで体部を形成し、外底部は不整方向の手持へう削りおよびナデで調整されている。こうした器形および手法的特徴は、最古段階の把手付椀や蓋杯に共通してみとめられる特徴であり、田辺編年の TK 216 型式、中村編年の I 型式 2 段階に帰属するものと考えられる。ただこの段階での特徴として、口縁端部が丸く仕上げられるのが一般的であるのに対して、本例の端部は、かなり稜角的でシャープに仕上げられている点、やや新しくなるかもしれない。また、本例のようにかなり深い体部を有する平底の椀は、陶邑窯出土の須恵器の中にほとんど見出しえなく、類品としては、倉敷考古館収蔵の岡山県笠岡市新川出土椀<sup>(19)</sup>、鳥取県倉吉市古川沢出土椀<sup>(20)</sup>、大阪府堺市四ツ池遺跡出土椀<sup>(21)</sup>などがあげられる。

県内での把手付椀の出土例として、羽咋郡押水町竹生野遺跡<sup>(22)</sup>、同正友遺跡<sup>(23)</sup>出土の 2 例がある。いずれも底部が丸くなる小型品で本遺跡例よりもやや下降する時期の所産と考えられるが、竹生野遺跡のものは古式の特徴のひとつにあげられる板状把手を有し、渦巻状の飾りが施されており、ほぼ同時期に考えてもよいかもしれない。

## 甕

一辺長 4 cm から 10 cm 前後の破片にと、きわめて細片化した状態で出土したが、一応口縁部から底部までの破片がそろっていた。接合点を明確にした復元形の把握は不可能であったが、推定量で口径約 29 cm、最大胴径約 54 cm、器高約 54 cm を測る中型甕と考えられるものである。上半部で大きく外傾し逆コの字状を呈する口頸部端部には 1 条の凸線がめぐる。体部外面は細い平行タタキ調整後さらに入念にナデ仕上げされ、内面はスリケシによりまったくタタキ調整痕を残さないなど、製作所要労力を多く費やした丁寧製品で、古段階の特徴をよく残している。これと近似する製品は、陶邑窯では TK 85・TK 73・TK 305 窯など中村編年の I 型式 1 段階の諸窯出土品中のみとめられる。ただ、本例にみられるような溝巾 1.5 mm 前後の細い平行タタキの占める割合はこれらの諸窯ではきわめて少なく、また口縁端部が方形に近いかたちをなすものは、丸く仕上げられるものよりやや後出的であるとみられている点などから、1 段階の甕の中でもやや新しい要素とされる特徴を有するものと考えられる。こうしたことから本例の甕は、中村編年の I 型式 1 段階新、田辺編年の TK 73 型式から TK 216 型式のあいだにあたる陶邑窯の製品と推定しておきたい。なお、この甕の口頸部片と体部片各 1 点が三辻利一氏により胎土分析が実施されており<sup>(24)</sup>、その産地として陶邑窯製品の可能性が高いと結論されている。

さて、県内出土の古式須恵器甕として、能美郡寺井町和田山 22 号墳出土例<sup>(25)</sup>、同辰口町茶白山 12 号墳出土例<sup>(26)</sup>があり、前者は田辺編年の TK 216 型式ないし ON 46 型式、後者は TK 23 形式併行期の所産に比定されている。また、隣の福井県では、TK 216 型式併行に比定される敦賀市向出

山2号墳例がある。いずれも破片化した状態での出土であり、葬送儀礼に伴う人為的な破砕行為の結果かと推察される。地方窯が成立する以前の初期須恵器は、地方にあっては実用品としてよりも、祭・宝器財的な意味あいの強いものであったと考えられている<sup>(28)</sup>。古墳以外の遺跡での出土例である本例の甕が、やはり破砕された状態で出土をみたことは、葬送儀礼以外の共同体的祭儀にもこうした須恵器が用いられたことを示すものと考えられる。近年、中部・関東地方の集落遺跡から発見される初期須恵器の多くが、完器としてではなく破損品として出土しており、特に甕・壺・器台類などの大型品のほとんどがこうしたかたちで出土をみていることは注目される。これは初期須恵器の地方での出現が、単に古墳築造に伴う新たな葬祭儀礼の導入を契機としたことのみでなかったことを意味するものであり、その性格や流通形態を解明することが今後の課題である。県内でも、集落遺跡からの古式須恵器の出土例<sup>(29)</sup>が増えつつある。その多くは蓋杯・椀・鉢などの小型品であるが、甕類などの大型品は前述したように破砕された状態で搬入されている可能性も強く、体部片などの識別に十分留意して当該期の遺跡出土品の発掘整理にあたる必要があろう。これらの問題については後日を期して述べてみたい。

## (2) B地区大溝出土土器

第4章第3節で述べたように大溝は新・旧2期にわたって営まれたと確認されている。このため遺物の出土層位については、大溝I期の堆積層に包含されているものを大溝下層出土、II期の堆積層に包含されているものを大溝上層出土土器として、便宜上区別して取り扱ったが、その区別は明確なものではなく、特に上層出土土器に関してはかなり新・旧の土器が混在しているものと考えられる。

### 大溝下層出土須恵器

下層から甕1点、蓋杯9点が出土している。いずれも、田辺編年のTK47型式からMT15型式、中村編年のI型式5段階からII型式1段階併行に比定されたものである。この段階では、鹿島郡鳥屋町鳥屋古窯跡群深沢4号窯<sup>(30)</sup>、羽咋市柳田古窯跡群柳田ウワノ1号窯<sup>(31)</sup>などの地方窯の操業が開始されており、これらの諸窯の製品と考えられる。またこの段階の須恵器は、古墳のみならず集落遺跡からもかなり普遍的に出土しており、葬祭やそれに準じる日常用品としての需要・供給関係がこれらの諸窯の掌握者を介在して周辺村落にゆきとどいたものと推察される。

### 大溝上層出土須恵器

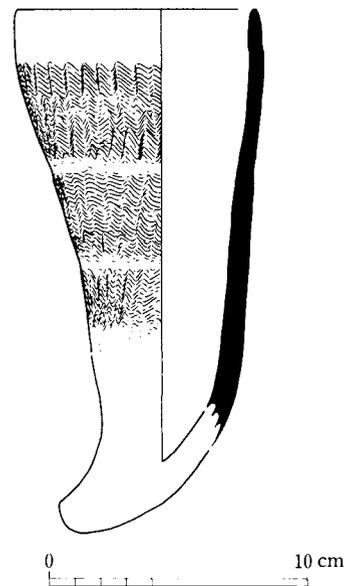
大溝上層からは、甕4点、壺6点、蓋杯16点、高杯4点が出土している。これらにはやや年代幅がある。口径48.6cmを測る甕(第53図1)が田辺編年のTK47型式併行、中村編年のI型式5段階併行と考えられるのに対して、杯蓋C(第54図13~15)、杯身B(第54図18・19)が田辺編年のTK209ないしはTK217型式併行、中村編年のII型式6段階併行に比定される時期の所産と考えられ、相互の間に約1世紀近い年代差が生じることとなる。第53図1の大型甕を残く他の須恵器が田辺編年のII期中葉前後、中村編年のII型式4・5段階を主体としていることから、先の大型甕は下層からの混入品と理解できる。

### 角杯形須恵器

器高 20 cm を測る完形品で、口縁平面形が 9.8 cm × 8.7 cm の楕円形を呈し、犀角状に屈曲する尖底部に紐通孔が穿たれている。ただ紐通孔の端部は稜角的で実際に紐を通して恒常的に使用した痕跡はみとめられない。大溝上層出土須恵杯身 A 類の第 54 図 23・24 の杯が同レベルに隣接して伴出しており、年代的にはこれらの時期(中村編年 II 型式 4 段階)に帰属する所産と考えられる。

角杯形須恵器の出土例として、岐阜県陽徳寺古墳<sup>(32)</sup> (1 点)、福井県獅子塚古墳<sup>(33)</sup> (2 点)、同興道寺窯跡<sup>(34)</sup> (数点) と本県加賀市天神山遺跡<sup>(35)</sup> (1 点) があり、陽徳寺古墳例を除くすべてが北陸地方に集中している。また、須恵器ではないが、和歌山県井辺八幡山古墳<sup>(36)</sup> から「角杯を背負った男子立像」埴輪が出土しており、正倉院御物の中に実物の角杯がみとめられるという<sup>(37)</sup>。角杯形須恵器は、その源流が中央アジアの馬上杯にあり、朝鮮半島をへて祭祀用として日本に伝わったものと考えられる特異な土器で、獅子塚や陽徳寺古墳の角杯形須恵器は国産品でなく舶載品である可能が考えられていた。しかし、1987 年に実施された興道寺窯跡の発掘調査で角杯形須恵器が製産されていたことが判明し、同窯の製品が獅子塚古墳に副葬されたことがほぼ間違いないと推定されること<sup>(38)</sup> から、同時期におかれる陽徳寺古墳例も国産品と考えられる。朝鮮半島の加耶土器にみられる角杯形土器<sup>(39)</sup> は、実物の角杯をかなりリアルに模倣したもので、全体がヘラ削りで仕上げられている。獅子塚や陽徳寺古墳例はこれに近い形状を示すが、外面はハケ調整で仕上げられ、興道寺窯例も同様である。また、興道寺のものはマキアケ・ミズビキなど他の須恵器製品と同様の成形手法が用いられており、田辺編年の MT 15 型式に比定される時期の所産とされている。井辺八幡山古墳の造営年代もほぼこれらの年代と同時期と考えられており、6 世紀初頭前後に角杯形須恵器が祭祀用として日本に導入されたものと推定される。また、興道寺窯では小型品も含めてかなりの量の製産が考えられることから、主たる供給源となっていたものと推察される。ところで、県内でのもう 1 個の出土例である天神山遺跡の角杯形須恵器を紹介しておく。竪穴住居跡覆土中より出土したもので底部を欠く破損品である。口径約 9.2 cm、現存高約 17 cm を測り、体部は入念にナデ調整され、クシ描き波状文が全面に重複して施されている。焼成は並で色調淡灰色を呈する。胎土は砂粒を多量に含む。興道寺窯跡出土のものと、調整・胎土が明らかに異なり<sup>(40)</sup>、加賀地方の須恵器窯の製品である可能性が強い。また共伴する須恵器は田辺編年 MT 15 型ないし TK 10 型式、中村編年の II 型式 1 段階のもので、興道寺窯跡出土のものよりやや新しい時期の所産と推定される。

さて、角杯形須恵器は、その供給源の 1 つと推定される興道寺窯例を除くと、古墳出土が 3 例、集落遺跡出土が 2 例で、地域的には、美濃・若狭・加賀・能登から出土して



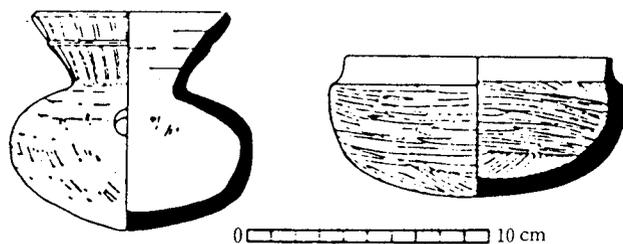
第 65 図 加賀市敷地天神山遺跡出土角杯形土器実測図

いる。いずれも、継体伝承と結びつきの深い地域であり、角杯形須恵器の存在をそれらと結びつけて考えようとする説や<sup>(41)</sup>、また、「日本書紀」垂仁紀の、意富加羅国の王子、都怒我阿羅斯等の記事などの、朝鮮半島からの渡来人説話からの関連で考える説<sup>(42)</sup>などがある。いずれも、6世紀前半代の古代コシ地域の動向を考える上で魅力あるものであるが、それらと関連づけるにはあまりにも資料に乏しい。また、この5例の製品が、時期的には6世紀初頭から6世紀後半代と約半世紀以上の年代幅を有することや、胎土・調整手法の相違から、特定期間における特定窯による一元的供給品ではないことも問題である。ただ、最古・最大の古窯跡群として成立し、終末の平安後期に至るまでに膨大な窯跡群が形成された陶邑古窯跡群の製品の中に、角杯形須恵器がまったくみとめられないことは、他の同様の祭祀用と考えられる「特殊器形の須恵器」<sup>(43)</sup>がやはりほとんど製産されていないという事実とともに注目しておきたい。

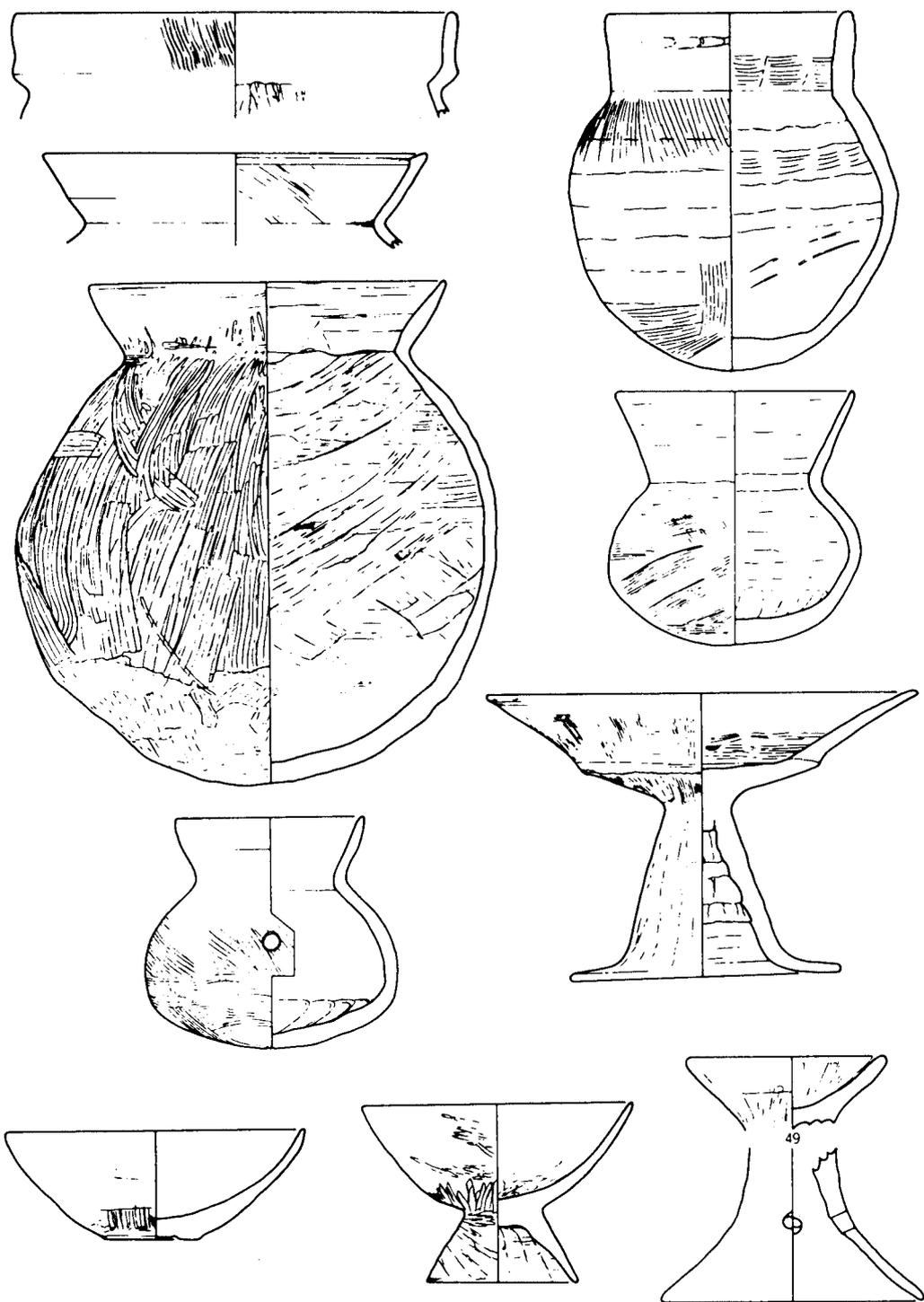
### 大溝下層出土土師器

須恵器との伴関係から、6世紀初頭を下限とする資料と考えられる。器種としては、壺、埴（広口壺）、甕、高杯、杯、椀、鉢（台付鉢）、甑、カマド、小型手捏土器が出土している。壺は有段口縁が残存し、第51図83のような大きく外反するものがあり、近似するものが富来町高田遺跡<sup>(44)</sup>から出土している。甕は口縁形態がかなり多様であり、大きく4形態、細く9形態に分類できる。甕A（第46図1～4）は球形に近い体部をもち、くの字に外反する口縁の甕で、畿内布留式土器新段階、関東の和泉式土器（和泉I期）の特徴とするもので、5世紀の中葉段階まで遡上させてもよいと考えられるものである。もっとも出土点数の多い甕B（第46図5～8・12～16・20）は体部の長胴となるもので、大阪府船橋遺跡<sup>(45)</sup>0-III・IV期や、関東の鬼高I期と併行関係にあるものと考えられる。ただ、胴張で体部中位に横ハケ調整痕を残す甕B<sub>3</sub>（第47図13・14）はやや古い様相を残すと考えられる。また甕Cも同様で、類品は金沢市田中遺跡出土器<sup>(46)</sup>など前段階にあたると思われるものに多い。甕D（第46図9～11・第47図18・19）は内面に稜を有さず体部が長胴となるもので、大溝出土甕類の中でもっとも新しい様相を有するものである。類品は高田遺跡や鹿島郡中島町外小牧・外遺跡<sup>(47)</sup>出土例など、須恵器MT 15型式と伴すると考えられる甕に多くもとめられる。高杯は3形態のものがみられ、新・中・古の段階に相当するものと考えられる。高杯A（第48図28・29）は、鹿島郡鹿西町宮地遺跡<sup>(48)</sup>、能美郡辰口町高座遺跡<sup>(49)</sup>、七尾市満仁寺家干場遺跡<sup>(50)</sup>、金沢市田中遺跡、羽咋郡志賀町倉垣遺跡<sup>(51)</sup>など鹿西町宮地遺跡を標式とする「宮地式土器」の高杯に共通するものであるが、本例は段部の稜がややあまくなっており、これらの一群の高杯の中でも新しいものと思われる。高杯B（第48図29）は粘土紐をめぐらし有段状したもので、同類のものが、辰口町茶白山2号墳<sup>(52)</sup>出土高杯などみられ、高杯Aの形態化したもので、高杯Aから高杯Cへの移行期にみられる特徴と考えておきたい。高杯C（第48図31）は杯部が無段となるもので、加賀市加茂かがり場遺跡<sup>(53)</sup>出土例など、須恵器TK 47型式併行期以降に出現する器形とみておきたい<sup>(54)</sup>。椀には便宜上、杯、鉢とされるものに近いものも包括したが、およそ6類に大別される。特徴的なものとして、内面黒色土器や須恵器を模倣したものが含まれ、注目される。椀A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>（第49図44～45）としたものは、古式土師器にみられるいわゆる埴に近い形態を呈するものであるが、体部がかなり大きくなり、低い器高となっており、系譜的

に連続性をもつものかどうか不明である。近似するものが小松市矢田借屋第4号墳<sup>(55)</sup>からMT 15型式の須恵器に共伴して出土しており、少なくともこの段階まで残存する器形と考えられる。椀B<sub>2</sub> (第49図52・55・56)は大阪府船橋0-II・IV期や関東の鬼高I期に特徴的にみとめられるもので、他地域との併行関係をみる上で1つのメルクマールになるものと考えられる。半球形を呈する特徴的な椀C (第49図54・57・58~60)は、須恵器TK 47型式からMT 15型式期にかけて多出する器種である。本遺跡A地区出土の第34図2の椀はその先駆の様相をなすものと推定される<sup>(56)</sup>。比較的器高が高い丸底タイプのものから器高が低く平底に近いタイプのものに漸移的に変化すると考えられ、県内では椀C<sub>1</sub>・C<sub>3</sub>などMT 15型式併行期にもっとも盛行する。またこのタイプで内面黒色土器となるものは、金沢市塚崎横穴群<sup>(57)</sup> (2・7・8号)出土例など7世紀初頭前後に出現する。椀D (第49図61・63)は椀・杯類の中では後出的なものと考えていたが、今回の出土例により少なくとも6世紀初頭ごろまでは遡上することが確認された。また、椀E (第49図62)は須恵器MT 15型式に比定される杯身の模倣品と考えられる。須恵器を模倣した土師器については、鹿島郡鹿島町小竹遺跡<sup>(58)</sup>、宮地遺跡、高田遺跡、草江丸山遺跡<sup>(59)</sup>敷地天神山遺跡などから出土しており、甌・蓋杯・椀などの模倣品が多い。これらの中には高田遺跡の杯など須恵器I期前半代の所産と推定されるものも含まれ、関東地方と同様の時期(和泉II式)にこれらの須恵器模倣土師器が出現したものと考えられるが、関東地方に比較してその量は圧倒的に少ない。ただ、甌に比定される胴部に円孔を有する壺の存在が比較的目立つが、これについては、県内ではこうした壺が初期土師器の段階にもみとめられるという事実があり、須恵器に先行して存在した可能性が強く、系譜的な連続性も含めてなお検討の余地を残す。鉢は比較的大型のものと台付のものがある。台付のもの鉢E (第50図69~75)は体部や椀A<sub>2</sub>に近い形のもので内面が黒色となるものも含む。大型でやや粗雑なつくりの鉢C (第50図67)・鉢D (第50図68)はこの期の「能登式製塩土器」に胎土・調整が近似するもので、注意しておきたい。グイノミ状あるいは丸底の小型手捏土器 (第50図76~82)は、「宮地式土器」期に出現し、先の椀形土器ともに5世紀後半代の土器セット関係の特徴づけるものである。また、祭祀用雛形土器として性格の強いものであり、県内では、高田遺跡、七尾市岩屋遺跡<sup>(60)</sup>などで子持勾玉、紡錘車などの滑石製品とともに伴出している。また、第51図93のカマド形土器やそれとセットをなすと推定される把手付の甑も、実用品としてよりも祭祀的色彩の強いものとしてこの期に出現する。先の高田遺跡では、子持勾玉・小形手捏土器・鹿角製装身具・貝殻・獣骨等が混然と堆積した5世紀後半代のある種の祭祀遺構



第66図 富来町高田遺跡出土須恵器模倣土器実測図



第 67 図 辰口町高座遺跡方形周溝遺構出土土器実測図 (縮尺 1/3)

が検出されており<sup>(61)</sup>、そこより多量の土器とともに、少なくとも3個体以上のカマド形土器が出土している。本例のカマド形土器は高田遺跡出土例とほぼ同時期に比定されるものである。これらの祭祀的色彩の強い土器類の出土は、この期における大溝の性格の一端を示すものとして興味深い。

以上、大溝下層出土土師器について述べてきたが、ここで少しまとめてみたい。冒頭にも述べたが、下限は6世紀初頭と考えられる。上限は、西日本の岡山県王泊遺跡第4層、大阪府小若江南遺跡、同船橋遺跡0-II・III群、東日本の和泉式土器の一部と併行にあるとされる吉岡編年<sup>(62)</sup>の「北陸における土師器の編年—第4様式」もしくはそれよりやや下降する時期においてほぼ大過ないものと考えられる。ただ、吉岡氏が「第4様式」を設定するにあたって、その基準資料のひとつとされた宮地遺跡出土A群の土器（「宮地式土器」）は、高杯、小型丸底壺、椀、小型手捏土器類を主体とする資料であって、他の器種、特に甕類については資料が断片的でありいまひとつ

第2表 中村畑遺跡の編年的位置

西 暦	須恵器 (田辺編年)	土師器 (吉岡編年)	中 村 畑 遺 跡	県 内 の 主 要 遺 跡
AD 400		第2様式		金沢・高島
		第3様式		小松・漆町
		第4様式	A地区土師器	辰口・高座
	TK-73 TK-216 (ON-46) TK-208			富来・高田
500	TK-23	第5様式	大溝下層土師器	七尾・万行畑
	TK-47			加賀・天神山
	MT-15			中島・小牧・外
	TK-10	第6様式	角杯形須恵器	
	TK-43		大溝上層土師器	
600	TK-209	第7様式		
	TK-217			
	TK-46			

明瞭さに欠ける。しかし、宮地遺跡A群の土器の中に口縁内面が肥厚する甕が含まれていることや、小型丸底壺の占める割合が大きいことは、「宮地式土器」がいわゆる布留式土器の範疇におさまるものであることを示している。「宮地式土器」もしくはそれに若干先行する時期の良好な一括資料として辰口町高座遺跡<sup>(63)</sup>方形周溝遺構出土の一群の土器がある。この土器群の中には、「第4様式」の土器セットの特徴とされる丸底椀や小型手捏土器類が全く含まれず、布留式土器の基本セットとされる小型丸底壺と小型器台がかなり形骸化しているとはいえ以然として主体をなしており、北陸における布留式土器新段階併行期の標式的土器群として位置づけられるものである。しかし、この一群の土器は吉岡編年の「第3様式」とは明らかに異なるものであり、吉岡編年に準拠するならば、「第3様式」と「第4様式」の移行期に位置する土器群となる。同遺跡の報告書で中島俊一氏が考察されているように、大阪府小若北遺跡出土土器やそれにやや後出的であるとされる同船橋遺跡0-I・II期と併行関係にあるものとした方が妥当であり、この期の標式的一括資料としてとらえておきたい。すなわち、県下での初期須恵器（I期前半）出現直前の土器群であり、これをこの期の基準資料とすることで、いわゆる「宮地式土器」のセット関係がより鮮明化されると考える。そして、大溝下層出土の土師器はこれに後続する土器群をその上限とするとした方がより明解であろう。断片的出土であり、あえて項をもうけて述べなかつたが、A地区包含層出土古墳時代土師器も、大溝下層出土土器とほぼ同期の所産とみてよいだろう。また、先に述べたTK 73型式もしくはTK 216型式併行期の所産とした須恵器中型甕があり、船橋遺跡0-I-II期に初期須恵器が伴う事実<sup>(64)</sup>や、TK 73型式の実年代がほぼ5世紀中葉前後と推定されていることから、この編年的位置づけは妥当であろうと考える。

#### 大溝上層出土土師器

第57図14~16・33など下層から混入品と考えられるものが多い。伴出する須恵器主体が6世紀後半代のものであり、甕E（第56図1~10）や椀I<sub>1,2</sub>（第57図23・24・29）、椀J（第57図27）などはそれらに伴う時期のものであろう。甕G（第56図12・13）や平底の椀I<sub>3</sub>（第57図32）は中でももっとも新しい様相のもので、杯身B（第54図18・19）などと併行する7世紀初頭前後まで下降するものであろう。また、第57図18の鉢形土器は製塩土器となる可能性が強い。

以上のように、大溝上層出土土師器は下層よりの混入品と考えられるものや、甕・椀類を除けば、きわめて出土量が少なくなり、日常食膳土器の主体が土師器から須恵器に移行しつつあることを示している。

#### (3) B地区第1号溝出土土師器

土師器杯・皿類と羽釜が出土している。杯A・B・C類や内面黒色の杯D（第61図7）・杯E（第61図9・10）など三浦上層式土器<sup>(65)</sup>に近い形態を示すが、三浦遺跡上層出土土器やそれに近い時期の所産とされる鶴来町安養寺遺跡<sup>(66)</sup>7・8号土壙出土土器群の中にほとんどみられない小型で高い高台の杯G（第61図12・13）や、グイノミ型を呈する杯H（第61図19・20）など、より新しい特徴とおもわれるものが含まれ、三浦上層式土器に後続する11世紀後半から末期の所産にあたる土器群と推定しておきたい。第61図20の羽釜は県内初例であり、これらに伴うもの

であろう。

#### (4) B地区第2号溝出土土器

すべて杯類であり、やや古い特徴をもつ第62図23・24の須恵器杯をのぞき、三浦上層式土器に比定される土器群と考えられる。溝上面の包含層から出土した緑釉土器(第63図1)もほぼ同期の所産であろう。

註

- (1) 今村啓爾「霧ヶ丘遺跡の土壙群に関する考察」『霧ヶ丘 霧ヶ丘調査団(1973年)』
- (2) 1978年発掘調査、報告書未刊、湯尻修平氏の教示による。
- (3) 1980年発掘調査、10数基の落し穴状遺構が確認されている。報告書未刊
- (4) 土肥富士夫・米沢義光『代田宮団遺跡』志賀町教育委員会(1981年)
- (5) 清水真一他『青木遺跡発掘調査報告書II』鳥取県教育委員会(1977年)
- (6) 田島明人他『漆町遺跡』石川県立埋蔵文化財センター(1982年)
- (7) 『金沢市埋蔵文化財調査年報(昭和56年度)』金沢市教育委員会(1982年)
- (8) 金沢市塚崎遺跡、同岩出ウワノ遺跡、押水町竹生野遺跡、富山県中山南遺跡、同小杉上野遺跡などで確認されている。
- (9) 吉岡康暢「土壙の諸類型と性格」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』石川県教育委員会(1976年)
- (10) 橋本正『小杉町上野遺跡(記録写真編)』富山県教育委員会(1974年)
- (11) 四柳嘉章「千崎・大畠遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書III』石川県教育委員会(1976年)
- (12) 1981年発掘調査。報告書未刊
- (13) 小笠原好彦「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」(『考古学研究』第25巻、第4号)(1979年)
- (14) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店刊(1981年)
- (15) 中村 浩他『陶邑I』大阪府教育委員会(1976年)
- (16) 中村 浩他『陶邑II』大阪府教育委員会(1980年)
- (17) 中村 浩他『陶邑III』大阪府教育委員会(1980年)
- (18) 中村 浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房刊(1981年)
- (19) 前掲書(14)図版および図版解説による
- (20) 真田広幸・平方幸雄編『山陰の須恵器』倉吉博物館(1977年)
- (21) 前掲書(17)樋口吉文「四ツ池遺跡出土の須恵器」
- (22) 石川県立郷土資料館『須恵器』(1981年)
- (23) 同 上
- (24) 付論参照
- (25) 前掲書(22)
- (26) 西野秀和『辰口町下開発茶臼山古墳群』石川県辰口町教育委員会(1982年)
- (27) 『吉河遺跡調査ニュース1』福井県教育委員会(1981年)および中司照世氏の教示による。
- (28) 前掲書(14)で田辺昭三氏は初期須恵器が祭祀遺跡で石製模造品としばしば共伴することを例にあげ「集落遺跡からも初期須恵器の出土する例は多いが、それは必ずしも初期須恵器の日常用を証明するものではなく、集落内での祭祀を想定することも可能である。」と述べられている。
- (29) 県内での、古墳以外の遺跡からの古式須恵器の出土例として、小松市高堂遺跡出土蓋杯(TK 216 型式併行)、金沢市犀川鉄橋遺跡出土蓋杯(TK 216 あるいはON 46 型式併行)、羽咋郡志賀町倉垣遺跡出土杯蓋(TK 208 型式併行)、羽咋郡富来町高田遺跡出土樽形甗(TK 208 型式併行)、同草江丸山遺跡出土有蓋高杯・大型甗(TK 208 併行)、鹿島郡鹿島町芹川八幡遺跡出土大型甗(TK 208 型式併行)などがある。  
戸潤幹夫『高堂遺跡—第1次・第2次発掘調査概報』石川県立埋蔵文化財センター(1981年)

- 平田天秋・米沢義光・芝田 悟『犀川鉄橋遺跡』石川県立埋蔵文化財センター（1982年）
- 橋本澄夫「高田遺跡の調査概要」『富来町史（資料編第1巻）』（1974年）
- 市堀藤夫「羽咋郡富来町草江丸山遺跡」『石川考古学研究会々誌（第10号）』（1966年）
- 浜岡賢太郎「鹿島町の弥生文化と土師器・須恵器」『鹿島町史（資料編）』（1966年）
- (30) 浜岡賢太郎・吉岡康暢「鳥屋町深沢窯址の遺物」『石川考古学研究会々誌第9号』（1965年）
- (31) 福島正実「柳田タンワリ1号窯発掘調査報告書」石川県立埋蔵文化財センター（1982年）
- (32) 前掲書(14)図版および図版解説による。  
大江 命「陽徳寺古墳」『探訪日本の古墳（東日本編）』有斐閣刊（1981年）
- (33) 上田三平「福井県史蹟名勝調査報告（第1冊）」（1920年）  
斎藤 優「若狭上中町の古墳」上中町教育委員会（1970年）  
入江文敏・森川昌和「獅子塚古墳」『探訪日本の古墳（東日本編）』有斐閣刊（1981年）
- (34) 入江文敏・森川昌和「興道寺窯跡の試掘調査」『重要遺跡緊急確認調査（II）』福井県教育委員会（1979年）
- (35) 註(12)に同じ
- (36) 森 浩一編「井辺八幡山古墳」同志社大学文学部考古学研究室（1972年）
- (37) 註(36)文献 300～304 P参照
- (38) 三辻利一「分析化学的手法による古代土器の産地推定とその問題点」（『考古学研究』第28巻第2号）（1981年）
- (39) 『世界陶磁全集 17（韓国古代）』小学館刊（1979年）
- (40) 入江文敏氏の教示による。
- (41) 前掲書(33)の入江・森川報文参照。また同書で、「興道寺窯の開窯にあたっては、鏡谷古窯跡群からの工人派遣の可能性がもっとも強いものと考えられる。」とされている。鏡谷古窯跡群は、滋賀県野洲郡野洲町と同蒲生郡竜王町にまたがる鏡山東麓一帯に広がる古窯跡群で、5世紀末から6世紀後半代とかけてのもの推定される窯跡約50基が確認されている。なお、未踏査の地点が多く、今後さらに増加することはまちがいないとされるが、その窯や須恵器の実体がいまひとつ明らかにされていない。また、この鏡山古窯群は、陶邑とともに「日本書記」にその所在が記されている例の1つで、「是以近江国鏡谷陶人。則天日槍之従人也」（垂仁紀三年）とある。天日槍伝承は渡来人説話の中核の1つをなすものであり、この古窯跡群の存在は朝鮮新羅・加羅系土器との関連できわめて興味深い。（前掲書(14)補注参考）
- (42) 黒岩重吾「富山の古代文化をさぐる——新羅と出雲・越との関連で——」（第1回日本海文化を考えるシンポジウムレジメ）日本海文化シンポジウム実行委員会（1981）
- (43) 複数の壺・甕・蓋坏などを連結されたものや、脚付壺に数個の小型壺などを取り付けたもので、いわゆる「装飾付須恵器」も含まれる。これらは朝鮮半島の須恵器の影響を強く受けて出現したものと考えられ、5世紀初頭から6世紀末にかけてみとめられ、その分布は、尾張を中心とした東海地方や、和歌山県、岡山県を中心とする瀬戸内海沿岸域に特に多くみとめられるという。
- (44) 橋本澄夫「高田遺跡の調査概要」『富来町史（資料編第1巻）』（1974年）
- (45) 田辺昭三・原口正三・田中琢・佐原真『船橋II』平安学園考古学クラブ（1962年）
- (46) 橋本澄夫「金沢田中遺跡」『北陸自動車関係埋蔵文化財調査報告書III』石川県教育委員会（1976年）
- (47) 浜野伸雄・米沢義光・谷内尾晋司『小牧・外遺跡』中島町教育委員会（1981年）
- (48) 吉岡康暢・橋本澄夫「石川県鹿島郡鹿西町金丸宮地遺跡の土師器」『石川考古学研究会々誌（第9号）』（1965年）
- (49) 中島俊一『辰口町・高座遺跡発掘調査報告』石川県教育委員会（1978年）
- (50) 谷内尾晋司「七尾市満仁町寺家干場遺跡出土の土器」『鳥屋・高階古墳群分布調査報告』石川考古学研究会（1977年）
- (51) 橋本澄夫「倉垣加茂小学校遺跡」『志賀町史（資料編第1巻）』（1974年）
- (52) 前掲書(26)
- (53) 大聖寺実業高等学校地歴部「加賀市加茂かがり場遺跡緊急調査報告」『石川考古学研究会々誌（第10号）』（1966年）
- (54) 畿内においては布留式土器の段階よりこうした杯部が無段となるものが存在し、系譜的に連続してみとめら

れるようである。

- (55) 小松高等学校地歴部『江沼郡月津村字矢田借屋古墳調査報告』(1951年)
- (56) こうした椀は小量ながら、金沢市古府クルビ遺跡、同田中遺跡などで布留式土器新段階のものと共伴して出土している。
- (57) 橋本澄夫「金沢市塚崎横穴古墳群」『北陸自動車関係埋蔵文化財調査報告書III』石川県教育委員会(1976年)
- (58) 浜岡賢太郎「鹿島町の弥生文化と土師器・須恵器」『鹿島町史(資料編)』(1966年)
- (59) 市堀藤夫「羽咋郡富来町草江丸山遺跡」『石川考古学研究会々誌(第10号)』(1966年)
- (60) 橋本澄夫「七尾・鹿島における土師器出土遺跡の紹介」『石川考古学研究会々誌(第12号)』(1969年)
- (61) 橋本澄夫「高田遺跡出土の土器」『土師式土器集成(本編2)』東京堂出版刊(1972年)
- (62) 吉岡康暢「北陸における土師器の編年」(『考古学ジャーナル』第6号)(1967年)
- (63) 前掲書(49)に同じ
- (64) 前掲書(49)66 P参照
- (65) 吉岡康暢他「加賀三浦遺跡の研究」石川考古学研究会(1967年)
- (66) 中島俊一・梶幸夫『安養寺遺跡群発掘調査概報』石川県教育委員会(1975年)

#### 参 考 文 献

- 黛 弘道編『年表日本歴史1』筑摩書房刊(1980年)
- 楢崎彰一編『世界陶磁全集2』小学館刊(1979年)
- 田中 琢・田辺昭三編『須恵器』(日本陶磁全集4)(1977年)
- 田辺昭三編『弥生土器・須恵器』(日本原始美術大系2)(1978年)
- 杉原荘介・大塚初重編『土師式土器集成』(本編1～4)(1972年)













# 女 郎 塚 遺 跡 発 掘 調 査 報 告



# 第 I 章 遺跡の位置と環境

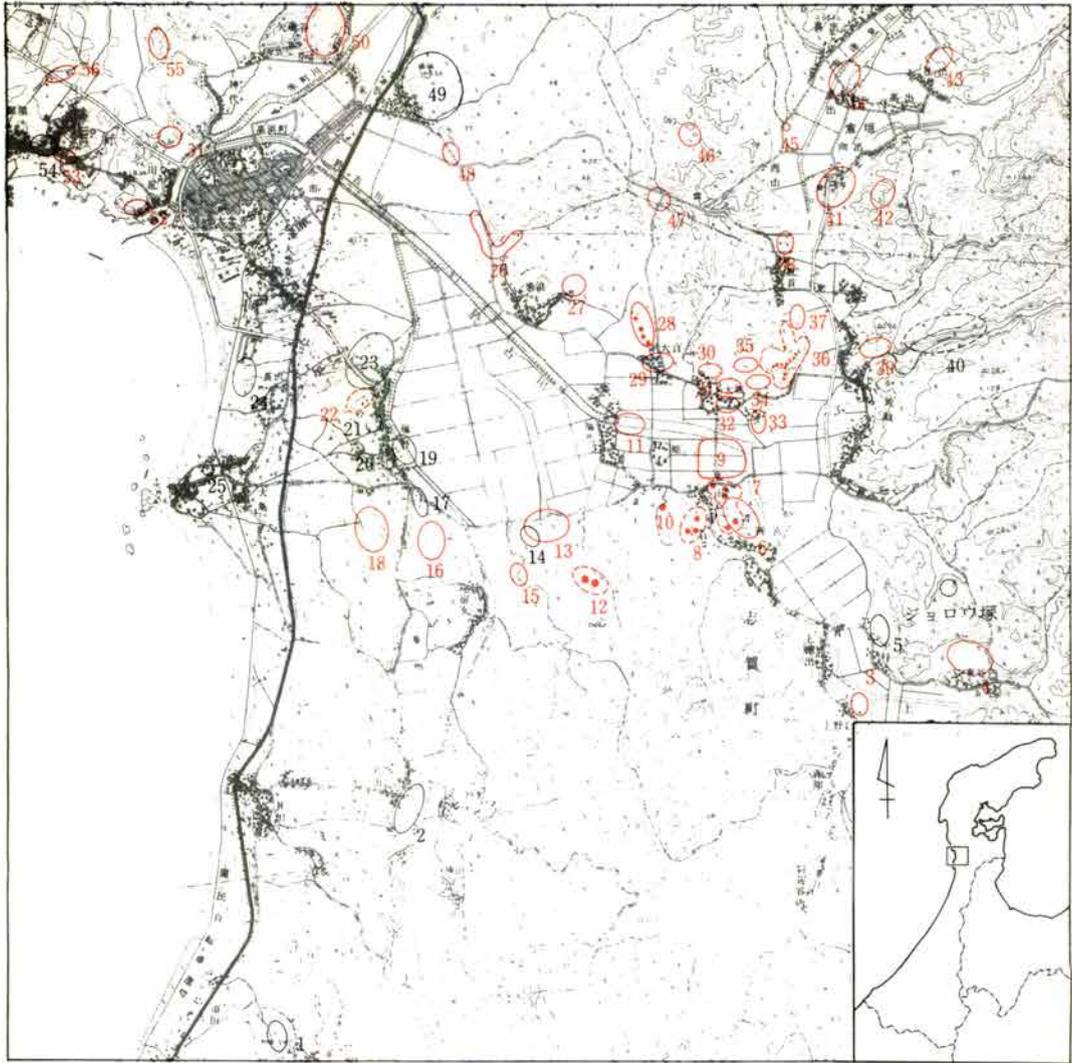
## 第 1 節 地理的環境と立地

日本海に突出した能登半島はその大部分が 200 m 以下の丘陵により被われている半島である。丘陵は長年の海進・海退やその後の開析作用により複雑に入り込み、海岸では潟や入江を形成し半島内では大小さまざまな谷平野を発達させてきた。これら谷平野や潟や入江は古くから能登に生きる人々の生活の場であった。この半島中央部の西海岸に位置する志賀町の於古川流域の低地に存在した潟が旧福野潟であり。旧福野潟のかつての潟線を復元すると南北 3.5 km、東西約 1.5 km の L 字形を呈し、その規模は羽咋の邑知潟に次ぐものと考えられ、四方を丘陵により取り囲まれた潟であった。丘陵は北に西山丘陵、東には矢駄丘陵、南には雨谷丘陵と広がるが、この三丘陵が旧福野潟の水源であった。現在、旧福野潟低地を流れる於古川は眉丈山系を源として、東谷内・上棚を過て二所の宮にて、北の奥山峠を源として安津見・倉垣・鹿首と流れてきた安津見川と合流する。合流した於古川はさらに河口の付近にて米町川と合流し、神代川となって日本海に注いでいる。於古川流域は北の安津見川流域と共に安定した谷平野であり、水稻耕作に適した条件を備えている。また、於古川上流の鹿西町後山は東西に分水している谷であり、花見月・後山ルートは現在でも旧福野潟周辺と邑知地溝帯中心部及び東部の七尾地区を結ぶ交通路である。さらに矢駄・安津見を経て谷を北上すると、能登半島の中央部を縦断する事が出来る。また、旧福野潟周辺は能登半島が最も狭まった所（約 13 km）であり、数少ない外浦と内浦を結ぶ交通路として利用されてきた。潟とその周辺は能登半島の外浦側にて、陸路・海路共に羽咋に次ぐ要衝地である。

ジョロウ塚は旧福野潟の東方に広がる矢駄丘陵の南端にて発生した開析丘陵から北方向に伸びた標高約 75 m の尾根上に立地する遺跡である。遺跡からは旧福野潟とその周囲に広がる丘陵、そして日本海が一望出来る。矢駄丘陵は他丘陵と地質的にも異なり、新第三紀中新世の安山岩質火砕岩類を主体として構成されるが、丘陵が谷平野に臨む西側では、雨谷丘陵を構成している函屋泥岩層が発達している。これは、矢駄丘陵の開析作用が丘陵の周辺部にて特に著しい事と関係していると考えられる。そして、遺跡が位置する尾根は丘陵を構成する安山岩質火砕岩類の西南部端にあたり、断層による地形変動が認められる所であり。遺跡が立地するための一因である自然面での条件を備えていると考えられる。

## 第 2 節 歴史的環境

旧福野潟の周辺には数多くの遺跡が確認されているが、その分布は潟を取り巻きかつての潟線を時代ごとに示してくれる。この事からも潟が人々の生活の場であった事は明白であり。ジョロウ塚の築造に関与した人々も潟とその周辺に開けた谷平野にて生活を営んでいたと考えられる。本遺跡の歴史的環境を理解する事は、潟とその周辺にて展開した歴史の復元であり、本項で



第1図 遺跡の位置 (1/50,000)

- |               |               |             |             |
|---------------|---------------|-------------|-------------|
| 1 滝谷中世墓       | 2 坪野中世墳墓群     | 3 東谷内遺跡     | 4 上棚遺跡      |
| 5 上棚中村畑遺跡     | 6 二所宮宮山遺跡     | 7 二所宮宮山古墳群  | 8 下甘田小学校古墳群 |
| 9 大坂舟の町遺跡     | 10 おお干場古墳     | 11 館遺跡      | 12 福井1・2号古墳 |
| 13 福井まんだら寺A遺跡 | 14 福井まんだら寺B遺跡 | 15 宿女南山遺跡   | 16 長沢おおくぼ遺跡 |
| 17 福野経塚中世墳墓   | 18 長沢堂ヶ谷内遺跡   | 19 福野前川遺跡   | 20 福野高野坂遺跡  |
| 21 福野上野遺跡     | 22 福野横穴       | 23 福野大念寺跡   | 24 長沢中世遺跡   |
| 25 大島氏館跡      | 26 米浜遺跡       | 27 米浜はげの下遺跡 | 28 穴口古墳群    |
| 29 穴口貝塚       | 30 大坂遺跡       | 31 大坂坊の上遺跡  | 32 大坂坊の下遺跡  |
| 33 大坂古屋垣内遺跡   | 34 大坂やちだ遺跡    | 35 大坂寺畑遺跡   | 36 大坂城ヶ墓古墳群 |
| 37 鹿首遺跡       | 38 鹿首モリガフチ遺跡  | 39 矢駄瀬戸山遺跡  | 40 矢駄横穴状遺構群 |
| 41 倉垣遺跡       | 42 倉垣1号竈跡     | 43 安津見上野畑遺跡 | 44 倉垣上野ヶ原遺跡 |
| 45 倉垣丸山古墳     | 46 安津見西山遺跡    | 47 矢駄おはい山遺跡 | 48 末吉瓦畠遺跡   |
| 49 末吉城跡       | 50 堀松貝塚       | 51 神代遺跡     | 52 川尻千代園遺跡  |
| 53 町たいら遺跡     | 54 平式部館跡      | 55 神代貝塚     | 56 町古竈跡     |

は造形文化資料も含め概観してみたい。

遺跡としては川尻ナベタカ遺跡にて、縄文時代の前期初頭に小規模な集落の営なみが確認されている。中期には堀松貝塚をはじめ穴口貝塚、長沢堂ヶ谷内遺跡、東谷内遺跡など潟の周辺では遺跡数が爆発的に増加するが、これは能登半島全域に認められる事であり。中期の海退作用は福野潟など生活の適地を生み出したのである。しかし、後期以降からは遺跡の造営が中断し上棚遺跡や米浜遺跡などが晩期に営なまれたに過ぎない。その後、弥生時代では北吉田米町川遺跡や倉垣遺跡、鹿首もりがふち遺跡などが確認され弥生中期から後期の遺物が出土している。これは水稲耕作の導入が生活の場を潟の周辺から谷平野へと移動させ、安定した農耕集落を営んだ事を物語るものである。古墳時代に入ると潟の周辺には古墳の築造が盛んになっている。特に堀松古墳群は米町川流域を基盤とした古墳群であり、中期の前方後円墳は能登半島の外浦側にて確認される最北のものである。隣接する丘陵には後期の北吉田古墳群が存在する。また、潟を挟んで対峙する城ヶ墓古墳群と二所の宮古墳群は、安津見川と於古川の各流域に発展した二勢力が独自の地域社会を形成したことが知られる。奈良・平安時代では米浜遺跡にて製塩活動が平安時代前期(註1)まで営なまれ、倉垣1号窯跡では10世紀中頃にその生産活動を行っている。この窯の成立は鳥屋・花見月古窯群から花見月・後山ルートを過て伝播してきたものと考えられる。中世の遺跡では墳墓、集落址、経塚、城などが確認されている。本遺跡から北方1.5kmに位置する矢駄横穴状遺構は1973年に5基中3基の発掘調査(註2)が実施され16世紀頃の土葬墓の一形態として考えられている。坪野白山神社墳墓群では21基中4基のマウンドが発掘調査(註3)され、鎌倉時代末から室町時代初頭にかけて築造された土葬墓と火葬墓の二者が認められた。また、砂丘上に立地する長沢遺跡は福野大念寺跡と同様に集落址である。他に末吉城跡や福野経塚などが知られる。

造形文化資料では矢駄観音堂の旧像であり、現在羽咋市豊財院に安置されている聖観音・十一面観音・馬頭観音の三観音像は同一仏師の手によるもので、安津見の細川家薬師堂に安置する阿弥陀如来・薬師如来・菩薩形像の三軀と同じく平安時代後期の古像である。また、二所の宮横山家持仏堂に安置する昆沙門天像は平安時代末期の作である。これら古像に見られる信仰は神仏習合のなかから独自の信仰を生みだし、新しい神仏の組合せる信仰観がこの地域に根づいたと考えられる。また、石造遺物では板碑の存在が目される。板碑はその分布や紀年銘などから造営に関与した人々の信仰を窺い知る事が出来るものであるが、旧福野潟の周辺は石動山麓から七尾市に広がる邑知地溝帯北東部と中島町以北の内浦沿岸域と並ぶ分布地である。その中でも福井の正応四年(1291)銘の大日板碑を初めとして、種子を標識とする板碑は下甘田・中甘田・志加浦の三地区で濃密に分布している。それら種子の大半は大日如来(バン)であり、この傾向は時代が下るにつれ強まる。その後、室町時代後半に入り凝灰岩などの割石に五輪塔を陽刻した板碑(能登式板碑)が急増し志賀町と中島町の中能登に著しい分布を呈している。板碑で見える限りでは旧福野潟の周辺は、邑知地溝帯北東部と内浦の沿岸域と強く関連している反面、独自の世界を創出する地域でもある。本遺跡は旧福野潟を舞台とした歴史の一端を成すものである。

註1 谷内尾普司・米沢義光『志賀町米浜遺跡』1980年石川県立埋蔵文化財センター

註2 橋本澄夫・中島俊一『志賀町矢駄遺跡一横穴状遺構の発掘』1973年石川県教育委員会

註3 平田天秋氏の教示による。

## 第II章 調査の経緯

ジョロウ塚の発掘調査は、県立埋蔵文化財センターの担当職員を中心に、石川考古学研究会々員の参加を得て昭和55年8月19日より開始した。調査には地元矢駄・鹿首・大坂地区から調査作業員として有志の人々の協力があった。発掘調査は最初に予備調査として平板測量を行ない、その後トレンチ方法を取り遺構の状況により全面発掘に改める事で進められた。

8月19日 午後に発掘器材を搬入し塚の清掃作業を行ない、小マウンドを2基(2・3号塚)を確認する。周辺は立木の伐採直後であり、材木や木の枝が散在している為に予想以上に時間を費やす事となった。

8月20日 塚とその周辺部の清掃を続ける一方、工事用の基準点からレベル移動を実施し測量原点を設置する。清掃中1号大塚の北側緩斜面に方形の塚(4号塚)を確認した。

8月21日 塚の南西斜面の清掃を行ないトラバースの設定を行なう。

8月22日 測量原点以外にもベンチマークを設定し平板測量を開始する。

8月23日・24日 全員鹿首モリガフチ遺跡の発掘調査の応援に行き現場を休む。

8月25日 平板測量を再開する。測量には地元の大学生が作業員として協力し進められたが、測量作業全般に及ぶ彼らの参加は作業進行上大なるものがあつた。

8月27日 平板測量を1号大塚と、その南に位置する2・3号塚にて実施する。

8月28日 平板測量を2・3号塚の周辺部と南西斜面にまで広げる。

8月29日～9月3日 鹿島町にて実施される古墳群測量調査に調査員が参加のために作業を中断し現場を休む。

9月4日 平板測量を再開し1号大塚の南西斜面と西側の嶺線部を測量する。

9月5日 平板測量を1号大塚の北側斜面と4号塚とその周辺部を測量する。本日にて平板測量を完了し予備調査を終り、トレンチを設定し発掘を行なう事とする。

9月6日～23日 全員鹿首モリガフチ遺跡へ応援に行き現場を再度中断する。

9月24日 調査を再開しトレンチ発掘を実施する。トレンチは五箇所に設定し発掘を行ない断面観察を一部に行なうが、1号大塚は腐植土層を残すだけで、その下は黄白色燈褐色などの色調を呈する砂と地山ブロックが混在する土層であつた。

9月25日 1号大塚と各塚を再度の清掃を行ない、腐植土層を削除する。有料道路課から立木の



慰霊祭風景

伐採が未了の土地にての調査を中止する旨の連絡があり、該当地にての発掘調査は当面不可能となる。午後宮下栄仁氏の読経による慰霊祭を実施し調査員・作業員一同参例した。

9月26日 1号大塚の伐採部分にて調査を継続する。2・3号塚本体と周辺部の発掘を行なうが、出土品は無く塚自体も盛土では無く削り出しによるものと判明する。

9月27日 1号大塚の南西斜面の表土の削平を行ない、斜面の基底面部にて黒色土層が確認され1号大塚全体が盛土である可能性を示すものと考えられる。

9月29日 1号大塚の南側の窪地に設定した第5トレンチを発掘する。発掘が完了した2・3号塚の実測と写真撮影を行ない、断ち割りを目的とした第6トレンチを設定する。

9月30日 第6トレンチの発掘を継続する。1号大塚の東側斜面を発掘し旧表土を検出する。

10月1日 南西斜面の第2トレンチ拡張区内において断ち割りを行ない、1号大塚の築造方法が盛土では無く地山の削り出しの可能性が考えられた。

10月2日 第2トレンチの発掘を継続する一方、第6トレンチを掘り進める。

10月3日 第6トレンチを東方に延長し、掘状の地形部分が人為的なものかを解明する。塚の遠・中・近影の写真撮影を行なう。

10月4日 第6トレンチを東方延長部の途中よりベルトを残し掘り進む。掘状の地形は断面観察ではその性格解明にまでは至らない。センターより福島正実、中島俊一、土肥富士夫各氏が来跡される。

10月6日 第6トレンチの延長部を掘り進み塚全体の清掃を行なう。

10月8日 第6トレンチの延長部を完掘し清掃を行ない実測の準備をする。1号大塚の東側トレンチも完掘する。午後、中島氏と坂下氏が来跡される。

10月16日 平板測量によりトレンチの位置を実測する。測量後にトレンチのセクション実測の準備を行ない、その後周辺を踏査するが塚などは認められなかった。

10月17日 平板測量の補足部分に関して測量を実施し空堀状遺構も測量する。

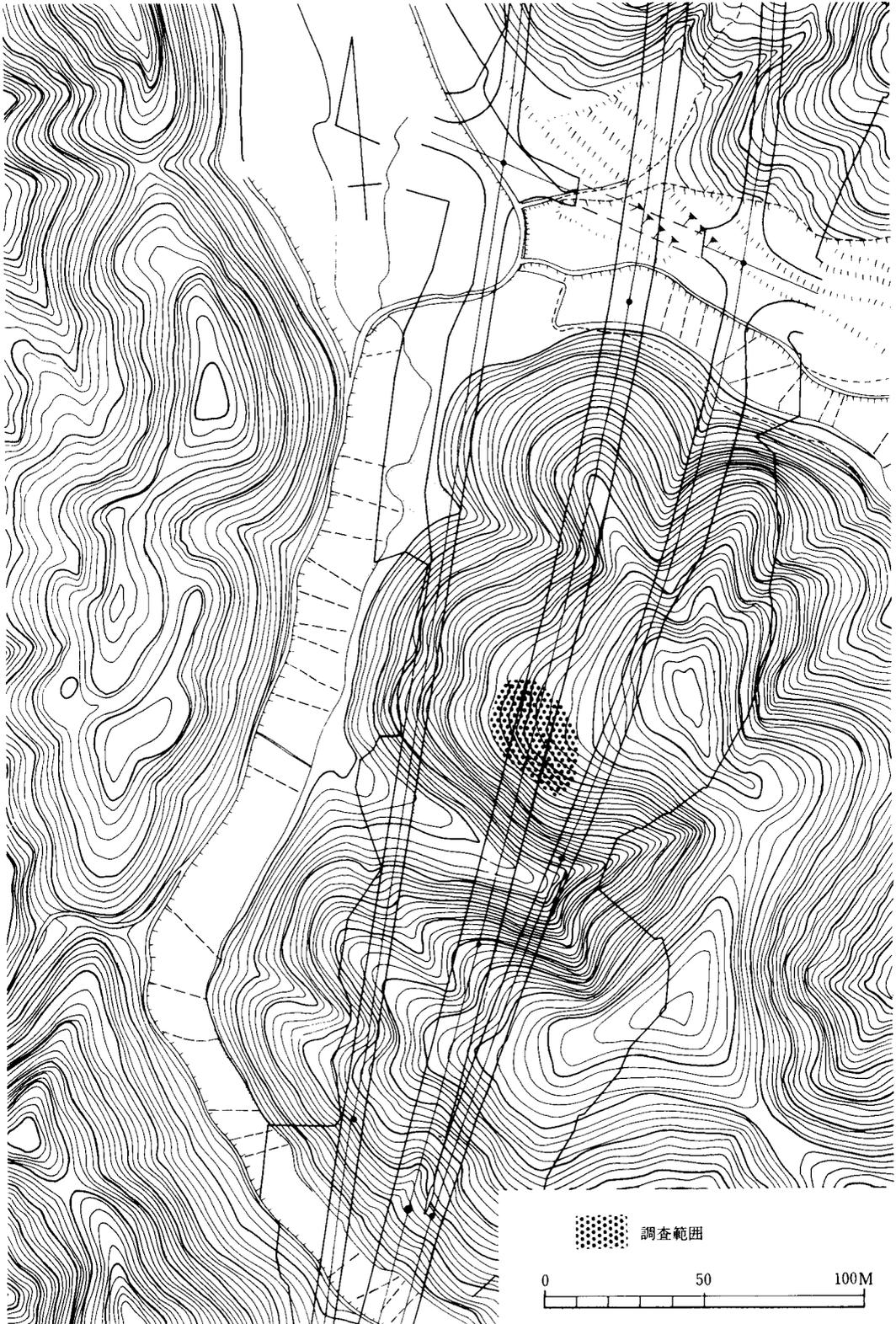
10月18日 第6トレンチの断面実測を行なう。午後、志賀町埋蔵文化財調査委員会が開かれたが、ジョロウ塚に関する問題が解決を見ない為に発掘作業を当面中止する事とする。これより昭和56年3月17日までの約5ヶ月間は一切の発掘作業は中止されたのである。

昭和56年3月17日 本日より発掘調査を再開する。塚の周辺は全て立木の伐採が完了し作業条件は昨年度より良好である。4号塚を中心に清掃作業を行ない三方に溝を検出する。

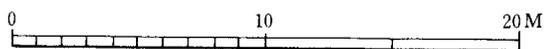
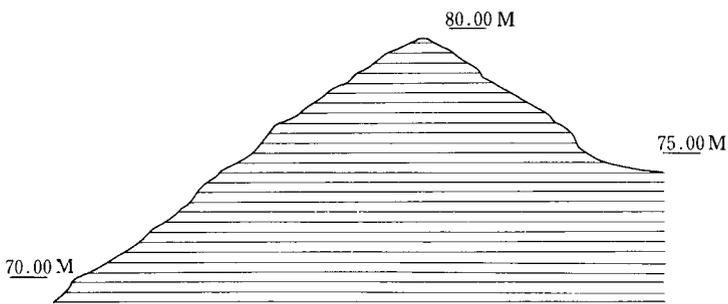
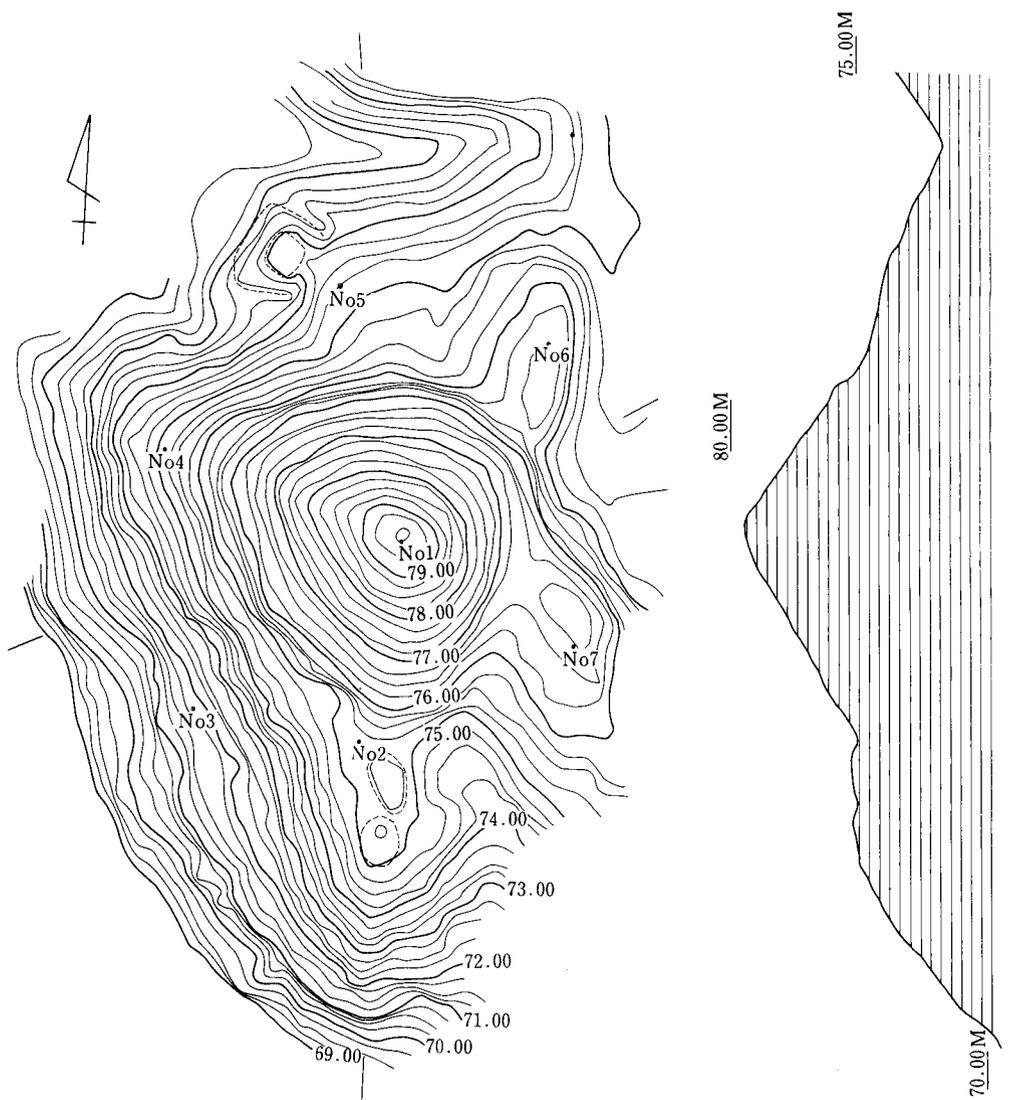
3月18日 4号塚の周辺部と溝を清掃し写真撮影を行ない発掘にかかる。一方、1号大塚の北西斜面に設定した第3トレンチを掘り下げる。午後より4号塚の平板測量を行なう。

3月19日 4号塚に十字ベルトを設定し発掘を行なう。第3トレンチを掘り進めるが盛土などは検出されず一部実測を行ない。1号塚上も断ち割りが地山だけで盛土は検出されなかった。

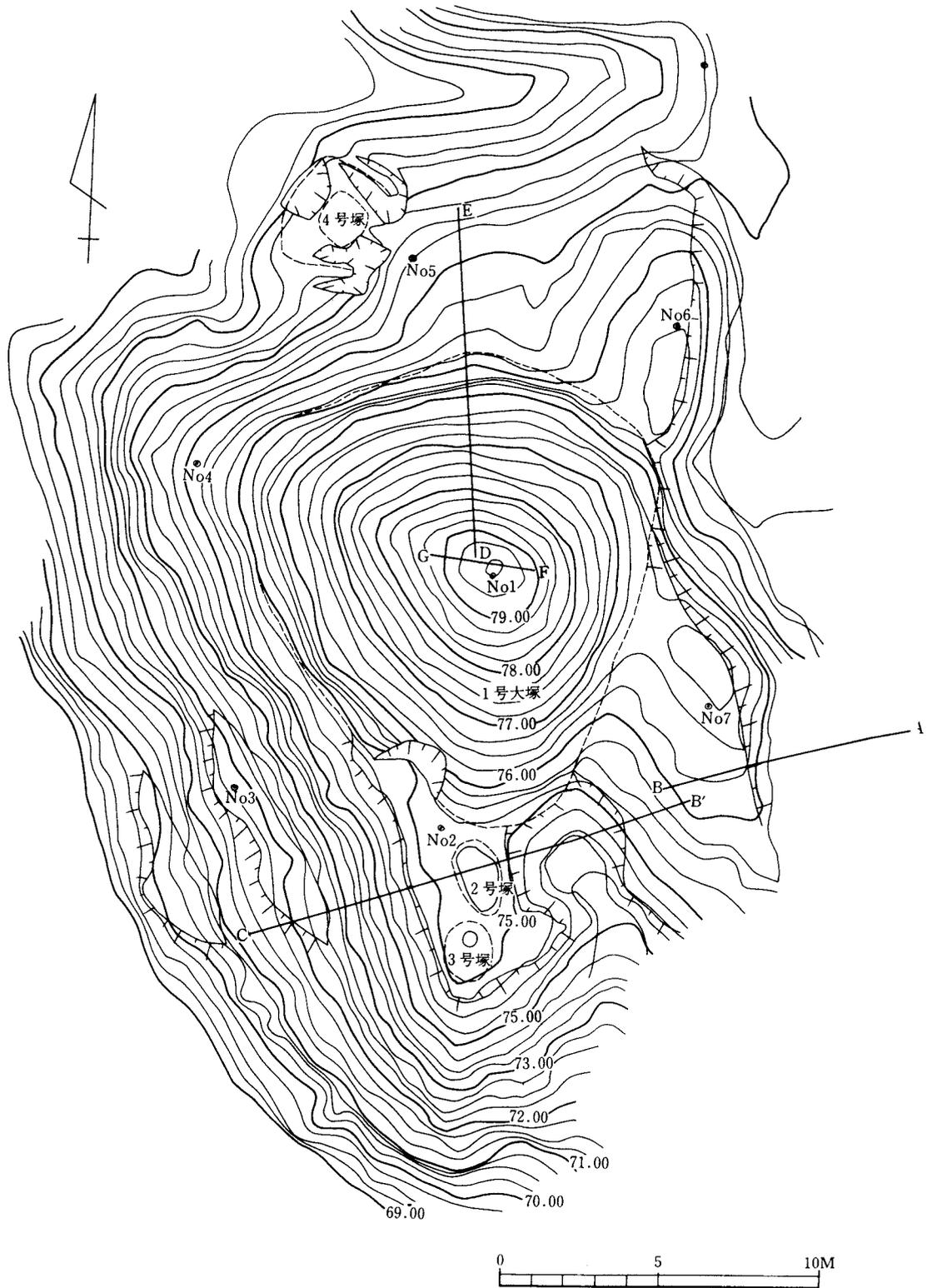
3月20日 4号塚は十字ベルトを残して完掘し写真撮影と断面実測を実施し、完了後にベルトを外し粘土層を観察するが、自然堆積層で地山の一部であった。1号大塚は塚上の断面を実測し、第3トレンチは塚の中心部まで掘り進め断層を検出した。本日にて発掘作業を終え午後に器



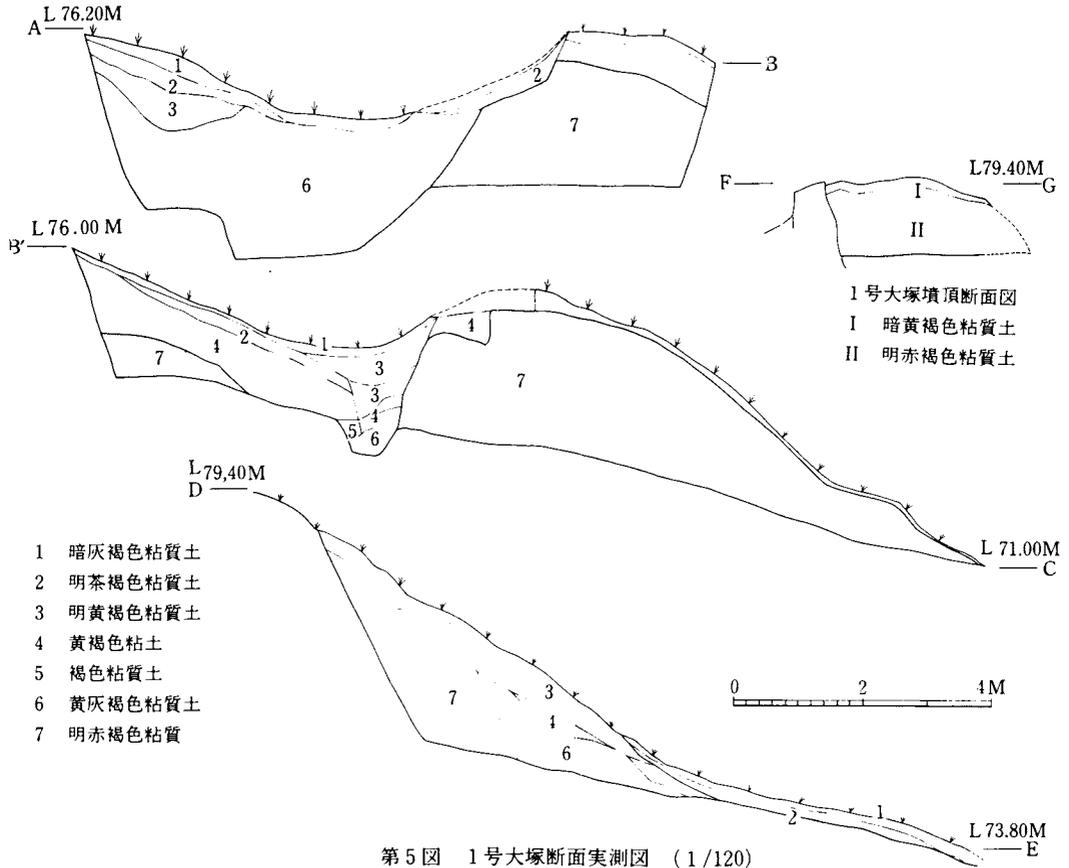
第2図 調査区の位置と地形図 (1/2000)



第3図 ジョロウ塚実測図 (1/300)



第4図 ジョロウ塚配置図 (1/200)



材を1部搬出する。

3月21日 1号大塚に設定した各トレンチを平板測量図に記入する。第3トレンチの断面実測を行ない発掘作業を完了する。調査を実施した本遺跡の1～4号の各塚は形態・規模の点にて異なるが、全て地山の削り出しによる築造である事が判明した。

3月23日 調査現場の残りの器材を全て撤収する。

### 第三章 遺 構

ジョロウ塚は発掘調査を実施するまでは、単独に遺存する塚(1号大塚)として見られていたが、発掘調査により大・小4基の塚状遺構から成る遺跡である事が確認された。各塚は長年植林が実施されていたにもかかわらず、築造時の状況を比較的良く留めていた。本遺跡は開析丘陵から北へ延びた尾根に立地するが、尾根の嶺線上から西方へ外れた緩斜面に位置し、各塚は1号大塚を中心に尾根方向に並列的に並んでいた。塚は北から4号塚・1号大塚・2号塚・3号塚の順に並ぶ4基であった。

(1) 1号大塚 (第4図 図版25)

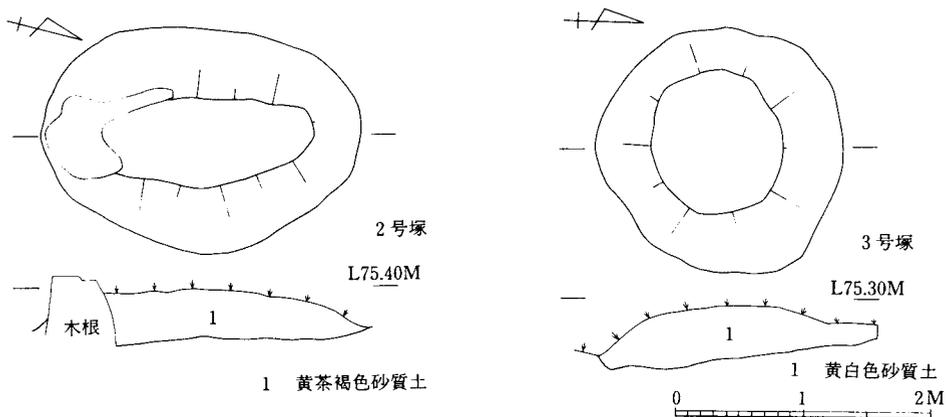
本塚は古くから地元の人々に“ジョロウ塚”と呼称されてきた塚である。塚の頂部は標高79.37mであり、やや周囲に張り出すが一辺14.5mから15mで、高さ4.1m(南端基底面)から4.4m(北端基底面)の略三角錐形を呈する事が測量により判明した。塚本体には盛土は認められず、断ち割りによる断面観察では全て自然堆積層であり、地山として認定出来るものである。このことから本塚の築造は地山の削り出しによるものであり、従来盛土と考えられた塚の築造とは基本的に異なる。塚は北西斜面の第3トレンチにて検出した断層により生じた自然隆起を巧みに利用し、その隆起を削り出す方法により塚の形態を三角錐形に整形したものと考えられる。塚の頂部なども精査したがピットなどの施設や遺物は発見されなかった。

(2) 2号塚 (第6図 図版26)

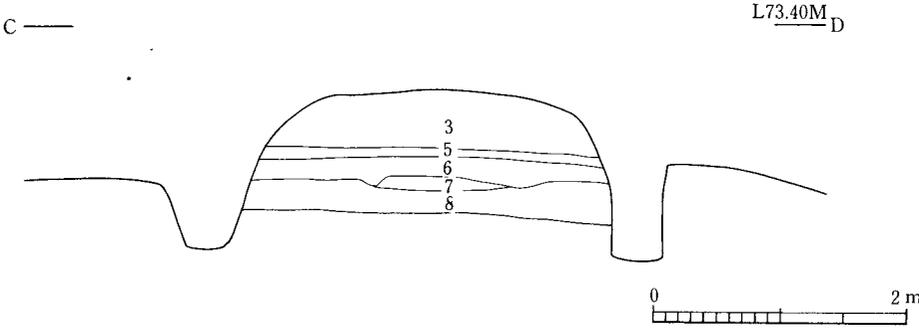
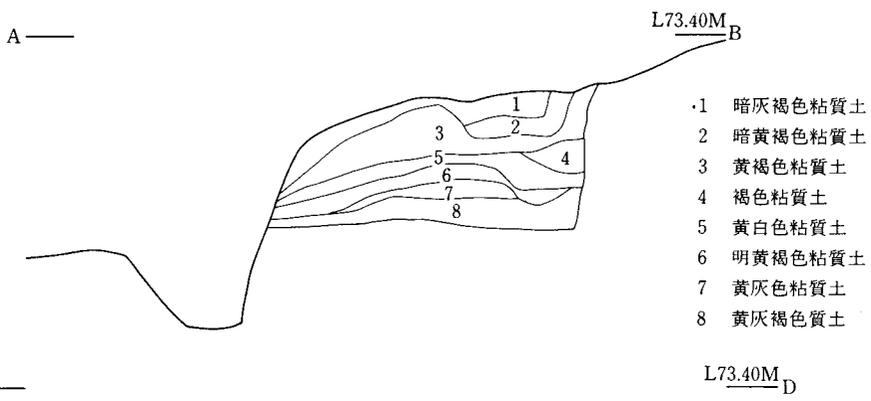
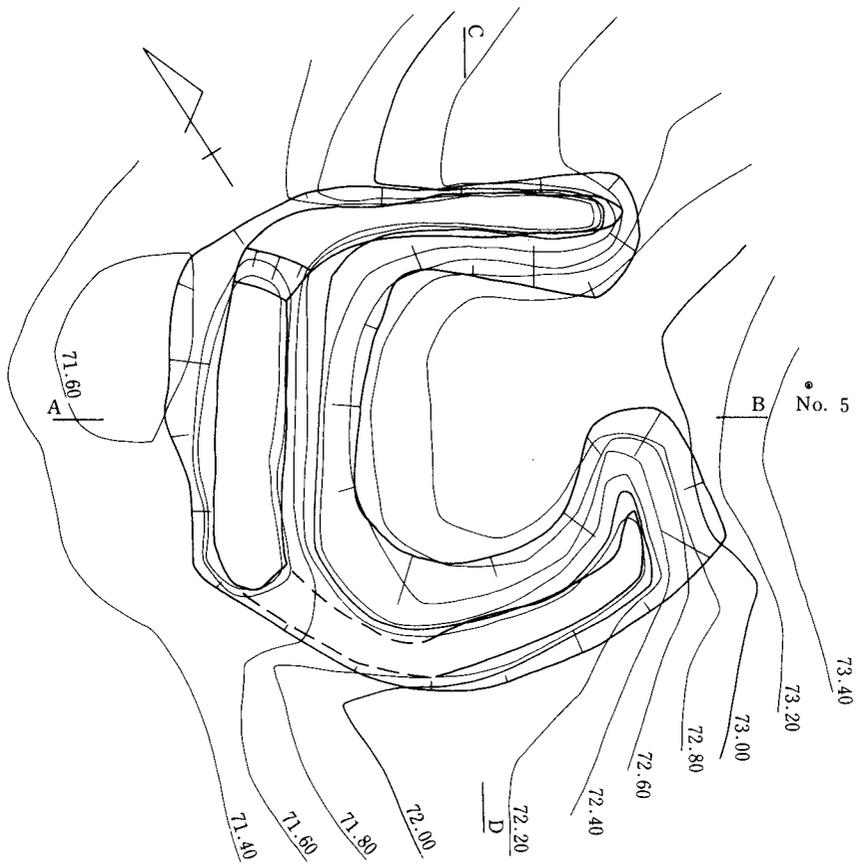
1号大塚の南にて3号塚と並んで発見された。マウンドは3号塚と同様に小規模ながら残りが良く、一見して土饅頭に感じられる塚であった。形態は長軸2.52m、短軸1.8m、高さ0.28mの楕円形を呈する。主軸はN-14°-W方向を示す。マウンドは地山の黄茶褐色砂質土を削り出して形を整えたものであり、施設や遺物は発見されなかった。

(3) 3号塚 (第6図 図版26)

2号塚と0.22mの間をおいて発見された。形態は長軸1.95m、短軸1.95m、高さ0.15m(北側)と0.4m(南側)で円形を呈する。形態も2号塚よりやや小規模ではあるが整っている。主軸はN-4°-E方向を示す。マウンドは2号塚と同様に地山を削り出しによる築造であり、施設や遺物は発見されなかった。



第6図 2・3号塚実測図(1/60)



第7图 4号塚实测图 (1/60)

#### (4) 4号塚（第7図 図版27）

1号大塚の北西側方向の緩斜面上に位置しているのが発見された。当初より長方形に近い平面プランを呈し、三方に溝が巡る事が確認されていた。塚は長軸 320 cm、短軸 282 cm、高さ 134 cm の長方台形を呈し、溝は斜面高方部を除く三方に巾 41 cm から 91 cm で巡り、南・北両側面では地表から垂直に掘削して溝を造り出している。頂上部の標高は 72,89 m で、主軸は斜面方向でもある短軸と考えると N-59°-W 方向を示す。頂上部から 100 cm まで掘り下げて調査を実施したが施設や埋納物などは認められず、土層観察では第 1 層の黄褐色粘質土が溝からの排土を盛った可能性が考えられたが、第 2 層以下の土層状況から盛土と確定するまでには至らなかった。築造は他の塚と同様に地山の削り出しによるものであるが、溝を三方に掘り出す事で塚の形状を整えている点が注目される。尚、塚は溝の状況などから斜面下方を“正面”として築造されたと考えられる。

## 第Ⅳ章 考 察

ジョロウ塚は四基の塚状遺構から構成される遺跡であり、塚状遺構の立地・形態・規模・築造方法に関して報告してきたが、ここではそれを踏えて遺跡の性格に関して県内の塚を含めて考えてみたい。

遺跡は開析丘陵から派生した尾根の西側緩斜面に立地しており。1号大塚からは眺望が良く旧福野潟とその周辺域が望まれる。1号大塚と2・3塚、4号塚は形態的にも三角形・円形・方形と、その平面プランが大きく異なる点が注目される。円形の塚は県内にも一般的に認められる形態であり、方形の塚も少数だが近年確認されているが、三角形で錐形を呈する塚は管見には認められない塚である。規模に関しても円形の塚である2・3号塚では同一であるが、他の塚は違っており形態と規模は関連していると考えられる。築造方法では四基の塚とも削り出しによる築造であり、盛土は行なわれず物を埋納する施設（以下埋納施設と称す）も認められない。削り出しによる築造形態は県内にもその例を見ない塚だが、塚の築造形態は盛土、盛土と削り出しの併用、削り出しの3種類がある。ジョロウ塚の削り出しは塚の性格に起因し、その背後にある信仰的要因が反映していると考えられる。

### 第1節 石川県における塚について

石川県における塚の調査研究は1924年に上田三平氏が吉野谷村笈岳経塚の出土品に関して報告（註1）されているが、学術的に塚が研究され始められたのは昭和30年代以降の事であった。今日では、塚は埋蔵文化財として広く認識されているが、今だその実体には不明な点を多く残しており、その性格も把握されていないのが現状である。塚はまず「墳墓としての塚」とその他の「宗教的産物としての塚」を分離して検討すべきであり、その上で「宗教的産物としての塚」で

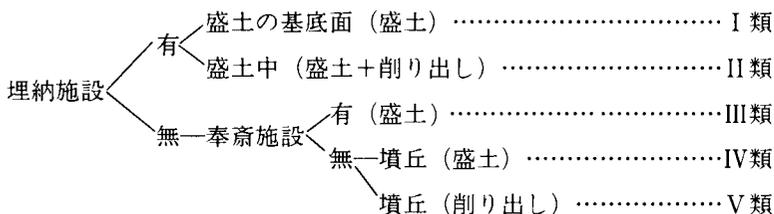
ある経塚などの分類が可能となる。以下県内にて確認されている塚の一部であるが、その分類を試み本遺跡の性格に関し考えてみたい。なを類例は塚の状況が知り得るものに止め、礫石経出土の経塚は除いた。

〔I〕 盛土下面に埋納施設を伴う塚

塚の中で盛土の基底面に埋納施設を伴う塚が本類に含まれる。類例では中島町上町マンダラ遺跡にて発掘調査が実施された塚（註2）が該当する。塚は長方形に近い平面プランを呈し、台形の盛土がなされ、盛土を完全に削除した後に塚の基底面中央に円筒形の小ピットが検出されている。遺物はピットの内部や、盛土中からも全く出土していない。この塚の埋納施設は極めて簡略的な埋納施設ではあるが、基底面の整地や整った盛土などに見られる様相は、本塚が秩序立った築造が行なわれた事を窺い知ることが出来る。本類の塚は埋納施設とそこに埋められた物の存在を示す標識的性格を帯びているものと考えられるが、標識的性格は埋納施設の有無に係わらず、塚の全てが備えている性格である。また、付録的であるが上町マンダラ遺跡の塚に代表される本類の塚は、埋納品を現世からの隔離を目的とした封土的性格をも与えられ、従来“経塚”と考えられていた塚に関してもその性格の再検討が必要であると考えられる。

〔II〕 盛土中に埋納施設を伴う塚

I類の塚とは埋納施設の点にて大きく異なり、盛土中に埋納施設を備えている塚である。一般に銅製経筒や和鏡などを出土し、広く“経塚”として認識されている塚が本類に属するものである。県内では吉野谷村の笈岳経塚に代表され最近の調査例としては能都町の藤波二ッ谷1号塚（註3）が上げられ、他に金沢市の小坂1号墳々頂経塚（註4）、辰口町の長滝経塚（註5）、小松市宮の奥経塚（註6）などがある。本類の塚は埋納施設を盛土中に備えている点にその特徴が置かれるが、マウンドも平坦面に盛土をするのではなく、尾根や丘陵の先端などで自然地形を巧みにし、削り出しと盛土を併用する築造方法が取られている。特に小坂1号墳々頂経塚は前期古墳（円墳）を塚のマウンドの代用とした例として注目される。また、本類の塚は経典や他の埋納品を保存し後世に伝える事を目的として造営される為に、埋納施設に石組や陶器を利用し埋納品の保全を図っている。埋納施設の整備と埋納品の充実は、本類の塚が造営主体の社会的・宗教的な状況を反映していると考えられる。塚の性格は埋納品を中心としてその標識的性格と保全を目的とした性格を帯びているが、I類にて考えられた封土的性格は埋納施設の位置からして与えられない。



第1表 石川県下主要の塚一覧表

遺跡名 (所在地)	立地	形態 (断面形)	築造方法	機能	出土遺物
藤波ニッ谷1号塚 (能都町)	丘陵上	方形 (台形)	盛土	埋納 (石組施設)	ナシ
上町マンガラ遺跡 (中島町)	丘陵上	方形 (台形)	盛土	埋納 (円筒形ピット)	ナシ
宮の前B遺跡 (中島町)	尾根先端	円形 (台形)	盛土、葺石	奉斎	和鏡、鎌
万行町首塚 (七尾市)	尾根先端	円形	積石	奉斎 (?)	ナシ
八幡経塚 (七尾市)	丘陵上	円形	盛土	埋納	陶製経筒
福水寺家山遺跡 (羽咋市)	山頂	円形、楕円形	盛土、削り出し	埋納・奉斎 (?)	珠洲焼 (壺・鉢) 板碑
元女堂山石塚群 (高松町)	尾根上	円形	盛土	埋納	珠洲焼 (甕・鉢)
小坂1号墳々頂経塚 (金沢市)	尾根上	円形	盛土	埋納	銅製経筒、珠洲焼 (甕・鉢) 青白磁合子、鎌
長滝経塚 (辰口町)	尾根先端	円形	盛土	埋納	和鏡
笈岳経塚 (吉野谷村)	山頂	不詳	不詳	埋納	銅製経筒、金銅製仏像和鏡、刀子、木製仏像
宮の奥経塚 (小松市)	尾根上	円形	盛土	埋納	和鏡

### 〔III〕盛土の上に奉斎施設を伴なう塚

塚の多くが埋納施設の標識的性格を目的として盛土によるマウンドを築いた塚であるが、マウンドの上に信仰標識としての祭祀施設（以下奉斎施設と称す）を造営していた塚が本類に含まれる。奉斎施設は人々の信仰標識である祠や石仏などであり、塚はその奉斎施設の台座的役割を果たし施設の存在を明示する為の標識であったと考えられる。該当する塚では中島町宮の前B遺跡にて発掘調査された塚（註7）が上げられる。塚は低い盛土の上に円礫を敷き詰めたものであるが、内部には施設は認められず遺物も土師質土器片が一片検出されたのみである。だが、発掘調査の前に塚上にて和鏡（五桜花文鏡）が一面と鎌が採集され、塚の上に和鏡を御正体とした奉斎施設が存在したと推定されている。この塚は前述のⅠ・Ⅱ類の塚と同様に標識的性格を持つと考えられるが、中心となる施設が地上に造営されている事から外的には標識的性格の二重現象を呈している。これはマウンドが奉斎施設の台座的役割を果たす“壇”（註8）として造営された事によると考えられる。

### 〔IV〕盛土によりマウンドを築き施設を伴わない塚

塚の造営目的が埋納・奉斎施設から離れ盛土によるマウンドの築造が主体となった塚が本類に属する。前述の塚は全て施設（埋納・奉斎）とマウンドの結合体であったが、本類の塚は施設とマウンドが分離し施設を全く持たない塚である。また、マウンドの築造も盛土を主体とするが、盛土と削り出しの併用や積石などが認められる。百塚や十三塚と通称されている塚の群集には盛土の場合が多いが施設などの発見は確認されない。県内の調査例では七尾市万行町首塚（註9）が有る。万行町首塚は積石塚であり盛土は認められず、施設や遺物は検出されていない塚である。これは塚＝マウンドと認識され、マウンドを築く事が信仰の具現であり信仰行為の一端と捉えられていたと考えられる。塚（マウンド）には標識的性格が与えられるが、造営主体の人々には信

仰の“証”<sup>あかし</sup>であり「標（しるし）遺構である塚」（註10）と認定出来るのではないか。

#### 〔V〕削り出しによりマウンドを形成し施設を伴わない塚

ジョロウ塚が該当すると考えられる塚である。前述のIV類とはマウンドの築造方法の点にて異なり削り出しのみによる築造が行なわれている。施設は溝状遺構以外には認められず遺物も検出されない。県内にはジョロウ塚以外の確認は無く新潟県の中山3・4号塚（註11）と宮城県の日光山遺跡（註12）にて報告例が有る。塚の形態は一定化してないが、塚の立地は尾根上で眺望が良い事が共通点として上げられる。また、塚の性格はIV類と同様に信仰の“証”であり「標（しるし）遺構である塚」と性格表現出来るものであるが、IV類に含まれる十三塚などで考えられる宗教学的色彩は全く認める事が出来ないのである。

「宗教的産物としての塚」を塚の築造方法と各施設が備えている機能により分類を試みたが、各類中でも塚の外形の相違や規模の大小など塚の形は多種多様であり、形態＝信仰的背景の反映とは認定出来ないが塚の性格に埋納・奉斎施設が大きく関与し、施設とマウンドの築造方法が各塚の宗教的要因と関連する事が明らかになったと考えられる。これは、金子拓男氏が塚の形態が「くたち」としての表現・造作が常に信仰・宗教の論理的背景によって決定される」（註13）とする論とは類似するものの基本的に異った分類である。それは、埋納・奉斎施設を伴う塚では施設が宗教的・信仰的要因の表現として造営され、マウンドは付録的役割を負うに過ぎず。施設を伴わない塚ではマウンドが宗教的・信仰的要因の表現となっている点からも明らかである。また、IV類とV類の塚は築造方法が盛土と削り出しと異なるが、外見的には築造方法の識別は出来にくいのである。

塚の形態は多種多様であるが施設と築造方法などからI類からV類までに分類を試みてきたが、この分類は塚の編年の分類を目的としたのではなく塚の造営に関与した人々の信仰的要因の解明を目的としたものであり、“塚”に秘められた宗教的・信仰的要因を解明するための基礎的操作である。今後は宗教学からの論理を十分踏えた再考が必要である。

## 第2節 ジョロウ塚の築造方法とその性格

本遺跡が確認された契機は地元で伝わる伝承による。伝承の内容は「むかし、宿女にジョロウ（女郎）がいて病気で死んだ。しかし、普通の人と同じ場所に埋葬するわけにはいかないので、矢駄の奥の谷に塚を作って埋めた。それから、この谷を“ジョロガタン”と呼ぶようになった。」のであるが、この伝承が本遺跡中の1号大塚と4号塚の一方もしくは両者に関した事であるかは確認することが出来なかった。また、この伝承が遺跡の性格を物語ったことで無いことも明らかである。しかし、塚に関する伝承と塚が存在する事実を多くの人々が認知していたことは、谷の中心に“サンマイ（三味）”と称される共同火葬場が現存し、ジョロウが谷が農林業などで人々の生活の場であった為によると考えられる。火葬場は地元の人々にとっては特殊な場所であり穢れた場所である。この穢れの意識とジョロウ塚の存在が結び付き伝承が形成されたのではないか。

発掘調査の結果、本遺跡の塚には施設は存在せず、遺物も全く検出されなかった。また、築造

方法も盛土では無く全て削り出しによるものであり、県内にもその例を見ない塚であった。4基確認された塚はその形態と規模の点に関しても相違が著しく、4基が一同の信仰的要因から築造せられた物とは認めがたいものである。だが、各塚は全て前述の分類ではV類に含まれ、IV類と同様その性格が信仰の「証<sup>あかし</sup>」であり「標（しるし）遺構である塚」と認定できるものであり、その信仰形態は橋本澄夫氏の「肉体的労苦を経過すること自体に大きな意味を有する民間信仰」（註14）という表現が適切と考えられる。この肉体的労苦は禪宗による所の作務に通じるものでありその関連が注目される。

また、ジョロウ塚からは西に広がる旧福野渴低地とその周囲の丘陵が一望でき、遺跡の立地条件に眺望が含まれていたことが知られる。立地条件は他に築造方法の点からも影響を受けている。それは、塚の築造を削り出しによる方法で実施する場合、自然地形を最大限に利用する事が意識されるが、塚が築造された丘陵には断層により生じた自然隆起が存在し、それを削り出した塚が1号大塚であり。これは1号大塚が地山の削り出しで内部に断層が認められたことから明らかである。本遺跡はこのような諸条件により築造せられた遺跡である。

## 第V章 ま と め

今回の発掘調査によって得られた事項を要約すると下記の如くである。

- 1 本遺跡は矢駄丘陵から派生した尾根上に立地し、4基の塚が存在した。
- 2 1号大塚は一辺14.5mから15mで、高さ4.1mから4.4mの略三角錐形のプランを呈し、2号塚は長軸2.52m、短軸1.8m、高さ0.28mの楕円形で、3号塚は1.95m、高さ0.4mの円形を呈していた。4号塚のそれは長方形であり長軸3.2m、短軸2.82m、高さ1.34mを呈し、三方に幅0.4mから0.9mの溝が確認された。
- 3 4基の塚はともに自然地形（地山）の削り出しによって形成されていた。
- 4 1号大塚・2号塚・3号塚にはともに施設は全く確認されなかった。
- 5 4号塚にて周溝が認められたが、それ以外の施設は確認されなかった。
- 6 遺物は全く検出されなかった。

4基の塚が塚状遺構であることは、溝の存在や削り出しの状況等からも明らかであるが、その築造年代に関しては不明である。また、そこで営まれたと考えられる祭祀行為も明確でなく、四基の塚の平面形態の相違も性格の違いからではないことは、塚の群集や築造方法の共通性からも考えられる。そして、今後もこの種の塚をより綿密な調査を実施し、その性格解明に努めるとともに期待するものである。

註1 上田三平「吉野谷村笈岳経塚」『石川県史蹟名勝調査報告』第2輯 1924年 石川県

註2 中島俊一・三浦純夫氏の教示による。

註3 浅田耕治「能都町藤波二ツ谷1号塚・波並堂の上遺跡発掘調査報告書」1978年 石川県教育委員会

註4 吉岡康暢「金沢市小坂第1号墳の調査」『石川考古学研究会々誌』第13号 1970年

- 註5 鶴来高校歴史部「能美郡辰口町長滝経塚遺跡」『鶴来町の古代中世遺跡』 1963年
- 註6 小松高校地歴クラブ「石川県能美郡国府村遊泉寺遺構調査報告」『石川考古学研究会々誌』第6号 1954年
- 註7 湯尻修平氏の教示による。
- 註8 壇は修法や祭祀を目的として築造した盛土、またはそれに代わるものである。
- 註9 橋本澄夫「七尾市万行町首塚」『石川考古学研究会々誌』第11号 1968年
- 註10 波田野至朗他「中山3・4号塚」『長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書(IV)』 1980年 新潟県教育委員会
- 註11 註10による。
- 註12 斉藤吉弘「日光山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書V』 1980年 宮城県教育委員会・日本道路公団
- 註13 金子拓男他「川治百塚と第6号塚」『北越北線埋蔵文化財発掘調査報告書』 1974年 新潟県教育委員会
- 註14 註9による。

#### 参 考 文 献

- 大場磐雄「歴史時代における「塚」の考古学的考察」『末永先生古稀記念古代学論叢』 1967年
- 石川考古学研究会『石川県羽咋郡福野潟週辺総合調査報告書』 1955年
- 志賀町役場『志賀町史』資料編第一巻 1974年
- 志賀町役場『志賀町史』第五巻沿革編 1980年
- 赤松俊秀他『日本佛教史』中世編 1967年 法蔵館
- 今枝 愛真『禅宗の歴史(増補)』 1966年 至文堂
- 土肥富士夫・米沢義光『代田営団遺跡』 1981年 志賀町教育委員会
- 波田野至朗・藤巻正信「中山1・2号塚発掘調査報告書」『長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書(III)』 1979年 新潟県教育委員会
- 波田野至朗「越後の塚」『考古学ジャーナル』 No. 182 1980年 ニュー・サイエンス社



# 図 版

(註遺物番号は挿図一遺物番号で表示する)



図版1 遺物周辺の航空写真



発掘調査区周辺の航空写真



A地点遠景（於古川より）



B地点遠景（北方農道より）



B地点より旧福野湯平野を望む



表土除去前のA地点近景



A地区調査風景



B地区の調査風景



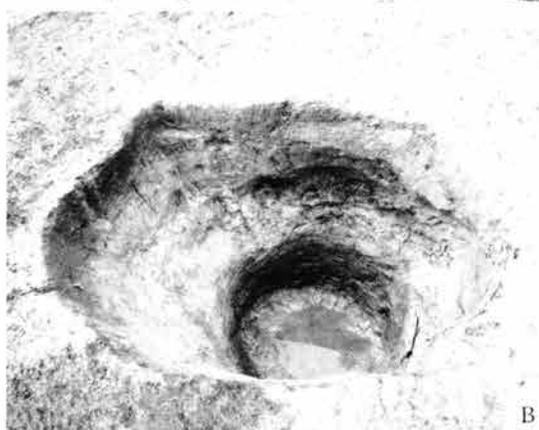
第1号竪穴住居跡（右上 同住居跡内把手付椀出土状態）



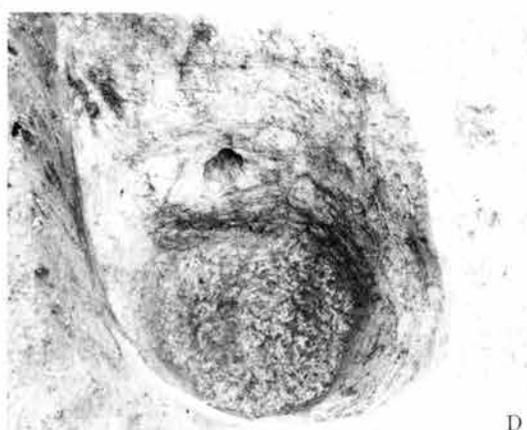
第1号竪穴住居跡および第1号掘立柱建物跡



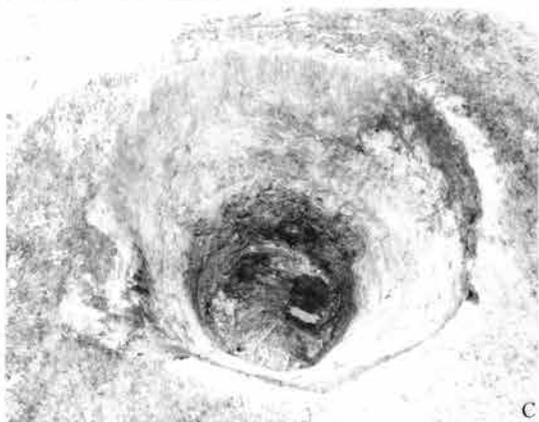
A



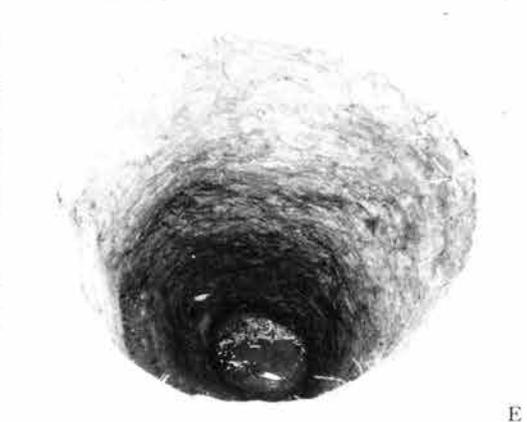
B



D

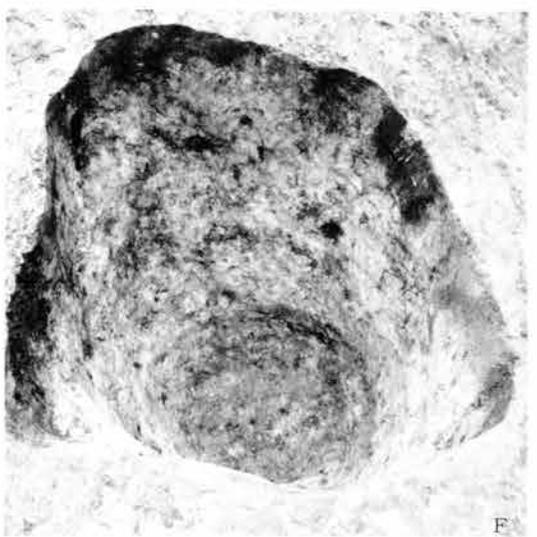
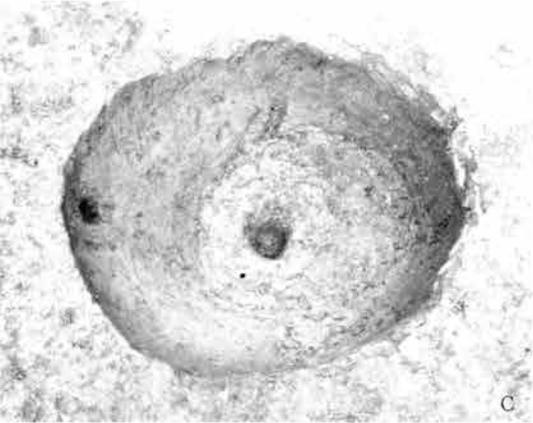
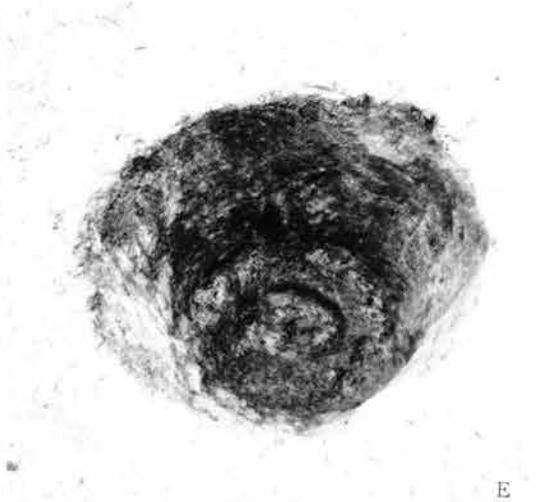
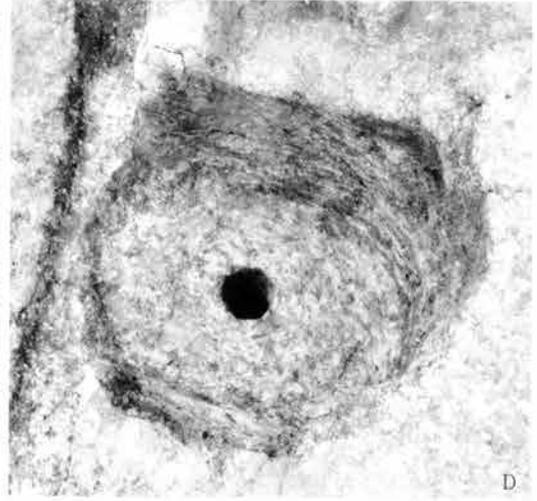


C

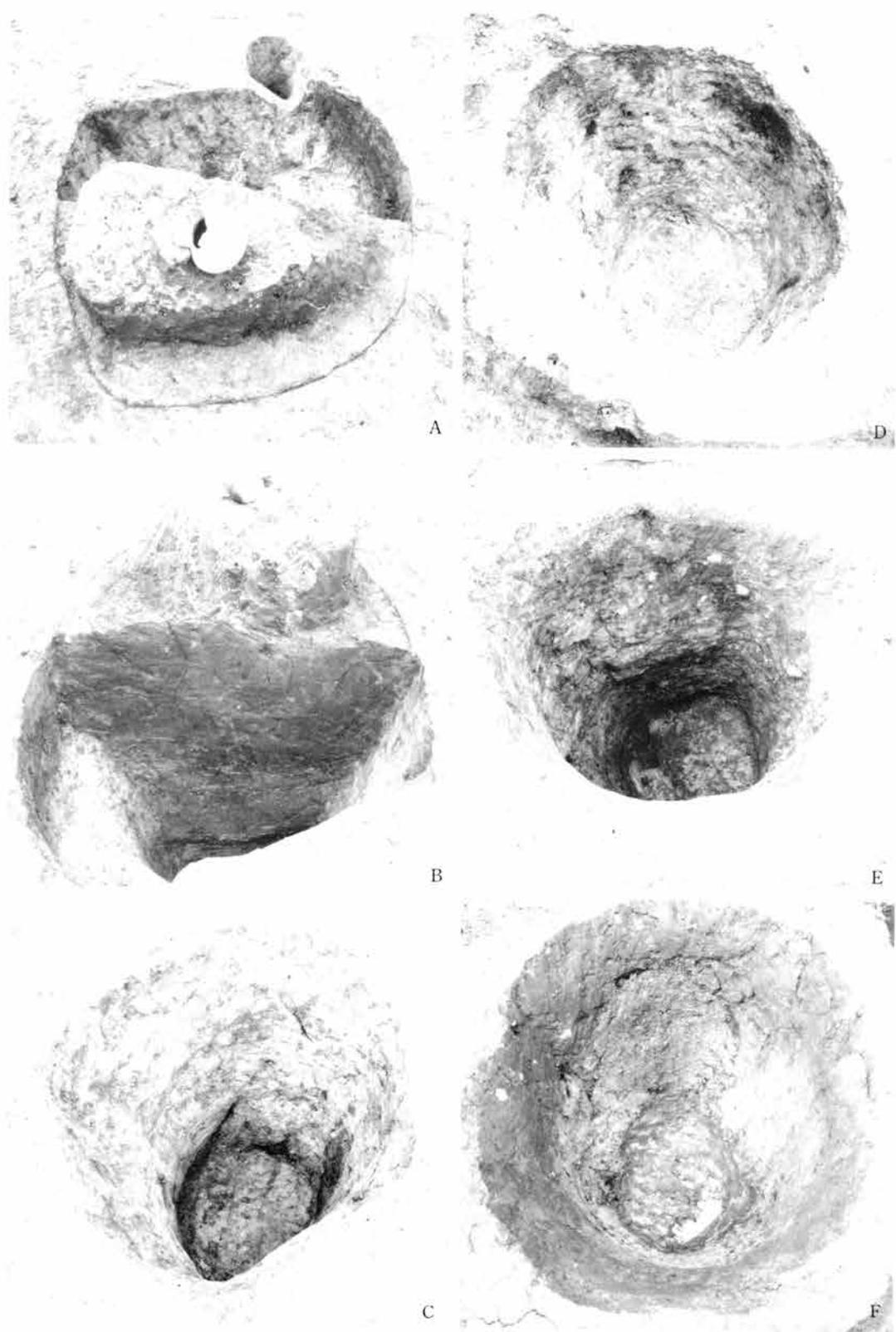


E

A—第2号土壇の層序 B—第2号土壇 C—第1号土壇 D—第3号土壇 E—第4号土壇



- A—第5号土壇
- B—第16号土壇
- C—第10号土壇
- D—第15号土壇
- E—第14号土壇
- F—第9号土壇



A・B・C—第18号土壇 D—第6号土壇 E—第12号土壇 F—第17号土壇



平安時代の遺構（東より）



古墳時代後期の遺構（東より）



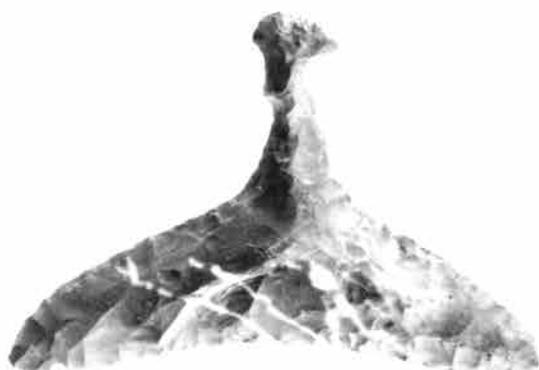
大溝土層堆積状態



大溝遺物出土状態



角杯形須恵器出土状態



33-A



33-2



33-B



33-3



33-1

33-A: 33-B  
33-1  
33-2  
33-3

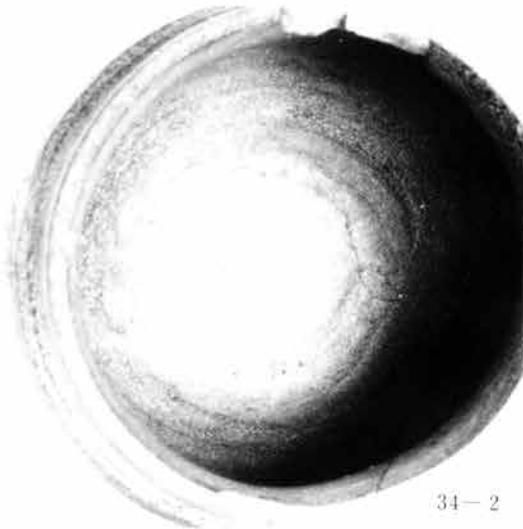
A地区出土石匙  
B地区出土打裂石斧  
" 石锤  
" 石鏃



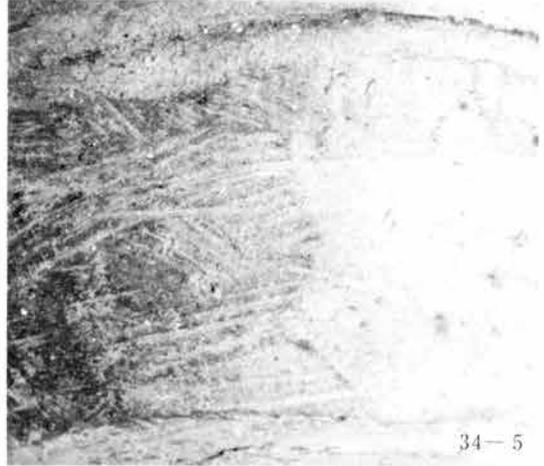
34-1



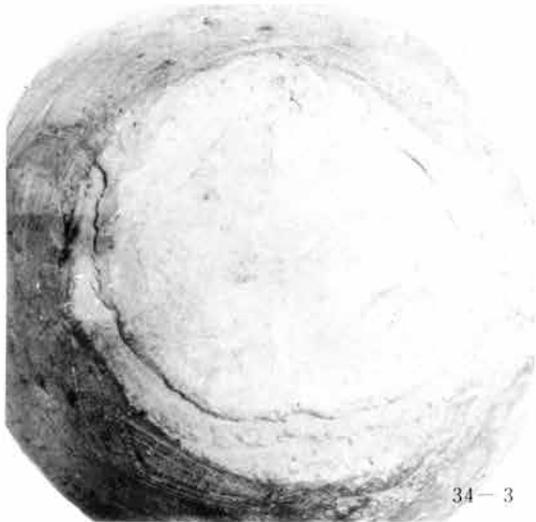
34-4



34-2



34-5



34-3

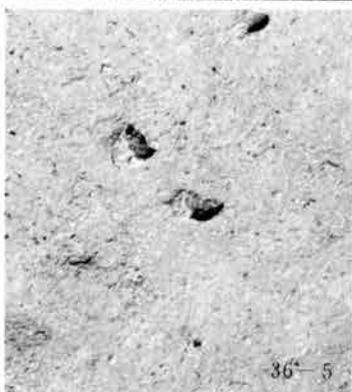


34-6

- 34-1 第1号住居跡出土須恵器把手付碗
- 34-2 同 内面の状態
- 34-3 同 底部外面の状態
- 34-4 同 胴部文様細部
- 34-5 同 底部外面へラ削りの状態
- 34-6 第1号住居跡出土土師器碗



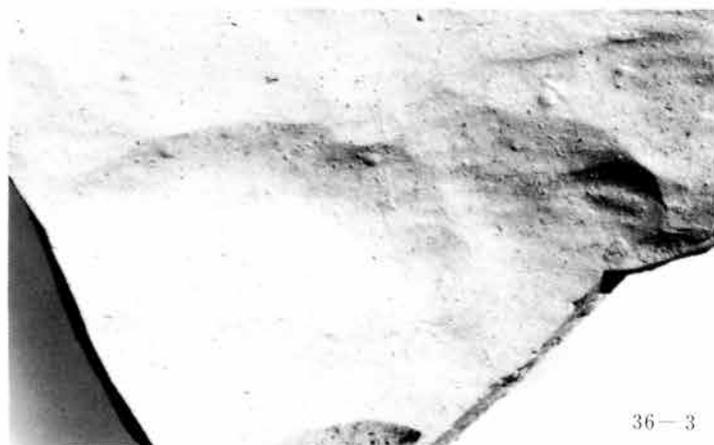
36-1



36-5



36-2

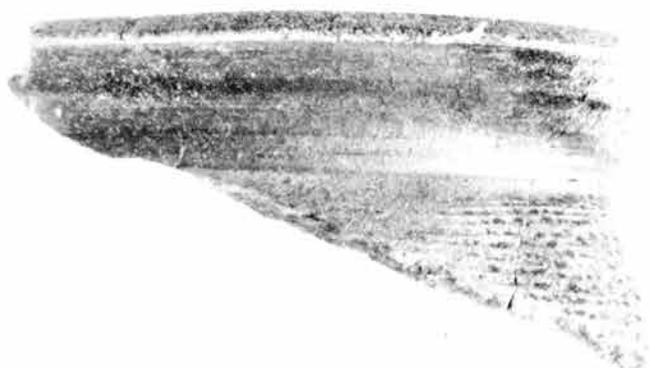


36-3



38-1

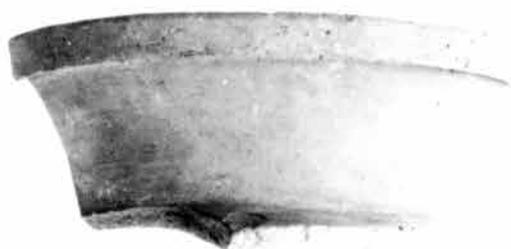
- 36-1 須恵器甕
- 36-2 同 底部外面細部
- 36-3 同 底部内面細部
- 36-4 同 胴部外面細部
- 36-5 同 胴部内面細部
- 38-1 土師器壺



39-1



39-3



45-1



45-2



53-1·2

39-1・39-2・A地区出土須恵器

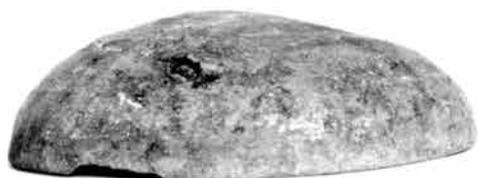
45-1・45-2・53-1・2 B地区大溝出土須恵器



55-A



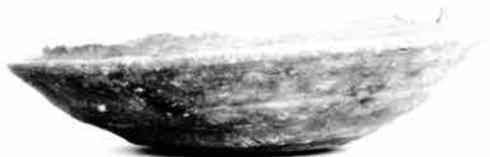
55-B



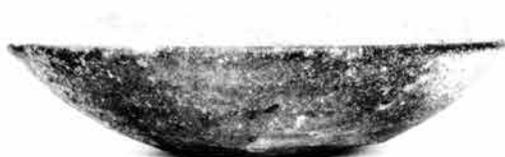
54-2



54-1



55-22



55-23



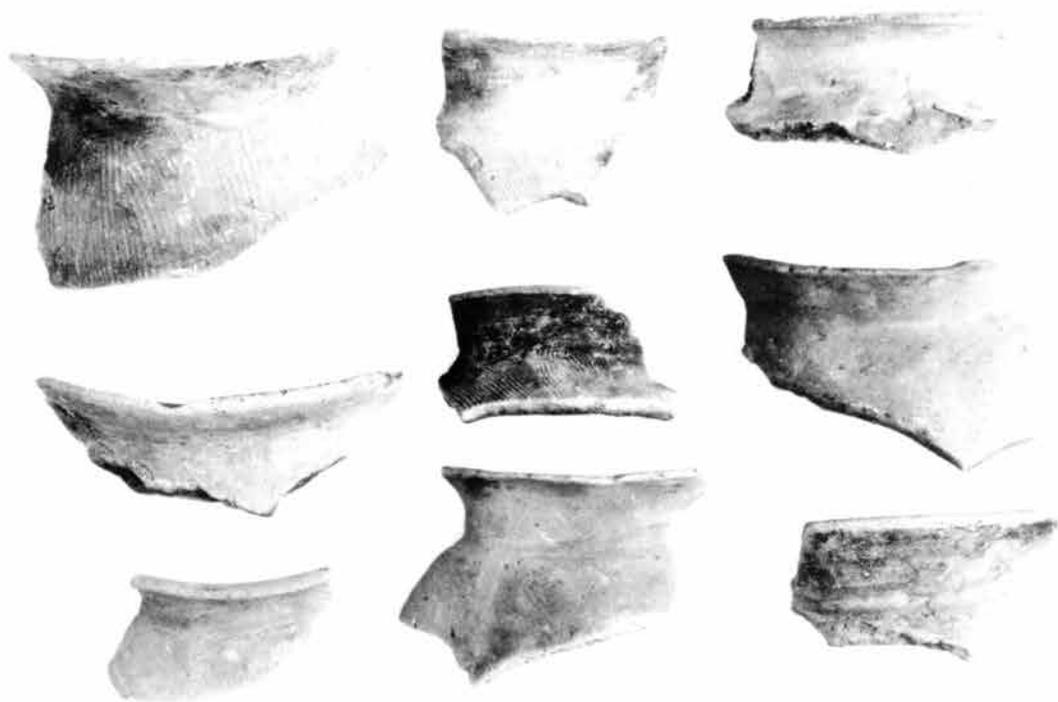
55-24



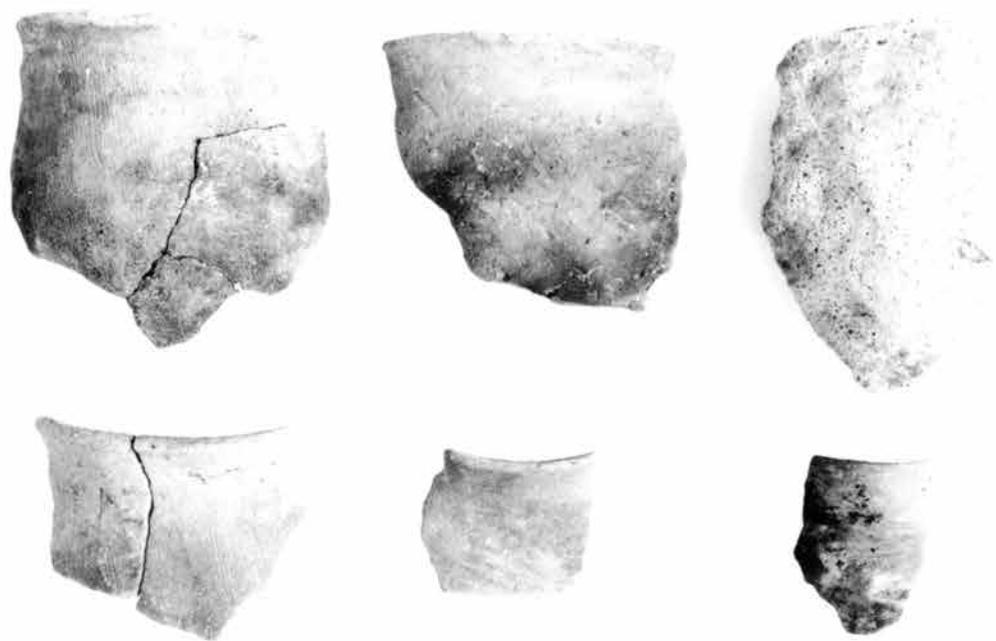
55-26

55-A · 55-B · B地区大溝出土角杯形須惠器

55-2 · 55-1 · 55-22 · 55-23 · 55-24 · 55-26 B地区大溝出土須惠器



B地区大沟出土土師器



B地区大沟出土土師器



47-14



47-13



47-17



51-91



57-33



51-83



50-76



51-93

47-14・47-13・47-17・51-91・51-83・50-76・51-93 大溝下層出土土師器  
57-33 大溝上層出土土師器



49-51



49-59



49-55



49-53



49-53



57-28



57-32



50-73



50-49



50-71

49-51・49-59・49-55・49-53・49-53・49-53・50-73・50-49・50-71 大溝下層出土土師器 57-28・57-32 大溝上層出土土師器



50-70



50-72



48-31



48-29



48-41



48-40



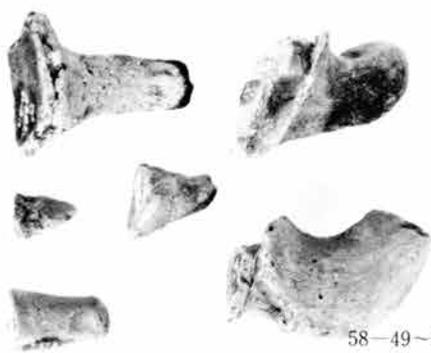
48-34



58-38



51-94



58-49-53



43·52



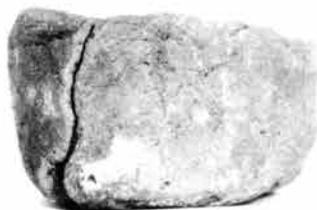
58—54



50—78



50—79



38—9



38—10



50—81



38—8



58—44



50—82

43·52 A·B地区出土  
土製品  
58—54 B地区大溝上層  
出土土製支脚  
38—8·38—9·38·10  
A地区出土土器  
50—78·50—79·50—81  
·50—82 B地区  
大溝下層出土土器  
58—44 B地区大溝上層出  
土土器



59-10



40-2



59-9



50-15



40-9



59-7



40-8



59-6



43-4



43-6



60-9



43-8



61-18



60-10

40-2・40-8・40-9 A地区出土須恵器 43-4・43-6・43-8 A地区出土土師器  
58-9・59-10・59-7 59-6 B地区1号溝出土須恵器 60-9・60-10 B地区1号溝出土土師器  
61-18 B地区2号溝出土土師器



61-1



61-2



60-1



61-3



60-2



43-2



23-16



43-13



60-7



60-6



43-21



60-18



60-17



60-12



43-10

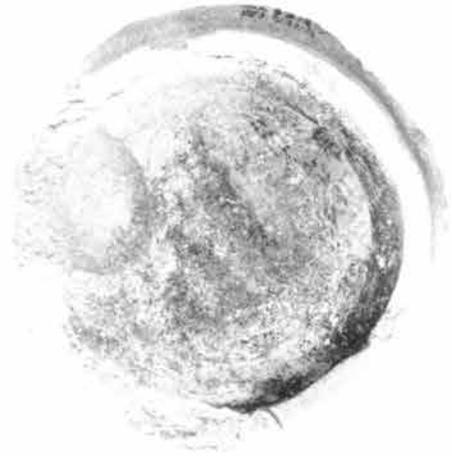
43-2·43-10·43-11·43-16·43-21 A地区出土土师器 60-1·60-2·60-18·60-17·60-12·  
60-7·60-6 B地区2号沟土师器、61-2·61-3 B地区2号沟 出土土师器



62-A



62-B



61-24

62-A B地区出土緑釉土器

62-B "

61-24 B地区2号溝出土  
須恵器底面外面の  
墨痕

61-21 B地区1号溝出土羽釜

41 A地区出土近世陶器

64 B地区出土中・近世陶  
磁器類



60-21



41



64



航空写真（南から）



調査区遠景（南から）



調査区近景（東から）



1号大塚近景（南から）



2・3号塚近景（東から）



2号塚断面（東から）



3号塚断面（東から）



4号塚全景（北東から）



4号塚全景（北西から）



4号塚断面(南から)



4号塚完掘状況(南東から)



1号大塚頂部断面（北から）



断層検出状況



同左拡大

能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書 I

(志賀町中村畑遺跡)  
(志賀町女郎塚遺跡)

発行日 昭和 57 年 3 月 31 日

編集 石川県立埋蔵文化財センター  
発行者 金沢市米泉町 4 丁目 133 番地

印刷者 榎橋 本 確 文 堂  
金沢市大手町 2 丁目 35 番